

ルター氏耶蘇傳

DISCARD

千八百六十一年九月二十四日、バビロスに死にたる我が妹アンリーットの淨き靈に

御身が今しも休らへる神の御胸に、御身諸共訪ひにし所々よりし、默然と我が側に坐しつゝ、御身は業毎を讀み盡し、我れ書き終るや、直ちに之を寫しとりけり。勢猛なる日の光、數知れぬ星の軍に所たれ。ひと日御身は、我れに、この書の御身と共に書かれしが故に、又御身自らの心に抱ける思想の、崇高なる對象にこそ、我れを讓らぬ。

判斷を恐れしことあるも、しかも御身は常に眞に宗敎的なる人々の、遂には此の書の中に見出づるに至らんとの、確信に充ち充ちたりき。かゝる甘き沈思のもなかに、死の御翼もて我等二人をば擊ちぬ。昏睡は恰も一つ時に、我等を捕へたり。覺めたるは我れ一人なりてなるは淚は注ぐを常としける聖き泉の邊り近き、アドニスの土に眠れり。嗚呼、我が善良天才よ、御身が愛しける我れに、死の上に君臨し、我等を死の恐怖より護り、我等をして殆ど死を愛するに至らしむる所の、かの諸々の實相を顯示せずや。

序

綱島先生の後を受けて、淺學不文な自分が、此の書の譯稿を續ける様なことになつた。自分の其の任に堪へ難いことは承知して居ながら、さかも自分は進んで此の事に當つたのである。

先生在世の頃、自分は學資を得ることの必要から、自分の修養にもなり、其の結果が幾分か多少は世をも益することの出來る仕事としつて、飜譯の纏まつた者として遺り、且耶蘇傳の事を思ひつき、先生に御相談をした所が、先生は恰も其の時分、ルナン氏の譯を完成しようと志して居られたので、結局、先生がまだ手を著けて居られぬ、第十一章以下の下譯をすることになつた。三十八年の十月頃から、翌九年の五月初旬頃までかゝつて、一先づ稿を終へて、先生にとゞけた。これは先生の添刪を須つのであつたから、偏へに原文に忠實といふことを旨として、殆ど直譯的のものであつた。爾來先生の病氣の狀態やら、內生活の模樣やらで、先生は筆を此の方に執られる暇がなかつたが、去年の七月、先生は例年になく病狀がよいといつて、筆

エルネスト、ルナン

は、千八百二十三年二月二十七日、佛國コート、ヂュ、ノール縣(Côte du Nord)、ツレグュイエー(Tregnier)に生る。千八百四十四年、僧侶となるの目的にて、巴理のセミナールに入りしが、其後間も無く、東方語の研究に身を委せんが爲めに、ここを去りぬ。千八百五十六年學士會院の員に列す。後四年にして、古代フェニシヤ探究の爲めなる學術旅行の指揮を掌りたり。彼は之れによりて、耶穌の生れ長ぜし境を知るの機會を得たり、而して又東方の地に於いて、浩瀚なる『原始基督教の歴史』の第一巻と定められたる、其の著『耶穌傳』の稿を起せり。歸國の後、千八百六十二年、巴理なる佛蘭西大學の希伯來語教授となり、此の時に該書を完成したり。此の書は、一年の後に世に顯はれ、非常の注意を喚び、而かも亦同時に、僧徒等の憎惡を激起しぬ。千八百六十三年七月、彼れは爲めに其職を罷めらるれき。政府代りに、僧圖書掛の職を命せしかど、辭して受けず、千八百七十一年、佛蘭西帝國顚覆の後に至り、再び講を始めぬ。

著者は其の著作を完成せんことを欲し、かくて『耶穌傳』の後には、『使徒』、『聖ポーロ』、『アンチクリスト』、『福音使徒及び第二基督教時代』、『基督教會』及び結尾として『マルクス、アウレリウス及び古代世界の終末』の著出でたり。彼れは實に又、其の『イスラエル國民の歴史』に於いて、上に劣らぬ大作を成さんことを欲したりき。外に尙ほ多數の科學的著作及び二三の哲學的戯曲を作しぬ。

さつた、眞心からの厚情の記念である。自分は先生の純な無雜な幾たびか汚雜にして不純な自分の心の、これを受くるに堪へ難き は向後永く先生の此の眞情を忘れぬと共に、更に永く充實な、眞摯勇猛不退轉な、謙遜な、熱烈な、先生の高き生涯を心に止めたい。先思想の道とは、必ずしも一ふに同じきを得なくても、先生の人生に態度は、永く自分達の模範たらんことを念ずる。

此の原著に對する批評は、ここに擧げぬ。唯譯筆によつては、到底髣髴することも出來ぬといはれて居る原文の妙をば、原文を讀み得ぬ自分の重譯が、大部分こはしてしまつたらうと思はれることは、深く原著者に謝罪せなければならぬ。

親友藤原正君が、自分の暇の少かつたのを憫んで、二十一章から二十七章までの下譯をしてくれられたことを深く感謝し、又止むを得ぬことながら、勝手に其れに筆を加へたことをおわびする。自分の譯中、固有名詞、術語等については、藤田季莊氏の敎を受けたこと多く、又ケーベル先生、波多野精一先生の敎をも受けた。先生の遺稿の方は、主として望月世敎君の嚴密にして忠實なる校正を煩はした。ここ

を執られて『三十五年の三月頃から起稿せられて『名著綱要』に出た。これが即ち本書に出でた文字である。

での稿を加へられた程手を加へられたのに、秋冷の季節を待つて、筆自分の方は忽焉として長逝せられてしまうて、自分風の原稿は初めた九月の十四日には、先生の原稿は、秋冷の季節を待つて、筆を加へられる積りにしての稿に遺つた。

かかる次第であるから、自分は、淺學で不文でも、先生の後を受けて此の稿を完成すべきものであると思ひ、且つ自分のくすることは、必ず先生の喜んで下さることを信じて、先生の令弟政治君の厚意ある盡力にも與つた上、愈〻此の稿をかくことになつてあつた稿に筆を加へて、今年四月半ば頃から五月の末までに、やッとこれを終つた。隨分骨も折つたのではあるが、總ての方面に於いて、素養のない自分のことであるから、知らずしてなした誤も多いことと思ふ。

先生の此の邊は、切に江湖識者の示教を仰ぎたい。

も、飜つて見れば、此の一書は實に、先生の自分に對して寄せて下

凡例

一、本書はルナン氏原著 "Vie de Jésu" の英譯なる、スコット、ライブラリー中のウィリアム、ジ、ハッチソン(William, G. Hutchison)氏の "Life of Jesus"(1897.)により重譯したる者なり。

一、本書第一章より第十章までは、綱島佳先生の譯になり、第十一章以下は余の譯にかかる。余の譯には、傍らレクラム版のハンス、ヘリング(Hans Helling)氏の獨譯 "Das Leben Jesu" をば參照したれども、此の譯は多少英譯と異なる所あり。かかる諸點は、一に英譯に依りたり。但し原著には、外に叙論あるを、英譯にはこれを省き、獨譯には之を載す、今英譯に從ひ、本書にも之を省けり。又英譯には、聖書の本文を其の儘に引き來たりし場合の外には、其の出所を示さず。然るに獨譯には、所説議論の根據としての、聖書及び『タルムド』ヨセフォスの書等の出所を、一々に示せり。原書も亦然る可きこと疑ひなし。其の中、聖書の分だけは、讀者參照の便あるべきを思ひて、獨譯より抄記し、先生の譯の方へも入れたり。

に併せて深く之を感謝する。

明治四十一年七月

芝
山
龍
成

明治四十一年七月

譯補者識

凡例

一、卷頭原著者の亡妹に與へし獻詞及びルナンの小傳は、余の拙譯なり。前者は英譯により、後者は獨譯に附載しありし者により譯す。

一、書中の固有名詞は、主として和譯聖書に依り、其の他は多く、羅甸讀みの發音のよるのみ。羅甸名なると、羅甸讀みとしたり。是れ現はれ來る人名の多くが、羅甸名なる方に從ひしもあり、例外最も簡易なるに其の他、國により該國語の讀むを得ず、今のあるべきは止一々に贅せず。

一、先生遺稿の分は、先生の手記に依り、誤字たるの明かなるものを外に「テョピロ」とありしを、英譯により「アルピョ」と改めしのみなり。生のものにて(二一三頁)、立ちせしものはなし。余の譯も同せり、然れども尙ほ多少の相違あり、例へば、アルピョ(Alpheus)、クレオパ(Cleopas)をパレトとなしたるも同じく、クロパとなし、クイリニウス(Quirinius)をクレニオとなし、ハレス(Hareth)をパレトとなしたるが如し。

一、先生の遺稿讀合せについては、令弟政治君、中山三郎君、望月世教君主として之に當り、余も亦少しく之に與りたり。

ルナン氏 耶穌傳 目次

第一章　世界史に於ける耶穌の地位……一
第二章　耶穌の幼少時代、その最初の感銘……一一
第三章　耶穌の教育……二八
第四章　耶穌の發達を圍繞せし思想界……四一
第五章　耶穌最初の説教、其の神父及び純宗教に關する思想、其の最初の弟子……六六
第六章　バプテスマのヨハネ、ヨハネに對するヱダヤの嘖……八七
第七章　野に於ける住居、ヨハネの洗禮……一〇三
第八章　神の國に關する耶穌の思想の發達……一一〇
第九章　耶穌の弟子……一三五
第十章　湖畔の垂訓……一四九

第二十四章 …… 四
第二十五章 …… 四
第二十六章 …… 四
第二十七章 …… 四
第二十八章 …… 四

ルナ氏耶穌傳

佛國 田尻稻次郎 譯

第十一章　貧者の國として考へられた新國……一六二
第十二章　喜悦のヨハネによる福音へのの遣使、ヨハネの死、耶穌教と
宗との衝突……一七六
第十三章　ニルテンムに於ける最初の企圖……一八五
第十四章　耶穌の異教者及びテマヤ人との交通……一九九
第十五章　自然的天職に關する耶穌自身の意念……二〇八
第十六章　神の國に關する耶穌の新生、其の超自然的性質……二一三
第十七章　耶穌の教會……二二六
第十八章　基督教の普進……二三六
第十九章　耶穌に對する反響……二四八
第二十章　基督教徒のエッセネ……二五一
第二十一章　基督の最後の計畫……二六九
第二十二章　二基督教徒の一通信……二七一

耶蘇傳

佛國　エルネスト、ルナン著

綱島梁川　重譯

第一章　世界史に於ける耶蘇の地位

世界史に於ける主要なる事件は、人類の最も高尚なる部分が、異端てふ漠然たる名目の下に宗教を打棄てて、神一致、三位一體、神子化身の信仰の上に總括せられたる許多の古宗教を打棄てて、神一致、三位一體、神子化身の幾んど一千年の歳月を要したる一宗教に引き移りたる革命也。この改宗は、其の成就に年を要したり。さはれ、件の革命の起原は、羅馬皇帝アウグスト及びテベリオの治世の時に起これる一個の歴史的事件なりき。當時一個の卓絶せる人格あり、その大膽なる創意と、その燃ゆるが如き愛情とは、永しへに人類當來の信仰の標的となり、

端を防ぎたり。支那は宗教的精神の利鞘二つながら知る所あらず。せよ、支那はこの點に於ける人類の大思潮の指導に、何等の影響をも有せざりし也、バビロン及びスリアの宗教は、奇怪なる感覺的一境より盲て全く解脫せらず、此等の宗教は、紀元後四五世紀の頃に絶滅せるものなるが、その頃に至るまで不道德の宗門として殘存し、唯だ時に一種の詩的直觀の、靈界の斷光に觸れたるもののみ。さて埃及は、表面は物體崇拜の國なりしに拘らず、いと早くより、形而上學的神學說と、一個の崇高なる標現說とを有したりき。人は一個閉隙なる觀精微なる神學上の解釋に、疑ひもなく原始的にあらざりき。されどかかる念を有するあひだ、決して之れを標現の衣に包みてみづから娛しむことあらず。吾人が意義既に廢たれたる古への神祕的想像の中に觀念を投し索むるは、三並人心のみづから不條理に安んずる能はざる結果として、祝ね永き反省を經たる後の事に屬する也。加之、人類の信仰は埃及よりは發動せざりき、其の無數の形を更へ姿を改めつつ埃及及びスリアより流れ入りたる基督教の要素でふものも、言ふに足らぬ外形の細節なるか、然らずんばそは單純なる崇拜の形式の中にだに當

信仰の告白を有せざりければ也。婆羅門教の今日まで殘存せるは有の異常なる保守的能力の然らしめたる所のみ。佛教は、その西漸に於いて全く蹉躓し了んぬ。ドルイド教（一種擬の宗教。譯者）は、その本立の中にて崇拜を取り行ふ一形式として存じ、また世界的意義を有せず。希臘人が神秘的なるオルフォイスといふ等技フォイス教（ろオルフォイス神を崇拜中心とする宗教に秀でた者。譯者）に施したる改造の企圖も、亦人心に堅實なる教養の料を給するには足らざりき。唯だ波斯のみ、能く獨斷的にして且つ一神教に近き一種の宗教を巧妙に組織し得たりしかど、而かも件の組織そのものが、畢竟一個の摹仿若しくは剽竊に過ぎざりしは疑ふべからざるに似たり。いづれにもせよ、波斯は世界を改宗し得ざりき、之れに反して波斯自身こそ、回教が其の國境上に押し立てたる神一致の旗影を望見して早くも改宗せられたりけれ。

人類の宗教を創始せし光榮を荷ふものはセム民族なり（讀者の注意を乞ふべきは、この語は、ここにては單にセミチックと稱する言語の一種を語り、若しくは曾て語りし民族を指すことなり。かかる用法は全く不當なること明かなり。されどこはかのゴシックの建築「アラビア數字」などいふ語の一類にして、此等の語は吾人

に遺存するなる渣滓のみ。要之、此等諸宗教の最大關與は、其の本質なる道德上の思想は、專制政治の下に壓虐せられ且つ個人の自由活動を幾んど全く杜絶せる制度に慣れたる人種の間より發出すべくもあらざるを也。

　靈魂の詩、卽ち信仰、自由、正義及び歸依を致さしめたる印度歐羅巴民族とセム民族となり。印度歐羅巴民族の最初の宗教的直觀は、詮ずるに自然主義なりき、人と自然との美はしき抱擁なりき、無限者に對するに自然的なりき。さはいみじき詩なりき、一言以て掩へば、そはすべてチュートン族、ケルト族の天才、若しくはシェークスピア、ゲーテ一類の詩人が出現せり、是れ卽そは宗教にあらず、將た倫理、哲學にあらず、一味の原理なりき。

　そは恍惚と、想像と、就中道德及び宗教の必須條件たる眞摯との混合物なりき。さりながら、何となれば、此等古代の崇も發こらざりき、何等の明瞭なる入類の信仰は、ここより拜形式は、多神教の係縛を脫するに多大の困難を有し、而かもそは

要するに、帝國は、その主權が、皇室の御一身に、專屬し、皇室が、その統治權の總攬者として、その權力を行はれる國體を有する國家である。

さはれ、當然、古代に於ける、各種族國家が、それぞれ、その獨自の政治組織を發達せしめ、而して、兩者が、相對峙して、兩者の間に、妥協がもたらされ、その一種の統治權の本質に、その一種の活

彼れを敬はざりき、まことや、彼れは我等の病患（なやみ）を荷ひ、我等の悲哀を擔ひたるなりと。彼れは我等の犯せる罪ゆゑにいたでを負ひ、我等の不義ゆゑに打碎かれぬ、我等が平安の爲めの故に懲罰彼れのうへに臨み、彼れの瘢痕に依りて我等の癒されたり。羊のごとく我等すべては彷徨ひあり、各自（おのおの）その途に迴りゆく、然るに神は我等すべての不義を彼れの肩に置きぬ。彼れは虐げられき、さはれ彼れはみづから謙りてその口を開かず、彼れはさながら屠處に牽かれゆく小羊の如く、剪毛者の前に默する羊のごとく、その口を開かず、……彼等は彼れの墓をば惡しきものと共に作りぬ、……爾（神）が彼れの靈魂を罪業のそなへものとなす時、彼れはその後裔を見ることを得て、その日を永うすることを得ん、而してエホヴの喜び彼れの手にさかゆくべし」と。

同時に、重要なる醇化は、トーラ即ち律法の上に加へられき。モーゼの眞精神を再現せんの趣旨にて、新なる法文、例へば『申命記』の如きもの作出せられ、而してこは實際に於いて舊游牧時代の精神とはいちじるく懸絶せる精神を開始せり。偖

の大王國の如くに、理想的イスラエル族をして全人類が悉く網羅せる都の如くに見えき、彼等は此處ことを堂々として全人類が悉く網羅せる都

しめ、彼等は一種の法をたてゝこの夢想を生ぜしたるに外ならず。彼等は國民的前途又は政府にても、自己の崇拝と實行を妨げざるものにだにあれば、甚しき自由を許し、自己の信條に從ふを要するエル民族は、宗教的情熱家以外に他の一個の一團の敵をも有せず、これよりして後、イスラエルの律法以外に他の一個の敵をも有せず。

而して記すべきは、律法の全然社會的にして且つ道徳的なりし事也。こは是れ現實生活に對する一個の理想、及びそれを實現する最良の方法を見いでたりとの信念を以て貫かれたる人々の手に成りしものなりき。

確信は、律法（トーラ）を格守せば圓滿なる福祉の藥る、更に疑ひあるべからずといふ事なりき。

このトーラは、かの希望、雄馬の「語律法」の眼に抽象的權利の論定以外に出でずして、この國本的律法より流れいづる結果が社會的秩序にして政治的力を揚くすることゝ、この民族の王國にして俗世

果てたるにあらずや。基督教の殉道者等が、基督世紀の初數世紀間に就したること、正統教派の迫害の犧牲となれるもの等が、吾等の時に至るまで基督教の懐に擁護せられてこそ成しつる事どもをば、彼等猶太民族は、基督世紀に先つ二世紀の間に既に業に成しとげける也。彼等は實に迷信と宗教的唯物論とに對する一個活潑なる抵抗教徒たりしなり。その異常なる思想運動は、概ね反對の結果を齎らしつつ、彼等をして當時世界に於ける最も驚歎すべき獨創の民族たらしめたり。彼等がすべての地中海沿岸に散布し、且つ希臘語を使用せることは(彼等はパレスチナ以外にてはこの語を採用せり)、その教を天下に宣傳する道を啓きぬ、この傳教の一事は小邦分立の古代社會の曾て貽さざりし事例なり。マッカビーと稱ふる一家は一個の家族的又種族的宗教はその他日人類の宗教たるべきことを牢く唱へて已まざりしにもかかはらず、その出づるところほひまで、猶太教の特質を有しき、即ちそは古代に於けるなべての宗教たりし也。げにもイスラエル人は、自己の宗教禮拜を最善と思惟して、異教の神々をば蔑視したり。而かも、彼等は同時に又、眞神の宗教はひとり彼等一族の爲めにのみ作られたることを信じたり。何

の共和國に
豫の感知す
る所也」

イスラエ
ス、ネヘミ
に對する熱
個の神聖民
や宇くその
のあらゆる
し黄金時代
心魂の不朽
階びたる作
は、周圍の異
なりや」見
宗教は、ひく

ル民族は、甚多の失敗にも
ア、オニアス、マッカビース
情に燃えて、接踵、起つて古
族なり、神に簡ばれ神の約
根をおろしぬ。一個莫大
印度歐羅巴民族は、樂園を
世の初めにおき、そのすべ
ル民族は、黄金時代を未來
に涙を流きぬ。イスラエ
の詩とういふべき詩篇の
巻とは、彼等が神聖にして
の昂揚せる敬虔の一念と
りそ吹き出てたる。かく
敬國民の宗教のおすえ
へゆくが中に、眞個に又
よ、波斯、ヒロニヤの宗教
は、一個の公然たる詐術と
特別に神の民とは
なり、埃及、スリヤの
なる飾り物となり

たりし感慨なり。猶太民族の指導者等は、不動の堅忍剛毅の模範を示さん趣意をもて書き綴られたる一冊の物語、例へばダニエルと其の仲間等の歴史、マッカビー、ズ一家の母と其の七子、アレクサンドリアの競馬場に關する傳奇の類、或は古來定著の宗教制度を死守するにありとの觀念を人心に滲洽せしめんと力めたり。

スリヤの王アンチオコス、エピファネスが猶太人に對する壓制横暴は、彼の觀念を熱沸せしめて、幾んど一種狂亂の情たらしめたり。そは二百三十年の後ち羅馬の暴王ネロ帝の治下に起こりし事と甚だよく類似せり。狂憤と失望とは、信仰者を驅りて、夢まぼろしの世界に躍り入らしめたり。第一の默示錄『ダニエル書』は現はれたり。そは預言の一個の復活なるに似たれど、而かも古代の豫言とはいたく異なれる形にてものせられ、且つ世界の運命に關する一段闊大なる見解を含みたり。『ダニエル書』は、或點より見て、救主（メシア）（猶太人は、いと早くより救ひ出だして萬民の上に立たし給へる人の出來たるべき救主につきて熱情の際言なるものしぬ。譯者）の希望に關する最後の表現を與へたるものなりき。救主（メシア）は、最早ダニ

人も猶太人の家族の一人となりての孫の傳來の遺産たる宗教を始めてエホヴの禮拜を興せしむる一事には、毫も想ひ到らざりき。然るに、エズラ、ネヘエル人も、アブラハムの子敬神的精神の發達すると共に、一段鞏固にして且つ論理的なる一個の概念は遂に猶太教は一個の絶對的意義に於ける眞宗教となられ、かくて後幾程もなく、出ぬ、何人にても欲せるがままにこの教に入ることを許されぬ。如何へに導き入るるは一個敬神の事業と見做さるるにテスマの約翰、耶穌及び使徒ポーロをして、種族てふ至りぬ。言ふまで

高く拔かしめたる容雍大雅の感情は、當時尙ほ存在せざりき。何

宗者等は、一個奇異なる矛盾と思はるるまでに、彼等猶太人の爲りければなり。さはれ、一個最勝最尊も、法律よりの宗教てふ觀念、世には國

めたる觀念（これ卽ち幾多の使徒、も、高き或るものありてふは創痍せられたり。俗世の幸運は如何に花やかなるものありとも、異

敎徒こそ深く哀れむべきものなれと は、實にそのころより後ち の猶太民族の懷き

ふべからず。此の時代の猶太人は、絶えて神學的興味を缺ぱざりき、彼等は本性につきて思索せざりき、天使、人間の運命、神格等に關する信仰は、既に彼等の間に其の萌芽の認むべきものありしも、そは各人隨意の信仰たるにとどまりき、即ち與り聽かざりし所なり。かかる一切の個人的想像より立ち離れて、一向に單純なるモーゼの教訓を恪守せるものこそ、最も正統的なる信者なりけれ。後の基督教が教會に導來せしが如き獨斷的勢力は、當時まだいささかも存在せざりき、」教會史をして一個莫大なる論爭史たらしめたる定義熱の發端は、唯だ紀元後第三世紀の初頭、即ち基督教が辯證と形而上學とに狂熱せる一群の理窟好なる人々の手に渡りたる時に至りて、始めて在り。勿論猶太人の間にも亦爭論ありにき、激昂せる諸派の學者等は、論議の主題となれる幾んど一切の問題に關して、種々反對の解釋を提出したり、されば此等爭論の中に(其の主要なる顛末は藏めて『タルムド』

にあらず、一個の神政的且つモーゼ的サイラス王にあらず、彼れは三の(二)現はれいづる一個の「人の子なりき」、人間の形を賦せられてこつ貴金時代に君臨せんとする一個の超自然者なりき。惟ふに光ために當さに來たるべしとせられたる大豫言者波斯のソシオシュは、件の新理想の形態を寄與せしなるべし。兎に角に『ダニエル書』の未詳の著者は、當さに世界を改造せんとする宗教的轉機の上に、一個劃然たる大影響を與へたり。彼れはメシアの新理想に關する慕開(ミステン)の準備(セット)(milieu-in-scène)及び種々の術語を作出しぬ、而して吾人は耶蘇がバプテスマの約翰につきて言へることを彼れの上に適用し得るなり。曰はく、彼れの前には豫言者、彼れの後には神の國を以て復び世に現はれたりと。後數年ならずして、同一の思想は豫言者エノクの名系統(基督教を指す。)の豫想を供と直接の關點を有しきと思はるるエッセネ派亦幾んど同時に世に出でて、やがて人類の爲めの深遠にして驚心駭魄すべき宗教的運動の事端を以さはれ、こに構成せらるべき訓練の大教義(ドグマ)て、かの基督教の內部に破裂せしなべての論爭の場合に存せりとは想見るが如き特殊なる

大平和期と人心が永き革命期の間に經験せる悲涼多感の感銘とには到底邊際の希望を生み出だしたり。この期待は猶太に於いてその頂點に達しぬ。聖なる人々――そがうちには物語が幼かりし耶穌を懐きぬと傳ふる老シメオンあり、パヌエルの娘にして女豫言者としてあがめられたるアンナあり――は、且つ斷食し且つ祈禱して、宮居のあたりにその生を送りぬ、彼等が前りは、イスラエルの期望の成就を睹ざるうちに、此の世より我等を取りたまふ勿れといふにありき。

個の力強き豫兆に觸れたり、彼等は何とは知らぬ或物の將さに近づき來たらんとするを感知せり。

件の明瞭なる見解と夢想との入り亂れたる混淆、虚妄と希望との紛糾、融惡なる實在より不斷に反跳せるこれらの向上心は、竟に一個絶倫の人にその解釋を見出だしぬ、良心は、之れに下だすに「神の子」の名稱を以てせり、而してこの稱副へ

ら如何にとならば、彼れは何人が與へ能ふよりも、偉大なる一個の動力、恐らくは如何なる當來の進歩も以て比較するに足るきじき一個の動力をば宗教に與へたれ

ば也。

實に全猶太敎なりし也。一個の信條なく、一個の理論的標章なく、アラビヤ哲學の門徒の一人、モーゼ、マイモニデスが會堂の神託法に諳熟せるの故を以て、し、所以は、他なし、唯だその猶太敎の典最後の猶太王、アスモニアン家及ひヘロデ王朝に至りては、激なりぬ、宗敎運動は、不斷に繼續してせられ而して一種異樣なる內部の產み滅じ、而してそが不信仰者の手に落きぬ、世界は、一般に他の觀場に心擾されて、またこの寂々たる事の起こりつつある、かを毫も知らざりけり。

ぞ、善くこの消息には通じ得たる。かは、彼れをして普遍的新生の種の奇しき響きによりて第二のイザヤに相呼應したる普通の出來事にして、豫言的と稱せらるる文學の一夢想の中に入らしめたりと覺ぼしく、一嬰兒の誕生時に於けて近く建設せられたる羅馬帝國は、人の想像を崇うし、世界が新

かかる夢想は、當極めて

の事に於いて自ら(みづか)軒擧せしなるべし。古來の大使命は、かくて數ふ
に附せられたる名字に依りて發見せられたりし也。熱情の人は、自己に關する何
事をも偶然のものにあらず。彼等はいと意味少なき出來事の中にだに、至高者の意志の一徴
理する所たり、彼等はいと意味少なき出來事の中にだに、至高者の意志の一徴
證を認むる也」

ガリラヤの人種は、げに其の國名の指示するが如くに甚だ雜糅せりき。耶穌の
當時、この地方の人口には、猶太人なる多くの人、即ちフィニシア人、スリヤ人、アラ
ビア人、及び希臘人さへ混在せりき。かかる人種雜糅の國うに於いては、猶太教へ
の改宗は決して希有の事にあらざりき。かかる人種問題を揭げ
て之れを論議し而して人類間の血脈の區別を抹殺するに最も與りて力ありし耶
穌其の人の血管に如何なる血の流れたるかを定むるは不可能の事なり。

耶穌は平民の階級より出でたり。父ヨセフ、母マリヤは、手工に
る身分卑しき木匠なりき、ここは東邦に於いては、富貴にもあらず貧窶にもあらざる
普通の生活狀態なり。かかる國うに於ける生活は、人をして贅澤慰樂の

第二章　耶蘇の幼少時代、その地位及び特徴

耶蘇は、彼れの時代以前にはその名皆はれざりしがリラヤの一小邑ナザレに生まれき。彼れはその一生を通してナザレ人てふ名もて呼ばれをゝツにへムに生まれたるが如く記したるは唯だ一種の不當なる附會說の動機と、其が畢竟耶蘇に附せられしことを明かにすべし。彼れが生れたる地は確實に於いて、ごの附會說の然らしむる所のみ。吾人は確實に於けるアウグスト治世の時、即ちあらゆる文化の民が彼れが誕生の日より前一年に先きだつ數年の時に於ける當時の事なりしならんか。

イエス耶蘇てふ名は、ヨシュアの轉名なり。そはいと普通の名なりけれど、後に至りては、人とおのづからこれに向かつて神祕的性質に關する一個の興味を來めたり（馬太一の二一、路加一の三一）。恐らくは耶蘇も亦、なべて

るれば也、而して少くとも其の中の一人ヤコブは、基督教發達の初重要なる人となりぬ。母マリアは、己が名と同名の一人の妹を有アルピヨ或はクレオパと呼びたる人（これ）と婚して、耶蘇の最初の弟子中著るく重要なる位置を占めたる（し）、而かも彼等の母と同じく、彼れたりき。これらの名は同じ人を指す（まこと）の従兄弟は、耶蘇の眞實の兄弟等が彼れに對抗しの兄弟等」てふ名を得たりしものにして（約三翰七）、主の死後に至りて始めてその名を知られは、彼等の母と同じく、彼れるもの也。耶蘇の眞實の兄弟等の従兄弟の改宗は、一層自發的なりき、而してその性格は一層獨自一しが如し。彼等（使徒一四）のみ（ほ）到底彼等の従兄弟等と駢馳し得ざりしが如し。耶蘇の眞實の兄弟等の、人に知られざるの甚だしき、かの福音記者が、ナザレ人をして耶蘇の血族上の兄弟を指名せしむるに方たりて、先づクレオパの子等（即ち耶蘇の従兄弟）の名の、第一に擧示せられたるべき也。

耶蘇の姉妹は、ナザレにて嫁ぎぬ、而して彼れはそこにて其の少年時代の初幾年

給を必需せしめざるが故に、富者の特權は幾んど無用に屬し、人〻甘んじて貧處するなり。之れに反して、其の藝術上の趣味及び其の物質的生活を飾るに足るものの全然の缺亡は、之れを措きては他に何物をも闕如せざりし彼等が家に、一味赤裸〻ふべき陋俗の觀を帶ばせたり。回々教が到るところに齎らせる一種厭レの邑は、恐らくは今日見る所なかりしならむ。吾人は、耶蘇が小兒の時に、個々の住屋を區劃せる石路（いしぢ）、さては小路（こうぢ）にて遊戯せし街衢を見る。疑ひもなく〻ヨセフの家は、今もそこにて睹るる貧屋と酷似せるものなりけん、それら の家〻は、戸口より僅に光を採れるのみにて、而して家具調度の類ひとては、一枚の蓆、土間の敷物、一二の土瓶さては彩りたる一個の櫃あるのみ。

耶蘇の家族は、一夫婦の出なりしが如し。彼等はすべて世に知られで終はりぬ。そは耶蘇の兄弟と呼ばれたる四人のものは、實は彼れの從兄弟なりと思はるる三一―五、一〇、一四）、皆耶蘇よりも年下（したな）りしが如し。

耶蘇には兄弟あり（馬太一二の四六、一三の五五、馬可三の三一、六の三、路加八の一九、約翰二の一二、七の三―五、使徒一の一四）、姉妹あり（馬太一三の五六）。

谷はその敍狀を證して餘りあり。そのかみ、この一小邑の生命と愉しき打ちざめきの中心たりし泉、今は澁沒して跡なく、破渠、僅に一條の泥流を見るあるのみ。さはれ、夜なここに打ち集ふ婦人の美貌は、不思議にも往年の面影をぞ遺したる（これ第六世紀に於いて、既にアントニーの注意して聖處女マリアの面影のかたみと見做したるものなり）。その打ちなやめるとこに往來し、而して水瓶肩に打ち載せて、他の世に知られで終はりし同じ水汲婦等の仲間に加はりしなるべし。殉道者アントニーの記にいふ、他の地の猶太婦人は、甚督敎徒を卑しみ輕んずるのここ ろあれど、この地の婦人は、優さしき善遇の情に充ちたりと。今日に於いても、ナザレに於ける宗敎上の確執不和は、此の國の他處に於けるが如く激甚ならざる也。

邑よりの眺めは劃られたり、されど吾人若し少しく躋りて最高家屋（丘に添うて建てられたる）の上なる、そよ風斷えず吹くメル山の一線、美くしう伸びて、餘勢陡絕、直ちに海に入るの觀をなすあり。次いで限に入るものには、メギドーの邑の上に湧出せる重巒あり、長老時代の聖地として

を送りぬ。

たる窪地の一小邑也。今日の人口は三千より四千の間にあり、氣候甚だ人の健康に適して、今尚ほ東邦諸村一般の小邑と同じく、見すぼらしき小舍の聚落にして、家屋と殊ならざりしなら、家ノンの最も富饒なる地方を塡塞せる石造立體の、内外に何等高雅なるはば衛衛の臺と無む。但だ此等の家くは、謂

落の特色たる蕪雜と貧寒との相を呈したりしや疑ひなし。

今日のレバ趣味もなき花果の樹蔭に埋もるが故に、その眺たり、げに世界のうち、此の地の如く圓滿なる幸福の夢想に適へても、ナザレは尚ほ樂しき住地、恐らくはパレスチナ其の類ひなき痛歯荒涼の眺めに壓せられたる心の重荷を卸下むる唯一の地なるべし。その民は樂易にして快活に、その園は末、この近鄰一帶の聖蹟を園に比したり。げに西方

ナザレは北の方エスドラエロンの原野を控へたる、三千より四千の間にあり、曾て甚だしき異一小邑也。今日の人口は

ず。茲は寒威凛烈にして、邑は當時に於て、今尚ほ東邦諸村

群山の巓に打開けて、曾て甚だしき異

に於ける幾個の谿

なる聖處に代ふるに眞個正確なる聖地巓にこそ。改めてその宮居をば建立すべきなれ。祖行動の中心地に於いてこそ。全基督教の生誕地。その開るべきなれ。又この一小地點、卽ち木工ヨセフが、曾てこの谷あ踏みいだししこと なき名もなき無數の學者が人事の歸趨を瞑想して、その定めを得べき恰適無比の一地數の曲折波瀾を貫き、あらゆる事相の無常に打勝ちて追求する新たなる確證なるべけれ。

聞えたるシ
、
さしきさて
あり、さては
古人が一個の胸になぞら
との諸山の間を貫きてヨ
を形つくれ
るペレアの高原を見るべ
セント、ダアークの港は掩はれ
くの如きは
耶穌當年の眼界なりき。
の間、彼れの
世界たりき。げに彼れは
出でしこと
あらざる也。そはかなた
出だしたる
最端の地點たるヘルモン
山腹のカイザリヤ、ピリピ
には、一味の悽容を著けた
るサマリアの丘ミの、荒廢
なた南の方
たるユダヤの荒莫を豫見
き枯らされ
せしむるあれば也。

若し世界
が基督教徒として殘存し
而かも斯教の起原に對す
得て、かの知見昏かりし時
代の敬虔心が取り定めた
る卑俗にして不經

何等の稱號をも有せざりしなり。さはれ耶穌を以て我等が所謂無學者の際と稱はば、そは大いなる誤りなるべし。我等が今日の學者的教育は、人物の價値に關して、件の教育を經たるものと之れを經るの機會なかりしものとの間に、大いなる時代にはさはあらざりき。今人が學校教育を經ずして全く孤獨生活を送るが爲めに陷いるべき不知無學の狀態は、徳教就中時代精神の人々不斷の觸接によりて遐邇相播けりし當時の社會の曾て知らざりし所也。曾て一教師にだに就かざるアラビア人にして屢々俊秀の人材たることあり、畢竟彼等の天幕は、不斷に公開せられたる學校の一種にして、そこを中心とせる教養ある人士の交通は、偉大なる智力的否文學的運動をさへ作り出だしけるが故なり。東邦に於いては風采の嫻雅、知見の明敏は、吾等が謂ふ所の教育と何等の相渉る所もあらず。之れに反して衒學浮夸、禮容を缺けりと目せらるる徒こそ、なかなかに學校の出にはありけれ。是くの如き狀態の社會に於いては、吾等が他を劣等の位置に貶せんとする無學そのものが、なかなる事業と高き獨創との要件たりしなれ。

第二章　耶蘇の教育

温雅にして自然の風物は、耶蘇の一切の教育なりき。

は東邦の教育法に従ひて讀み書きに一卷の書を持たせ、他の仲間と一齊に調子そろへて之れを覆誦せしめ、その諳熟するを待つて則ち已む、是くの如きは即ち東邦の教育法なりき。

その原音によりて十分に解し得たれば彼れが希伯來の文書をるや、アラマイックァ語の譯文彼れが舊約書の註解の原理となせる所のものも、その弟子のなせる所により

する限りにては、當時流行せし經典の譯解（タルガムス）もしくは註釋（ミドラシ）なるものと甚だ類似したりしを見る。

猶太の小邑に於ける學校教師は、「ハザン」即ち會堂に於ける讀經者なりき。耶蘇は律法學者の高等學校に通ひしことは絶えて無し。恐らくはナザレには、かかる學校一個だにも存せざりしなるべし、隨うて彼等俗人が見て以て知識の特權とするも

而して埃及に於けるすべての分派的學校の、エルサレムの本山と相隔離せるの甚だしき、吾人は『タルムド』の中にも、將た猶太教の傳說の中にも、これに關したる些の引照を發見する能はざるなり。確實なる一事は、希臘語は卑陋視せられ、甚だしきは學脩せられざりてふことなり、希臘語の學脩は危險視せられたる場合に於いてだに、而してその最も善視せられたる場合に於いてだに、尙ほ且つ單に女性的一藝能と思惟せられたるに過ぎざりし也。唯ふ律法の學脩のみぞ、高雅にして眞面目なる人士の心かくべき價値ありとは見られける。兒童に希臘の學問を敎ふるには、如何なる時ぞよきてふ問ひに、或る博學のラビ(敎學者)答へて曰はく、「晝も夜にもあらざる時に於いてせよ、そは掟に、爾、律法を晝も夜も學ぶべしとあればなり」と。

されば直接に開接に、世俗の敎學は、些かも耶穌に達せしことにすべて知る所あらざりき、彼れの心は無邪天眞の自由を保ち得て、博覽弊の爲めに曾て累されしことあらざるなり。彼れは猶太敎以外の思潮運動に對して一個風馬

耶穌が希臘語を知らざりしは疑を容れず。この語は政府と同一味の階級及び異教徒の住まへる市邑カイザリヤの如きを外にして、猶太には幾んど傳播することあらざりき。耶穌の眞(まこと)の國語は、希伯來語を混じたるスリアの方言にして、當時パレスチナにて用ひられたるものなり。耶穌が希臘の文化に對する何等の知識もなかりしは尚更確實なり。希臘の文化はパレスチナの敎師の禁止する所にして、彼等は「豚を豢ふものとおのが子に希臘科學を敎ふるものとを」同一呪詛の材となせり。兎に角に希臘の文化は、ナザレの如き小邑にまでは流れ入らざりしなり。固より猶太敎學者の嚴禁ありしにもかかはらず、猶太人中、既にしものありしは事實也。埃及なる猶太人の學校に於いて、幾んど過去二百年の間、引きつづきて希臘主義と猶太主義との融合に力めたる一事あり。ダマスコのニコラスと呼ぶ一猶太人は、當時既に最も高名博學にして、次いではヨセフォスの如き、亦完全に希臘化したる猶太人の一實例たり。さはれニコラスは、唯だ種族の上に於いて一個の猶太人たりしに過ぎずして、ヨセフォスはた自ら同代人中の一例外者なりと宣言す、

は、吾人のほぼ推恵し得る所なり。ヒルレルは耶穌に先きだつみづからの一と多くの類似を有する諸訓言を物したり。若し耶創家に師あり、ヒルレルこそ彼れがれ、その貧苦に打墜へたる柔順に於いて、その性格の醇美に於いび僞善者に對する反抗等に於いて。

舊約の諸書は、耶穌に一層多大の感銘をより成れり、即ち今日の吾人が有する所の書し、當時の諸書、思れなり。古より猶太意尚ほ當時を通し、書中になくして面かも彼の其の中に迎へ容れしめたり。この國りも等ろ管思尚ほ當朗ち歌度の念厚からざ彼等が時代の向上心とといふべき件の「律法」は、國民が政治的自治の能を失ひし來隠微容るる不盡の題目とはなりぬ。豫言者及び『詩篇』について、一般民衆は、此等

牛の觀をなしたり。當時一方には、エッセネ派又はセラピュート派の、枯禪的生活を送るありリヤの猶太大學校に於ける精緻なる宗教哲學の思索研究ありて、耶蘇と同代の人、又他方にはアレクサンドフィローン實にその巧妙なる解釋者たりしが、是等すべて耶蘇の知らざりし所也。耶蘇とフィローンとの閒に屢〻發見せらるる類似、例へば神之愛、慈惠、神に依る平安などに關するいみじき諸格言は、さながらこの名高きアレクサンドリヤ哲學者の物せし著述と同一精神より流れ出でたるに過ぎざる也。

幸ひにして彼れは又、エルサレムに於いて教習せられ、而して猶太の政治、宗教に關する律法集と註釋とを含む。（譯者）の形式にして既に斯學をガリラヤに輸入したるものありとせんも、彼れは彼等と交りを結びしことあらず、而して彼れが晩年に及びてこの迂愚なる煩瑣神學と相知るに至るや、彼れは唯だ唯だ厭惡の一念に充たされたり。

スリヤの暴君、アンチオコス、エピファネス人の作と銘打たれたるものなるが、後世なる其の頃の時代精神を代言したるもの歴史哲學の創掫者たるこの書の作者こそ、始めて大膽にも世界大王國起伏の中に、ひとり猶太民族の運命に屬したる一貫綜ものにはありけれ。耶穌は夙にこれら高上なる希望をもて充たされたり。彼れは又思ふに、當時聖書の巻々と駢び崇ばれし默示の書『エノク』、及びその他この類（たぐひ）の、民衆の想像をさしも踊躍せしめたる書（ふみ）どもを讀みたりしなるべし。光榮と恐怖とを齎らす「メシヤ」の降臨卽ち諸國民のこもごもの崩壞、天柱地維の大洪水、凡そ此等の觀念は、不斷に彼れが想像を養ひ育てたり。而して時來たるや、既に近きにありと宣べ傳へられ、剩さへ多くの人々は、この感情の超自然的狀態に、耶穌に取りては、初めよりして全く自然且つ單純の事態と見られたりしなり。

耶穌が世界一般の狀態に關して何等の知識をも有せざりしは、彼れが最も正確

の書に於ける幾分神祕の描寫は幾んどすべて「救主（メシヤ）」に關りたる事也てふ信念を有しき、而して彼等は國民の希望を實現すべき類ひの偉人をば、常にこの中に見いださんとせり。耶穌また、此等寓意的解釋に對する民衆一般の趣味を通有せり。されど、これら幼稚なるエルサレムの註釋家等が捉らへ得ざりし聖書の眞詩趣は、耶穌の天才によりて豐かに翫味せられたり。「律法」の書（ふみ）は、彼れに多くの興趣を與へたりとも見えざりき、彼れは律法以上のことを成し得べきを信じたり。さるに『詩篇』は、驚かるばかりに、彼れが抒情詩魂と調を合はせたり。生の食たり又支柱たりきの宗教詩は、驚かるばかりに、彼れが抒情詩魂と調を合はせたり。

さてまた豫言者、就中イザヤ及び俘囚時代に於ける彼れが繼起の豫言者等は、その當來を描ける光彩陸離たる夢想、その熱烈なる雄辯、その人を魅する畫樣の想像を打まじへたる諷刺に於いて、耶穌のまことの師たりしや也。彼れはまた、默示の書（ふみ）の數〻をも讀みたり、詳にいへば此等の書は皆や近代的作物なれど、其の著者等に古經典の特有せる權威を此等の書に付與せんが爲めに、古豫言者及び長老等の名の下に自ら匿れたるなり。これらの書は彼れの心を惹きたるものなり、『ダニエル』の書是れなり。この書は

は彼れが「此の世の王國とその一切の榮華」と呼び做し所のもの也。專政君主的紛奢、この行政的且つ臺閣的なる藝術は、彼れを厭惡せしめたり。彼れが愛好したるものは、小舍、鳥巢、巖洞、泉、墓、無花果、橄欖など參差として打見渡さるるガリラヤの諸村邑なりき。彼れは常に自然と親しく相抱けり。彼れの美服衣る處ぞと思へり（一馬太六ノ八一）。彼れがこの世の王者顯榮を取りて不可能事に充てる譬喩は、たへに美くしきものを通して世界を見たる外に、曾て貴族社會の事情に通せざりしを證するものなり。

彼れは、希臘の科學之れを排斥してふべき新觀念、即ち超自然力の排斥てふ新觀念に關しては、更に哲學の基礎ともいふべき思想十分に之れを守うしたる、あらゆる一層知る所ありき（古代人の單純なる信仰は、宇宙の統御をばかかる超自然力に歸したるなり）。耶蘇より幾んど百年の前、羅馬の詩人ルクレチウスは、既に自然界の全系統の齊一不變をいみじうも表白せり。奇蹟の檢無言ひかふれば世界一切の事は、神との個人的干渉と相容れざる法則によりて生起すてふ思想は、希臘科

なる說話の一々の有樣に徴して明らかなり。彼は、地上は分割せられて五ひに相戰ひつつあるが如くに見たり、彼れは及び當時開始せられつつありし社會の新狀態をば知らざりし馬の權力に關して何等の明確なる觀念をも有せざりし如く、唯だ「カイザル」(皇帝)てふ名のみぞ彼の耳には達したる。その周圍、テベリヤ、ユリア、デオカイザリヤ、カイザリヤに於けるヘロデ諸王等が羅馬の文明を謳歌し且つ皇帝アウグスト朝家に對するその忠臣ぶりを證せんがために建立したるもの。而して今や定めなき運命の嵐にその名異しうも打變りて、それらは唯だ僅かに簫條たるべドインの諸荒村を呼ぶの料たるのみ。彼れはまた、疑ふらくはヘロデ大王の經營に成れる幾百本の圓柱。これらの無味枯淡なる「大路」(リユー、ヴ、リヴオリ)の裝飾。これらのものの、誰れか其の一個の器械なんどのやうなる組立物に過ぎざりしを信せざるものあらんや。これら華美なる建築の材。これらの海路にてユデアに到着したる華美なる

にし得と信ずるものは、奇蹟の中に何等非尋常の事をも認めず、そはかりては、事物の全進行は神明の自由意志の結果に外ならざればなり。は、實に耶蘇が一生を通しての知識狀態なりき。彼れの偉いなる心魂に生じたる結果は、そが俗流の心に生じたるものとは全く相反したり。俗流若し神の殊能を信せんか、そは女神人親交の深奥なる思想となり、人力に對する絶大の信念の場合にありては、そは神人親交の深奥なる思想となり、人力に對する絶大の信念とはなりぬ。げに、こは彼れが力の秘訣たりし美くしき迷謬なりけり、そはこの事、他日彼れに對する物理學者、科學者等の評を招致せるの媒となれりとはいはんも、彼れが當代の上に揮ひたりし前後無比の感化力は、實にこの一信念の賜なりけれは也。

耶蘇の異彩ある性格は、極めて幼かりし時より發露したり。傳說は、彼れが小兒の時だに親權に叛きしこと、及びその天職を就さんがために尋常生活の方法を遁て去りて顧みざりしことを喜び描きたり（路加四二）。少くとも、血屬關係が彼れに對して何等の重きをもなさざりしは事實なり。彼れが一家のものは、彼れを愛（いつく）しみたりとも見えず（馬太一三の五七、馬可六の四、約翰七の三）、彼れまた時としては、彼等につれなくあた

學を採用せりしすべての國々に於ける大ろなり。疑ふらくはバビロン、波斯の國々きと見えたり。耶穌は、かかる思想上の進れは、實驗科學の諸原理の既に唱へいだされし當時に生まれながら、尚ほ全く超然的觀念の中に住ひたり。思ふに異能奇ものはあらず。知識活動の中心の一地に住みて、而かも最も圓滿りと稱せらるるフィローン其の人だに、唯だ極めて荒唐にして幼稚なる科學上の知識を有したりしに過ぎざる也。

この點に於いて耶穌は、彼れの邦人と異惡魔を信じてそを惡靈の一種と想ひ(馬太一三六)、而して又他の凡ての的諸病は惡鬼の病者に憑きてそを惱ますわざぞと想像せり。彼自然の不思議は、例外の事にあらずして正觀念に、自然界に於ける實驗的科學の成立と容れがたき事にあらざりき。超自理法の觀念を關如せるもの、祈願によりて天上の雲を左右し、病も死をだに捲

第四章　耶穌の發達を圍繞せし思想界

冷却せる大地の、それを塡圍せし火氣の燒燼せるがために、最早吾人をしてその劫初創造の光景を了解し得ざらしむるが如く、人類の運命を定めたる創業期の革命は、吾人が今日の細心なる研究法の應用よりも成る歴史的說明を以てしては、常に幾百倍の物の盲蓋せられ、人間活動の賭臺に上れるを免れず。耶穌は公共生活の競技の自由に演ぜられたりし一時期に住まへり。是くの如き時にありては、有らゆる大任要し、而かもこは、他の恐るべき一事即ち死を賭せずして得らるべき事にあらざるが故也。今や人少賭して少獲す。人間活動、英雄期にありては、人全賭して全獲せり。善者と惡者と、然り少くとも自らかく信じ、又他よりかく信ぜられたるものどもは、劃然として雨黨に分立せり。神と崇び祭らるるの人は敵首臺に上るの人人間の記憶に永遠の型を鐫り出づる性格は劃然たる特相を有す。耶穌を造り出だしし時の如く人間の蘊蓄したる潛在力(而してそは唯だ

りきと見ゆ（馬太一二の四八、馬可三の三三、路加八の二一、約翰二の四）。耶蘇は、一個の思想に一向專念せるすべての人と同じならひに、おのづから血屬上の緣故を輕視するに至りぬ。思想の紐索のみぞ、彼れが如き一類の天性の認許する唯一のものなる。彼れ曾て、手をその門弟にさし舒べて曰はく、「天なるわが父の聖意を濟すもの、これわが兄弟、わが姉妹、わが母なり」（馬太一二の四九、五〇）と。質朴なる民どもは、彼がこの言葉の意（こころ）を得かくて或日のこと一婦人あり、彼れのあたり近くに來て、「爾を生みし胎、爾をはぐくみし乳房こそ幸なれ」と叫びいひければ、彼れ直ちに答へて曰はく、「さの言葉を聽きて、之れを守るものの幸（さち）多きには如かず」（路加一一の二七、二八）と。

歩武を進めぬ、かくて吾人は、血屬、戀、鄉國等の絕對の觀念に

關して推論せしことあらず、彼れは寧ろ端的に神を感じたればなり。

のかた、基督教が挿著したる形而上學的萬藤の岩は、決して開祖の創造にあらざりしなり。耶蘇は教義をも有せずして、唯だ一個不抜の決意確信を有し人に超したる強烈の力は、今に至るまで人類の運命を支配せり。

猶太民族は、バビロン俘囚の當時よりこれ該國民精神の解明者等をしてその長期の狂熱は、彼等の間に一種燃ゆるが如き狂熱の下に筆を揮はしめたる所以、而してこの性悍い狀態に在るの利を有したり。

をして不斷に理性の上下に品低せしめて、その中道を歩まざらしめたり。未だ曾て彼等の如き自暴的勇氣と、その努力を極度にまで實現するの決心とを以て、未來及び自家の運命の問題を提らへたる者あらず。人類の運命を自家小民族の運命と紛錯せしめて、人類進歩の一般論を立せんとしたるは、猶太の思想家、實に破天荒たり。常に自家の小城内に限られて、その競爭的都市の小紛爭にのみ遑なたりし希臘はげにいふじき歴史家を有したりき、されば羅馬期以前に於いて、全人類を包容する歴史哲學の一系統を古典文學中に求めんは無益なるべし。之れと反して

雲蒸の大動亂期にのみに見ることを得べきものを發展するに恰適したる歷史的環境は復た在らざりしなり。

若し世界の統制が一個の思索問題にして、而して又最大の哲學者が人に信仰を與ふる最適者なりとせば、世に宗教と呼ばるる偉大なる道德的、敎義的眞理は、正さに釋迦を除きて、偉大なる宗敎上の開祖は、哲學者たりしことあらざるなり。純然たる思想に起原をは、其の動機の全く政治的道德的なりしがため也。之れをセム民族の諸宗敎に見るも、そは絶えてゼ及びマホメットは、思索的傾向の人にあらざりき。彼等は活動の人なりき。彼等が人類を支配し得たるは、その同國同代の人と同じく、耶穌もまた、多少の哲學者にもあらざりき。耶穌の弟子となんがためには、何等の信條に署名し、若しくは何等の信仰を告白するを要せざりき、ただ一事の要あり、他なし、彼れを親み彼れを愛する、是れなり。彼れは、曾て神に

て一個黄金時代の最後の出現等。『ダニエル書』『エノク書』及び女巫文學の諸書の或る部分は、同一の理論を猶太ぶりに表現したるもの也。固より凡この人が此等の思想を懐抱したりきとはいふ能はざるべし。これらの思想は、その初め唯だ異邦の教學に心を傾けたりし少數多想像の人々によりてのみ抱かれたりし也。

狹陋にして心に『エステル書』の基礎にまるる『エステル書』の著者の如きは、世界の他の國々に關しては之れを蔑視し外省てこれに想等したることあらざるを也。『傳道之書』の著者は、自己の子孫のために勞するを無益と考ふるまでに當來を思ふこと絶無なりき、この利己的獨身家の眼中より見來たれば、人の最上智はその資財を自己享樂のためにのみ費すもあれ、一民族の大功業は、概ね之れを少數者の力に負ふ。

慧及び詭辯などいふ性格に許多のいみじき關點を有したるにも拘はらず、彼等は史に錄せられたる無私の熱情の最醇乎たる運動の原動者たりし也。反對は常に一國の光榮を增益す。一國民中の最大の偉人は、彼等が常に死に付す所の者也。ソヒクラテース[1]は雅典人の光榮なり而かも雅典に彼れを窘迫して死に至らしめ

猶太人は（多謝す）彼等が一種の豫言的感覺は、彼等をして往々不思議にも當來の大趨勢を觀測するに適せしめたり（歷史を宗教に踏み入らしめたりの）歷史を進化の一連環と見、その一環毎に一個の豫言者ありて之れを管すと思へり。その豫言者は、各〻ハザア卽ち一千年期の領を有し、而してかかる長期（印度に於ける一佛毎に開展まる）無量劫時とひとしき）迭ひに相繼ぎて、則ち光明世界の準備となるべき世運の進行は成るなり。千年期の連環、すべて循り盡くして、さて最後の淨樂主は來たるべし。かくて人はいと幸福の生を送るべく、大地は一大平園をなすべし、而して唯だ一個の言語、一個の政府ありて相通ずべし。さはれ恐るべき慘禍ありて、この未來の新狀態の先容をなすべし。ダハク（波斯の惡魔）其の鐵鎖を破りて世界に落下すべし。二個の豫言者出で來たりて人類を慰め、且つ新天地の出現に備ふべし。凡そ是くの如き思想は世界を風行して羅馬にさへ達し、而してそこにて、豫言詩の一體を榮えしむるの主題をそ供したる、これら豫言詩の含める根本思想は、人類史の諸期の區分、此等の諸神のかたみがはりの出現、世界の全改造、而し

亞其他六〇)。

波斯王サイラスの勝利は、一時彼等の熱望を實現したりきとぞ見えし。嚴格なるアヹスタの弟子とエホヴの崇拜者とは、互ひに自ら兄弟なりと信じ合へり。波斯は複數神なるデーヴ(devas)を驅逐して、漸次之れを惡魔(daivas)に改造しつつ、かくて本質上自然的なりし古亞細亞の想像中より、一種の一神論を抽き來たりぬ。波斯の教學に存する許多の預言的音調は、ホゼア及びイザヤの或作物と頗る相類したり。波斯王アケミニデア及びクザークゼスの治下に小康を得たりけるイスラエル人は、實に波斯人自らの畏懼する所たりき。さはれ希臘及び羅馬の文明の亞細亞に對する征服と、その屢次の殘忍なる侵入とは、彼等をして遽然として再び故との夢想に立ち還らしめたり。彼等は、前よりも一層切に彼等民族の審判者、及び復讐者としての救主を仰ぎ要めたり。彼等が自ら優勝民族にてありながら、この屈辱に遭へりとの感に激成せられたる燃ゆるが如き復讐の渴を醫するには、正にこれ全世界をその根柢より震盪する一個の大改革、大回祿を要したりし也。

若しイスラエル人にして、身體と靈魂とを二元に別かつ謂ふ所の精神的教理を

たり。ス

めて破門

せり。

一個宏

氣力を新

想を知ら

の當來の

紀元前第

て無殘に

立脚して、

種族の分

離のために彼等國民が地上

デ家の復古、民族分裂の和解神教政治

の崇拜の勝利、及び偶像的諸宗教

優勝を夢想したり。俘囚期

エルサレム宮當來の榮華の壯觀を描

して坐ろきぬ、その目もあやなるい

に耶穌の夢想の一斷光が六百年を距てて彼れに通へ

ピノーザは近代的猶太人中

民の光華なり、而して彼等

民族を襲ひて、恆に其の衰

造せり。耶穌はイスラエル人

魂不滅の名の下に宣流せ

の當來に愛慕の全力を鍾

す、彼等はその一國民として

國運の、洋々無限なる神約を

九世紀このかた世界をして

も彼等が向上の精神を壓碎

しければ、彼等は乃ち最も

倍〻強力一邊の支配する

世にも矯激なる運動渦中に

狂奔するに至りぬ。その

に於ける一切の望の消滅

に至り、高調の一詩人あり、

きぬ、その目もあやなるい

るかを思はしむ。（以

人及びモーゼ五書を信ぜざるに至りしユダヤ人の頑冥なる心情は、層一層支ふべからざるに至りぬ。アンテオコス王の横暴なるイスラエル人は、その最も律法に忠なりし時にあらずや、唯だかの意義すたれる陳言を反覆するに慣れたる僧儕家のみぞ。これらの災禍は民の不信より發したりとは主張したりける（以西結書六帖一）。あはれエホヴはいかになればかの意義すたれる陳言を反覆するに慣れたる僧儕家のみに斃れたる幾多の犠牲、彼等勇敢なるマッカベの母及び七人の子をば永しへに忘れたまひて、之れを墳墓の塵に委ねたりとは主張しけるぞ。思ふに世俗的にざりけめ、又かのソコのアンテゴノスの如き一個圓滿なる聖者こそ、しして懐疑的なるサドカイの徒こそ、かかる結論にも屈縮せし如く報償を期して徳を履むべからず、吾等は求むることなくして有のまゝに安心すべきなり。さはれ、民衆の多數はこの如き人々の追懐の中にいや栄えて、脅て彼等を虐げたる悪者を審判し給ふ神の前に生く……彼等は神に知らる」。これ他の或もの、殊にパリサイの徒の如きは、蕪生説に依り縋りぬ。思へらく、義人はメ

有し、而して身體の壞廢にかかはらずして靈魂のひとり存續すべきを信じたりしならんには、是くの如き強烈なる激昂憤悱の反抗運動は當然發せざりしなるべし。さはれ是くの如き教理は希臘哲學の一産物にして、猶太人心の古傳説とは其の調を合せざりしなり。古代希伯來の文書は、曾て未來賞罰の思想の片影をだに含まざる也。

嚴密なる報償の人の想像に上らざるは、自然の數な

けれぱ或重要なる點に於いて、甚だしく相矛盾せる見解をだに、同時に
ることを得たり。（約翰二四ノ一）と。或は曰はく、義人は復活の時を待つべし
く、復活は一般的なるべしと。（路加ノ二ノ一六）と。或は曰はく、そは惟り篤信家のために
く、義人は死するや否や、彼と共にアブラハムの懐（ふところ）に攝取せらるべし
り（以上二の二理由）と。時としては復活は一個の新世界、新エルサレムなりと豫想せられ、
時としては又宇宙の壞滅その先容をなすべしと解せられたり。

耶穌はその一家見を抱持すると同時に、直ちに上に陳べたる如きパレステナの
熱沸せる思想界の中に入りぬ。これらの思想は、いづこの學校にても教へられし
ことあらず、そは風と播（ひろ）り、空氣と漲りて逸はやくこの少改革者の心魂に浹洽せり。
今日にてはいささかにても、自家運命に關する一種不安の感情なくしては、立ち能
ふまじきナザレの山上に、彼れはさばさば一點の疑ひにも襲はれず、悠々として晏座
したりしならん。吾等をして德の報償を墳墓の彼方に冀求せしむる頽ひの源な
る私情の塵を蟬脱し去つて、彼れは一意ただその事業と、その種族と、及び人類との

シヤ的王國の一人とならんがために再び肉れ來たり、世界の敵者の屈從に對して王となり、審判者の權を握るべしと。

作の根本的教義は、舊代イスラエル民族の間には、唯だ微かなるるのみ。この教義に對する、猶太の教論者は寧ろ復活說の信者なりき。さあり。加ふるに、靈魂不滅の信なる黨派たり、進歩し、且つ勢力を有す古代の教理乃至人民の位置よりして、極の要素の幾分を給したりしなるべし。仰、及びやかてぬ、而してそは來む萬物更新の教論と相說を採用したる信仰箇條となることなく一個偉大なる結合して、かの諸〻の默示りきとは見えず)、全人心に熱淵々を生じたり。そは浸透し、やかて猶太の國のいかめしき教義的峻嚴を全く闕如したり

彼等は再び肉身を取りて生ま

思想の勝利と其

べからざるも、國民の性格上の難點のために、そのかみのソロモン王の、ダビデの太守（ラヤア）の如く羅馬の一鎮臺に過ぎざりき。アンテパテル又の名アンテパスは、ガリラヤ及びペレアの封主にして、耶穌は終生其の臣下たりき。八となるを得ざりしなるべし。彼れの三王子は、英領印度の太守（ラヤア）の如く羅馬の一鎮臺に過ぎざりき。アンテパテル又の名アンテパスは、ガリラヤ及びペレアの封主にして、耶穌は終生其の臣下たりき、八となるを得ざりしなるべし。彼れの三王子は、英領印

て崔駭、羅馬帝テベリオの一偏辟として阿諛容悦を事とし、又ヒはヒばるるを多かりけり。ピリピはガウロニテ及びベタロデアの愛に迷溺して道ならぬ振舞をなして、アンテパスよりは一さは立ち優れたる良君主なりき、耶穌はそニアの封主にしてアンテパスよりは一さは立ち優れたる良君主なりき、耶穌はそ

の領地内へ屢〻旅せしことあり。今一人、エルサレムの領事アルケラオにつきては、耶蘇の知らざりし所なり。そはこの矯激にして而かも操持する所なき柔弱の君は、耶蘇の知らざりし所なり。そはこの矯激にして而かも操持する所なき柔弱の君主が、皇帝アウグストに廢黜せらるるは、宛も耶穌十歳の頃なりければ也。是くの如くして、エルサレムに於ける自治尚政府は其の最後の痕を絶ちたり。

マリヤ及びイドミアと合併せられて、スリヤの一附庸となり、有名なる議官ポブリウス、クイリヌウス帝國大使として之れを管したり。羅馬より簡派せられたる代官、コポニウス、アンビヴィウス、アニウス、ラフス、ヴレリウス、

うへに必ず勝せたり。山や海や蒼空や地の運命の戀ひを自然に關ひたす歔慨たる幻影たらる影なりける也。

耶蘇は當時に於ける政治上の出來事に多くの重きを置きたるは之れに對しては風馬牛なりしなるべし。ヘロデ家の宮廷の、彼の名を耳にせしことあり太甚だしき、彼れは唯だその地なせるのや必せり。耶蘇の生誕とほゞ年を同じうして逝けるヘロデ大王功業を遂し、欲れに對して惡意を懷ける後人をしてだに、尙ほ且つと驚稱せざるを得ざらしむ、さもあらばあれ、彼れの事業は繼續せられで畢はりしを事たりき。世俗的智巧に長けたる一個の野心家たる一個不完の事

イドミア人（ヘロデ大王を指す。譯者）は、自ら宗教的論爭の熱渦の中に浸潤して、に拘泥せられざる冷頭と明斷とを以て、なかなかに心狂へる宗教みせざるを得たりし也。さはれイスラエルの現世的王國に關する彼れの思想に至りては、たゞ當時に於ける世界大方の狀態に徵して、時代外れなりきとは評す

るべく、而してこれ實に耶蘇既に出でて、その權威に充ちたる天才と、崇高なる心魂とを以て、恰も律法を廢止せんとしたりし時なりけり。かくて、彼等狂熱家が律法の破壞者と見做せるものを、誓つて悉く殺すべしと自任せる敬虔なる刺客者流、現はれそめたり。又これとは全然の異精神を代表せる奇跡者流あり、その神德神力を有せりてふ名聲を博取せるの故を以て、神祕超自然に渇したりし時代の痛切なる要求に投じて幾多の歸依者をぞ得たりける。

耶蘇に一段多くの影響を與へたる一個の運動は、ガウロニテ人又はガリラヤ人なるユダの運動なりき。そのころ羅馬に征服せられたる國々が課せる評判なるものなりき。該條例は、總じて大切の賦役のうち、戸籍調査はその最も不評判なるものなりき。

> 耶蘇の發達を圍繞せし思想界

いなる中央行政の要求に習はざる民のいたく惶れ惑ふ所なるが、猶太人はとりわけてこれを嫌惡せり。吾人は既にダビデ王の時に於いて、人口の調査が預言者等の激烈なる逆訴と威嚇とを挑發したりしを見るなり（二撒母耳四章後）。戸籍云らべは、つまり課稅の基礎なり、而して純乎たる神敎政治の觀念に從へば、課稅は正さに一個の不敬事たり。神こそ我等が承認すべき唯一の主なるに、俗世の王者に十一の稅

グラトス等迭ひに相繼ぎて(重要なる事件に至りては、スリヤに制を受けつゝ)最後のポンテオ、ピラト(紀元第二十六年)に至り、而斷えずその脚下に震發雷轟せる火山洞言ふまでもなく熱心なるモーゼ黨の不斷の一揆運動は、この の人心を煽り立てて息まざりき。一揆運動は必然に死を齎ら威一たび危かならんとするや、彼等は喜びて死を迎へたり。 すること、常にモーゼの規制を恪守敬重せざるヘロデ王家の蠻ること、羅馬代官等が誇り示すなる誓ひの紋章(もんどころ)、及び偶像崇拜の術的作物を打壞す鉢に對し反抗激昂の太甚しきや、人生一切の念慮をも斷ち去つて顧みる所あらざりき。サリパのごとなるユダヤと、この有名なる二人の律法學者は、當代の秩序、制度に對して一個大膽なる侵以後にまで存續せり。サマリア人も亦同じたぐひの一揆運動思ふにこの時ほど律法に對する狂熱的黨派を組織しける が、そは彼等の處刑に煽動せられき。歸依者の數多く輩出したりし時はあらざ

めばなり。ユダは、明かにガリラヤ派の首魁たりき、この派は初め深く救主の觀念に浸潤し、やがて一個の政治的運動とはなりぬ。羅馬の代官コポニウスは、このがウロニテ人の一揆運動を鎭壓したりけれど、門派は依然としてその首長を戴きて存續せり。吾人はこの派が後再び開祖の子メナヘム、及び開祖の親戚なるエレアザアと呼ぶものの指導の下に、羅馬對猶太の最後の戰を甚だ勇敢にものしたりしを見る。耶穌はユダを睹て、その革命の觀念の、適然として彼れが後ちにカイザル(羅馬皇帝)の銀貨につきて發せし格言は、恐らくユダのこの過なれるを知りしなるべし。兎も角も耶穌はこの一派の運動を知れりき、而して彼失なりしなるべし。其の知見能く一切の一揆運動と遠ざかれる耶穌は、前人の覆轍に學びて他の王國、他の救濟を夢想せり。

ガリラヤは是くの如く最も多樣なる要素の相合して滾沸せるりき。生命に對する已甚の輕侮、否、切言すれば死に對する一種の渴望は、これら擬亂の結果なり。大いなる狂熱運動に於いて、經驗は何等の力をも有せず、アルゼリアは、その佛蘭西に占領せられたる初年に於いて、毎春恆

を納むるは、或意味に於いて彼れを神位に代置するものなり。國家の神教政治は、この事に於いては、唯だ偏へにその論理的歸結を趁ひ是れなり。彼等は、國庫の金を盜金と見なぬ。曰はく、公的社會及び一切政府の拒絶したり。羅馬代官クイリニウスの發したる戸籍令（紀元第六年）は、再びいたく此思想を復興せしめて、一大紛擾をぞひき發せり、テベリヤ湖の東岸なるガマラの邑の人ユダと、サドクと呼ばれたる一パリサイ人とは、この群の徒黨をその周圍に嘯集して公然たる叛逆とはなりぬ。この派の根本格言は、自由は生命に勝るが、それは惟り神の有し給ふ所也、などいふにあり、（常に一致せざりし史家ヨセフォスは、故らに之を以てして、何故にヨセフォスが、彼れを猶太國民中の哲學者の一位置に列し、乃至はパリサイ、サドカイ、エッセネ三派と相駢びたる第四の一派の開祖と許したるかを解するに苦し

等は、舊約書中の單純なる著作の毎行に、義人安きを得て神工永しへに完了すべき新天地の徴證及び謂はば曲目をば看取したるなり。

趣味、精神、兩つながら相對峙したるこの二黨派の分立は、古より常に猶太國民の道徳的發達を促したる。一個強力の原理たりし也。高上なる運命を負へる民族は。必ずや兩極を包有せる一個の小世界たらざるべからず。かの希臘に於いて、僅かに數里を距てスパルタとアゼンスと相對立せる如き、淺見者流よりして之れを見れば、睽離相容れざる背中合せの觀をなせども、其の實狀に於いて二者は自他相資の競爭的姉妹たりしなり。猶太に於けるエルサレムの紛爛に劣りきといへども、そは大體に於いてひときは豐饒なりきよりぞ發したる。エルサレム人が、自然に對する感情の全然の空乏は幾んど、粗厲、褊狹、狠戻の際にまで流れゆきて、その彼等の手に成れるすべての作物のうへに、一味の瑰瑋を鏤りたれど、而かもそは陰鬱寒儉厭ふべきものたり。エルサレムは、その嚴めしき學者、その枯淡なる經法家、その偽善にして悒鬱なる信徒を以てしては、竟ひに人類を克服し得ざるべきなり。

掃攘せんがために、神より遣はされたる不
だしたるが、その翌年に至れば彼等の死は
者は鮮少ならざる信用を博し得たりき。
りけれど、而かも毫も干渉の意志なく、多大
政府が一揆叛逆の運動を鎮壓する殘忍極
といへども、而かも其は未だかの自ら衛る
陰險なるが如き には至らざりし也。羅馬
の必要ありと思惟する日の至るまでは、あ
全放浪生活を通して、曾て一たびだに其の
かかる政治上の自由さへありけるに、剩さ
を縛することの少なきてふ幸福のあるあり、
ましてめでたからしめたり。革命卽ち他
一般思想上の活動を催起したり。人々皆みづから一切大更新の
ひをなし、經典は幾樣かの意義に曲解せられて、最も莫大なる希望
被傷の剛者と宣する若干の狂熱家を出
早くも打忘れられて、而かも彼等の後繼
羅馬政府は、或點に於ては甚だ苛嚴なりき。
しもの政治的自由をさへ允したりき。
まれる虐政は、甚だ怖るべきものなりき
べき、一個の獨斷的信仰を有する政府の
政府は、その見て以て强硬の手段を取る
らゆる自由を容認したり。
筋の干與制裁を受けたる事跡あらず。
へガリラヤにはパリサイ的衛學の、人心
エルサレムにもこの地をしてこの地に於ける

さしやかなるもうちましてゞいうらかも物性ちすると
泡ふるが如き　世界に於けるいづこ
こちら面などの　この山も、この里のぼかり姿うつくしう
面に文人の高上なる思想を謳歌するにふさはしく
ちじ。　耶蘇は、これらの山々に對して特
有しきりと見えし。　神聖なる彼れが閲歴の中にて、その最も重要なる
しく山上の出來ごとなり。　彼れが心の最も高潮に達せしは、そこにて
なり、波れが自衣
き（馬太五、一、
一四の二三、
馬太一七の一、
加九の二八）。
變容（かたちかはり）
の眼前に現はしたるも亦そこにてなり
は、目もあてら
て尚は
ず。ゝて
の珍減し得ざる際のものの
性たる郷となりて、唯だ人力の
に、耶蘇の當時に於いては、
、そこに幸福と快活
十人は氣力垂危に、雄ふしく、業にいそし
ちて活にたらけるなり。　ヴィ
スが、紀元十五年の東羅馬帝テベリオの
と共に國こゝにし。　封主アンテパ
民なりき。　ゝに一箇
ゝにしてゞ
ゝにはゞ
ゝ

北方ガリラヤが、世界人類に嫌悪したるカナン人なり、そは情熱高きマグダラ人女マリヤなり。ばに北方のみぞ、ひとりエルサレムは、パリサイの徒之れを排して、『クルムド』に牢うせられ經て吾人に傳はれるかの頑冥固陋なる猶太教の本山なりけり。

美しき自然界は、瞬間なる精神ふれば、ガリラヤの風色をしきは、思ふにエルサレムの一樣夢の如き牧歌的特色をるべし。ガリラヤは之れに反して、緑なる樂土にして、凡べて一神教的精神を生ずるの傾き少かりければ、世界のうち最もうらかなる牧歌的特色を帶ばせたり。世界のうち最もうらかなる牧歌の眞の故鄕（ふるさと）なりの感歌の眞の故鄕（ふるさと）なり。四五月の交に至れば、この里に、世に類ひなき多樣の色彩もて、飾られたる一個の掛物と變ずるなり。もろもろの動物は小さくて、いみじうやさしけなり、玆とやかにして活潑なる山鳩（やまばと）、草の葉たわわにとまれる螽蟖人の脚もと近くそ來寄りて怖ろる氣色もなき、さてはいとまじめに、つつ

幼基督教の全歴史はかかる有様にて、一個愉快なる牧場詩とはなりぬ。婚禮の祝ひの筵には白拍子及び善良なるザアカイも招かれたり。――花婿の行列にも似たる天國の諸〻の祖師――此くの如きはガリラヤが、敢て世界に提供し、而して又世界をして納受せしめんとしたるもの也。

希臘は彫塑と詩歌とを以て、人生のいみじき繪姿を描きぬ。されどガリラヤは大理石と手だれその技藝家と微妙典雅の言葉とを有たざりき。されど、ガリラヤは人のこころに最も崇高なる理想を作り出でたり。如何にとなれば、その田園詩の背後には人類の運命定まり、而してその繪畫を照耀する美しき風光の中に人となりぬ。幼かりしより、耶穌は幾んど毎年エルサレム宮の祭に詣でたり（路加二・四一）。この巡禮は地方の猶太人には一個の娯しき行事なりけり。一家打ちつれだちて、前路にエルサレム宮の壯麗榮華、祭の庭の莊嚴なる大典、さては同胞一處に會して住まふうれしさなど、心〻に念じつつ、春の幾日を山越え谷越えて行く、この種の行旅の幸は詩篇の卷〻を通して讃へ歌は

個の大都城だにあらざりき。さはれこの郷は小都大村相塡充して、人口稠密、耕耘の名殘をとどめたまで行き渡りたり。當年榮る廢墟を睹て、吾人形の美に心を騁せずこの郷は、清き流れと巧の才薄く、紛奢を思はず、外して、唯だ一すぢに一個の農民を玄のぶなり。果（このみ）とに富みたり。なる圃（はたけ）には、葡萄の蔓と無花は林檎、胡桃、柘榴な太人がサフェドの地これを多量に飲みき質主義、卽ちノルマンこれに釀せるものによ。その自足樂易のデーの農民の歯莽あらざりけり。そ漾ぐ靈化せられた野に勢ひ猛に懺悔さしめよ、如何なれ

歡樂は神の國の一部なるべし、そは謙虚の人、善意の人の娘ば花婿の友、その花婿と共に住まへるうちにあらずや。

に對して、已まの反感を催起せしなるべし。そこなる猶太の曠野達に或影響を有せしこと、及び彼れがそこに長く淹留せしことあぜらるる所なりしは、一般に信(路三、五加四の一六)。されど耶蘇が曠野にて見出でたるはあらざりき。神は、彼れの神にそは寧ろヨブの神也、峻嶮慄烈何人にも感應することあらず。時としては惡魔來たりて彼れを誘へり。かくて彼れ、そのなつかしき天(あめ)なる父を見出だしぬるや、そこなる綠邱及び清泉のに天使の歌を歌ひつつイスラエルの救を竢てる裏に、そこなる愉婦人及び小兒(わらべ)の中に。

れたり（詩篇二八四、三章）。これらの行旅に於いて、耶蘇の擇べる普通の路筋は（五路加九の一等）。今日に至るまで通路となれるものなり。

サレムまでギネアとシケムとの間の場のあたりは旅路甚だ嶮めど、巡禮者が一種物寂びたる土地にて、そこに一夜を明かすものは世にも希有なるべしと思ひに打たるるとぞいふ。谷は窈窕として狹く、一條の流れはそを圍繞せる危岩多き岩間に、これぞ、愉快なる詩篇第八十四章に一迪として記されたる「涙の谷」、即ち滴る水の谷にして、又かの哀れに婉曲なる思ふに、これぞ、愉快なる詩篇第八十四章に「涙の谷」、即ち滴る水の谷にして、又かの哀れに婉曲なる

明日は、つと起きて、この夜のうちにエルサレムに著くべしと見られしものなりけるが、巡禮者の一群、この心あては今も隊容を整めて眠りを輕からしむ。

この巡禮的旅行は、國民を一處に會せしめて、その思想を交換せしめ、かくて幾んど常に大いなる思想上の動亂の中心となりけるが、耶蘇も亦ここにて國人の心情に觸接し、而して恐らくは少時早く既に猶太教の空文虛式に拘々たる徒輩の缺陷

耶穌は、父の業をつぎて工匠となれり（馬可三、可六）。この業は、いささかも卑賤若しくは不愉快なるものにはあらざりき。猶太の俗、智力的事業に身を獻ぐるものは、まづ手工の業を學ぶを要すとせり。有名なる教法の學者、亦皆その職業を有したり。かくて周到なる教育を受けたる尊者ポーロは、一個の天幕製造人たりき。」耶穌は終生娶らず。彼れが戀愛に對する全能力は、その自ら天職と感じたる集中せり。吾人が彼れに於いて看取する、その婦人に對する非常に優婉なる感情は、彼れがその天職に對する一向歸依の熱情と兩立しがたきものにはあらざりき。彼れはアシシのフランシス及びセールスのフランシスに於けるシャンタールのフランシスの如く、彼れはアシシのフランシス一流と同樣に、自己と同じる尊者クレエア、セールスのフランシスに於けるシャンタールのフランシスの如く、彼れはアシシのフランシス一流と同樣に、自己と同じやうなる婦人をば姉妹としして遇しぬ、彼れはアシシのフランシスに於けるシャンタールのフランシスの如く、彼れはアシシのフランシス一流と同樣に、自己と同じ一きは多く耶穌を愛したりき。さはれこれらの婦人は、その事業を愛したるよりも、疑ひなし。かくて屢〻世の高尚なる天賦の人に見るならひに、彼れが優さしき心の匂ひは、一轉して一個無限の甘美、一個縹緲の詩、一個普遍の愛嬌となりぬ。彼れ

第五章　耶穌最初の說教、其の神父及び純宗教に關する思想、其の最初の弟子

ヨセフは、その子耶穌が未だ何等の公事に參與せざりし前に逝きければ、母マリア、二家の首長とはなりぬ。耶穌が他の幾多の同名人と區別せらるる時、概ねマリアの子」と呼ばれたるは、蓋しこれがために(馬可六三)也。マリアは夫を失ひて、ナザレの村に賴るかたなくなりければ、その出身の鄕里カナに引きこもりぬとぞ覺ぼし(約翰二一、四六)。

カナはアンキの平原の北方に境したる山麓の一小邑にして、ナザレより二時間乃至二時間半約の道程にあり。眺めはナザレの壯觀に劣りたれど、彌望の平原、ナザレの山、セポリの岡ふと相境して風光甚くが如し。耶穌は、玆ばらくここに逗留しきと見ゆ。思ふに彼れはここにて少年期の一部を送り、而してここにて其の偉大を現はしそめしなるべし。

偏知識的枯痩や、第十八世紀の深根の非宗教や、是等は皆、神を削減し若しくは神の中心自我以外の一切を撥無して之れを限定し、因りて以て近世に於ける一切の豊饒なる神性の思想を薙蔽したり。若し神にして實に吾人以外に存する一個の人格的存在者ならんか、自ら神と特別の關係を有すと信ずるやか、之れに反して凡神論は、神の人格性を拒否や物理的生理的諸科學は、一切の超自然的幻像は錯覺に過ぎざることを示すが故に、論理的超神論者が、古人の偉大なる信念を理解せんとは、到底不可能に了はるべし。

するが故に、そは古代宗教の活ける神とは迥然として相距たりたり。深切に神を了得したる人ゝ、卽ち釋迦牟尼、プラトーン、尊者ポーロ、アシシス、及び尊者オーゴスチン（その謎跎生活の或期間に於ける）の如きは、もしか凡神論者なりしか、如是一個の疑問は無意義也。神在の物理學的及び形而上學的論證は、此等の偉人と全く何の關する所もなかりしなるべし。

を自家の哀に感じたり。神の眞の子等なる此の一大家族の中にて、吾人は耶蘇をその第一位に推さざるを得ず。耶蘇は何等の幻像を有せざりき、神は彼れ自らの

が操行堅からざる婦人に對する自由にして親密なる面かも全く道德の如きも亦之れを彼れが天父の光榮に對する愛著の熱情及び之れに切の婦人に對する熱心なる愛慕の情に歸して說くことを得べき也（約翰七の三、七、八、四の七、八）。この未詳期の間、耶蘇の思想は如何なる段階を歷て進步せしか、如何を經て彼れはその頓言者的生涯に踏み入りしか、これらの點に關しては、彼れの傳記が唯だ斷片の物語をのみとどめて年代的精確を示さざるが故に、すべて分明なるを得ず。さはれ活ける人格の發達は、いづこに於いてもその揆一也、隨うて耶蘇の如き力ある性格の生長が、儼然たる法則に率ひしは疑ふべからず。其の大なる心魂の所產たりし一個の偉人はここに吾人が區々慣熟の思想を拋ち去り、且つ細碎なる知識的詮議に泥むことなく、正當に耶蘇の敬神思想の眞相を解せんとせば、吾人と勿らんを要す。

吾人との間に橫はる一切のものを遺却せざるべからず。夫れ超神說（自然神敎）と凡神說とは神學上の二端たり。かのスコラ學派の笑ふべき閑是非や、デカルトの

教父等の思辯は、全く異別なる精神より發したるものなり。神を以て單純に父と見たる、是れ耶蘇の全神學なり。而してこは、彼れが一個の理論的原理、又多少の證明を經たる一個の教說として他に紹說したりしものにあらず。彼れは曾て弟子と議論を交へしことあらず、彼れは弟子等より何等の注意を強索せしことあらず。彼れは彼れ自家を說きたり。絶大無私の品性は屢〻其の多くの高き性と結びて、自家一己の上に絶えず留心するの特質及び一般婦人の特有性なる非常に鋭き個人的感受性を有することを表はす（例へば約翰ニ一五の一）。神は自家の衷に在り、不斷に自家と共在すてふ彼等が一個の信念の牢として、我等が弱點の一部たる腹藏、他の意見に對する畏敬は、彼等自身を他に强要していさかも恐れ憚るところあらざるや、彼等は平然彼等自家の如き自我の昂擧は、利己の沙汰にあらず、その故、是くの如き人はかくの如き自我の思想に心祝はれて、その事業を完うせんがためには、喜んでその自ら抱ける一念の思想はまた、そはその懐ける客觀的目的と自己との自己の生命を捐つることを能くすれば也。これ所なり。合一の極度に達したるもの也。この新教說に唯だ開祖の個人的空想をのみ見る

外にあるものとして彼れに語らざりき、彼れみづからの心裏より父神は彼れの裏にありき、彼れに關する一切を打ち出でたり。彼れは神との不斷の交通によりて神の懷裏に住まひぬ、而して彼れは神を感じ、而して彼れは神を之れを默識するや、復たモーゼの靈魔や、乃至マホメットの天使がプリエルを着るを要せざりしなり。吾人は又耶蘇に於いて、尊者テレサの想像及び幻覺等のものをも發見せざるなり、而して彼れの知らざりし所なりし所以也。自己を神と一也と宣發せしことあらず。彼れはみづから直接に神と交會て人心に存したりし神の最高意識は、耶蘇は神なりと信じたり、彼れは自らの精神的立脚地より發途して、是くの如き一個の結論はざりしかの理由を解する也。世に是れ也。

吾人は一方に於いて、是くの如き一個の精神的立脚地より發途する耶蘇が、何故に竟に釋迦牟尼の如き思索的哲學者たるを得ざりしかの理由を解する、かの希臘ど、頗瑣神學と隔絶せるものはあらず。神の本性に關

のに主の名を與へんよりは、寧ろ死するに如かずと主張したりしを欲み取るものにまかせて、神のために更に一段の美名をぞ備へは、彼れに取りて權力の代表者なる此の世の王者に一種の冷觀的上の慰藉を確立しおたり、即ち天なる「父」に對する倚の心に讓したるまことの神の國是れなり。

神國もしは「天國の語は、耶蘇が世界に開始したる革命を述べんり出でたり。この現實驚くべき事の實者に從へば、罪に汚されに歸して、永遠無窮なる聖徒の國、第五の帝國しとせらる。この地上に於ける神の國は、おのづから最も多樣なりぬ。されば一個の新ごとに、それに繼ぐべき人には、それは、メシヤ、もしは一個の新ごとに、それに繼ぐべき

學は、所謂神定國を以て屬ゝ一神的崇拜、敬禮を旨とするなる眞宗教ものに外ならずと解したり。耶蘇は、その晩年において、この神たる神宗教に關する思想、其の最初の弟子

人には、そは自己に狂愚の人は靈覺の人と大術耀とも見られつべし、大能たり。世人類に對する眞面目なる貢獻は、未だ曾て狂者の與し事あらず。

意ふに、耶蘇は初めより是くの如き高駢び住まへり、唯だ狂愚の人とべからず。さはれ其の結果を見るもれど、彼れが自己の神に對する關係を、子の父に於ける關係の如くに見做したりしは事實なるべし。ここにて、彼れは自己の偉大なる獨創ありの種族と何等の共通點をも有せざるなり。猶太教美なる愛の神學を會し得ざりき。耶蘇の神は、そのする無慈悲なる主君にあらず。耶蘇の神は吾等の好惡に任せて吾等を擧に耳傾くる時に神の聲を聽く。バ卽ち父」と呼ぶかすけきラエル人をのみ神民と偏別して、之れに特殊の保護を與ふる不公平神にあらず。彼れは人類の如き愛國者にも。耶蘇はマッカビーの毅然として、高く黨員にもあらず。彼れは、神以外のも

ロニテのユダ一流の神政身を國民の僻見以上に挺き、以て普遍なる神父教を確立しぬ。ユダは、

にもあらざりき。されば彼等は既に逸早く
学をぞ受けたる。吾人が往々にして猶太人の中に見るなる美くしき顔ばせに兼ねたる彼れが愛嬌ゆたかなる性格は、彼れの身邊に一團の春温を扇がせて、ここに集へる和好眞率の民をして、おのづから恍惚たらしめたりしなり。

この少學師の思想にして、尋常善徳の平準を超出すること若し餘りに甚大ならざりしならば(人類をしてこの平準以上に躋擧せしむるの道は、尚ほ未だ發見せられざる也)、樂園は誠に地上に齎らされたりしならん。神子としての萬人同胞の一體、及びかかる觀念より結果すべき道徳上の結論は、妙にいみじき感情を以て抽繹せられたり。彼れは、當時なべての教法師等と同じく、辯證的推論を好まずして、その教説をば寸鐵の警句、もしくは時として隠語めきたる異様の表現に託したり。これらの警句の一部は、舊約の書より來たり、その他は一段降れる世の聖賢、就中ソコのアンチゴノス、シラクの子イエス及びヒルレルなどの思想より來たれり、而して彼れの之れを學ぶや、學者的研究に依らずして、俗諺として常に民間に用ひられたるものに依れりき。當時の會堂は、いと巧妙に言ひ表はされたる許多の格言を

たり。さはれ、こは彼れが最初の思想にはあらざりけらし。彼れの觀念より抽出せる美妙なる道徳的結論は、かの世の終り近づきぬと信じて、斷慾苦行に依つて、この一個空想上の壞滅に備ふる。一流狂熱家の道徳の類にはあらず、して、そは現に生活し、且つなほ生活すべき人々の國に於ける道徳なりしなり。彼れは、彼れを陷れんとて來たつて外形の徴證を求めけるものに向かつて言ひぬ、「神の國は爾曹の裏にあり」と。彼れが神國出現に關する現實的觀念は、その一死と共に虚にして柔和なるものの住ふべき神國を打ち建てたる耶蘇は、早年の耶蘇、すなはち眞なる神の聲が最もさやかに彼れが衷心に響き渡れるをりの貞潔純眞なる耶蘇なりき。神が眞にこの土におり住まへるは、そのころの幾月もしは恐らく一年(ひとせ)の間なりけり。少木工の來たりぬ。一個無限の魔力は彼れが人格より發りいでて、そのをりまで彼れを見知れるものも、最早その彼れたるを認むる能はずなりぬ(馬太一三の五四、馬可六の二、約翰六の四二)。彼れは、尚ほ一人の弟子をも有たざりき、彼れを環れる群衆は一個の宗徒にもはた門派

れじ(の誤植)三(六)「篇の父のおはれど深きがごとく」(使徒二の三五)「日ら高うするものは卑くふるは一人の福なり」(使徒二の四)「路加一一、一八の一一、一四)と。

基督、譬喩、警語、切、和平及び無私の諸徳目に面しては、耶蘇は當時の武断以上に、基も説き易へたるふしあらざるを思。これら諸徳に於ける倉堂の恩寵の高きに感じて、古きbの諸格言に新しき生命を與へたるにぞ。歳言をめでたからしむる等巧妙に表現せられたる原理と相渉らずと見做さるる箴言その者に勝れり。耶蘇が前人より借りたれる詩は、一も抽集の真理と見做さるる箴言その者に勝れり。歳言をめでたからしむる等巧妙に於けるよりも全然異別なる結果をその諸格言に於けるよりも全然異別なるものは、これら古代の「作法」及び「ダルムド」に生じたるは、否むべからざるなり。世界を征服し一変したる基督教の「作法」「語しくは「タルムド」には、言ふところ苦し雷音道徳が発んど全く古格言の補助を得て表通せられたる完全生活の最美の典則たり。

有して、一種の時樣的俗諺文學を作りなせり。耶穌は幾んどこれら敎訓を襲用したりしが、同時にこれに一種高上なる精神を嘘き込みたり。彼れはいつも「律法」及び預言者等の設定したる諸〻の義務以上に出でて完全を要求せり。かの正當に基督敎的と稱せらるべき(若しくは基督に依りて說かれたるの意に解すれば)謙虛の全德、すなはち寬容、賑恤、撙節、克己などいふきは、既に前人の敎訓中に萌芽として存したるものなり。公正の德に關しては、爾も亦人にそのごとくしむけよ」(太馬七の一二)てふ有名なる格言をさながらに襲用するを以て足れりとしき。さはれこの古くして一分自利的なる俗智は、竟に彼れを滿足せしむる能はざりけむ、彼れは乃ち極端に聽せゆきたり。曰はく、「人、爾の右の頰を批たば、その左をもこれに向けよ。さて又、爾を訟へて裏衣を取らんとするものには、外衣をも取らせよ」(路加六の二九、三〇、馬太五の三九、四〇)、「爾の右眼もし爾を罪におとさば、之れを抉き遺てよ」(馬太五の二九、馬可九の四七)、「他を審くことなかれ」(路加六の三七)、「人を罪することなかれ、然らば爾も罪せらるることなかれ、爾の敵を愛くしみ、爾を虐ぐるもののために祈れ」(馬太五の四四、路加六の二七)、「他を審くことなかれ」(馬太七の一)、「人を罪することなかれ、然らば爾も罪せら

との直截の交通に依るなる一個純粋なる禮拜と宗教とは、これら原理の結果なり。耶穌はこの大膽なる結論を宣べて曾て懼れ憚りしことあらず、而して、これ彼れをして猶太教の中心に於ける一個不屈の革命者たらしめたるものなり。何が故に人と天父との間に中保者を要するぞ、神は惟り心情を洞視し、神聖視せる傳說に肉體にのみ關する潔齋勤行、何の詮かあるべき、猶太人のさしも神聖視せる傳說だに、清淨なる感情に比し來たれば幾んど復た言ふに足らざるなり（馬可七。その六）。

ふやそれを衒ひ誇るの心強く、さては、おのれの敬神家たるを眴さんために常にその外衣を旋らし、その人を賑すに或徽章を附するなど、此等パリサイ教徒の虛僞なる信仰よりいづる一切の僞善矯飾は、彼れが嫌惡の念を催起したり。彼れ曰はく、「彼等は既に報を得たり。されど爾曹、人に施すときは、右手の爲すことを左手に知らしむる勿れ、これ爾の賑恤を隱れたまふ天父、あらはに既に報いたまふなり（馬太六の三、四、比較、傳道書、三の一七、二九の一五）。禱るときは、僞善者の爲に倣ふ勿れ、彼等は人に見られんがために會堂もしは衢の隅に立つて祈ることを好む。誠にわれ爾曹

耶穌は、モーゼ法を非難せしことあらず、さ
く看取したれど、彼れがその不
る以上の事は明かなり。彼れは
いささかの事を爲さざるべからずてふ事を反覆說きて休まざりしは
禁じたり（馬太五三）。彼れは復讐を難じたり（馬太五三）。彼れは高利
貸へたり（馬太五三）。彼れが此等高上なる慈惠に關す
したる動機は常に一貫して渝らず、曰はく「こ
なり、彼れは、その日を惡者にも善者にも照らし
らざるものにもそそぎ給へり、爾もし爾を愛す
ん、卽しき稅吏だにかかせざらんや、爾もし爾の
勝れたることあらん、稅吏だにかかせざらんや、されば天なる
く、爾も亦完くすべし（馬太五の四五、比較、利未記一一の四四、一九の二
信仰および外形の儀文に賴らずして、ひとへに心情に訴へ、神に倣ひ、良心と天父

したまへ」（馬九太六）と、彼れは、天父は我等が要するものを、我等よりも一段よく知りたまふこと、隨つて我等が此のものの彼のものと、わづらはしく神に求むることのみじき罪なる所以をとに極言せり（路加、五、九）。

この事に於いて、耶蘇は唯だ猶太教の創拗せる大原理をその論理的結論に導きたるに過ぎず、この原理たるや、この國に於ける僧官的階級が日に倍〻輕視するに至れるものなり。希臘人、羅馬人の祈禱は、概ね常に單なる利己的贅語たるに過ぎざりき。異教の僧侶はその信徒に向つて、曾て「爾曹、供物を神壇にささげんとして、曾て爾の同胞に恨を買ひしことあるを憶ひいでなば、供物をば、壇前にさし置きて、まづ往いて彼れと和をもとめ、さてのち還りて供物をささげよ」（馬五太の）と、やうに誡げしことあらず。古代に於いては、惟り猶太の豫言者、中にも特にイザヤは、いたく僧侶政略を嫌惡して、人の神に負へる崇拜の眞性質に關する一閃光や、我は牡羊の燔祭と、肥えたるけものの膏とにあけり、われは牡牛、あるは小羊、あるは牡山羊の血をよろこばず、……燻物（たきもの）はわが惡むところなり、なんぢらの手には、

に告げ人の子は罪人の手に渡されて十字架につけられ三日目によみがえるはずであると言われたのを思い出した。

婦人たちは墓を立ち去って、この一切のことを十一弟子とその他の人たちとに報告した。

婦人たちはマグダラのマリヤ、ヨハナ、およびイエスと共にいた他の婦人たちであった。

十一弟子はこれらの婦人たちの言葉をたわごとのように思えたので信じなかった。

ペテロは立ち上がって墓に走って行き、身をかがめて中をのぞくと、亜麻布だけが見えたので、この出来事を不思議に思いながら家に帰った。

（ルカ二四・一―一二）

墓場は意義深き地なり。此處のさゝやきを聞かん外に、この人と神との關係に對する崇高の思想は發れがたし。山上または閑寂の地にて創造主の一個の靈魂之れを約束せしめ、彼れ以後に出でゝ自ら足れりとする者は、この人と神との關係に對する崇高の思想は發れがたし。

イエスは墓場のさゝやきを聞かん外に

對的新觀念也。
觀念は、彼れに
に躓きたりし
するを得べき
自然に對す
ては、我等が機
諺をいみじく
て爾の目の塵
よ、まづ爾の目
明かなるべし
久しく少學
邊に集へたり
ビュート派い
タリオン、ヒル

（馬太七、四、五）

智と呼ぶなる烹錬の簡淨、彼
活用して、これに精彩を帶ば
を取らせよとはいふ、見よ梁
木は爾の目にあるにあら
兄弟の目より塵を取り去
師の心に潜めりしこれらの
立に適したり、そはエッセ
時代の精神は小教會の存
訓を有する教法學者即ち
のユゞ、ガマリエル及びそ

の躓きたる想像を給與し
たり。時とし
としては、又俗
つて、我れをし
ずや、爾僞善者
るやう、爾の眼
子を、彼れの身
ネ、もしはセラ
セメイア、アゞ
の他のものゝ

血盈ちたり、惡業をせさり、善業をならひ、公平を求めよ」（以賽亞一の一七、馬拉基一の一以下五章八節の一部）との　降りては域學匠や義人シメオンや、シふきはは、幾んどこの極致の位置に達し得て、律法の旨は一言すればヒルレルなどいりとぞ宣したる。　猶太的埃及人の中にては、フィローン、耶穌と同時に高尚なる道德的神聖の觀念に到達し、その結果、律法の形式的遵踏に對しては無頓着の態度を長したり。　セメイ及びアブクリオンも亦甚だ自由なる心學（カスイスト）決疑學者（この譯語に就ては經文の一節の正邪を一定の本文に照らして、個々特殊の場合の行たるを證示せしこと一再ならず。

ラビ、ヨハナ、はたれこの原理を最も有效に宣傳したるものは、耶穌一人にとどめたり。　吾來耶穌、はかり僧侶氣質の僅少なりし人はあらず又、耶穌ばかり宗教保護の託言の下に之を窒死せしむるなる形式に對する偉大なる敵はあらざる也。　この事に於いて、吾等はすべて彼れの弟子なり、彼れの繼嗣者なり、是れに因りて彼れの礎石を据ゑたるなり、宗教もし人類に必須なるものならば、彼れは、眞宗教の永劫世界が彼れに允許せる神的位置を空しうせざるものといふべきなり。　一個の絶

善を小得する、實に未だ盡くさず、吾人は之れをして人界に勝からず。而してこれを成就せんがためには、やや不純なる一道らず、げや耶蘇の福音をして、『馬ばそは一段と完かりしなるべく、『路可』の數章以外に出づならんをさりとて奇蹟なくしてそは能く世界を改宗し得たるが上來紋し來たれるあたりにて世を去りしならば、彼れが生涯しむる一頁だにあらざりしなるべし。而かも同時に、彼れ、神の偉大者として存すると共に、人には永しへに知られで殘りしなるべし、彼れが絶倫無上の心魂は、堵の如き無名の英雄魂中に空しく葬り去られしるべし、かくて世界は、天父が彼れに賦せられざりしなるべし、かくて世界は、天父が彼れに賦したる其の偉大なる道德的崇高より何等の饒益せし所なかりしなるべし。シラヒルレルは、幾んと耶蘇のに劣るまじき高調の宗教、何金言を吐囑して基督教の開祖とは稱せられざるべし。倫理に於いては、藝術に於けるが、訓言何の用ぞ、實行のみぞ一切なる。ラファエルの一畫に蘊されたる

も、到るところに競ひ起こりぬ（これら諸家の格言相集まりて『タルムド』をなしぬ）。彼等は筆を取ること絶無なり、當時の猶太敎學者は、書を著はししことをなし、一切は會話と、記誦に依りて傳通せられたり。さればナザレの少木工が、始めて起つてこの開的敎訓とに依りて傳通せられたる公便なる形に物せられたる諸格言を宣傳したるの日は、いさき出來事にはあらざりき（これら幾んど既に世に布きたる諸格言を改造したりし彼れは讃むべきかな）。そは、唯だ一個のラビ（彼れが一切有てりしは眞なり）と、神祕の知識に渴して最も人を引著するの力を來たれる少數の靑年とのみ。人の視聽基督敎徒なるものあらざりき、さはれ眞はその成立の初期たりし此の時ほど、完あらざりしなるべし。このや或意味に於いて、彼れは之時以還、耶蘇はまた何等の永久性をもこと能はざる也。

縫せり、そは如何なる觀念にても之れを成功せしめんには犧牲を供へざるべからず、吾等は傷を負はずして、人生の戰場より還るべからず。

第六章　バプテスマのヨハネ、ヨハネの訪問、その工夫に於ける住居、ヨハネの洗禮

この時一個異常の人傑現れたり。其名をヨハネといふ。ユダヤの曠野に聲を揚げて、悔改めよ、天國は近づけりと宣傳へしが、其地を詳にせず。こは恐らくエルサレムの東北、ヨルダン河の流域なるべし。ヨハネの出でしは、ユダヤの王ヘロデ・アルケラオの治世の末年、即ち紀元前四年の頃なりしが如し。ヨハネの家庭は、ザカリヤの少祭司にして、其母エリサベツもアロンの族なりければ、而かも彼れの宗教的教訓に遙多の重要なる特徴を供し得たり。

ヨハネは、文書の學問を聞きたれば、今や其學問を實地に應用せんとて、自ら荒野に入りしなり。彼れが耶穌と交通せしことあるは疑ふべからず。こは恐らくエルサレムの東北、ヨルダン河の流域なるべし。ヨハネの出でしは、ユダヤの王ヘロデ・アルケラオの治世の末年、即ち紀元前四年の頃なりしが如し。ヨハネの家庭は、ザカリヤの少祭司にして、其母エリサベツもアロンの族なりければ、而かも彼れの宗教的教訓に遙多の重要なる特徴を供し得たり。

ヨハネは、文書の學問を聞きたれば、今や其學問を實地に應用せんとて、自ら荒野に入りしなり。彼れが耶穌と交通せしことあるは疑ふべからず。こは恐らくエルサレムの東北、ヨルダン河の流域なるべし。ヨハネの出でしは、ユダヤの王ヘロデ・アルケラオの治世の末年、即ち紀元前四年の頃なりしが如し。ヨハネの家庭は、ザカリヤの少祭司にして、其母エリサベツもアロンの族なりければ、而かも彼れの宗教的教訓に遙多の重要なる特徴を供し得たり。

ヨハネは、文書の學問を聞きたれば、今や其學問を實地に應用せんとて、自ら荒野に入りしなり。彼れが耶穌と交通せしことあるは疑ふべからず。こは恐らくエルサレムの東北、ヨルダン河の流域なるべし。ヨハネの出でしは、ユダヤの王ヘロデ・アルケラオの治世の末年、即ち紀元前四年の頃なりしが如し。ヨハネの家庭は、ザカリヤの少祭司にして、其母エリサベツもアロンの族なりければ、而かも彼れの宗教的教訓に遙多の重要なる特徴を供し得たり。

思想は其ふところに足らざる貧ぶべきは神性そのものにありて、それは始めて實在として世界に實現せらるるに至らざるに於いてである。是くの如く個人の傳説をば、永く世界進展に傳ふるの準備せしむる人の有なる、爲を捨ぶるの點に於いても匹儔を絶したるの故である。

これに反して高德の士はいかに出でざるなり、勝利の冠は、いかに重きかを知るべし、永しへに新たなるべし。

メル山に棲みて、野獣の生を送り、巖洞を家として、そこより雷火の如くはためき出でて、この世の帝王を一生一殺しけるが、世々の訛傳を經て竟には、隱見變幻かつて死を味はざる一種の超自然者となりぬ。エリア再び出でてイスラエル王國を恢復すべしとは、彼等が一般に信じたる所なり。その峻峭なる生活、その今なほ戰慄と死とを感せ八をしてしむべき記憶、その今なほ戰慄と死とを感せるが如く一般人心に銘して、その民衆一切の想像的産物の上に一種の特性をぞ捺したる。誰れにもあれ、猶太人民の上に偉力を揮はんと望まば、エリアを學ばざるべからず。而して孤寂の生活は、彼れが須要なる特質なりけるゆゑに、彼等は一切の聖徒は皆懲戒、孤棲、峻嚴の諸日を送らず、而しのぞと想へり（以賽亞二一ノ一一亞二一ノ一の）。是くのごとくして、曠野の退隱は高上なる運命及び其の序開きの要件とはなりけるなり。

第六章　バプテスマのヨハネ、ヨハネに對する耶穌の訪問、そのユダヤの曠野に於ける住居、ヨハネの洗禮

出にして、ヘブロンに近きユッタ若しくはヘブロンに生まれきと、ブロンはユダヤの曠野に接近し、アラビヤの大沙漠とは隣かに歎てたる僧等なる長老衛にして、昔も今もぐひの窒慾齋戒の儀式に同じく嚴酷なるセム思想の一つなりけり。ヨハネは、幼より或たくに彼れの心を惹きたり謂はば彼れが環境たりし件の曠原は、疾として宛然印度の枯禪敎瑜珈の生活を送れりの。弟子晴天、彼れの身邊に集まりて酷なる敎理に思ひ聽かめ、若し此の隱者に於ける特殊の性行が、そのイスラエルの大豫言者の最後の裔たるを吾人に表示することなりしならば、吾人は髣髴として印度ガンヂス河畔に彷徨ふの感をなせしならむ。

猶太國民が、自家の運命を回想して一般民衆の想像は一向に古の豫言者に聽ながら苦悶多き長夜の夢の如く、彼等猶めけるが、そのは太民族をして、遽然として大なるものはエリアなり。この豫言者中の巨人は、荒涼たるカル

又の名メンダイト」は、アラビア人が「エル、モグタシラ」と名づくるに屬す。紀元初數世紀の間、浸禮教、星辰教等のあひだに存したりし猶太教、基督教、浸禮教、星辰教等の吾人に傳はれる説明の頗る混雜せるがために、批評を搖曳せる諸〻の宗門は、その一個の疑案たり。兎に角にヨハネ、エッセネ、及びこの外形上の實際的儀禮の多きが、極東新來の影響を受けたるは事實なるべし。ヨハネ派の特色にして其の名根本の因つて起これる今日に至るまで殘存せり。

一件の儀禮は浸禮即ち全身沒なり。

の東邦宗教に慣行せられたりし如く、猶太人の宗教にも既に慣派の間にありては、そは一種特殊の發展を遂げたりしエッセネさはれ全身沒の浸禮に、此の者を猶太の一個慣用の儀式、即ちなりぬ。

第六章　バプテスマのヨハネ、ヨハネに對する耶穌の訪問、そのユダヤの曠野にかけ住居、ヨハネの洗禮　九一

トの諸誓約とは何等の類似をも有せざるヨハネの生地に近くエッセネ諸派の枯禪敎は、死海の東岸なる及び男女性交の禁絶は、豫言者（シーアス）の脩道門の敎規と制度とを有てる隱遁者なるを要すとやうに組織の開祖の如く、自家特殊の敎師の或ものも、亦や婆羅門の敎師に類したる隱遁者流なりき。思ふにこの思惟せられたり。靑年子弟點に於いて、印度に於けるる釋迦牟尼の遠來說敎として、世界を蹈破したりしか、近世の初フランシスカン派の僧徒等のなり。或佛敎の雲水等は、行爲をせるごとく、猶太の地にも脚しならんと思はるる如しならんか。この點に關しては吾等知る所あらず。バビロンは、一時實に佛敎の一故鄕たりしなり。さて又、ボーダスプといへる人として名高く、セベイズム卽ち星辰敎の開祖たり。セベイズムは其の字源の示すが如く、バプテスマ卽ち浸禮の義なり、詳言すればそは數多の浸禮敎にして、又尊者ヨハネの基督敎」と稱呼せらるる現存宗門の原始也、而して「尊

は彼れに對して何等の惡言をも發し得ざりき（馬太二一の二五、路加七の三〇）。

的貴族主義に對する民衆的情操の一勝利なりけり。彼等主なる祭司

のこの事に關して、明瞭に發言せざるを得ざる場合には、いといたく困じたり。

浸禮

（馬太三の二）と。彼れは來たるべき大「震怒」、詳言すれば特に起こらんとする恐るべき破滅を宣し（馬太三の七）、而して今や既に斧は樹根におかれ、樹はやがて火に投げ入れらるべしといへり。浸禮を

粃糠をは、ヨハネの眼中には、將に差し迫れる出來事に對する準備の重大なる手段たりしなり。

也（ゝ）吾人は彼れが此等の出來事を如何さまに會得したるかを詳知せず、されど彼れが耶

すれば官權的猶太教に對して、強硬なる攻撃の鋒を向けたること、及び耶穌の如く、

實にヨハネを以て嚆矢とすべし。ヨハネはその活動の舞臺としる死海の近傍の地を擇びたり。そのに(路加三、三)、又はエリコとルダンの河岸又水多きサリムに近きエノンるベタニヤもしくはベタバラに、或はら即ち「泉」と稱せられたる地方に退きぬ。數多くの群集就中猶太族の人ゝは、彼れんがために爭うてそこに臨至せり。一人、又世界の忘るる能はざる一人とはなりけり。

民衆は彼れを豫言者なりと信じ(二馬太一一の一四、馬可六の二六)、又多くの人は彼の再生なりと想像せり(馬太一四の二、馬可六の一四、約翰一の二一)。かかる復活の信仰は當時一般に弘布せり、人ゝおもへらく、神はイスラエル國民をその最後の運命に導かんがために、古豫言者の或者を墳墓より起たしもとより彼れは此かるりとも見たり、むべしと。或は又、ヨハネを「託言をなさざりけれど(約路加翰一三の一〇五、二一)、この豫言者復活説に反對し、且つ常に狂熱家を仇敵視したりし僧侶及ハネを藐視せり。されどこの浸禮家の聲望は彼等の稔知する所

嚴の生活を送り（馬太一四九）、云ばゝ云ばゝ斷食し、且つ不安に充ちたる一切の所有を有を願つて、特殊の思想のうちに所有物共有の片影を認め、又富者は貧苦とその一て、特殊の恩惠をうくべきものと見られたるなり（路加一三一一）。

ヨハネが活動の中心は、ユダヤなりしかど、その聲華は、忽ちガリラヤに籍甚して、耶穌の耳に達したり、耶穌は恰もその最初の談議によりて、一少群の聽者を其の身邊に集めど、彼れ尙は人の信賴を受くるに於いて、自己の思想とさしも共通の點多き一敎師と會こと薄く、且つは其の敎訓を見せばやとの望に驅られて、輒ちガリラヤを後にしてヨハネを訪ひぬ。この新來の客は、みづから他のすべてのものと同じく、ヨハネの浸禮を受けたり。ヨハネはガリラヤの諸弟子を歡迎し、而して彼等が自己の弟子となりき、彼等はあまた通有の思けり。二個の敎師は靑年なりき、彼等は自他相愛して、互ひに劣らず其の溫情を汲みかはしたり。ふハネに對しては、浸禮家ヨハネに對する耶穌の訪問、そもユダヤの曠野に於ける

彼れがとりわけて藐視せられたる下級の民に歡び迎へられたるは確實なり（馬一二、路二、一四の三）。彼れは、アブラハムの子孫たらしむべしと神は路上の石をして、よくアブラハムの子孫たらしむべし（馬三、九）と。

彼れは、耶蘇をして奏功せしめたる偉大なる觀念、卽ち一個純宗教の思想の萌芽をだに有したりとは見えざりき。されば彼れは僧侶を必要とする諸〻律法的儀式に代ふるに、一個祕密の儀式を以てして、この思想に有力なる寄與をなしたり。その位置恰も、プロテスタントと稱する中世紀の苦行的宗教が、當時の官權的僧侶より、諸〻の赦罪の獨占權を褫奪して、宗教改革の先驅をなせるとは總じて嚴酷なり、峻峭なり。其の敵者攻擊に用ひたるの如し（馬三、七、路三、七）。彼れの說教は一個の續けざまなる脣聲の痛罵なりき。彼れは政治については、全く疎遠なる局外者ならざりしが、フォスは、其の師バプテスマを經て、ヨハネと殆んど直接の交通をなしたりけるが、其の注意深き描寫のうちに、之れに關する多くの暗示を與へたり。ヨハネを死に至らしめたる破局は、實にこの閒の消息を含みたるが如し。彼れの弟子は甚だしき峻

發點とはなりぬ、卽ちヨハネの證明をなり。洵に勝るの證明者はあらじと思はれたるほどなりき。さはれヨハネは、耶穌のために此事に於けるヨハネの博したる信憑の大いなる、世に推讓することと絶えて無し。耶穌はヨハネと共に住ひしあひだ、常に彼れを先覺と仰ぎて、唯だ纔かに控へ目がちに、その自家の天才を開發したるのみ。

さしも、自己の思想と合致せざるも、少くとも數週の間は、その深奥なる獨創家たりし耶穌の若しくは毫も重きを置かざるものをも、そりしが如し。彼れが前路（ゆくて）は、なほ不明なりき。加之、彼れの心に投ずるの故を以て、之れを採用したり。さはれ此等の附加物は、曾て彼れが中樞一貫の原理を累したることとなくして、常に之れに從屬せられたり。耶穌はヨハネと同じく、この儀式に伴はいたく歡び迎ふるものとなりが故に彼れは浸禮を施し、彼れの弟子等亦之れと倣ふを要すと考へたり。かくして、ヨルダンの河岸は到處浸禮家を以て塡充せられ、その說法は

かせり（約三、六、四の二一、二三―一）。彼等は、ヨハネの範に以てせり。

虛遥譲は、強剛なる猶太魂の曾て知らざる所なり。不斷に怒張せる如是ラメネイ一流の頑梗なる性格の人は、甚だ激情にして競爭者をも容れざるべきが如く然り。されど、かくの如き觀察法は、畢竟ヨハネの人格に對する謬想に基づく。吾等は彼れを一個老年の人と想へり、これと反して、彼れは耶穌と同年輩にして、當時の思想に從へば極めて若かりし人なり。心の發達よりいふも、彼れは耶穌の父にあらずしてむしろ兄弟なり。同じ憎惡とにや世の年老いたる教師にして一個無名の人あり、卒然近づき來たつて、己れに對して獨立の態度を表するを見んか、必ずや色然として反撥すべし。凡そ一學派を率ゐるの人にして、温かなる心情を以てその後繼者を引接するの美例は、寥々として聞くこと希れなり。さはれ青年は如何なる犧牲をもなし得べく、隨うて自己と同精神を耶穌に認めたるヨハネが、些の個人的誠意をも設けずして彼れを歡び迎へたりしは、さもありぬべきことなり。

この二人者の親善なる關係は、後に福音傳記者等が開展したる福音傳全系統の出

き間互ひに親密なる交りを保ちて存
信友としてヨハネの出來事の報に接したる最始の一人なりき（馬太一三・一四の一二）。
ヨハネの譴言的生涯はやがて中道にして挫折せりこ彼れは
預言者の亞流にして、時の政權者に對
彼等の失行に對する大膽なる攻撃は
たりし彼れのユダヤにある間は、封主
が、そのヨルダン河を渡りてペレアの
の領地に踏み入るや、そこは即ちヘロデ・アンテパスの
を思させたり。ヨハネが宗教的愛國的熱情に依りて、其の身邊に多くの人々を群
集せしめたる一事は、人の疑心を惹くべきものあり。加ふるに
外に、一個純然たる個人的禍難のふりかかるありて、この嚴酷なる弾劾家の死をし
て竟に止むを得ざらしめたるぞ是非なき。

悲劇的人物

ロデアなるヘロデ王家の中にて最も異色ある人物の一人は、ヘロデ大王の娘ヘ

多少の功をたゝひ求をなしたり。弟子はやがて師に關して弟子等の間に多を吐き訴へたり。彼等のに取つて代るべしと思ひたるがやがて彼等のに來たりて。若ガリラヤ人ヨハネの弟子等ヨハネの許なり。さといふ。ヨハネの優勝は。かくのごとく狹隘なる心事を超越せり。一說に從へば。耶蘇が其の最も著名なる弟子の一群を羅致したるは。其のヨハネと伴侶たりしに取りては。明々白々の擊名日に隆きに來たりて。

開の事なりきと鏃を駢ぶるに至り。耶蘇は唯だヨハネをして益々成功を獲得せしめたる外形的手段を長せんことを希ひ。而して民衆の注意を得んがためには。ヨハネをして益々驚くべき成功を獲得せしめたるの事實を羅致したるは。其のヨハネと伴侶たりしに取りては。明々白々の擊名日に隆きに來たりて。

爭ふべからざる一事にして。之れと力を角せんなどとは。彼れの想ひ到らざりし所なりき。

也。耶蘇は唯だヨハネの保護の下に生みづからの浸禮者たるに滿足せずして。その開口第一の言葉は。ヨハネの說敎と同一の言葉を以て。その說敎を開始したりき（馬太三の二）。

ざるなり（馬太三の七、一二の三、四、二三の三）。

その他耶蘇の談議中には。ヨハネの表現が語々さながら反覆したるに過ぎざるなり（馬太三の一七の二）。

らに反覆したるもの多々なるを見

かくて由來猶太人の婚姻法は、嚴正なる猶太人をして、常に非宗教的なる羅馬人數にして寧ろ孤立的なりしヘロデ王朝の人々は、憤怒の情を起こさしめたり。この多

法を蔑視せり。かれが其の伯父ヘロデと婚したるは、恐らくその
り。ヘロデはマリアムネの子。ヘロデ大王に廢嫡せられて、曾て政
せしことあらず。ヘロデアは、夫が一門の中にてその位地の劣れ
如何にもしるに心安からず、
て躬ら主權者たらんと思ひ定めたり。アンテパスは、
頗使する所たり。意志薄弱なる彼れはいたく
を約し、その妻を斥けんことを約したり。アンテパスの妻は、ペト
レア近鄰なる諸種族の首長たるハレスの娘なり、この陰謀の警戒
亡の意を決し、乃ち父の領地なるマケロに旅すと詐りて、窃かにア
に依りてそこに護送せられたり。マケロは、死海の最東端に突出
砦にして、アレクサンダー、ヤヌスの手に成り、更にヘロデ王の再築
地味荒涼不毛、奇怪の話り傳へ、妖魔の出沒する處なりと信ぜ
は、恰もハレスとアンテパスとの國境上に介在しけるが、當時は
たりき。ハレス、件の警戒に接するや、その娘の逃走に對する一切
意りなく、竟に諸族の開を遞傳して、恙なく彼れをペトラの地に迎へ入れたり。

第七章　神の國に關する耶蘇の思想の發達

ヨハネが獄に囚はれたるは、紀元後二十九年の夏とおぼしき頃なるが、その頃に至るまで耶蘇は、死海及びヨルダン河邊の地に脚を留めたり。總べて、嚴重に斷食を守りつつ四十日を曠野に送りぬ。弟子の一種と伴侶として種々其の想像を逞しうしたり。凡そ世界の中、死海西岸の岩根こごしき一帶の傾斜ほど、神にも見すてられ（路加一四）。この曠野は一般に魔神の巢窟と信ぜられ人生とも隔絶せる荒涼の地はあらざるべし。傳へいふ、耶蘇この曠野にて襲來し、甘言を誘惑せること、及び試鍊に對する彼れが勝利に報いんがために、天使下りて彼れに奉事しぬといふことなど（馬太四章、馬可一の二、一三、路加四章）。

耶蘇が、ヨハネの捕はれたるを知りしは、思ふにその曠野を出で

而して彼れは汎く其の感化力を揮ひ、
こゝより其の弟子等と消息を通じ、かくて再び耶蘇との聯絡を有したり。
の日近きにありとの彼れが信仰は、ただますます宇宙の運動に注意し、而してその中に、自己宿昔の希望の成就に憑ふ徴證
より不斷外間（そと）
を見出だされんと力めたり。 救主出現

類の儀文のゆるを遁つることあるまじければ也。基督教が高尚なる人心を一切の外形的儀式を擺脱し去りたる一宗教として收攬し得たるは、そが更に再び自家特殊の事業を開始せざるを得ざりしが故に由りし也。ヨハネの囚はるるや、その一派は忽ちにして衰へゆき、かくて、耶蘇はいて、彼れが、ヨハネに負ひたることとては、唯だ纔かにその說敎と其の對衆的行動とに於ける敎訓なりしのみ。實にそのころより、彼れは非常なる力をもて說敎し、群衆をして彼れの權威を感せしめたり（馬太八の二九、馬可一の二九、路加四の三二）。

加之、ヨハネの權威を感せしめたるが如し、これとの共棲は耶蘇をしてその「天國」に關する思想をいたく熟せしめたる敎訓なりしのみ。實にそのころより、彼れは非常なる力をもて說敎し、群衆をして彼れの權威を感せしめたり（馬太八の二九、馬可一の二九、路加四の三二）。

加之、ヨハネの囚はるるや、その一派は忽ちにして衰へゆき、かくて、耶蘇は更に再び自家特殊の事業を開始せざるを得ざりしが故に由りし也。ヨハネの囚はるるや、その一派は忽ちにして衰へゆき、かくて、耶蘇は更に再び自家特殊の事業を開始せざるを得ざりしが故に由りし也。ヨハネに負ひたることとては、唯だ纔かにその說敎と其の對衆的行動とに於ける敎訓なりしのみ。實にそのころより、彼れは非常なる力をもて說敎し、群衆をして彼れの權威を感せしめたるが如し、これとの共棲は耶蘇をしてその「天國」に關する思想をいたく熟せしめたる敎訓なりしのみ。實にそのころより、彼れは非常なる力をもて說敎し、群衆をして彼れの權威を感せしめたるが如し、これとの共棲は耶蘇をしてその「天國」に關する思想を併しながらヨハネの感化といふよりも、耶蘇みづからの思想の自然の進歩に由れること多かりし也。この時以還、彼れの標語は、「めでたき音づれなり、神の國は近し、悔改めてふ宣言なり（馬可一の一四、一五）。耶蘇は最早單に、高上なる敎訓を寸鐵の警句に自己懷抱の理想を建設せんと試みたる超絶的革命家なり。この事に汲々たる一個怡顏の道德家にあらず、彼れは世界を根柢より改造して、地上に神の國を待つことは、耶蘇の弟子たることと同義語となりぬ（馬可一の一四、三一五）。

事なるべし。彼れは最早、この年ば異郷なかりしなり。疑ふらくは、彼れは又ヨハネと一網の奇禍に羅織して一死其の理想の進歩慎れ、且つは聲名未だ顯はるるに至らずして何の益なきの時、躬から危地に蒞むを欲せざりしなるべし。かくて彼れは一個の偉大なる經驗に熟し、且つ自己とはいたく其の天賦を殊にしたる一個の偉人に接觸して、自己獨創に關する滿身の自覺を得て、その眞の故郷ガリラヤへ歸りけり（馬太四の一二、路四の一四、約四の三）。

總之、ヨハネの影響は、耶穌に取りて利りしよりも一しほ害ありしなり。そは彼れが發達を杜絶したり。何となれば、彼れがそのヨルダン河に浸禮に對する一時的傾注より見ても信せざるを得ざればなり。疑ふらくは、ヨハネ若し自由の身として生き存らへんか、その權威を以て彼れが名も亦た宗派として終はりたらんなき猶太の一宗派として終はりたらん。疑ひなかるべし、そは世界は單に他の聖

事物の新秩序、人類を支配すべし。
に雖も、
やがて來
し、滅きは
めは見ゆ
にしあれ
に。これを土に播けば大木
三一三三節の
その全圖
る譬喩談
ること、及
章、一節、路加八の一
誰もか
始んどそ
もいふべ

この「神國」しく、は「天國」ふ表現は、曾て言はれ耶蘇は、これに一個の道徳的意義を附し、一個の社會的適用を試みたり、而してこれ實に『ダニエル書』の著者の、その天啓的情熱を以てしてただに、敢て夢うじて想像したりし所のもの也。

彼れは現在の世界に於いては、惡が最高の權を握れることを見たり。「この世の王」は、諸の王にして、一切のもの彼れに從ふ（約翰一二の三一、一四の三〇、一六の一一）。比較、哥林多後四の四、以弗所二六の二）。諸の預言者を殺せり。サタンは自ら爲さざるなり、義人は虐せられ而して不正者は泣く。「世界」は、謂はば神とその聖徒等のために報ゆべし。正義代はりて世を支配すべし。

この正義の王國の出現は、一個の偉大にして急激なる大變命たるべし。世界は幾んど現存の事相と反對のさまを想ひ浮かぶるを要す。初は終たるべし。一個

はこの世のものならざるに、何とて彼れは無益の心づかひをもてんとはすべき、彼れは下土を蔑視し、現實の世界の顧念の價値なきに隱れ家を見出だしたり、彼れは超越的自眼の偉大なる未だ「我が王國はこの世のものならず」と言はざりき。幾吾人にひとり平和を齎らす靈魂自由の眞教論を打建てをさへ曇らせたり。時としては奇怪なる誘惑、彼れが心たり。さはれ、彼れのユダヤの曠野にあるや、惡魔は彼れに地上の諸王ならむ。羅馬帝國の眞勢力に對する知識を闕如せし彼れ、當時ユダヤを其まで動かしつつありて、やがて恐るべき干戈の抵抗となりて爆發道の熱情を感得せる彼れは、思ふに其の數多の黨與と、其の自己の一王國を建設せんとの希望を抱き得たりしならん。恐らくは、幾の疑問は、彼れに其の解答を迫りしならむ、神國は暴力によりて實はた柔和によつて實現せらるべきか、叛逆によりてか、はた忍耐にへいふ、一日ガリラヤの愚民ども、彼れを擁して王となさんと犇きわたりけれど(約翰

いふ思想なりしことを。されば、かかる疑問に對する耶穌の解答は、かるべきなり。彼れが神をしてこの土を統治せしむべしてふ自信れの精神を領したり。彼れはみづから、普遍の改造者なりと信じたり。全自然界も、顛狂も、疾病も、及び死も、だ彼れが器具なるに過ぎざりし雄邁なる意志の激發するや、彼れはみなり。その勝改新に從はずんばあらず。猛火と、神の氣息とをもてべし。一個の新天地ここに創造せらべし(太三二三〇)。

自然界其のものをただに一網に打盡したる一個の掃蕩的革命、是の根本的觀念なりき(使徒二一三)。彼れが政りけらし、ガリラヤのユダの先例は、民れは羅馬人及びその代官等に對して、しなり。彼れが時の政權に對する服從は、まこかりき。彼れは譏りを避けんがために貢をカイザルに納めたり。

は、彼れは眞ごころより言ふなるべし。これぞ我が望みたるものなる」と。 若し一切の人事に免れがたき缺陷を姑く措きて言はんか、耶蘇の建設せるもの、永しへに彼れのものとして殘るべきものは、その靈魂自由の教論なり。 希臘羅馬の道を講じたり。 されど概觀すれば古代人は、自由をもて或種類の政治に關しての附隨するものと思惟したるなり、彼等の所謂自由は、ハーモディアス及びアリストジトン（ヒッパルコス及びヒッピアスに對して紀元前五百十四年に、虐君に處せらる。譯者）プルータスの如きは、虐政の下にありて及びカッシアスに人化して宿りたり。 眞の基督教徒は一段眞實なる自由を享有せり、このうつし世にありては、彼等は一個の謫者なり、されどそは、ふるさとならぬこの地上の東の間の支配者たる彼等に取りて何かあらむ。 彼等に取りては自由卽ち眞理なり（約翰八、三二）。 耶蘇は、如是一個の教論が、共和政の自由終りを告げつゝある及び古代の帝府的小國家が、羅馬帝國の統一の下に併呑せられつゝあるの時に當りて出でたるなり。 而かも彼れがいみじき常識と、その天職につきて有したるに適へるの理を會得するほどに、深く歷史に曉通

（六の五）耶蘇は窈かに山に遁れてそこにひとり寂びしき幾時を過ごしぬと。彼れが高貴の天性は、彼れをして一個の叛逆の首魁、即ち一チューダ、もしくは一バルコケバたらしむべき過誤より遠ざからしめたるなり。

彼れが爾らさんと希ふる革命は、常に道徳上の革命なりき、されど、彼れはこれを成就せんがために、尚ほ未だ天使と未日の喇叭とを藉らんとはせざりき。彼れは人の上に、又人みづからに頼りて行動せんことを希ひたり。末日審判の近きを思ふの外に他念なき夢想者流は、人間の改善に對する彼れが如き老婆親切を有せざるべく、又人間未だ曾て有らざる最精美なる實践的道徳の教系を開立することあらざるべし。彼れの思想は、疑ひもなく多くの曖昧を藏したり、而して彼れをして、さしも崇高なる事業に心動かしめたるものは（縦令、其の實現の趣きは彼れが想像したりしものとは、いたく殊なるふしありきとするも）その一個確乎たる立案にありしを見るなり。

耶蘇の建設せるは、實に神の國、他語もていへば靈魂の王國なりき、耶蘇もし天父の懐裏より、世界歴史の上に果を結びつつある彼れの事業を瞰おろしなんに

彼等は政治問題を社會問題に從屬せしめて、前者に一種の無頓著を表するものを難じて已まず。或意味に於いて、我等の見は正を得たり、何となら八事の正當なる統理上に有害なるもの一般道徳のうへに何等の進歩を起こしたる乎。耶蘇にして若しこの代りに、自ら羅馬にゆきて、皇帝テベリオに對して不披瀝したりしならんには、世界は果たして何者を贏ち得たり(皇帝テベリオの嫌疑を受けて羅馬の將軍の謫死す。譯者)の往事を悔恨する事に、その熱心なる愛國家としては、竟ひに當代を横流大なる意義なきらざること、及び人は市民以前にして又その實驗科學の原理は、耶蘇が理想的企畫の一部たりし夢想と相容れず、吾等歴史を知る、耶蘇が預期せしたぐひの天地的革命は、ひとり地文學的、天文學的原因との關係の如きは、未だ曾て明證

吾等が所以を宣言してこそ、國家の一切にあるべし、ただ彼れが政治に重流を捉らふる能はざりしなせる大潮の現したるなれ。

以上のものなりてふ眞理を世界に顯

てもし眞個の預言的本能とは、彼れにイザルのものはカイザルに、神のものは神に歸すべし（馬可一二ノ一七）と、て、政治以外に獨立の或物即ち暴力の帝國の眞中に於ける幾多の造りいでたり。言ふまでもなく、是くて政權の正當を是認すべきてふことを一個の原理として說定し眼もて而かも疑義なく納稅すべしと宣言せるが如きは、取りも直さず、古への共和主義を打滅ぼして、一切の暴政に與みするものなり。基督敎は、こ著るく市民の義務感を弱うし、かつ世界の意味に於いて、批難を免るる能はず。さはいへ、基督敎が三百年間、政治以外に獨して顧みざりし廣大なる自由の團體を建立したる一事は、優にそが市民的諸德に償ふに足る。國家の權力は、地上の事物に限られたり、人心は自由とも恐るべき羅馬萬能の箠は、永しへに折り去られたり。

何物よりも先づ公共生活の義務に專念する人は、自家政黨上の爭奪以上に何等かの高尙なるものありとする人々をば、容易に假借することあらざるなり。就中、

たること、及びそが賢明穩和なる人をして、吾人が細項平庸の計較を以て、吾人凡常の思想を逈然として超出せる、此等の希有異常の運動に倚ふること勿らしめよ。吾人をして、されど吾人をして又、世界は幸福もしくは個人的道徳てふ如き單純なる思想によりて、動かさるべく、斃々としてその一部に蓋するが如き、非なり、是くの如きは明かに、人間の更生に與りて力あらずや。

理想は其の本質上、常に一個の無何有也。今の時、吾人若し現代の救主（クリスト）、即ち現時代の懇請者を描出せんと欲せば如何にか爲すべき。みづから一千八百三十年の昔に倣したる事を爲すのみ。すなはち吾人の意識に現はるるよりも全く殊なるものとして想像すべ

せられしことあらざるなり。　されば、偉大なる人物に對する評價を公平ならしめんには、彼等が衆俗と分有せる僻見の有無により て判斷すべからず。　コロムバスは、尚ほ亞米利加を發見せしが、ニュートンは、その世界論と同樣の思想より發途しけれども、尚ほ一個の眞理なりと信じたる迂愚なる解釋を以て、自らその天啓に對する一個のアシシのフランシスや、一個のルーテルなりや、一個のジョン、ダークや、乃至一個のルーテルなりや、一個の公示したるが如き誤謬を有せざるの故をもて、彼等以上に立たしむべき乎。

より、又は世界の眞構成に關する多少の科學的知識によりて人を衡らんとするは、果たして望ましきことなる乎。　吾人は耶蘇の位置と、彼れが力の下に伏在せる諸原理とを善解せざるべからず。　第十八世紀の自然宗教、及び或種の抵抗教（プロテスタンテズム）は、吾人をして、基督敎的信仰の開祖をもて、唯だ一大道德家、人類の一大恩人なりと思ひ慣はしめたり。　吾人は福音書の中に、いみじき格言以上の何物をも見ざるなり、吾人は福音書が其の形を成すに至れる奇異なる知力的狀態の上に、そと心して一個の被覆を置くなり。　之れと同じく世には佛蘭西革命が一次なら ず主義の勃を脫し

は明かにこの矛盾にありき。天地一新の理想家（基督再來説は動もすれば千年期説を信ずるもの。譯者）のみにては、何事業を成し得ざりしなるべく、又道徳家のみにては何等有力の事業を興へ得ざりしなるべし。天地一新説（基督再來説は動もすれば千年期説を信ずるもの。譯者）のみにては何等有力の世界に於ける偉大なる成功の二條件を結合して、他は連續生活の可能こと求に應せざるべからず、即ち一は革命的發途點にして、他は連續生活の可能こと是れ也。何事にもあれ耶蘇は人事界に於ける一個無雙の革命を宣言すると同時に、一千八百年の開社會の基礎たる諸原理を唱へ出だしたる也。

耶蘇を理想主義の一乘政府について何の思想をも有せざりけれは也。かかる政府は、彼れに取りては一個の錯謬也。彼れが之れを語るや茫漠たる言辭を用ひて、恰も何等の思想の如く然り。有らゆる有司官人は彼れにあたり、彼れはその諸弟子が、その民の一個自然の敵と見えたり、彼れはその諸弟子が、

く、又干戈に訴へずして、黒奴の鐵鎖を解放し、貧者の境遇を改善し、若しは諸〻の國民をその壓虐者の手中より濟ひ出だす一個の道徳的釋放案を描出すべし。而かも吾人は個中世界の大革命、ヴージニア及びコンゴーの氣候の變化、數百萬人の種屬の改造、現今の複雜なる社會の奇怪なる單純化、乃至は歐洲に於ける政治的布置の自然的順序の轉換等を含めるを遺却せるなり。耶蘇が希望したる「一切事の復興」（使徒三ノ二一）も、これに增したる困難はあらざる也。新天新地、新エルサレムの天上よりの出現、「見よ、わが一切を新たならしめん」（默示二一、二、五）てふ宣言は、おらゆる改革家の理想と哀しむべき現實との對照は、人心をして、常に其の冷靜なる理性に反抗して是くの如き叛逆の擧を敢てせしむ、小人は之れを狂愚視すれど、一旦其の事の功を奏するに至るや、憂きに反對したるものは、最先に其の合理當然を認識すべし。

耶蘇が、世界の終焉近きにありとの教義と、現在の狀態と殆んど大差なき人類の恆久なる狀態を眼中に置きて立意したる、その一般の倫理教系との間に一種の矛盾の存し得べきは、何人も否み得ざるべし。彼れが成功を確實ならしめたるもの

に憎まるる所のもの也（加一五―六）。神の國の勝雄者は、心の愚直なるものなり。富者にあらず、學者にあらず、僧官にあらず、婦女なり、平民なり、卑賤者なり、青年者なり（馬太五の三、一〇、一八の三、一四、二三、二四、二五、路加四の一八、六の二〇、一八の二二、二五、一七、二四、二五）。「メシア」降臨の大いなる特徴は「貧者また福音を聽かせらるてふ事にあり（馬太一一の五）。

ここに再び優勝を占めたるは、耶蘇の牧歌的温藉の天性なりけり。階級上の諸差別消滅して、この世に於ける一切の權威を地に下らしむる一大社會的革命は、彼れが夢想なりき。世は彼れを信ずべくもあらざりき（約翰一五の一九、七の一四、一六）。

したり、さはれ彼れの弟子は、この世のものにてあらざりき世は竟に彼れを死に付さんとす。

等は、彼等の謙讓そのものを以てこの世を征服せんとする、謙虚素朴なる民の一小群なりける也。「世俗的」てふことを「基督教徒（クリスチアン）」てふことと兩端の異たらしめたる思想は、開祖の思想そのものの中に、十分の由來を有したりといふべきなり。

すること、あるべきを預告し、而して個中何等の差ふべきふしありとは一刻も考へ到りもしたことあらず（馬太一〇の一七、一一）。さはれ、彼れは曾て富める者、權力ある者に取つて代らんとする何等の希望をも表示せしことあらざるなり。彼れはその弟子等が窘迫及びさまざまの刑罰を受くべきことを預告せり（馬太一〇、一六の二二、二〇、三二、三三、約翰一七の一五、一四の二）。されど武裝的反抗の思想は、曾て一たびも現はれに取りては、萬物は一個の具象的實現に外ならざれば、彼れは肉身を離れて靈魂ありてふ思想をば、いさかも有せざりき。彼れは一個の完全なる理想論者なりき、物質は彼れにありては、唯だ理想の外面的顯現にして、現實は不可見なる物の活表現たるなり。

吾人は、誰れにか向かひ誰れをか頼んで、神の國を建設せんとはする。この點に關して、耶蘇の心には何等の疑惑もあらざりき。それ人の崇ぶ所のものは、神の前

が、天使も
及び異獣
座を環繞
る車輪を
的異象の
には、諸獣
られ、而し
いたるも
これを永
「人の子」は
に於ける
の或門派
の王と推
上に適用

が、天使も諸〻の異獣の上に位
及び異獣は、この國の民がアッスリ
座を環繞せしめたりしもの也。既
る車輪は、諸怪物の上に、負か
的異象の大いなる啓示者たるもの
には、諸帝國の夢象の眞中に大
られ、而して書の將に開かれんとす
いたるものに向つて進みゆきける
これを永久に支配すべき權力を與
「人の子」は單に「人」といふと同義語な
に於ける件の重要なる文句は、太く
の或門派に於いては、世界の審判者
の王と推さるる救主の一稱號とは
上に適用したるは、やがて其の救主
的使命の宣傳にして、且つ來たるべき大破局の

第八章　カペナウムに於ける耶蘇

吾人は曆の時以還一層矯激の度を增し來たれる、一個の思想に支配せらるゝの開き出だし種の絶望的無頓著を以て、其の驚くべき天才とその異かに彼れをたる徑路に打沿うて、邁進したるを發見すべし。彼れるに此時よ慕ひ來たれる少數の徒にのみ、其の思想を打明けたる後、復れの敎訓は公開せられて民衆の注意を惹きたに三十歲（路加三三）。浸禮家ヨハネの弟子にして、來たりて耶蘇に投せしもり。彼れ年齒正其の數を增し、加之ヨハネに反きて耶蘇に伴隨せる聽者の一小群は、明かにありしなるべし。彼れの最初の心ニエルが、そラヤに歸ると共に、大膽に「神の國の福音」を宣べたるは、實にこの一敎會ふ「人の子」は正しく耶蘇その人なりける也。

藝術及び天の夢象の中に、最終にして最勝なる啓示の神的宣傳者として見たりて鬼神誌に反對したる猶太人の思想に於いては、單に人の形したるもの

この期に於ける耶蘇は、ゲネサレ湖畔なるカペナウムの小邑なりき。

カペナウムは、カパル即ち村落てふ心語をも含みたる名にて、羅馬式の都邑を表示する大邑、例へばテベリヤの如きに對して、一個のささやかなる古様なりし。その名の世に知られしは、其の著書の一つざるや、猶太の史家ヨセフォスは、其の近傍なる泉の名と思ひ取りたるほどなり、村よりも、その名高かりけるなり。カペナウンはナザレと同じく何等の歴史を有せず、ヘロデ王家を悦ばしめたる汚はしき運動に對しても、何等の關係を有せざりき。

太より歸るや、直ちに故郷ナザレに著して、之れを第二の故郷となせり。彼れの猶せざりきと。一福音傳記者の素朴なる記事に見ゆるが如く、彼れはそこにて何等の奇蹟をもその事業を開始せんと試みたりしが、功を奏行ひ得ざりしなり（馬可六の五、比較馬太八、路加四の二三）。彼れが家門の卑賤なることが其の地方に知れ渡りし爲實は、いたく彼れの權威を損じたり。

ことの兄弟姉妹等と顔を合せたりしナザレの民どもは、彼れをダと能はざりき、加ふるに注意すべきは、彼れの家族がいたく彼れに反對し、

確言ならし。此時彼れは、日の老いたるものに委託せられたる、盛大なる權力を擁して、世界を審かんとはするなり（二約翰五の二、二七）。

この新豫言者の教化の成功は、今や確として拔くべからず。すでに純なる無邪氣の精神とを特有せる男女の一群、耶穌を慕ひ來たり、而して口々に言へり「爾は救主（メシヤ）也」と。「メシヤ」は、ダヒデの子孫たるべきが故に、彼等は自然にメシヤと同義語なりしこのダヒデの子孫てふ稱號を耶穌の出生に知れわたりければ、かかる稱は彼れに多少の迷惑をも與へしならめど、彼れは人々の呼ぶに任せて、喜んでこの稱を受けたり。而して、彼れ自ら擇びたる名は、人の子てふ稱なりき、こは表はには一個謙退の稱にして、而かも直接に救主的希望と聯關せり。彼れは、彼れみづからを稱呼するには此の名を用ひたり、其の之れを喜びし用ふるの屢々なりしや、彼れに於いては「人の子」てふ語は「予」てふ代名詞と同義なりしほどなりき（彼れは予てふ語を避けて用ひざりき）。さはれ彼れは他よりこの稱を以て呼ばれしことなし。その故、此の稱は彼れが未來顯現の時に於いてのみ、始めて十分なる意義をもて彼れに適用せらるべき謂はれあればなり。

數多の古代の會堂は、今尙ほガリラヤ
いみじき良材もて造られたり、さはれ
び蔓草模樣の裝飾多きに過ぎたるが
座席あり。寺院殿堂の特質を
公衆讀誦の用に供へられた
齋あり。その內側には
る一個の高壇あり、神聖な
爲めに、やや虛飾に流れた
一個の小建物は、全猶太人
生活の中心なりき。彼等は安息日に
をも有せざりければ、何人にても最初
み、而してそこに集ひぬ。猶太教は、
を據ぶる首都エルサレムを除きて
標本は、吾之れにミドラシ、卽ち全然た
對の意見なりけり。これ卽ち「說敎」て
がて一種人之れをフィローンの短論
ザン卽ち標本は、吾之れを陳べ、若しくは疑問を提出
ン卽ち對の意見は、件の自由公會とはなりぬ。こ
第八章　カペナウンに於ける耶穌　　一三五

而して全然彼れの天職を信せざりしてふことなり（馬太一三の五七、馬太四、約翰七の三、馬可六の四）。或時の事、彼れの母及び兄弟等は、彼れの心狂へるを主張し、腕方に訴へて彼れを捉らへんと力めたり。更に一際暴戻なりしナザレの村人どもは、彼れを或險崖より擠し（おと）て殺さんとさへ希へりと傳へらる。耶穌が此くのごときは、あらゆる偉人の共通運命なるを觀じて、「何人も故郷にて豫言者たるものあらず」といふ古諺を援きて自家身上に加へたりしは、良に當を得たりといふべし。

此等の障礙はいささかも彼れを沮喪せしめざりき。彼れはカペナウンに歸りけるが（馬太四の一三、約翰二の一二）、そこにては、安息日の開に、傳道上の一隊を組織したり。この美麗にして豐饒なる一鄉の民は、安息日を除きては、曾て一處に集會することあらざりけり。而してこの一日こそ、耶穌が其の敎化のために擇びたる日なりけれ。當時は各邑、皆その會の場處を有したり。こは寧ろ一個のささやかなる正角長方形の室にして、希臘式の裝飾を施したる一個の廻廊あり、何等の際立ちたる自家の建物をも有せざる猶太人は、曾てこれらの建物に一個特創の樣式を賦せむともせざりけり。これら

を。意のまに得るの術もありて、爲めに新思想の傳播弘布に樽益にして、又彼れが其の教義上の教訓を提供する最慣用にしてこれ卽ち、耶蘇が自由の手段なりし也（馬太四の二一、三一、四、三九、六の二、路加四の一一、三五、馬可二三、九の三一、一〇、約翰八の四四、一三の二〇）。彼れ會堂に入り、讀經せんとて立つ、ハザン彼れに書を捧げて讀み、而してその中より彼れ自身の思想と關係するものを抽出し來たる（路加四の二一）。ガリラヤには幾んどパリサイの徒を見ざりしが爲めに、其の教義上の論爭に於いて、エルサレムに於けるが如き厲しき辯難攻撃の聲を耳にすることなかりき。（エルサレムにては、耶蘇は屢〻彼等の激烈なる辯難の爲めに、發端より其の進行を妨げられたるなり。）これら善良なるガリラヤ人は、曾て此くいかりいみじくも、彼等の愉しき想像と調諧せる教論を聽きしことあらざる也。彼等は彼れを讃へたり。彼等は彼れを勵ましたり、彼等は彼れが談話の巧妙にして其の論理の確となし難透の疑案に答へ得たりとして最も其の幾んど詩的調和を得たる談論は、尚ほ未だ經學者等の街學のために佔領せざりし朴直なる民心の愛慕を博したり。

官又は使節たるべき委員と、及び聖物監督者とあり。かくして會堂は、一個廣大なる司法權を擁するの責任を有し、且つ之れを監督する實際上の小獨立國たりし也。これらの會堂は一切の國家的團體の如く、羅馬帝國の晩年に至るまで名譽條例を發し、社會に對して法律力を有する議決を投票し、乃至身體上の刑罰をも制定せり、而してこの身體上の刑罰は、一般にハザン即ち請經者の執行する所なりき。

激烈なる心活動を有する猶太人の特色と相合して、かかる一種の制度は專横なる嚴酷の認許せられたるに拘らず、甚だ活潑なる論議の府たらざるを得ざりしなり。猶太教が十八世紀間の迫害を經て、能く自ら支へ自ら完うし得たるは、ひとへに會堂の力なりけり。これらの會堂は、相互に競ひ開ぐの好戰場とはなりぬ。彼等は、内に相分離せる幾多の小世界の如く、各〻國民的精神を匿して、これらの競鬪爭を消耗し、等級に對する爭ひは熱烈に戰はれたりき。第一位の名譽の席を占取するは、いみじき敬神の報と見られ、又富者の特權としていたく羨まれけり。されど一方には、人おのおの自ら讀經者たり聖書の本文の註解者たる自由

ほ湖畔に沿うて、平原の他の一端に到れば、吾人はカンミンエと稱する一邑を得べし。そこには美しき數條の流れと、岩開を斫り開きて造りなせる、清らかなる道とあり。これゲネサレの野と、湖の北方坡地との通路として、耶蘇の當年屢〻踏過したる所なり。此ヘルモン、タビガの麓の一流を渉るべし、これより二十五分時の旅路は湖より程遠からぬ所にして、吾等はアイン、タビガよりヨルダンの河口に至るまでの間の、瘠鹵なる斜地の上に、落々たる小屋と累々たる斷碑とを見る、これ卽ち

羅馬、雅典の名と共に、人類が永く忘るまじき五小邑は、耶蘇の當時メヂデルの村とテルホムとの間に散在したり。こは唯だマグダラ、ダルラデンの中にて、今日たしかにそれと知らるるは、ベッサイダ、コラザンの五邑、卽ちマグダラ、ダルマヌタ、カペナウン、メヂデルの村が、耶蘇の最も親しき女友の生地たる當年の小邑の名と位置とを保存せるものたるは、疑ひなし。ダルマヌタの

此くてこの少教師の權威は、日一日と加はりゆきぬ、而して民衆が彼れに對する信賴のいや増すほど、彼れの自信も亦おのづからいや增したり。域は甚だ狹隘なりき。そは全然テベリヤ湖の峽地に劃られ、而してこの峽地の中に於いても、彼れが特に擇びたりし一地域ありけるなり。湖は蓑五六里、廣三四里あり。そは幾んど一個完全なる楕圓形の觀をなしたりしかど、テベリヤよりヨルダンの河に瀉ぎ入る所まで、一種の入江をなしたり、その弧は約三里を算すべし。これぞ、耶蘇がおろしたる敎への種に、いとみじう適したる一沃地とこそ、後に至りて知られけるる。いでや吾等をして、今日の日も回敎の魔神のために、枯瘦の喪服を打ち袗はれざりし以前の光景をば、步々點檢する所あらしめよ。

テベリヤの邑を後にするや、吾等はまづ海に轉(まろ)び入りたらんやうなる、山なす險巖を見るべし。やがて、山ゝは次第に退きて、一個の平原幾んど湖と平面に展開し來たる。そは見る目のたのしき蒼綠の森にして、アイン、メダワラと稱する古への大圓地より、その一部を發したりとおぼしき流れ幾筋、その間をくぬりゆく。正當にはゲネサレの里なる、この平原の境にメヂデルと呼ぶ蕭條たる一荒村あり。尙

命と歡樂とに饒めりし波間をば。孤舟一葉今はいと侘びしげに岸邊はフレ湖の如く。岩と尚ほ清瑩にして澄徹せり。れ水は今幾個の小岬ありて。薔薇（さうび）樅（もみ）樹（のき）及び刺（とげ）玄（はしばみ）げきケとより成りて。池よりも小さき海と見るべし。澄明淨潔一塵の汚泥を帶びず。小波（さゞなみ）常に輕くわきてクリケアに近きヨルダンの河口と、ゲネサレ一點を拍てり。そこにの原の境とには。美くしき花園ありて。去來の波一々その芝生と花とを打ち越えては。一個のささやかなる入江をなして。美はしき介殼充ちたり。水鳥群飛して湖面を蔽ふ。

る碧水深く燃ゆるが如き岩間に停蓄せられたるを。サして一個の黄金杯底にあるの觀をなせり。北は雪をフェド山上より望戴くヘルモンの山ペレアの高地。全くたる一脈の山勢を分けて行く。さはなして。カペナウンに於ける耶蘇

るべからず。コラヂンは湖の北方なる、及びカペナウムにつきても、之れを今日はアイン、メダルワラの諸邑のいづれとも同視せんこと、頗る覺束なし。吾人は想ふ、或は風土記に於いても歴史に於けるところにこの偉大なる歓迎の遺跡を隠埋せるにはあらざるかと。これが足跡を接吻せんとて場所を確定し得んこと、所詮疑はしといふべし。

湖水、地平、灌木、花卉、思れぞ耶蘇が其の神業を開始せる、方三四里域の一切の名殘なる。樹木は今は叢影をだに留めず。往時は草茂り榮えて、史家ヨセフォスをして一種の奇蹟とまで觀せしめたりしほどなりしに――その記によれば、自然は恰もこの一地に、寒國の植物と熱帶の果實と温帶のものの如く、一歳の間、花果常に滿地に塡溢せしむるを喜べるの宿をいづこに見いだし得べきかを。一日今や旅人をして、次の樹蔭（かげ）にはしむる地とはなりぬ。湖はいたうさびれたり。

認め且つ自ら「神の子なりと宣言」すること
人其者に
一たびも想到すること
いつも
の小世界
不斷の
は、時とし
て、東岸の
ア、及びカ
は、又當時
せしことと
中央に立
種種の妖
デ王が、羅
ぎ見しな

第八章　カペナウムに於ける耶穌

にありて、その氣候は苑も死海熱帶の狀と相似たり。往時は鬱密の過甚の暑氣を和げたり。今日に於いて、毎年五月の初めより、苑るこの全湖地が、僅て僅丈なる活動の舞臺たりきとは殆んど解しさはれョセフスは、この地の氣候を甚だ温和なりと指定せり。ふバニアに於けるが如く、此臨にも亦歷史的原因より來たれる氣しや疑ふべからず。耶蘇の愛好したる此の地をば、さながら死の枯凋せしめたるものは、回教、就中十字軍に對する回教徒の反動なりき。

耶蘇は一個危險なる鄉の民どもは、この一鄉の最高運命が、僅てこの平和なる土地に、いみじき不幸を齎らすものなりけき。

耶蘇は一個危險なる鄉人なりき、そは彼み出でたる光榮を有すテヤは二個の競爭的狂熱黨の驅逐して相爭ふ憂慘沙漠に變じたりしなり。

さは、その鄉村に八知れず埋もれてありしならばし若し年齒壯なるまで、その鄉邑の齎來を慮りしならむとは言ふものぞ、而して彼

第九章　服飾の第二章

さ一地に建てそのたるパン（羊群を保護する神の名）、あまたの神像の前に杖を停めたりしなるべし。

諸〻の異神をば、神化の人、もしは鬼神と解し慣れたる一合理的れら一切の形像上の神を偶像視し去りしや必せり。多感なる諸しめたる自然崇拜の詩美は、竟も彼れを動かさざりき。彼れはツカルトの古聖處に、今尚ほ猶太人のと略〻相類似せる一個の原始存したりしことをも、明かに知らざりし容居と一個の聖森とを建てたる異教と、其の偉大なる勤勉と不義觀は、竟も彼れの眼を喜ばしめざりしや必せり。一神教は人をして、異教に對する一切の評價力を閉如せしむ。多神教の有せざるに似たり。耶蘇は、これらの旅國〻を遍歴せる回数徒は、何等の眼光をも也、彼れは、いよいよして、明かに何をも學ぶ所あらざりしにのりき、彼れの湖畔に歸りぬ、彼れが思つもなつかしきゲネサレはそこに愛と信仰とを見いだしたりの古里はそこ

蘇に奉事するに忙しと見えし時だに、尚ほ絶えず漁人の事にめる耶蘇は、時として、彼等を人間の漁者たらしむべしと言へり（馬太四の一九、馬可一の一七）。まことに一切の弟子中、耶蘇はこの二人者よりも熱心なる歸依者を有せざりき。

ザブデア又はゼベダイと稱する有福なる漁人にして、數艘の舟の持主たりし他も亦、耶蘇を厚遇せり。ゼベダイに二人の子あり、長ヨハネといふ、而してこのヨハネこそ即ち後に初代基督敎の歷史に、一個の重要なる位置を演じ出だしたるものなりけれ。二人とも熱心なる弟子たりき。或證跡ば、ヨハネもアンデレと同じく、耶蘇が浸禮家ヨハネと交遊せりし折、彼れも、ヨセフとゼベダイとの二家族は、親密なるが如し。いづれにしてれが終焉の際に至るまで隨從せり。

婦人は眞に熱心に彼れを迎へたり（馬太二七の五五）。彼れは婦人に對してに打振舞ひぬ、而してかるか擧動は兩性間の思想の結合を甚だ優美ならしむ。猶

彼等の、レバノンの善良なる部分の住民に、やや似たるふしあるを想見す。唯だ諸ろの偉人を産出する天才は、特り前者に見るべくして、後者に見ざる所なり。耶蘇はここにて、眞個の家族を見出だしたり。彼れは彼等の一人として、彼等の間に安住せられて、その懐疑の同胞と、その少恩のナザレ人との冷嘲的不信を忘れ去りたるなり。カペナウンは、彼れみづからの市邑」となりぬ（可馬太九の一、二の一、二）。彼れは、就中耶蘇に愉快なる隠家と、篤信の弟子とを捧げたる一家ありけり。この家には、耶蘇が湖畔に來たりしときは、必ず投宿せしところ逝りぬとおぼしきヨナパ、即ち希臘語のペテロ、「石」と綽名されたるシモンにして、他はアンデレといへり。イダの生まれなるが、耶蘇が其の公生涯を始めしころカペナウンの二人兄弟の一人はケて子あり、姑、彼れと共に住まへり。耶蘇はこの家を愛して常にここに同棲せり。ペテロは娶りて耶蘇はヨルダンの河畔にて、彼れと相知れりしならむ。この二人の兄弟は、師耶

他の一人は、その家の一人娘で、十五歳になる美しい女の子であつた。

四人は、いつもの通りに一緒に出かけて、その日は那須野の高原に遊んで、夕方になつてから、手に手に花束を携へて帰つて来た。

ところが、その翌日になつても、その翌日になつても、四人は帰つて来ない。

家の人たちは、どうしたのであらうかと心配して、あちこちと捜してみたけれども、どこにもその姿は見えない。

そこで、警察署へ届け出でて、警察官も一緒になつて捜したけれども、やはり分からない。

そのうちに、一週間ばかりたつてから、四人のうちの一人が、那須野の原の中で、変り果てた姿となつて発見された。

それは、その家の娘であつた。

娘は、両手に花束を持つたまま、胸を突き刺されて死んでゐたのである。

その傍には、他の三人の姿は見えない。

娘の死体を検査してみると、その胸の傷は、一刀で突き刺したものではなくて、何度も何度も突き刺したものであつた。

娘は、一体誰に殺されたのであらうか。

他の三人は、どこへ行つたのであらうか。

警察官は、この事件について、いろいろと取り調べてみたけれども、犯人の手がかりは、少しも得られなかつた。

犯人は、一体誰であらうか。

三人は、どこへ行つたのであらうか。

この事件は、当時の新聞紙上に、大きく報道されたので、全国の人々は、皆この事件に注目してゐた

太民族に於ける高雅なる趣味のあらゆる發達を杜絶したる男女の隔絶の一事は、疑ひもなく當時に於いては、吾等の今日に於けるが如く、大邑よりも田舍及び村落の方、甚だ峻嶮ならざりし也。三人もしくは四人の、歸依の心深き侍女(かしづ)くの樂しみ、及び彼れに相言ひ伴ひぬ(馬太二、七の五、五、六、馬可一、五の四、路加八の二、三、二三の四九)。彼等はこの新宗派に、能に對する趣味の一要素とを導き入れたり、此等要素の重要なる意義は、彼等のうちの一人にして、その一寒邑の名理解し初められたりしなり。大いならしめたるマグダラのマリヤは、甚だ熱烈なる稟性の一婦人なりき(路加八の二)。

彼れは七個の鬼に憑かれたり。當時の用語に從へば、彼れは神經的にして、且つ表はには説明しがたき沈痾のために惱まされしが如く、耶穌はその皓潔にして優美なる人品もて、彼れが心の煩擾を鎭靜し、マグダラ婦人は、ゴルゴタの刑場にまでも伴隨して、耶穌に忠事せりき、而して耶穌の死後僅かに一日にして、彼れは一個の重要なる事件を演出しぬ、そは吾人の後ちに記さん如く、彼れは復活に對する信仰を確立せしめたる主働者なりけ

耶穌が死後の事なりき。耶穌の一家の人々が「主の諸兄弟」てふ力ある團體を造りたるも亦この時なりけるが、市の陷落の後はベタニアに隱れ家を求めたりしこと、宛もマトの生時、何等の重きを有せざりしその妻女等が、彼れの死後に至りて、いみじき權威となれりしと撲を同じうすれり。この團體は、長き間エルサレム市の敎會の仲間を親しき仲間の中にても、耶穌ホメッなりけるが、市の陷落の後はベタニアに隱れ家を求めたりしこと、宛もマトの生時、何等の重きを有せざりしその妻女等が、彼れの死後に至りて、いみじき權威となれりしと撲を同じうすれり。

これ

仲間を

なりけ

もて、い

得たり

加九、九の

九、五、四

集まり

せんと

謂はば一個の「内輪」は、その尤なるものは、彼等の熱心なりけり。ゼベダイの二人の子なるヤコブとヨハネとの過甚なるの故をもて、いみじうも之れを諱名して「雷の子等」と呼びぬ。げに彼等の熱心もし雷を御しならば、彼等は屢〻之れを驅使利用したりしなるべし（馬可三の一七、九の三の一七、九、路加九、五、四）。ヨハネはわきて耶穌と親しかりきと見ゆ。漸次に來たり、而して其の言行錄を物するにも、毫も彼等一派の利害の記事を掩蔽せざりし弟子等は、耶穌の彼れに對して抱けりし溫かなる交情をも鋪張

けられたるトマス、タッダイと名づけられたるレッバイ（約二〇の九の二四、一六）、ガウロニテのユダの弟子にして、そのころ組織せられて、やがて猶太民族の運動に一個重要なる地位を占むるに至りしケナイム黨の一員と思ばしき狂熱家シモン（馬太一〇の四、馬可三の一八、路加六の一五、使徒行一の一三）と綽名されたるヨセフ、バルザバ、アリストンと呼ばれたる有無疑はしきマタヤ、及び最後にカリオテの邑のシモンの子ユダ等。ユダは忠實なるこの一群の例外にして、世にもリラヤ人ならぬは、唯だ彼れ一人ありしのみ。カリオテはユダ族の極南の一邑にて、ヘブロンの彼方一日の程の處にあり。

吾人は總じて、些の愛情をも有せざりしを見たり。

さはれクレオパの妻のマリア（前出）の關係にて、耶蘇の從兄弟たりしヤコブとユデとは、この時よりクレオパの妻マリヤみづから、カルバリ山の最期にまで耶蘇に隨從したる彼れが友の一人なりけり（可馬太二七の五六、馬一五の四〇、約翰一九の二五）。耶蘇の母マリヤは、此の時未だ彼れの傍らに在らざりき。マリヤが甚だ重要なる位地を獲得し、而して弟子等が彼れと相結託せんとするに至るは、唯だ

る福音傳の著者ならざりきとするも、この書は耶蘇の性格に關して多くの點に於いて證りを與ふるものなるべし。傳者としての彼は、單に、猶ほたる觀念を有したるにかかはらず、無價の貴き教訓を含む一個の恍惚たる心魂をもて、其の記憶を轉換するの慣ひありければ、師の著作に與りてなかりしが如し。

テトーンのソーヴァゲートンに於けるが如し。彼れは單に、熱烈にして正確なる記錄者の稱號を用ふるを禁じ、たゞ彼れのみ雅も師にしてこの著作の中に描きつつありと信じながら、即ち託言の下に巧妙なる僞作を供給しぬ、完全なる善信仰は、これざりしが如し。

正當に謂へば、何等の階級組織も、これの新約書には存せざりき。耶蘇は、絶對的に、ラビ藉しは父といふが如き優れたり、彼れのみ雅も師にしてシモン、ペテロは、この仲間のうちにて、特別の神のみ雅り父也。彼等の中の最大なる者は、彼れの家に住まひ、又彼れの舟にて教へたるの觀ありき。耶蘇は彼れの家に住まひ、又彼れの舟にて教へたるの觀ありき。

彼れは仲間以外の人よりもこの重きを置かれたるの觀ありき。耶蘇は彼れの家に住まひ、又彼れの舟にて教へたるの觀ありき。

せしふしあり（約翰一、三の二三、一、八の一五、一、七、二九の二〇）。

ある事實は、共觀福音書中、シモン、ペテロと、ゼベダイの子ヤコブとヨハネとが一種の祕密會を作り、而して、耶蘇が他の信仰及び消息について疑を抱ける時には、則ちこの會を開催したることなり。加ふるに彼等三人は、その漁人の事に於いても、相協力したりきと見ゆ（馬太四の一八―二二、路加五の一〇、約翰二一の二）。ペテロに對する耶蘇の正直、誠實、感激の性格は、耶蘇の毫しも神祕家ならざりしことを證するに足れり。ペテロは、その單純なる疑惑、その偏見、及びその一切の人性の弱點をばすべて、師の面前に打ち明けて坐ろにセントルイに於けるデョインボルを想ひ出だしむ。耶蘇は、その信任と敬意とを失はざる一個友人の態度を以て彼れを儆しめたり。ヨハネを謂はんか、その青春、その熱情、その靈活なる想像は、彼れをしていみじき美しさを有せしめたりしや必せり。初代基督教に、さしも劃然たる一個の影響を與へたりしこの傑人の人格は、唯だ後年に至りてその發展を遂げたるなり。彼れ若し、彼れの名を

はその時こそは、何人か最も「人の子」に近き榮座を占め得て、謂はば其の大宰相たり補弼たり得べきものぞと各〻自問せかかる事に思を凝らせる彼等は、竟にその母サロメを慫慂しサに寄り近づきて、その子の爲めに二個ら高うするものは卑くせらるべしてふこと、及び天國は心謙る、格言に依りて、巧みにこの請一場の談柵を生じ、ヤコブとヨハネとに對する不平の傳者は、絶えず自己を「耶穌の愛したる弟子」なりきと名乗り、耶穌終焉の際その母を託したりと記し、且つ彼れ自身をペテロと併置せんことを求め、

上記の九の二二、一六、二七、二八、一〇）。

第九章　耶穌の弟子

一四五

一群の首長と目せられ、而して通行稅の係員が、この仲間より稅金を徵收するにも、彼れに對つて交渉するを例とせり（馬太二一ノ三一―七）。耶蘇を救主と認めたるは、彼れを以て始めとす（馬太一六ノ一六―一七）。耶蘇の不評なりし折、彼れ其の弟子等に「爾曹も亦去らんとするか」と問ふや、ペテロは直ちに「主よ吾等誰れにか適歸すべき、爾は永生の言葉を有ちたまふ」と答へたり（約翰六ノ六七、六八）。耶蘇は屢〻彼れに敎會に於ける或種の上位置を與へ、又彼れにケパ卽ち石てふスリヤ語の綽名を與へたり、蓋し耶蘇はこの語によりて、ペテロを敎會の「隅の首石」とするの意を詮表せんと欲したるなり（馬太一六ノ一八、約翰一ノ四二）。耶蘇は又或時は、彼れに「天國の鍵」を與ふることをさへ約し、且つ常に永遠に准可せらるべき裁決を地上に宣するの權をさへ許し與へたるが如し（馬太一八ノ一、馬可九ノ三三―三七）。

件のペテロの好位地が、他の弟子仲間に、幾分の嫉妬心を起こさせたるは疑ふべくもあらず。就中、未來世及び神の國の見解に關して惹き起こされたる嫉妬は熾んなりき。未來の神の國に於いては、一切の弟子、師の左右座に居流れて、イスラエルの十二支族を審判すべしと定められければ（馬太一九ノ二八、馬可一〇ノ三七）、彼等

れたり。彼等は唯だ、刺客、劫盗若しはれたるのみ」此くの如き宮職に就きたる猶太人は絶交せられ、而して法律家は彼等脱せられたり、彼等の財貨は呪詛せらじたり。此等憫むべき社會の譴人は、彼等自身の階級以外のものとは何等の社會的交通をも有せざりし也。耶蘇は、レビが晩餐の饗應をば甘受したり、而してここには、當時の言葉に從へば、「あまたの稅吏と罪人と」居たりける（路加五の二九）。此等の世評よりして吾人は、屢〻正統教派の爲めに卑しめられ險なきを得ざりし也。かくして吾人は、屢〻正統教派の爲めに卑しめらからぬ家に出入するものは、罪惡の社會と會すべき人〻の偏見と衝突するをも顧みず、自級を高うせんがために、尊敬熱信者輩の盛罵の矢面に立ちたる彼れを見る。パリサイ人は、果てしなき勤行と外形的敬禮の類ひとを、救濟の價となしたり。さはれ、神は唯だ一事卽ち感情の純正をのみ嘉みし給ふ事を宣傳しつつ出で來たれる耶蘇が、これら數〻の勝利は、その人や職務的僞善の腐敗を蟬蛻せる一切の靈魂に祝福歡迎せらるべき也。

人より身を起こしたり。八毎に苦勞作業は、かの說教者等が基督教の奇蹟的起原をわきていみじく表示せよ、此等の弟子にして、社會の上等階級に屬せしものはあらざりき。されど猶太にては賤なる性質のものにはあらざりき。さは唯だアルピヨの子なるレヾとなん呼ばれたるものと、今一人恐らくは使徒マタイとのみは稅吏と呼ばれたるもの、羅馬に於いて「プブリカニ」と呼ばれたる、身分高き(常に羅馬の貴族たりし)收稅者には等は、此等收稅者の手代、位地卑くき被傭者、單純なる稅官たるに過ぎざりき。世界最古の貿商道の一たるガリラヤ湖に沿うてガリラヤを横ぎりたるマスコへの通路には、此の類の被傭者を盛えしめたり。この道路にはンには、件の役員許多住みけり。この職業は決してあらずして、猶ほ見做したり。彼等に取りて新奇なりける徵稅の事は、彼等が臣服の徵章なりき。又、稅吏は非法の熱心家にも嫌惡せら端外道の所行なりと主張せり。此くの如き、納稅は異

第十章　湖畔の垂訓

是くの如きは、テベリヤ湖畔に於ける耶蘇の周圍に集まれる貴族を代表せるものには、唯だ一收税吏と、ヘロデの家令の一人たりしものの妻との一要素だに、この最初の聖徒の團體にり き、彼等は幽鬼と精靈とを信じたり（路馬太一四の二六、馬可六の二四の三九、約翰六の四九）。他は悪く漁人と平民となりの致育をも幾んど受けしことなし、さはれ彼等は温情と好意とに溢れたり。ぬ。彼等はその單純善良、幸福なる狀態に於いて、實に神の國の前驅をなしたるものなり。

彼等は、あるは樂しき小湖の穏波に搖られつつ、あるは夜を湖畔の不斷の慰樂たらしめ青空の下に流るるが如き美くしき生活の不斷の交通によりて得たるいみじく強き愛、その無邊の光景、卽ちその自然と夢は、今日の我等が想像せざる所の輝の下に結びつるとなりけらし、彼の夜毎の

鋭き洞觀の語、その唯だ警醒を待てるのみなる單純なる良心に投ずるにして彼れに歸依あつき弟子をぞ與へたる。時としては耶蘇邪氣なる計略を用ひたり。ンが用ひたると同じやうなる一個無邪氣なる計略を用ひたり。さんと欲ふものの内生活の或一ふしを知れるが如くに裝ひ、ある事情を懷ひ出ださせたり。して、其の心に深く體みたる、或祕密の事情を懷ひ出ださせたり。ン（約翰四翰八一）、ベテロ（約翰一二）、及びサマリヤの婦（約翰一四七）を歸依せしめるは、かかる手段によれるなりけり。彼れは、彼れを環りて群集膺人に卓越せる、其の偉力の眞源頭を押し隱くして、一個上天よりの默示の聲ありて彼れに一切の祕密を啓示し、一切の人心を赤裸々たらしむてふ時は耶蘇みづからも亦十分有したる時代思想の要求に應せんが爲めと傳へられたり（馬太一七の三、路加九の三〇、三一）、彼れは古のモーゼと倶に山上にて物語りぬと信じたり。彼れは又、屢〻彼等を天使來たりて彼れと上天との開に、一個超自然の交通開けたりと信せられたり（馬太四の一一、馬可一の一三）。

彼等は、歩々天國近きにあるの徴を認めたり。
き時、將に到來せりと信じたり。涙は變はりて喜びとなりぬ、普に出現せんとす。
耶穌山上に坐し教へて曰く。
「心の貧しきものは福也、天國はその人の有なれば也」。
「哀しむものは福也、彼等は慰藉を得べければ也」。
「柔和なるものは福也、彼等は地を嗣ぐことを得べければ也」。
「饑渇するが如く、義を慕ふものは福也。彼等は飽くことを得べければ也」。
「矜恤あるものは福也、彼等は矜恤を得べければ也」。
「心清きものは福也、彼等は神を見ることを得べければ也」。
「平和を求むるものは福也、彼等は神の子と呼ばるべければ也」。
「義のために責めらるるものは福也天國は彼等の有なればなり」。（馬太五の三―一〇、路加六の二〇）
彼れの說教は、自然に對する感情と、花野の匂ひとをもて打ち薫りつつ、優雅に且

キニデ石ヲ
ツ置シ其ノ
新ノ時ハ、天
ハ歩ミノ前上
心ニ抱キタル
宙ヲソノ理想
ニ、ソノ心ニ、ソノ
絶日神ノ面前
ニ立ツベキモノ（遊）。

二年ハソノ
ソコヨリ
ソコニ三度
ソノ時ヨリ
ソノ三年ノ
ノ三年ハ
ノ三年ヲ
ノ中ニ、

吾等荒涼の國土に住めるものの必とする外形的生活、及び衣贅澤、紛奢に對する全然なる無頓著に至りては、ガリラヤ人の樂易單純なる生活の必然の結果なりき。寒冷の氣候は人をして不斷に自然界と戰はざるを得ざらしめ、隨うて求に多大の價値を置くに至らしむ。これに反して、人土は、理想主義及び詩歌の故里(ふるさと)也。かかる國土にては、生活の快樂と比して無意義なり、そは家屋の裝飾は不必要なり、そは家屋に住極めて希れなれば也。氣候温暖ならざる邦人の、多量濃厚にして不快なりと思惟せらるべし。若しそれ、衣能く神が地上と天(そら)の諸鳥とに與へたるものと競ふことを得んや。かかる風土に於ける勞働は無益なりと見ゆ、その報は以て之れに要ざれば也。野の獸は、世の等何をか勞せし。この勞働に對する侮蔑は、そが懶惰心を高うするに與りて大に力あるものなるが、耶穌はり。「蠹みくひ、銹び腐り、又は盜穿ちて竊む地上

つ温藉な訓を物し、に織り込たり。天の鳥、海原、山さては童幼き）一體に肖似せり。彼れの教訓は擴充的ならずして、而してそは後に繋ぎ合はさなし、マタイのものしたる如き長談義をりぬ。何等の繋ぎの糸の、此等諸の斷片の珠を聯ぬるものはなかりけれど、り。耶蘇の尤も面白き一體に關して、耶蘇に何等の模範所あらざりし也。彼れ之れを揶揄始せり。吾人が佛教經典の中に、福音書ど全く同調同構成の譬喩談を發見するは事實也、されの基督教と佛教とを同らく二者の類似を說明するに足るべき

中に見る一類を

は一層多く希伯來の譬喩作者中にも、彼れと同代の猶太教學の譬喩（ヒルケ、アボト）『訓言集』の句、哈蘭（コーラン）ぶりの句法

のの遊戯など、かたみがはりに彼れが發草さかも無し、そ

なる美くしき教

曹はまづ神の國とその義とを求めよ、然らば此等のものは皆爾曹に加へらるべし。この故に明日を思ひ煩ふこと勿れ、明日の事は明日自ら思ふべし。一日の勞は一日にて足れり」（馬太六の一九―三四、路加一二の二二―三一）。

此の有した幸福な見做したり。何り。生活上の需用の滿足る一群の信徒等は、生活上が爲めに財を蓄ふるぞ、神て人に施せ、爾曹のために古びざる財寶、盡きざる天上の寶を作れ」（馬太一九の二一、路加一二の三三―三四）と。

爾曹がことあらんや（路加一二の二二―三一）。耶穌はし資財を富饒にしたる後ち末だを添へたり。貧困の爲めに劫掠の禍を受けざりし貧者は、自ら神に惠まれたるも

に財を蓄ふること勿れ、蠹みくひ、銹びくさり、盜穿つて竊まざる天上に財を蓄ふべし。そは爾曹が財のある所に心も亦あるべければなり、人は二人の主に事ふること能はず、そはこれを憎み彼れを愛しみ、此を親しうし彼れを疎んずべければ也。」

この故に我れ爾曹に誥げん、生命の爲めに何を衣むとて思ひ煩ふこと勿れ、生命は食より優り、身體は衣よりも優れる者ならずや。空の鳥を見よ、稼かず、穡らず、倉に蓄へず、而るに爾曹の天父はこれを養ひたまへり。爾曹はこれらの者よりも大に立ち優りて、また何故に衣のことを思ひ煩ふや。よく寸陰の生をも延べ得ることをせん思へ勞めず紡がざるなり、われ爾曹に告げん、ソロモンの榮華の極みの時だに、その裝一に加かざりし也。神は今日野にありて明日は爐に投げ入れらるる野の草花をだに、かく裝はせたまふなるを、まして爾曹をや、嗚呼信仰薄きものよ、されふこと勿れ、此くの如きは要するに異邦人の求むるものなり、爾曹の天父はすべて此等のものの必需を知りたまへり。爾

打立てられたる、至福生活の空想は、幾多高上なる人心を襲うる處に、この教義に對する、大膽にして眞摯なる實現の企圖を生じたり。

耶穌とエッセネ派との關係は、精確には定めがたけれど（歷四使徒四の三二、三、三七、五の一）、彼等の兄弟たりしとは見るべからず、彼れは、たしかに此の點に於いて、彼等の規法たりしはこの新社會の規法たりきはされ基督教的道徳がさも峻嚴に見たりしものと、及びかくすること、これより得たる金を售りてこれを買ふべきことを注意せざるべからず。

耶穌の弟子となる第一の條件は、人その産業を售りて、貧者に施すことにありき。この極端なる行爲より逡巡するものは、その仲間に入るを許されざりき（馬太一九の二一、馬可一〇の二一、路加一八の二二）。耶穌は屢〻、神の國を見出すことの、如何に困難なるかを說きたり。

「天國は畑に藏されたる寶のごとし、人見いだせば、之れを祕し、而して喜び歸り、その所有の凡てを賣りて、その畑を買ふなり」。「また天國は、貴き眞珠を求むる商人に譬ふ

のと思惟したりしなるべく、之れに反して、所有の一層不安なりしかに眞(まこと)の貧者なりけれ。私有財産の今日の社會に於いては、貧者の位置は嚴酷なる觀念の上に打建てられたる吾等が戰慄すべきものあり、彼等は文字通りに日の下に住處を有たざるなり。土地所有者を除きては、一本(ひともと)の花なく、一草なく、ぱた一個の本蔭だにになし。東邦にてはこれらのものは何人にも屬せざるを以て、自然は萬人の遺産也。

加之、原始基督敎は、この事に於いては、唯だ僧菴生活を實行したるに外ならず。共産的要素は此等エッセネ、及びセラピュートの諸派に浸入しぬ、而してこはパリサイ、サドカイ二派の同樣に嫌惡せる猶太諸宗派の間にありて、全く一個の政治問題たりし救主的敎義は、彼等の間にては、恐らく根據なきことにあらず)、地上に天國の社會問題たりき。靜穩にして訓練ある瞑想的生活に賴りて、個人の自由に十分なる活動の範圍を與へ、かくして此等の小敎會は(其が或點に於いて新ピタゴラスの制度を摸倣せるの疑ひつつありと信じたり。萬人同胞と、眞神に對する純正なる崇拜との上に

一人の乞食いたく腫物を病みて、体の餓層を拾うて養はれんことを希へり、また大家たりてその腫物を舐めたり。やがて乞食死にければ、天使彼れをアブラハムの懐に送りぬ、富者も亦死にて葬られけるが、陰府にて焦熱の苦に堪へず、目を挙げて遥かに、アブラハムとその懐にいだかるるラザロとを望み、叫びていひけるは、父アブラハム我れを憫れび、ラザロを遣はして、その指頭を水に蘸してわが舌を清涼ならしめよ、われこの焔の中にて苦しみを享けたりし事を憶ひいだせと。アブラハム曰はく、子よ生ける間は福を享け、又ラザロは生ける間は苦めらるるなるを憶ひいだせ、今ラザロには慰められ、爾は苦しめらるるなり（一節九―二六の二五）と。あはれ、何物かこれより公正なる応報あらんや。

されどここは単純なる富者と貧者との譬喩談といはんよりは、富者其の人の故也、唯だその富のために彼れは地獄に投げ入れられ、何が故ぞ、唯だその富のために彼れは飽食して、他にその門前にありて飢餓をたるが故也、唯だ貧者に臭へざるが故也、唯だ

べし、價高き一個の眞珠を見いだせば、彼れは行きてその一切の所有を悉く賣りてこれを買ふなり」（馬太一三の四四―四六）。嗚呼此くの如き教理の實際上の不利は、久しからずして彼等の自ら感ずる所となりぬ。一個の會計係は要せられたり、而してイスカリオテのユダはこの役員に選ばれたり。當否は知らねど、彼れはその共有財嚢の中より竊みたりとの難を受けたり。憎惡の重荷は彼れの頭上に積まれたり。

地の事よりも寧ろ天の事に曉通せる師は、時として更に異やうなる經濟說を敎へたり。彼れは、その奇異なる譬喩談の一にて、貧者の報償に賴りて天國に入るの望みを確實にせむが爲めに、主人の金を貧者に施してその友となれる或番頭の所行をかしこと賞めたり。貧者こそ實に天國の施主なるが故に、貧者は唯だ彼れに施與の恩あるものとのみを天國に攝取すべし。されば未來を慮る知者は、貧者の歡心を得ることを力めざるべからず。福音記者記して曰はく、「慾ふかきパリサイの人ら、凡べてこれらの事を聽きて耶穌を嘲りたり」（路加一六の一四）と。彼等パリサイの徒は、耶穌が語れるおそろしき譬喩談を聽きたりや。「一人の富者ありけり、美くしき紫袍細布を衣飾りて、日々奢り樂めり、また ラザロと呼ぶ

眞諦の生活、理解によりて天上の閃光を得たるなり。事わざしに於けるがごとく、またはリラヤの自由生活の追憶はさながら他界よりの花香神の野を枯渇荒涼の中より救ひ出づる「ヘルモンの露」にも似たりけり。

尙ほ恐るべき提唱をなして曰はく、「富者が神の國に入るよりも駱駝が針孔を出入するかたすべて此等の事に於いて遙かに容易なり」（馬太一九二四）と。

なる思想は、耶穌及びその隨從者たる快活なる一團の弟子を支配し、而して彼れをして永しへに靈魂平和の眞の賦與者、人生の大いなる慰藉者たらしめたり。耶穌は、その自ら「この世の心づかひ」と呼べるものより人を解放せしめんが爲めに、或は傷せしならむ、さはれ彼れは、數百年間この極端に駸駸たる、件の精神的高蹈を開拓中なる人心に歡喜を充たしたりしたり。彼れは、多くは自ら馴致せる一念の勞擾及び文明のために過度に增倍する心づかひよりも發し來たれるものなることを、いと明瞭に洞觀せり（馬太一一二三）。此くして耶穌の福音は、常途の役々に心倦めるあさましき煩慮を拂ふ方、草、さては彼れが對することなき救治、不斷の策勵、地上の耳にうち囁きて、「マルタ、マルタ、マルタ爾は多端に心づかひしてくてかなふまじきは唯だ一つ」（路加一〇四一二）といひしやうなる變ざるしき提醒の聲たりし也。多謝す、淺ましき世事務のために塵了せられたるわれらが屢

爲めに、其僕等を送りて、人々皆解し、或る者は使を虐待せり。其時顯達の人は彼れが招請を容れざりき、さらばよし、彼れを取れりと言ふ者は即ち充さゞる可からざれば。「我れ爾曹に云ふ、請きたる者一人々々、貧者、乞食、跛者なり。其家は小路より集め來りし人々、大路小路より集めて來りし人々、貧者、乞食、跛者なり。我れ爾曹に云ふ、請きたる者は、我が饗を嘗ふ者一人もさればこそ純粋なるエビオニズム(Ebionism)——唯貧者(エビオニム)——は耶穌の教たりき。彼れ曰はく、「爾曹富める者は禍なるかな、爾等は既に慰藉を受くればなり。爾曹飽ける者は禍なるかな、爾等は饑えんとすればなり。今笑ふ者は禍なる哉、哀哭かんと爲ればなり」(路加六の二四)。「又彼れ爾午餐或は晩餐を設くる時、朋友、兄弟、親戚また富める隣の人を請くなかれ、恐らくは彼等また爾を請きて其報答をなさん。爾筵を爲さば、貧乏、廢疾、跛者、瞽者などを請け。然らば爾福なるべし。蓋彼等は爾に報ゆること能はず、義しき人々の甦らん其時、なんぢに報答あればなり」(路加一四の一二—一四)。彼れが屢「好き貧主となり」と傳説に存せる診にして、厭くまで引用せらる。アレキサンドリアの(又オリゲン、聖ゼロメ及ひ多數の教父の書中に見る)と繰返

第十一章　貧者の國として考へられた る神國　以下　安倍能成重譯

生を光と大氣とに養ひし國土に好き此の諸訓言、天父の胸に信子等の一園の美はしき共産主義は、常る宗派に適したるなるべし。耶穌は實の王國に力を貸さゞるべきことを知りたり。彼れは此去りて、彼れは孤つて單純の民に向ひぬ。階級の大轉置は起りに小兒の如き者。(二)世に棄てられたる者、謙遜なる善人を卻くる社會の驕傲

一、路加一四の一六、比)。

(馬太二二の一一、一二、二一の三三)。王あり、婚宴を設けて、請きおける者を迎へんが

惡と解せらるゝ。此奇異なる天啓書（アポカリプス）には、二人の子」は王を位より貶し、深樂の生活に浸潤し、新たに全然世間的なる齋修逸樂の分子を導き入れたることは、淳朴なる家長的生活の擁護の爲めなる猛烈の反動を生みぬ。「簡曹の父の卑しき住居と所有とを輕んずる者は禍なる哉、他汝の宮居を建つる者は禍なる哉、家を造れる石、煉瓦は、その一々に黙せん」（ハバクク書一ノ三、一四九丸）。「貧（エビオン）」の名は、聖徒、神人なる耶穌の弟子が好んで自ら呼びし所の者なりき、久しき間それは耶穌の鄉語及び原始の教を忠實に墨守し、耶穌の家族の子孫已れ等の中心にあるタニアの猶太教的基督教徒及びハウラン人（ナザレ人、ヘブライ人）の大潮流の外に殘り、異端（ヒエラルキー）の徒（Ebionite）として遇せられき。而して此の別派は、諸他の教會を擯斥し悉したる大明の爲めに、此異端（Ebion）の假託の創立者は捏造せられたり。

此の過激なる貧窮の嗜好が永續せざりしことは、容易に先見するを得べし。それは當に偉大なる諸運動の創業中に混じ、時を經て矯正せらるゝ、かの惡想惡向分子

せしは。恐らく同樣の意味なるべし。言貧すなり（馬太傳五章三節、路加傳六章二十節）てふ古籀言に從ひ、貧よとなり。

誠に上に擧げたる一切の中には、新たなるもの毫もあるなし。人類歷史中最も熱騰したる共和的運動は（成功したる者は唯一つのみ、何となれば是れ）、久しく猶太族を激奮せしめにき。神は富者及び強者に對する、貧者、弱者の復仇者なりとの思想は、舊約書の每葉に發見せらるべし。イスラエルの歷史は、あらゆる歷史の中につき、民衆の精神が最も恒久に勢力を有したるを證明せり。眞誠の保民官（ツリビューン）、而して或る意味に於いて最も大膽なる保民官たる預言者は、絶へず強大者に對して雷鳴し、又一方にては「富貴、不信、必、兇暴、邪惡」等の諸觀念の聯想は、唯益〻強きを加へたるのみなりき。『エノク書』は、「貧賤、溫和、謙虛、敬信」等の諸語の間に、密接なる關係を作りぬ。セレウクス朝の下に、貴族は殆と總て、主義を變じて希臘主義（ヘレニズム）に移りしより、上述の諸觀念の聯想は、唯益〻強きを加へたるのみなりき。『エノク書』は、世間人、富者及び有力者に對し、福音書よりも一層烈しき咒詛を載せたり。此書中には、爾後は罪

ミリエ。Humilies. ポーヴル。エヴァンジェリク。Pauvre Evangelique.（永遠福音の歸依者）調者は、以上の數名は、耶穌の眞の弟子たらん事を求め、而して又事實に於いて眞の弟子たりき。さはれ耶穌の場合とても亦、漸たなる宗教の最も實行に果に於いて得る所極めて多かりき、貧業的にして組織細密なる今日の社會にては、其當時及び恰適なる風土へ難き、微賤なる乞食生活は、其人を率くの風趣に富みたりき。優婉にして沈思を好む魂には、そは唯一の恰好なる條件をぞ供したる。貧窮を愛と願とを神聖となすは、經濟學の估價する能はざる大手筆なり。然れども眞の道德者は、之に面して遂に冷淡なる能はず。其荷を擔はんとせば、人類は必ずや、排はるゝもの、全然金錢のみにあらざるを信ぜざる可からず。人間が唯パンのみによりて生きざることを、幾たびも幾たびも反覆するにあり。凡ての偉人皆然るが如く、耶穌も亦平民を好みたり、而して彼等と共にあれば、即ち怡樂の感をなしき。彼れの心には、福音は貧者の爲めに造られたり、彼れが救の好報を齎せしは、貧者にとてなりき。彼れは特に、正統の猶太教が擯斥したる者な

の一なりき。

偶的なる佛教が、人々歸依の數を重ぬるや即ち俗徒を許すに至れざること能はざりき。

易に其の懷ろに富者を受容するを諸せはいつまでも過ぎ去り、忘れ去られたる存す。　たとへそは速かに

オニズムは、基督教の制度中に、湮没することなき酵母を殘しぬち耶蘇の談話の拾集は、ベタニアなるエは少くとも其の成を見たり。「貧窮」は、眞にれざりし理想と殘りにき。　一物も有せざるは、眞誠の福音的狀德、神聖の狀態なり、乞食生活はとなりたり。　宗教組織に對する一切の計謀の中、第十三世紀のアムブリア教徒(Umbrian 譯者曰ふ、伊太利上代の宗教)の運動は、終始一たる仁心、其萬有の生命と細やかに、純に又よりも最も耶蘇に近かりしアシシのフランシスは貧人なりき。　中世の乞食教社及び無數の共產的諸宗派(ポーヴル、ヅ、リヨン。Pauvre de Lyon. ベガール。Bégards. フラトリセール。Fraticelli. ユ

ム。Bons-Hommes. フラトリセール。Fraticelli. ユ

醫者を忿懣せしめし巧妙の答をなして曰はく「腰頸なる者は醫者の助を藉めず唯病ある者は之を藉む（馬太九の一二、馬可二の一七、路加五の三一）又、信仰のうすき誰れか、一百の羊あらんに若し其一を失はゞ、九十九を野におき、往きて其迷を獲るまで尋ねざらんや。（馬太一八の一二、路加一五の四）或は又、人の招ひし宴に赴くが爲めにあらず、或は我が來るは義人を招くが爲めにあらず、罪ある人を招かんが爲のなり（馬太九の一三）最後に放蕩息子の美はしき譬喩あり、墮落したる者は當に悲光に照接すべき一種の權利あるを示せり。罰き又は罪ある婦女は、かゝる牽引の力に魅せられ、必ず始めて信

ば悪く之を
に多くの人
は、彼れが一
言一行にも顯れざるはなし
る羊の群は、實に恐らくは厳
なる猶太人が交はるを
も。其數の中には、自負自尊
太九の一〇、ヲ恐らく耶蘇は、
加一九の五參照。）
て、自己が皮
相の道徳を誇る所の衒燿狭
の明晰、心情
て、己より信
仰能き者と觸接せば汚れを
隠すること
の如き、殆ど印度の賤民に類
する階級別にも劣らざ
る痛ましき錯雑を悪み、此感
情のかか
好みの（馬太九の三六、馬可六の三四、）
九の一一、馬可一二、
六、路加五の三〇、）彼れが
が爲のに悪行の風説を立て
者を攻撃して曰はく「見よ、彼
者とは、選行

選まれた
色を發揮し
皐げたり（路加
太九の一〇、）て恐らく耶蘇は、
世間普通の方便に染ま
るよりも、一層知識
陋なる中流社會に於け
ゼの命令を細張し
り。パリサイの徒は、モー
受くと信ずるに至りた
り。而して食事に
りき。耶蘇は宗教
と食を共にするを
パリサイの徒と學
か」と。耶蘇は僞

れは喜んで婚筵に赴きぬ。彼れの奇跡の一つは、小市に於ける婚禮の興を添へんとて行はれたりと稱せらる。東方にては、婚禮は夜にありき、其の燈光は誠に一しほの眺を呈す。耶穌は此の華やかに勇ましき光景を愛し、譬喩を之より取れり（馬可二の一八、路加五の三三、馬太九の一五）。かゝる行爲は、バプテスマのヨハネの弟子とパリサイの人と斷食をなすに、爾の弟子は何ゆゑ斷食せざるか。とは、人あり問うて曰はく、「ヨハネの弟子とパリサイエス彼等に曰ひけるは、新郎の朋友其新郎と共に居る間は斷食するを得べき乎。日きたらん、其日に斷食すべきなり（馬太九の一四、馬可二の一八、路加五の三四）。かれら新郎と共に居る間に、絶へず顯れ來りぬ。彼れ曰はく、「されば此代の人々を何に比べ又何に譬へんや。童子市に座して互に呼んで、我曹笛ふけどゝ、靈活なる思想及び愛嬌ある戲謔の間に、絶爾曹踊らず、悲歌をすれどゝ、爾曹哭かずと云ふに似たり。蓋バプテスマのヨハネ來りて、パンをも食はず酒をも飲まざれば、惡鬼に憑れたる者なりと爾曹いへり。人の子來りて食ふ事をし飲むことを爲れば、

めに誰虚の情に傾きたる女は、墮落せぬに增して、彼れは又他面に於いて、此等柔の王國に近かりき。我等回復の手段を見出でて、熱に激して富時の社會が擧心もて耶穌に愛著したにより容易にげたる不平は、彼れは之をするを喜ぶに似たりき。「世俗」を擯斥するは、偉大なる事物、偉大なる條件なれど、何人も未だ彼れの如く、昂然として「世俗」を蔑視せし者はなかりき。彼れは主としみ（九路加の加二一）。彼れは主として、殆と正統教派の首長の一顧をも受けざせられし時の、卑賤の生を送れる人々を選めり。「誠に我れ爾に告けん、稅吏及び娼妓は、爾曹よる、卑賤の生を送れる人々を選めり。「誠に我れ爾に告けん、稅吏及び娼妓は、爾曹より先きに神の國に入るべし。夫れヨハネ義道を以て來りしに、爾曹之を信せず、稅吏娼妓は之を信じたり」（馬太二一、三二の）。謹恪峻嚴の道德を務としたる人々にとり、娼婦の示せる好例に從はざりしとの非難が、如何に手痛き攻擊なりしかは想ひやるべし。

彼れは外を裝ひ、端嚴を表示することなかりき。彼れは歡樂を避けざりき。彼

るもの皆を愛せし耶蘇は、熱心度に過ぎたる友の加へし困惑ともせざりき。彼れは彼れを崇拝せしほどを崇めんとしたる者を辯護しぬ（馬太二一の六、馬可三の七、路加七の三九）、されば彼此等柔軟にして誘惑に陥り易き者共を、家族より引離すとの非難は、最も屢〻彼れの敵が與へし攻撃の一つなりき。

かくの如くにして新たなる宗教は、多くの點に於いて婦人や小兒の運動なりき。後者は恰も、耶蘇がこの罪なき王位に即くに當り、耶蘇を圍む少年侍衛の如くなりき、而して「ダビデの裔」と呼び「ホザナ」よと叫びつゝ、彼れの周圍に棕櫚樹を捧げながら、道の具として、彼等を用ひて行したり。耶蘇は恐らくサヴォナロラの小凱旋式（オヴエーション）を喜せし如く、敬信なる傳使徒が、進み出でゝ、耶蘇自ら受くるを敢てせざりし所の稱號を呼ぬるしなるべし。彼れは神聖なる者なること、神の國は小兒に屬すること、

（馬太二一の一六）。

彼れは折だにあれば、幼き者は神聖なりと答へぬ（馬可十の一四）。

まに食を喰みて肥え好む人、重且罪あるは智慧の子に義とせらる」（三路一加七以下の）。

かくて使れ方にては、こは恰好にして安全なる旅き用意に非ず。彼れ、常に霊実の中にありて、時に応じて乗前の相違なせり。彼れの弟子等は、時にての準やかなる行列にて往れを圏むことあり。彼は道の上に忽を撲げたり（馬太二の七、八）。彼れには村落や大なる団並に止まり、暖き好遇を受けたり。

全村は挙つてここに集まり、小児は唐して、奴僕追へども追へども復来る。耶穌には此聖無き聚を、虐遇するに堪ふる能はざりき。彼れは彼等を近くよせて抱擁し、手を按られんと（馬太一九の一三、馬可九の三五、一加一八の一三、一五、一六）。母は此待遇に力を得て彼れの頭に注ぎ、足に塗れり。

て、其駄騾をつれ来りぬ。婦女は膏を彼れの頭に注ぎ、足に塗れり。

時には、頻はしば然もども留まりぬ。東されど古俗を愛し、心の淳朴の表はれた

永遠無窮に持續すべき美しき花園なり（林路加多二三の四三、哥後一二の四四）。此きたりや。我等は語る能はず。誰人も此の間と同じく、時を數ふることなかりき。代の如くなりき。その數年を充せしや、將た數月を充せしやは、人類は爾來常に此夢の上に生き、其幽は極めて美はしかりき。人類は爾來常に此夢の上に生き、其幽あさるは、今も尚ほ我等の妄慰なり。かばかりの歡喜人心を充るなし。人類は暫しが間、此歡喜の中に、世界の上高く翔けらん時の繼續の觀念は消る努力の中に、人を地上に縛する鉛の如きた數月を充せしやは、ぬ。已が眼もて、此神なしき盛りの花なかとするる最も猛烈な幻覺に與りたる人は福なる哉。さはれ耶重みを忘れ、下土の生を蟬蛻して、自らの內に天上の光景を造出し、千年の御世の夢想にあらず、天上の徵にあらず、唯己が意志の正しきと己が靈魂の詩とによりて、能く自らの心中に神の眞王國を新に創拗せん者こそ、更に更に福なれと。

ここに天国には人に小見とならざる可からざること、神の国を受くべき者は、其の況は丸で小児の如くにして、其の況は丸で小児の如くにして動き者に類せざる可からざること、又天国には、なほ小児てふ観念と同様なる観念を以て見らるる、諸人が首位を占むべきかを論じ給へり（マタ一八、一―一四、マコ九、三三―三七、ルカ九、四六―四八）。

一、小児と天国

主イエスは、此の小児を膝の上に置き、彼等は、これ天国に於て大なる者なりと言ひ給へり（マタ一八、一―四、マコ九、三三―三七、ルカ九、四六―四八）。

当時ユダヤ人は、其の律法的の無価値なるに拘はらず、其の子孫を以て天国に入る者と信じたり、又ユダヤ人は、殆ど全く僵傲したる国民なりしが故に、主イエスは、此の如き王国に於ける暮れの生活を己れを見たり、人は新しき誕生の三、而して其の来る日を精確に覚へんとしたり。新しき誕生に名もなし。

ここは希伯来語にて、パラダイス楽園なる古き語は凡ての東方諸国に於ける王家の庭園を指せしが如く、直接語より借用せし語にして、原はアヘニミスは、来人の夢想を約束したる語なりき。即ち此地上の楽園の生活の

救主の位置を疑はざりし耶穌は、即ち二人の爲めに神の國の徴證たる數へて曰はく、病者は愈されん、救の好音は疾く慣れなる貧者の上に說かるべしと、彼れは自ら悉くこの等の事を成したり。而して更に曰はく、「この故に我がゆゑに躓かざる者は福なり」（路加七の二三）と。

此答がヨハネの死に先ちて、既に其耳に達せしや、この峻嚴なる苦行者に如何の影響を及せしやは、我等の知らざる所なり。彼れは果して自らの來るべしと傳へたる人已に此世に在るを信じて、喜んで死に就きしや。或は耶穌の使命に對して知る可からず。然れどもヨハネの宗派が、耶穌敎と並んで其後頗る長く存續せしを見れば、ヨハネは耶穌を敬したるに拘らず、尙耶穌を以て神の約束を實現すべき者となさゞりしことを推察するを得べし。加之死は來りて臨みて、一擧に此疑惑を斷絶せり。此孤寂の苦行者が不羈自由の心は、其小休みもなき苦難の生涯をば、又なくふさはしき最後もて飾るに至りぬ。

アンテパスが初めにヨハネに示せし寬容も、遂に永く持續するを得ざりき。基督敎の傳說に從へば、ヨハネは封主の結婚の不法なる

第十二章　獄裏の約翰より耶穌への遣使、約翰、耶穌教と約翰宗との關係

樂しきがに悶悶しつし年少き師は來りぬ。○所在をガリラヤが應功の報は、彼れが耳に入れば、イスラエルの國を再興すべし。又不思議の所行によりて、己が子と交通(馬太一一の一路加七の一八―二二)。

二人の弟子至りし時、耶穌の名譽は其絶頂に達せり。　耶穌を問れる歡喜の雰圍氣は、二人を驚絶せしめたり。　渴仰の經間とてもなき生活に慣れし彼等は、今俄に嵬呼の渦中に入りて、心痛く驚きぬ(馬太一四九)。二人は約翰の使命を耶穌に傳へて曰へるは、來るべき者は爾なるか。　亦我等他に俟つべきか」(路加七一九)と。　當時旣に己が

ンテパス全敗せり。而して此敗北は、普くヨハネが計報は、洗者の弟子によりて耶穌に齎されぬ（馬太一四の一二）。耶穌はアンテパスの害意の増大せんことを恐れて豫め警戒し、退いて沙漠に赴きしにハネが取りたる此最後の一歩は、此二宗の間に最も密接なる關係を作りぬ。耶穌人々多く之に從へり。一團の信徒は、非常なる節約によりて、そこに住するを得たり。奇跡は固より此中に見られぬ（馬太一四の一五、馬可六の一、約翰六の二）。

此時以來耶穌は、從前に倍せる發辭を以てヨハネの豫言者とは唯ヨハネの出づるまで力を有せしのみなること、律法と古き豫言者以上なること、而かも亦天國は尚ほ彼れをも入れざるべきことを宣べたり。之を要するに耶穌は、基督教神祕の結構中にて、舊約の世との間の連鎖たる特別の位置をもて、彼れに與へたるなりと豫言者マラキは、極力最後の新生に對し先づ人々をして多く其意見を引證せらるゝ（馬太一一の一〇、路加七の二七、路加一六の一六）。

此事に關して、神の選みし一人に先ち其道を直うするが

と、ヘロデヤの路加三の一九）。ヘロデ大王の孫女が、此執拗なる忠言者に對して、如何ばかり嫌惡の念を抱きしかは、容易に想像し得らるべし、彼女は偏に彼を陷るゝの機會をのみ待ちぬ。

彼女が初婚の際に生れたる女サロメは、母と同じく淫逸にして、其切なる望を尋ねたり。サロメは母アンテパスは、誕生の祝日に加擔せる宮殿あり、屢〻封主等を計壽に反覆して止まざりしと曰ふ（馬太一四の三、馬可六の一七）。ヘロデ大王の建てたる莊麗なる宮殿あり、屢〻封主等を計壽に加擔せる忠言者に對して、如何ばかり嫌惡の念をのみ待ちぬ。城内にヘロデ大王の建てたる莊麗なる宮殿あり、屢〻封主等を計壽に加擔せる忠言者に對して、如何ばかり嫌惡の念をのみ待ちぬ。其年（多分紀元三十年）アンテパスは、誕生の祝日に、野心に富み、母の女には不似合にマケロに在りとも思はれざりし舞踊の一種を演じたり。アンテパスは大に喜びて、其切なる望を尋ねたり。サロメは母の意を受けて、「バプテスマの一人は盆を携へて出で、時に我に賜へ」と曰ふ（馬太一四の八、馬可六の二五）。アンテパスは此願を聞きて、大に喜ばざりしも、而かも之を斥くるを敢てせざりき。侍士の一人は盆を携へて出で、獄に入りて、之を持來りぬ（馬太一四の三、馬可六の二七）。

洗者の弟子は、屍を得て之を墳墓に葬りぬ。然れども民衆の不平は甚た大なりき。其後六年ハレト、マケロを復し、其女の辱に報いんが爲めアンテパスを攻め、ア

や尚ほ疑はしと反論せし時、彼等は答へて、エリヤはや現はれたりしエリヤなれと曰へり。其生活狀態に於いて、其當時の權力にいて、ヨハネは實に、イスラエルの古史中のかの怪異なる人物を想起せしめ（馬一一の一四、路一の一七）。耶穌は其先驅者の功績と卓絶とを賞贊するに吝ならざりき。彼は言へり、「婦の生めるる者のうち、未だパプテスマのヨハネより大いなる預言者は無し」と。彼れはヨハネの洗禮を受けず、其聲に歸依せざりし故をもて、力を極めて學者とパリサイの人とを非難したり（馬三の七、路三の七）。

耶穌の弟子は、師の此主義に忠なりき。ヨハネの尊崇は、初期基督教時代に於ける不斷の傳說なりき。彼れは耶穌の親族と稱せられたり（使一の一四、路加一の三六）。此等の說は、ヨハネの最後の證據の上に打建てんとて、ヨハネ初めて耶穌を見し時、彼れを救主（メシヤ）と呼び、自ら靴の紐をだに解くに足らぬ卑しき者と認めたること、初めにはこれこそ耶穌の洗禮を受くべき者なれと主張して、耶穌に授とは斷言せられたり（馬三の一一、路三の一六、約一の二七、三〇）。彼れはヨハネの最後の證使の疑惑の形ありし點より見て、十分反對するに足るべき誇張說なり（馬一一の二、路七の一八、約三の二六、三三）。

爲めに來りし使者をば說きぬ。此使者は豫言者エリヤなりき、昔く流ぐるが爲め、直に從へば、エリヤは、人々を懺悔によりて大なる降臨の日に備へしめ、神又屢〻他の人々と結合せらる、或は二世紀の間尊き神事を委任せられし族長エノクなりといひ、或は民衆守護の天才と敬はれ、神の御座の前に絶へず民衆の爲めに祈るを事とせしエレミヤなりとも云ふ。二人の古豫言者が、救主（メシヤ）の先驅を務むべきなりき（馬太一一の一四、一七の一〇、馬可六の一九、路加九の一七、八）。エリヤは又此觀念は、又パーシー（Parsees 譯ペイ者）の教條中に、歷々として之を認め得べく、我等そはともあれ此觀念は、救主（メシヤ）をして此觀の日は、ボムベイの住民にくに關する猶太教理の主なる部分を形作りしなり。懺悔の衣纏ひし二人の眞實の證者の出現が、開かれてはすべきなり（默示錄一一の三）。

此觀念を以て、耶蘇及び弟子がバプテスマのヨハネの使命を疑ふ能はざりしことは、容易に解し得べし。學者がエリヤ未だ來らざるの故をもて、救主誠に來りし

の教を聽きたり。バプナウはヨハネに酷似し、恐らく其宗派たりしなるべし、バプナウは荒野に住み、樹葉を身に纏ひ、植物と野果との外を口にせず、日夜身を潔めんが爲めに洗禮をなしたり。主の兄弟と呼ばれしヤコブも亦同じ道を修めしぬ(恐らく名の錯誤ならんも)。其後紀元八十年に至り、浸禮教(バプチズム)は殊に小亞細亞に於いて、基督教と衝突したり、福音記者ヨハネなりと稱せらるゝ諸書の著者は、間接に此戰を爲せるが如し。女巫詩(Sibylline Poems)の一つは、此宗派より出でしに似たり。第二世紀の頃スリア、パレスチナ及びバビロンに盛に、其跡は今も尚ほメンデイト(Mendaites)若しくは「聖ヨハネの基督教徒」の名の下に存せる。ヘメロバプチスト(Hemerobaptist)、浸禮教徒、エルチャサイト(Elchasaites)——アラビヤの著者の所謂サビエンス(Sabiens)及びモグタシラ(Mogtasila)と同じ——の如きは、使徒ヨハネの正統とろバマテスマのヨハネの運動と起原を同じうせり。ヨハネが本來の宗派は、半ばは基督教と融和して基督教の小なる異説となり、かくて晦冥の裏に湮沒し了んぬ(?)。彼れにして若し卑しき競爭心に驅られしならば、當時の無數の宗徒の中に沒了して、今は既に忘失せられたらんのみ。

（一八）。されど一層一般的の意味に於いては、前驅者、新紀元を來るの數葬に先んずる沈鬱なる之を觀ずして死にたる預言者と殘れり。時代に於ける此巨人、此峻烈なる不義の神の國の甘きに備へしめし苦蓬（にがよもぎ）なりき。著の紀元を開きたり。彼れは新信仰の最敵を認めたる世俗の人は、彼れを生かすに堪へざりき。基督教し無殘の彼れが屍は、多くの人々跡追うて進むべき血潮の道ける。

ヨハネの宗派は、創立者と共に亡びざりき。一時は耶穌教とめは兩者互に相睦じかりき。兩者の開祖逝きて後多年、人々中には又同時に兩方に屬せを受けたりポロ（紀元五十四年頃）の如き、エ有名なるアペソに於ける基督教者あり、例へば使徒ポ（一使徒一八の二五、一九の一―五）。ヨセフォスは紀元五十三年にパナウ（二）と呼べる隱者

第十三章　エルサレムに於ける最初の企圖

耶穌は、共觀福音書に之を語らず、且つ第四福音書の記事此點に於いて甚だ曖昧なるより、又確かに殆と毎年、逾越の節筵の爲めにエルサレムに赴けり。此時より、已に殆と巡禮を重視せざりしも、當時未だ彼れが破壞する者なりしにヨハネの沒後にありしが如し。弟子數人は彼れに從ひぬ。耶穌は此元三十一年にあらず。されど耶穌の首都訪問中最も重要なる者は、紀太の習慣を傷るまじとて、之に從ひたり。加之此旅行は、彼れの計畫の上に肝要なる晴役を演ずるには、ガリラヤの地を去りて、猶太教の騒擾に及ばざりし猶き。何となれば彼れは已に、重き晴を其本壘に衝かざる可からざるを感じければなり。

小なる既に今日教の騒擾は頻々たりき。パリサイの人は勢力を握りて、極めて無の問題に限らるゝに至りたる法律研究なりき。か

エルサレムに於ける最初の企圖

れ、決疑論（カスイストリー）

彼れは自ら贖して、人類の宗廟中に、光榮ある唯一の位置を占め得たり。

ルナン氏耶蘇傳

此厭ふべき社會は、北方イスラエル人の柔和にして正直なる氣質の乖離を增大したり。彼等が思慕の對象たる美はしきに會するのみ。巡禮の讃歌の一節（詩篇八四）、「我れむしろ我が神の家の門守りとならんには、恰も明かにガリラヤ人に對するエルサレム人の輕蔑は、一層の簡朴なる歸依を笑ふは、恰も後世伊太利に於いては、彼等の爲めに作られしにも似たり。卑むべき嘲弄の心もて、遠來巡禮者の熱誠を冷視せしが如し。ガリラヤ人は方言を口にし、其發音は不完全にして、種々の氣音を混淆し、かくて多くの誤をなしては人の嘲笑を買へり（馬太二六の七三、馬可一四の七〇、使徒二の七）。人は何社會は、北方イスラエル人の柔和にして正直なる氣質の乖離を增大したり。彼等が思慕の對象たる美はしきに會するのみ。巡禮の讃歌の一節（詩篇八四）、「我れむしろ我が神の家の門守りとならんには、恰も明かにガリラヤ人に對するエルサレム人の輕蔑は、一層の簡朴なる歸依を笑ふは、恰も後世伊太利に於いては、彼等の爲めに作られしにも似たり。卑むべき嘲弄の心もて、遠來巡禮者の熱誠を冷視せしが如し。ガリラヤ人は方言を口にし、其發音は不完全にして、種々の氣音を混淆し、かくて多くの誤をなしては人の嘲笑を買へり（馬太二六の七三、馬可一四の七〇、使徒二の七）。人は何

知にして正統の嚴正なしと目せられ、「愚なるガリラヤ人」なる語ラヤの地の豫言者を出す能はざりしは、勿論の事なりとしき（約翰七の五二）。かくの如く殆ど猶太教の境界外にありて、憐れなるガリラヤ人は、纔かに覺束なき解釋を以蹇加へて、一縷の望をよせたり、「セブルンの地、ナフタリの地、海に沿ひた

くの如く、偏に神學的法典的なる修養は、心智の精錬に資する所毫も回教のファキール喝食僧の無味なる教條、即ち心的修養に資する者として然無用の論辯なる、かの禮拜堂の周邊に論議せられたる空の學問と雖も、尚ほかほどの感を我等に與ふることに似たり。近代僧侶の神學的教育は、甚だ乾燥無味なりレネッサン蓋文藝復興は、あらゆる吾人の教養中、其性質最も相容れざる者の中にすらヒューマニチー人文の分子を注入したるに學者の學問は、野蠻背理にして、精神的分子を導入したれば、猶太の博士、ソフェル(Sofer)即ち學問が、心力を盡して之を猶太の學者が、多大の勞苦を賭して得たる教徒が歐洲文明視せしは、今日學問ある回世人の知識に對せしが如く、又古代の加特力教徒が物をも尊敬するを止め、之を以て一生を特質は、一切の優美なる者に對して其心門を閉ぢ、難解の事せる人間自然の職分となすにあり。

の裝飾は、嚴格なる信者に喜ばれず、除かれて花の裝飾と易へられぬ。石柱碑に對するフェニシア、パレスチナ古住民の趣味は、不思議にも希臘式を穴居的建築に應用したる此奇異なる岩石の墳墓に於いて復活したる如し。技術的製作を空華の顯現と目せし耶穌は、總て此等の建築を嫌惡の眼もて見たり。彼れの絶對的精神主義と、古き世の外形は將に消え去るべしてふ固き信仰とは、心情の事以外には、何等の興趣をもたざりき。

耶穌の時には殿堂は全く新たにして、其外部の工事は尚ほ竣成せざりき。紀元前二十年若しくは二十一年に、ヘロデは他の建築と同型にするが爲め、其復舊に着手したり。殿堂の工作は十八月、前廊は八年にして成りしが、附屬建築は徐々に續行し、エルサレム占領の少しく前に至り、始めて其終を告げたり（約翰二〇二）。耶穌は恐らく其工事を見て、心密かに激昂の情なきを得ざりしなるべし。不信者、狂信者に立ちこへし明察の眼もて、彼れは此莊麗なる建築の、束の間の命と定められたるを豫知したり（馬太二四の二、二六の六、二九、路加二一の五、二一七の四〇、馬可一三の一、約翰二の一九、二一の四）。

る地、ことくに居る民は、大なる光を見、死地と死陰に坐せる者の上にも光りいでたり」（以賽亞九の一、二、三）。耶穌の生地の評判は、殊にも惡しかりき。「ナザレより何の善者出でんや」（約翰一の四六）と。

エルサレムの四周の荒寥たる自然は、更に耶穌が不快の情を增さざるを得ざりき。溪には水無く、土は乾きて石多く露はる、死海の低地を望めば、唯イスラエルの最古の歷史の風物稍見るに足るべきも、其他は擧げて悉く單調無味なるまでは、なほ眼を慰むるあるのみ。首都の樣子は、耶穌太人はアスモニア家に至りて、ミズパの岡の、わづかに明の聯想をあつむるミズパの當時も、今日と多く異ならざりき。猶太人はアスモニア家に至りて、ヨハネス、ヒルカヌス始めて首都を飾り、ヘロデ大王に至り、之を東方の最も莊麗なる都府となしたり。ヘロデの建築は、其莊嚴高大に於いて、其工事の完備に於いて、其材質の秀美に於いて、能く古代最良の建築と雄を爭ふべし。之と同時代に、獨特の趣致ある墓碑、多くエルサレムの四近に立てられき、此等の墓碑は、其體式こそ希臘風なれ、猶太の風習に適合し、著しく猶太式に變化せられたる所あり。ヘロデが好みし人間彫像

めには、外庭の中央に於いて、木柵を回せる場所別に存したり。

耶穌はエルサレム滯留の間、其日毎を此處に費せり。祭の時には、驚此都に集り來りぬ。十八乃至十二人の巡禮の團体は、東方人の好める處に止まれり。耶穌は群集の中に影を沒し、彼れを圍める狀態にて、到る注意を引かざりき。彼れは恐らく、侮蔑を以て己れを迎ふる敵の中にありとの感の情を促さるゝ、所のもの、悉く彼れが嫌惡のみせしならむ。眼に觸ゞるはなく、殿(みや)の設あり、犧幾分卑俗の觀を供したり。禮拜とは寧ろ相容れざる多くの事物、殊に商賣を伴ひ來り、其爲めに聖殿域内に店舗牲用の動物を賣れる所あり、兩換所もあり、動もすれば卽ち市場の觀を呈しぬ。殿堂の小吏は疑もなく、何れの世の寺吏にも變りなき反宗教的にして俗惡なる特性をもて、其職務を行ひたり。聖事を扱ふ此不敬、不注意の態度は、動もすれば極端に細心となる耶穌の宗教的感情を傷けぬる所によれば、彼れは一日怒の巢窟となしたり」と。傳ふ餘に、「繩の鞭」もて商人を擊ち、其卓を覆したり(馬太二一の一二、馬可一一の一五、路加一九の四五、約翰二の一四―一五)。總じて彼れは

此殿堂は全體として非常に宏大なる者にして、之に比ぶれば2nd譯者曰はく、回教の聖域にして異教徒を禁ず。）の如きは、其美麗はあれど、殆ど同日に論ずる可からず。堂と回廊とは毎日多數人の集會所に供せらる。かくて此廣大なる場所は、同時に殿堂、裁判所、官衙、講堂たりき。猶太各宗派の議論、法典の講授、更に法律事件、民事訴訟に至るまで、一言之を蔽へば國民のあらゆる活動は、ここに集中せられたり（路加四二六）。

議論の聲常に絶へざる闘場、何處の隅にも詭辯や鋭利の疑問を耳にせぬことなき論戰場たりき。かくて殿（みや）は恰も回教の禮拜（モスク）堂に酷似せり。當時あらゆる外國宗教に對し、其本領外に逸することなき限り、尊敬の念を以て之を遇したる羅馬人は、自ら聖殿に入るを辭したりき。希臘語、羅甸語、羅甸語の掲示は、猶太人ならぬ者の入るを許さず、境内を示しぬ。されど羅馬守兵の本營なるアントニアの塔は、全境内を支配して、域内に起りし一切の事件を見るを許されたり。殿堂の警察は猶太人の手にあり、長官は殿堂を委任せられ、門戸の開閉を督し、人の杖を穿ち、荷物を携へ、或は捷路を取らんが爲めに域内に入るを防ぎ、殊に、法律に觸れたる狀態にて人の内門に入らざる樣、心を用ゐたり。婦女子の爲

るソフェル即ち學者の下にあり。クルムて、當時のいはゆる學者なりき。エルサレム有せしも、宗教運動の頭首となることは決して無かりき。祭司のヘロデにより減殺せられしが、彼等は次第次第に羅馬の官吏と利益を多數に分たんが爲めに、屢〻更任せられたり。極めて宗教に對立して、祭司は殆と總てサドカイ人なりき、サドカイ人とは殿の周圍に集まり、祭壇の空なるを認めながら、之により生活せる、信仰かくて祭司の階級は、國民の感情、國民を起たしめたる宗教的運動より分離し去りて、初めは單にサドクヲイ(Zadokites)の僧族の一員の意なりしエピキュリアン者、快樂主義者と同義たるに至りぬ。

ヘロデ大王の朝以來、更に甚しき腐敗の分子は、高級祭司の間にドリアのボエトゥス(Boethus)の子なるシモンといふ者デ、アレキサンドリアの女マリアムネを娶らんとし(紀元前二十八年頃、屢〻の位を高くしに愛着して之を自己と同列となす外に、其手段を見出すを得ざりき。此姦惡なる一族は、殆と

殿(でん)を愛せざりき、彼れが抱ける天父の禮拜の觀念は、屠殺の光景とは何所なきなり。あらゆる猶太の慣例は、彼れを喜ばしめず、之に從ふの必要は、彼れが苦痛を與へたり。殿とその域内とは、猶太的基督教徒の外、基督教徒の敬仰の情を鼓吹することなかりき。新たなる宗教の眞弟子は、此古きスタンチヌス及び初期の基督教の帝王は、アドリアの異端のしぬ、コンに殘したり、而してユリアヌスの如き基オーマル(Omar)のモルサレムに入りけるに殘したり。殿の地は猶太人に對する憎故らに汚されたり。再び之れが光榮を猶太教の復活なる回教なりき。ここは

猶太人の驕傲は、全然耶蘇を不滿ならめぬ。イスラエルの大理想の成熟しつを失墜しつゝありし時、祭司は之と反比例きたり、祭司の註釋者たる博士等を、高く祭に限り、殆(ほと)んど加特力教の寺領僧の如く說教に與らず、會堂(シナゴア)の辯士、心學者(カスイスト)及び俗人な

にも、耶蘇は熱心と勉めたり。彼れは教を說けり。人は彼を信ぜしめたり。彼れと此一切は竟にエルサレム人中に一派を獲る跡と同じからず。唯彼れを教會を作り、エルサレム人中に一派を獲るに足らず。唯彼れを信ずる者は何人にても有せしにても有せし此愛すべき師は、此塗炭の論議と不用の犧牲とを導して得たる唯一の結果を認むる能はざりき。かくて彼れが此時既に、其最後の尋問の一箇月が變遷を結びし一團のみ。彼後其家族と相知りしとは思へず。されど恐らくは、數年の間、彼れに多大の感銘を與せしベタニアのふるに彼れは富裕のパリサイ人にして猶太（ユダヤ）教法議會（サンヘドリム）の員に列り、エルサレムの上流者なりけるニコデモの注意を引けり。正義誠實の人と覺しきニコデモは疑もなく耶蘇より好印象を受けたり。何となれば、彼れは其後同輩の偏見に對して耶蘇を辯護し、又耶蘇の死の後に至りて、彼れが愍篤なる注意をもて主の屍を護りたるは、我等

（約翰三の二、七の五）

三十五年間祭司の長の職に在り、王族と親近の故をもて、アルクラで其職を失はず、其後紀元四十二年、ヘロデ、アグリッパが一時ヘロくにボエトゥシム(Bethusim)た職に歸りぬ。かくの如ビの記錄に於いて、ボエトゥシムは不信者の義に解せられ、サドカイの徒と並べ難せられたり。ここに於いてる者、殿の周圍にぬ。」此等の徒は政治に生活し、自ら宗教的熱心に傾生ずるに至りて敬信の念薄き、殆とサドがたに、又此熱心を恐れ、慣例の續行によしは改革者に耳を貸すを欲せず。此等の貪樂の祭司は、パリサイの人の猛烈なく、傷に尚安をこれ、枯燥せる非宗教的感情は、耶穌を激せしめぬ。祭司とパリサイの人と、其相違は甚しけれど、耶穌の嫌惡を買りき。さりながら、耶穌は尚ほ勢力なき一他鄉人なりしより、獨り永ひし昵近の弟子にのみ、此鬱々の感を洩すに止めざし、唯己れに從て、遂に耶穌の死に終りしを得ざりき。

エルサレムに於ける潛留中の最も長き滯留の前

は、彼れと古猶太教との融和の不可能といふことなりき。彼れが起したる犠牲の廃止、信なく高慢なる祭司の壓服、廣き意味に於ける律法の廃止、耶穌が絶對的に肝要とする所なりき、此時より以來、彼れはもはや改革者に留まらずして、其破壊者となりき。救主（メシヤ）の觀念を有せる人々の中には、已に全世界に遍通なる律法を齎すべきを宣べし者ありき。嚴密に言へば猶太教ならぬエッセネ派は、殿堂ともモーゼの習慣とに拘泥せざりし者の如し。然れども此等は、孤立者なれ（太一二加一一六の一一、一六、馬一二、一三）。

耶穌こそは、彼れの時代までに至らぬ際（きは）の大膽たる律法の廃棄者なりと斷言せし第一人者なりき。彼れ時に謹愼の話をもこゝには在來の偏見を震蕩することの猛烈に過ぐるを避けしによるも、忽ち覆面を撤して、律法の已に力なきを宣しぬ。即ち適切なる譬喩を取來りて曰はく、「新衣を裁ち取りて舊衣を補ふ者あらじ……我等ここに、彼れが權威あり創造ある教の實行に付せられたるを見る。猶太人の外は輕んじて、殿堂と其境内とに入るを禁ずる如きは、耶穌の贅せ

ればなり（約翰一九・三九）。ニコデモは遂に基督敎徒とならざりき。彼上より、未だ顯著なる加入者もなき革命運動に加はる可きにあらずと信じたり。彼れ遂に耶蘇の死を妨ぐる能はざりしとはいへども、耶蘇に對して深厚なる友情を抱き、彼れの爲めに盡力したり。蓋實に耶蘇の死は、今の世にすざる事たるなり。

耶蘇は當時の有名なる學者とは關係無かりしに似たり。ヒルとは已に逝きて、同時代の最大の宗師は、ヒルレルの孫なるガマリエルイ（Shammai）なりき。此世智に通じ、上流社會との人心開き世間的の人にしてり。面を蔽ひ眼を閉ぢて道を歩みしパリサイの人と見ることを懌らず、又宮廷に近きしが爲めに希臘語を學びしことは、傳（使徒三・七）。ポーロも亦其學派に屬したり（使徒二二・三）。されど耶蘇の其新宗敎に對して穩當なる意見を發表しぬり得可からざることなり。

耶蘇が少くともエルサレムより携へ來り、其後も心中に根著したりと見ゆる考

上の主義に從ひ、耶穌は心情の宗教ならぬあらゆる宗教を賤みぬ。徒らに敬虔の形を裝ひ（馬太五の一）、虛儀を守りて救を待望める、嚴格なる外觀を衒ふ者は、耶穌に於いて不倶戴天の敵を見たり。彼れは多く斷食を願慮せず（馬太九の一四、二の一八、路加一の七五、二の三七、馬可二の二〇）、神の愛、慈善、相互の許容は彼れの赦免を先きにしたり（馬太九の一三、一二の七）。凡そ祭司的ならざることを之より甚しきはなし。祭司は其職務の故に、常に己が任せられて掌れる公の犧牲を人に强ひ、私の祈禱に至りては、其祭司を略するの手段たるを以て之を罵詈せり。福音書中に、耶穌の勸めし宗教的儀式を見出さんとするはあだなるべし。洗禮は彼れに取りて、何等の則ち設くるなし。世間常に然るが如く、人多くは弱き魂の善なる意志をも對する眞愛に代へ得べしと信じ、彼れをラビ、ラビと呼びて天國を得べし

ざる所なり。（九路加一九）。血統の自負は、彼れをして心を誇てる人は、何人もアブラハムの張したたりなり。換言すれば、耶穌は已に猶太人はあらゆる人をば、唯其神の子たるの人類の正義なり、猶太人の正義にあらず。人類の救濟なり、猶太人の救濟にあらず（馬一太二四の一四、二八の一〇、一四、五、路加二一を以て禮拜に招致せり。名をもて革命を說きたるがトと比ぶれば、相去ること何ぞそれ遠きや。

は創刱せられぬ。モーゼは廢せられ、ウロニテ人ユダ若しくはマタヤ、マルガロッからざるに至りぬ。人類の宗教、血に基かずの理由なく、而して心に基ける宗教は存在の理由なく、而して起つ可

り人々罪に觸るゝの機會を設くるを責めて曰はく、「醫者の相に溝に落つるを讐めよ」と。彼れは籠かに之に加へて、「あゝ蝮の子等よ、爾曹惡にして何ぞ善を言ふを得んや、夫れ心に充つるよりも口に言はるゝ者なればなり」（馬太一二の一、一二、三三、路加六の四五、一一の三九）。

彼れは異邦人と知ること少かりしかば、異邦人改宗の上に永遠の功果を據えつくることをば考へ及ばざりき。ガリラヤ、ピリピ、デカポリスの地に榮ゆるを見たれども、殆ど之に注意を拂はざりき。彼れは此禮拜は存せざりしが如し。

ヤの地には、多數の異邦の、盛にツロ、シドンの偶神禮拜に於いて我等は、其當時の猶太人の煩瑣なる衛生學と、アレキサンデルに對する毀譽例へば、箴言（十三章）の如き、殆ど同信者に普通なる偶像禮拜に對する毀譽例へば、箴言（十三章）の如き、殆ど根性にありき（馬太二〇の二五、馬可一〇の四二、路加二二の二五）。神の外ガウロニテのユダの兄弟――は、人々が主權者の身に捧げし尊敬と、之に加へられ往々にして虛僞なる名號とに憤激したりの

と思ひぬ。彼れは此徒を難じて、彼れの宗教は善を爲すに在りしと宣べたり（馬太二一、路加四六）、即ち屢〻以賽亞書の一節を引いて曰はく、「此の民は口唇をもて我を敬へど も、その心は我に遠かれり」（馬太一五の八、馬可七の六、以賽亞二九の一三）と。

安息日の遵守は、パリサイの人が憐むべき論議の口實にして、又迷信の根源 この古くして顯著なる制度は、心學者（カスイスト）が憐むべき論議の口實にして、又迷信の根源 なりき。人々は自然も亦此日を認むと信じ、間歇泉は悉く「安息日的」なりと考へぬ。 而して耶穌が好んで、手痛く其敵を攻めしは、實に此點なりき（三馬一二の一―五、一三の一―一四、一四の一―三）。彼れは明らさまに安息日を罵りて、彼れに加へられし非難には 唯巧なる嘲語を以て答へぬ。又彼れが、傳說により法に加へられ、且つ正しく 傳說の故をもて信徒に負まるる新たなる風習を蔑視したるは、一層正當なる者あり。 洗淨並びに淨物と不淨物との峻別をなすことに對しては、彼れは一片愛惜の情な く之に反對したりき。彼れは言へり、「口に入るものは人を汚さず、口より出づる者 は是れ人を汚すなり」（馬一五の一一―一五）。此等の滑稽劇の汎布者なるパリサイの人は、常に 彼れが攻擊の的たりき、彼れは彼等が律法を過用して、實行す可からざる條文を作

とは、記憶せざる可からず、況んやマットが『ユーラン』中に、口を賞揚するかと思へば、烈しく之を毀誉し、恰も彼等を獲んと欲するが如き、又欲せざるが如きことを云へり、彼れはこも〳〵之を用ゐるべし。「我儕に敵對する者は我に背く者なり」（馬可四〇九）。「我と偕ならざる者は我に背く者なり」（馬太一二の三〇、馬可九の三九、路加九の五〇、一一の二三）。

彼れの實なり。

腦語を語りて異教徒の間に住める猶太人より、又は異邦人より、或は異教の多かりしは確かなり。

轉せし者を指せり（約翰七の三五、一二の二〇、使徒一四の二）、而して耶蘇の同情を寄せたるは、此等の者を言ひ、或は希臘語を語りて、猶太教に加入するには、割禮（使徒一五の一、一六の三）を受けざるべからざりしなり。

多くの階級あり、されど兎も角も改宗者は、生來の猶太人に比べて常に劣位にあり、又は「門の改宗者」若しくは「神を恐るゝ者」と呼ばれて、ノアの教に屬したれ

かゝる例外。並びに彼れが異宗者と關係せし大多數の場合に於て、彼れは動もすれば、猶太人よりも多大の希望を之に嘱せるが如き言をなしたり（馬太八の五、一五の二二、二五、路加四の二五）。神の時、此農夫に何を爲すべきか……此等の惡むる他の農夫に葡萄畑を貸し與ふべし」（馬太二一の四一、馬可一二の一一、路加二〇の一六）。猶太人の考ふる所に從へば、異邦人の改宗は救主到來の最も確實なる徴證なるが故に、耶穌は益〻此考を固執せざるを得ざりき（以賽亞二の二、阿摩士の九、一、耶利米亞三の一七。馬拉基一の一一、一四。使徒一五の一六）。耶穌の神國にては、彼れは饗宴の時天の四隅より來りし人々をアブラハム、イザク、ヤコブの側に坐せしむるに、この王國の繼嗣は之を拒む。耶穌が弟子に與へし命令の中、往々思はるゝは事實なり。即ち彼れは正統派の猶太人にのみ救を宣ぶるが如く、異邦人に對しては、猶太人の僻見と同樣の態度を以て語れり（馬太五の四六、六の七、三二、一八の一七、一路加六の三一、二〇の三二）。されど其狹き心、能く、異邦人を抱持するに適せざりし弟子等が、自己の思想の鑄型に嵌著を抱持するに適せざりし弟子等が、自己の思想の鑄型に嵌著

徒と信ぜられて、常に其敵視を受けしが如く、又耶蘇を以て其同る者と妄信したるなり（路加九の五六、約翰九の三九―四三）。耶蘇は彼れの如何にして此誤解を脱すべきかを知りぬ。とに遇ひしことあり（路加一六―一七）。彼れの傷きたる人の話なり。一人の祭司來りしが、見過して行けり。傷に至り、進み見て同じく過行けり。ところがサマリヤ人は之を憫み、近よりて油を其傷を包みたり（路加一〇の三〇―三五）。耶蘇は之によりて、眞の同胞主義は慈心之を造るべく、宗教條之を造らずと論斷し給へり。最も廣き意味に於ける人類同胞主義は、あらゆる彼れの教を通じて溢るゝ同情を有せる人の意を去るに臨みて、耶蘇の心を傾せし此思想は、其歸途中の逸事と傳へらるゝ者の中に躍如として現はる。エルサレムよりガリラヤに至る道路は、セケムの地に二三の弟子を有し、少くとも二日をここに過したり（加路四）。又ある時は唯一人のサマリヤ人の家にての譬喩の中最も美はしきエリコの道にるサマリヤ人は之を憫み、近よりて油を其

エルサレムより（ルカ）より半時間程の間、エルサレムとゲリチム山とバル山とガリラヤ

どもモーゼの教に屬することなかりき。此劣等こそは疑もなく、耶穌を此徒に近け之を愛せし者ならむ（馬太一五、六、使徒八の二五、一〇の一二、三、一一の一四、一七の四、二六、四三、五〇、一六の三七、加）。

耶穌のサマリヤ人に於けるも亦然するに至らしめたる原因なりき（使徒八の二五、一〇の一二、三、一一の一四、一七の四、二六、四三、五〇、一六の三七、加）。

まるゝこと恰も小島の如く、サマリヤ人はパレスチナに一藩籬を設けて、エルサレムの禮拜を固執したるゲリチム（Gerizim）神の古き禮拜を固執したる兄弟にして且つ競爭者なりし。此憐むべき宗旨は、本來の猶太教の如き特色も、該博なる組織もなく、痛くエルサマリヤ人を異教者と同列に置き、而かも之を惡むこと一層激しかりき。彼等は之に對する反感より、彼等に對して好意を寄せ、屢〻音を限り、サマリヤ人に說くことを弟子に禁せしことは使徒等が、特殊の事情によりて生ぜる別の命令に附したりしが如きも、是れ恐らく耶穌の意味を以てせし者ならむ（馬太一〇の五、六）。サマリヤ人も時には、彼等は恰も歐州の自由思想家が、回教徒の爲めに終始狂熱的基督教

はエルサレムなりといふ」と。耶蘇答ふらく、「婦よ、我を信せよ、唯又エルサレムのみにもあらずして、爾曹父を拜すべき時至らん、……眞の拜する者、また靈と眞とを以て父を拜する時至らん、今其時はなれり」（約翰四の二一―二三）。

彼れ此言を陳べし日や、彼れは誠に神の子なりき。彼れは始めて、永久なる宗教の家の其上に築かるべき言を發したり。彼れは實に一信仰一地方の者にあらで、世の終りまで心高き人の修する禮拜を打建てたり。其日彼れの宗教は唯に人類最善の宗教たりしのみならず、又絕對の宗教たりとするも、その說く所は道德とに富める住民ある遂に、耶蘇がヤコブの泉の邊りに說きし此教を出づる能はじ。人は此位置を支持する能はず、理想の實現せらるゝは唯一轉瞬の間なればなり。耶蘇が此言は、夜の電光なり。

電光なり。

た途に人類の眞に照りまさらん。ありと

る日輪の光の極めて一小部分たるに

認とを表す止まるを思へ。さはれ此

第十四章　耶蘇の異教者及びサマリヤ人との交通

通せり。此道は猶太の巡禮者の避くる所にして、寧ろペレアを經て迂路を取るも、サマリヤ人と飲食を共にするは禁制なり。サマリヤ人の侮辱を受け、渇しは物を乞ふを欲せず。サマリヤ人の言の中には、「サマリヤ人の麵包片は豚の肉に等し」（約翰加福音四九の五三、）とあり。此道を取りし者は先づ糧食を用意しぬ、而かも衝突と虐待とを免るゝは殆と稀なりき。耶穌は此狐疑と恐怖とを抱く人と當時も尚今の如く、其谷の方に開ける泉を以てヤコブのヨセフに送りたる到る處に族長時代の傳說に基ける名を附するを習ひとしたり、彼等は此泉を以て同じ泉なるべし。弟子は食を求めんと谷に入り、耶穌は泉の側にゲリ

時恰も正午、セケムの婦水を汲まんとて來りぬ。耶穌は婦に對坐しぬ。其太人とは相交はるを禁ずる習なれば、婦は痛く驚きて曰く、『主よ、我汝が預言者なるを知り、已が禮拜を耶穌の豫言者と知れり、我等の列祖は此山にて拜せしに、汝等は拜す可き所

の關係を父子に比しぬ。他人に於いては許す可からざる高慢たるに於いては自負を以て見る可からざるなり。

「ダヸデ」なる名號は、彼（ま）が初めに受けたる無邪氣なる詐術には此名を以て彼れの稱號と定めんと欲したるアスモニア家の末以來、誰れも、又へロデも、羅馬王朝も、皆暫しだに、此古王朝の權利相續者已りしアスモニア家の族等の間に存せりとも知らぬ古王朝の子孫は、隨所に人心を動して彼れの如くベツレヘムに生るべしと云ふに一つゝありき。（馬太二の三、六、二二の四二、路加一の三二、約翰七の四一、四二、使徒二の三〇の三）。耶穌の最初の思想は、嚴密に云へば之と同じからざりき。猶太人の大多數が無上となしたるダヸデの記憶は、救主（メシヤ）はダヸデの裔たるべし、而して彼れの如くベツレヘムに生るべき者も、彼れは此點に於いて強ひて自ら枉ぐるに恐らく彼自らは、與らざりしならん。祭司の族たる者はなかりき。されどアスモニア家の權利相續者已りしアスモニア家の末以來、誰れも、又へロデも、羅馬王朝も、皆暫しだに、此古王朝の子孫は、隨所に人心を動して彼れの如くベツレヘムに生るべし、而して彼れの如くベツレヘムに生るべき者も、彼れは此點に於いて強ひて自ら枉ぐるに

第十五章　耶穌傳說の初生、其超自然的天職に對する耶穌自身の觀念

耶穌は全然其猶太教的信念を失ひ革命の熱心に充ち溢れてゐた。彼れの思想は極めて明瞭に顯來れりと。其最初の豫言者的時代に於ける無邪氣なる訓言――一部は耶穌以前の猶太のラビより借來りたる――と美はしき道徳の教とは、今や高じて斷乎たる政策とはなりぬ。而して之を徐かんとする者は彼れなり。神の國は將に現はれんとす、而して現はさんとする者は彼れなり。救主（メシヤ）は來りぬ、而して彼れは救主（メシヤ）なりき。猛心の犧性となるべきを熟知せり。彼れは己が勇ず、そは誠に危急を冒し、大苦悶を經て打建てらるべきなり（馬太加路太――六の一――六、二）。人の子は死して後、數多の天使を從へ榮光を負うて歸り來らむ、而して亡さるべしこの大膽なる思想を見て驚く可からず。耶穌は已に久しく、自己と神と

分に是認せらるべきものなるをや。耶蘇は、彼れの王統の出なる彼れの徒衆の中に生じたる、妄誕の系圖を默認したりしや（馬太一の二三、路）、耶蘇のベツレヘム出生を證するが爲めに案出せられたる傳說につきて知るツレヘム出生を、羅馬帝王の使節クレニオの命に基ける人口其ベツレヘムに於ける出生を、羅馬帝王の使節クレめたる曲巧について知る所ありしや（路加二の一、）。我等は語る能不精確と矛盾とは、人をして此系圖の、種々の方面に影響を及せる産にして、決して耶蘇が認許したる者たらざるを思はしむ。彼れ商と呼ぶことなかりき。彼れの弟子は知ることを彼れに如かず、動自己に關して述べたる所を誇張したり。されど彼れは常に、此等の誇張說について知る所なかりしなり。加之、基督教の大切なる時代たる最初の三世紀間は、耶蘇の王統と系圖の眞實とが斷乎として否定せられたる一事は、特筆すべきことなり。

さればこの傳說は、偉大なる而して全く自然に生じたるコンスピレーションの結果にして、其生前既に耶蘇の身邊に作られぬ。凡そ歷史上大事件の起るや、何れも皆傳說の輪を生せざるなし、而して耶蘇は此等の民衆的創造（ポピュラークリエーション）を妨げんとせしも得ざりしなり。炯

ありぬ。

「耶蘇は救主なりなる命題の直接の結論は、耶蘇はガデの商よりの命題となるべし。彼れは身に名聲を受くるを許しぬ、これなくばガリラヤの地に成功を得んこと望むべからざりければなり。されど彼れが遂に此名を喜ぶに至りたりと覺しきは、ガリラヤの願ふ所の奇跡をなせしに見るを得たる(九馬太の一二、馬可一二の一四―一五の三、路加一一の二八の三)耶蘇の生涯の他の場合と同じく此場合にも亦彼れは其心情と想像とを暖むる者あらば、悉く束ぬるに「神の國」なる信條を以てし、己にとりて些末事たるに拘はらず、ヨハネの洗禮を受けたる耶蘇を見たり。

一大困難は現出せり。普く世に知られたる彼れのナザレ出生これなり。我等は耶蘇がガデの商はベツレヘム人たるべしてと果して此反對と鬪ひしや否やを知らず。ガリラヤの地には、此事は恐らく多く顯れざりしならむ、且つガデの商を名に負ふ觀念が廣く散布せさりしがゆへる彼れにして、其國民の名聲を擧げ、イスラエルを潜の全盛に歸すこともあらんか、ガリラヤの熱心者にとりて、この稱號は十

なせる者は、即ち其不精密なる年代なり。等の話説を以て彼れが説教の補足となしたる者は、卓絶なる温和なる民衆の感情なりき（馬太一章、二章、路加一章、二章）。常に發達したり。然れども其の生前に於いて已に、偏に正直なる贊嘆とを以て迎へられ、世に流布せしことは想像せらるべきなり。

耶穌が思想は猶太的精神と全く縁遠き者にて、曾て自ら神の化身と夢想せしことなかりし一事は疑ふ可からず、かゝるだも認む可からず（使徒明かに二の二の如きは之を否定せり）、唯、耶穌の所思を其儘に傳ふるとは思はれぬ第四福音書の一部分中に、此意の示さるゝを見るのみ。

時には耶穌がかゝる教を駁せんと心若しは神と等しさへあり（馬太一八、一九の一七、馬可一〇の一八、路加一八の一九）。彼れが自らを神の子なるを宣せり（馬可三の一一、五の七）。彼れは凡人を超絶せしを信じ、されどあらゆる神と無限の距離を隔てりと思ひき。彼れは神の子なり、又神と無限の距離を隔てりとは、即ち其不精密なる年代なり。

然れども、總て此等の話説を形作り、又此善良の精神、深邃き者にて、共觀福音書中には其痕跡も見ざる一事は、即ち其不精密なる年代なり。

眼の士は恐らく已に此點に於いて、超自然の出生を耶穌に寄せんとする傳說の胚胎が、古代に流布せし非凡人は兩性の間に生れずとの思想に基けるか、或は救主（メシヤ）の處女より生るゝ、以賽亞書中の解釋すべしてふ預言なりと信せられたる「神の氣息」が、孳生の原則なりて（馬太二の二三、路一の三五）、若しくは最後に、已に此當時にすら救主（メシヤ）的理想、或は會したる豫言の、世に流布せし者決して一にして足らざりき（以馬太一の一、亞七の一四）。

少年時代の逸事の、世に流布せし者決して一にして足らざりき（以馬太一の一、亞七の一四）。

世に弘く信せられたる觀念は、救主の到來の星によりて告げらるべしてふこと、遠國の使者救主生るゝ時に來りて、彼れを拜して禮物を捧げんといふことなりき。

此豫言は、當時エルサレムに來りしと傳へらるるカルデヤの星學者によりて、實現せられたりと（馬太二の二、路二の五）。大部分事實を變形して作りたる此等想像せられぬ。其他パプテスマのヨハネ。ヘロデ大王及び極めて神聖なる記憶を遺したる二老人シメオン。アンナの如き有名なる人物は、彼れと結合の綴合の特色を

の子」と呼ばざりし相違あるのみ。「人の子」は審判者の資格を表し、と力とに與れることを表す。此力は限りあることなし。父は彼に總ての力を與へたりと(馬太一一の二七、加六の五)。彼れは安息日をさへ變更するの權あり(馬太一二の八、路六の五)。人は彼れによる外、父を知るの途なく、父は審判の權を以て彼れに委ねたり(約翰五の二二)。自然は彼れに從ふ、何となれば信は萬事を成し得ればなり(馬太一七の二〇、路一八の二七、一九の四一)。彼れの奇跡を見し人は、耶穌の心にも、又其教を聽きし人にも、不可能の限界を標する自然法の概念なかりし故なり。彼れは、觀過す可からざる所なり。彼れは罪を許しぬ、彼れはダビデの子アブラハムのロし神を讃美しぬ(馬太九の二、一二の四一、二二の四三、馬可二の五、路加五の二〇、七の四八、約翰八の三五)。我等の預言者よりも大なりき(馬太一二の四二)。

人に與へ、かくの如き能を(ら)モン其他は如何なる形に於いて、又如何なる範圍まで、彼れの斷定は如何なる標準に據りしや知らず。我等の區々たる方便律を以て、耶穌を判斷すべきにあらじ。弟子の贊嘆は、彼れが其初めに滿足せしラビの稱は、もはや彼れを蔽ひ、彼れを運去れり。彼れの自ら擬したる位置は、超人間的存在の位置なり、而思ふ所に吻合せざりき。彼れの自ら擬したる位置は、超人間的存在の位置なり、而

る人は、其度こそ異なれ均しく神の子なり、又神の子たり得べし（加馬五、二〇の三六、約翰一の一二、一三、申命八、二九、羅馬八の一四、一九、二六、後哥林多六の一八、加四の一、箴言二の一、一〇、三の三四、三五、使徒太三の二六）。

人は皆日々神を父と呼ぶべし、總て廣き意味を有せり。之れに反して、極めて嚴重（ズム）なる宗教の與ふる平庸の意味とは、一道の氣息宇宙を貫きて存し、人の神に在り、神も亦人に在りて甚だ明瞭なる感知を有せしめざりき。彼れは、全然無意識なるのみ。

とは人間のことなり、人の神と同じきを示すにあらざるなり。子なる詞はセミチック語及び新約書の語にては、極めて（ヒブリウ）舊約書の神の子たりし者は皆神の子たらむ。

抱きし人なる觀念は、冷かなる自然（デイ）の自然に對する詩的思想に於いては、彼れをして、自己の人格についてイズム）の超絶的觀念論（ツランセンデンタルアイヂアリズ）を比較せよ（使徒一七の二八）。

神に生くるが如く、神も亦人に在り（使徒一七の二八）。彼れの父なるが如く又一なり。此觀念は彼れにとりて萬事なり、人と人とを區別する肉體は、全然無意識なるのみ。

かくの如くにして「神の子」若しくは單に「子」なる稱は、耶蘇にとりて「人の子」の稱と同義となり、從つて又救主（メシヤ）の意と同じくなれり。唯彼れ自ら「人の子」と呼べども、「神

彼等が「神の大能」の示現と目せしシモンといへる奇術者を有したり(使徒一〇八)。殆と二世紀の間、猶太教の思辨的精神は、神的屬性を樣々に人格化し、或は神性に關する特殊の言辭を生ずるの傾向となりぬ。かくて舊約書に度々記されたる「神の氣息」「神の智慧」「神の道」も亦、同じく恒存の實在なる神聖の靈と見らるゝに至り、神の智慧「ソフィロト(Sephiroth)」グノスチシズム(Gnosticism)のエオン(Aeons)、基督教の三位及び其他人格化せられたる諸種の抽象より成れる、荒唐なる神話を生ずるに至りし過程の胚胎する所にして、一神教が其一神を多神とせんことを願ふ時には、必ずや此等の助を待たざるを可からざるなり。

耶穌は明かに、忽ち無味の論爭を以て世界を滿したる此等の神學的曲巧をば、全然關知せざりき。耶穌と同時代のフィローンの書、カルデヤのタルグムミム(Targumim 譯文書)の譯者曰はく、希伯來語なりと)及び當時已に簇言中に發見せられたる如き「道」の形而上學的理論は、馬太のロギア(今の馬太傳書といはるゝ者。譯者)及び廣く耶穌の言の最も信憑すべき說明者たる共觀福音書中にも、其閃光だに捕捉する能はざるなり。「道」の教義は、實際救主の義と相通ずる所なし。

して人々よりも更に以上の親緣を有せる者と見られんは、即ち彼れの願なりき。然れども我等の頻瀕なる神學的意識に於いて無意味の語なることは記せざる可からず、彼れに取りて、高き宗教の發達は、神を外なる有限の王國にあらざりき、あてもなく嶮嚴なる法則に隷屬せる價無き實在にあらざりき。彼れには超自然あることなし、彼れに自然なければなり。無限の愛に醉うて、彼れは人心を縛せる重き鎖を忘れたり。彼れは一躍して、人と神との間に設けし深淵をぞ超へける。

後日耶穌の此等の斷定の中に胚胎せる「天使メタトロノス」(Angel Metatharnos 譯者曰く、メタトロノスは神の坐に列り、功と罪を記錄する書記の神の)「神の長子」、或は「道」(ことば)第二の「神」「神の長子」、或は別の見地より猶太の神學にて一種と同一と想像せられし一個の補助者を神の側に置き、以て古代を支配する一神教の過嚴を調和すべき幾分の必要に迫られたるなり。ある特殊の人々の、神の能力若しくは「力」の化身たるべしてふ信仰は流布し始めぬ。殆と之と同時代の頃サマリヤ人は

ら修練せり（馬五太四）。彼れは憂悶せり、落膽せり、彼れは父に試みられ、子の如くへり、子の如く神に服從せり（馬太二六の三九、二六の二七）。世界を裁くべき知らず（馬八可章）。彼れは安全を守るが爲めに（約翰一二の一）。彼れの身を隱すを要したり（馬太二〇）。彼れは安全を守るが爲めに、彼れを殺さんと欲せし權者を欺き、一言にして直ちに去ることなかりき（馬太一七の二〇、馬可九の一五）。彼れの奇跡には、我等、其の苦しき努力ありて、恰も物あり、身外に出去りたる如き疲憊の狀あるを感知す（路六、約翰八の四五、四一の三）。此等一切は、單に神の使者たり、神に守られ、神に恩寵ある切は、單に神の使者たり、神に守られ、神に恩寵ある（徒三、三）。此中に論理と結論とを求め得べくもあらず。耶蘇が名聲を博する爲めの必要と、弟子の熱心とは、偏に矛盾せる思想を積聚するの結果を見るに至りしのみ。救主（メシヤ）降臨の望に溢れし『但以理書』、『エノク書』の讀者には、彼れは人の子たりき。彼れが弟子には、神の子若しくは單に子たりき。其他大人、『以賽亞書』、『米迦書』の讀者には、タヰデの裔たりき。普通の信仰を有せる猶太人は、弟子等の非難に遇ふことなく、古の豫言者、救主（メシヤ）の時に備へんが爲めに再現すべしとの民衆信仰に

主の意を有せず。使徒ヨハネ及び其徒が耶穌は道(ことば)なりと說き、神と相異なれる新たなる神學の作られしは、後世の事に屬す。「道(ことば)」の主し。人類の最終審判に於ける首審者の位置は、彼れの自ら居りし所にして、初期基督敎徒の彼れに負はしめたる位も亦然り(使徒四ノ一二)。此大なる日に至るまで、彼れは神のメタトロノスとして、宰相として、未來の復仇者として、神の右(馬太二六ノ六四、馬可一六ノ一九、路加二二ノ六九、使徒五、羅馬八ノ三四、以弗所一ノ二〇、哥羅西三ノ一)に坐して、審判者として、唯、侍坐奉仕を事とせる諸天使よりは位高き自己と同列の使徒の間に坐せる、希臘敎會の奥堂の超人間的基督が畫像こそは、我等が已に其重なる姿の卽示せられしを見たる、かの人の子の觀念をば、いとも精確に繪に表せる者なれ。

そはともあれ、學究的煩瑣神學の嚴密はかくの如き社會狀態の裏には生存するを得ず。我等がここに解明したる諸觀念の全體は、弟子等の心中を成すなかりしなり。彼等に從へば、神の對(つい)の一種なる神の子は、純然として人間の如く行動すといふ。彼れは誘惑せらる、彼れは知らざる所多し、彼れは自

能はず。

る所の目的は、信仰の絶對的に神聖とするを以て、正しき議論功を成さゞらば、其論定を證するが爲めに誤れる議論を用うるは、毫も跼蹐する所なし。かくかくの證明は正確ならずとするも、他に幾何も正確の者あるを如何……かくかく無しといふも、更に多くの奇跡の起りたるを思へ……其宗教の眞理を信ぜる敬虔の人々が、明かに微弱を自認せる所の手段を用ゐて、頑固の徒を征服せんと企てしと如何に多かりけるぞや。幾多のスチグマチスト(Stigmatists 基督の瘡を己傷れに有す)と)癲癇病者及び修道院の夢想者流は、其四圍の影響、其自己の信仰により、しし若しくは事の危險を支持するが爲めに、屢〻虚僞の行爲をなすの止むを得ざりし自己を民衆の思想に適應せしめてこそ、始めて民衆を導くを得べしにあらずや。抑も偉大なる事物は、悪く民衆の力によりて成る。我等は、賞賛に價すべし、さりながら人類を其迷と離れて高きを守れる哲學者は容れ、人類と共に人類の爲めに働かんと努むる者も亦難ず可からず。シ

妄と共に

ーザーは己かヴィーナスの子ならざりしを疾く知りにき。若し佛蘭西國が一千年

從ひ、彼れを死より甦りたるパプテスマのヨハネとなし。エリヤとなしぬ（馬太一四、一四の二、一五の四、一六の四、一七の三、馬可六、一五、八の二八、路加一〇の一九）。

彼れに起るべき筈の疑惑をさへ生ぜしめざりし絶對の信念は、此等一切の無法大膽を掩へり。我等が冷淡遲疑の性質を以てせば、殆と人如何なれば、耶蘇が一身を投じてその使徒となりたる如き思想に、かくも心を奪はれ得べきやを解する能はじ。深く眞面目なる種族の一員たる我等に取りては、自信とは先らに對する誠實の意なり、さはる東方人に取りて、多大の意味あることなし。善信仰とは、我等がいては瞭離相容れざるの語なるを、東方に於いては兩者に相通ずる無數の遁口と欺瞞とは、我等が迂路とあり。高尚なる人物、例へば天啓書『但以理書』、『エノク書』の著者の如きは、東方に於いては殆ど遲疑もなく、平然として我等の目して僞と言ふに足らず、東方の人は、誠實の標準を明かに認容するにあらずば、成立する

凡そ歷史は、自己の觀念、興味、情熱を標準として萬事を觀察す。

第十六章　奇跡

耶穌の同時代者の考に從へば、超自然的の使命を建設し得る者は方法――奇跡と預言の成就――に止まりね。耶穌其人又殊に耶穌に於て善良なる信仰を以て、此二つの證明の手段を用ゐぬ。耶穌は久しきたるは已が事のみなりと信じ、彼等の神聖なる託宣の裏に自己を認め、自ら擬すに、イスラエルの全預言的精神の未來を映せる鏡を以てしぬ。基督者が救主（メシヤ）について述べし所と、全存生中既に、耶穌の、預言者の書（太一の二二、二三、一の二三、四の一五）。此等の比較的多くは概ね預言の書の一節を想ひ起さしむるものの大多數は、主の生涯中偶然的にして大切ならざる事柄にて、彼等常に前一過の者に、諸〻の姿を認めし預言の書の三一、五四、五六、二六の三一、五四、五六、二七の九、三五、馬一一四の二七、一一の九、一九の一四、二四、二八、三六）て先入主となりて、眼迄なり（馬太二三、一七の九、一九、二四、二八、三六）て引證を巧みたり。會堂（シナゴグ）は未來の此時代の聖書は未來の國に關する出

の長日月間、ライムの神聖なるアムピュラ(Holy Ampulla of Rheims)を信せざりせは、今日の譯者曰く、アムピュラは佛國ライムに市位)を信せざりせは、今日の佛蘭西は遂に存せのにある一個の瓶にして、クロビスの即ざりしならむ。持來れりし者と傳へらる。之を虛僞呼ばはりし情の下に、人生の舊闘をなしたる勇者を凌辱するは、我等の如き者にとりて極めて易々の業たるのみ。若し我等の思慮によりて、彼等が僞者を成就しめて嚴酷に彼等を裁くの權あらむ。少くとも我等は、萬事が省慮の裏に生ずる我等の社會と、諸〻の時代を支配せし信仰の生傳說の上に信單純なる社會との間に、明かなる區別をなさゞるを可からざるなり。建てられざる偉大なる創業あることなし。此時咎を負ふべき者は、唯。欺かれんことを願ひし人類のみ。

る思想の一つは、人は信仰と祈禱とによりて全然自然を左右すべしといふに在り（馬一七の一一九、二一の二三、二四一、二）。奇跡をなすの能力は、屢〻神により人権にして、其裏に何等の奇怪なしと考へられたり（馬太九の八）。

時は移りて、偉大なる基督教の創立者が、いつか人類の間に力を構成したる者は、變じて我等の思想あらば、そは確かに初に人をして彼れを信ぜしめたる、此等の所行の故ならむ。此種の歴史的現象に臨みて、批評は何の困惑をも感せず。今日の奇術者は、獨乙のスチグマチストの如く甚だ單純なる者の外は、何れも排斥すべき者なり、そは奇跡を信ぜずして奇跡を爲す者即ち單なる山師なればなり。然れども、我等若しアシシのフランシスを取り來つて考ふれば、問題は全く別となる。フランシスカン派の起原に關する多くの奇跡は、我等に惡感を與へず、却て眞の快味を與ふ。基督教の創立者等は、聖クラ及びツレス、ソチイ（Ires Soci：譯者曰はく、三人組の意、アシシのフランシスは分りたれど、其上に關したる口碑の中にありとまで詳かにせず識者の教を俟つ）の如き、純然たる詩的無智の狀態に於いて生活したり。彼等は主がモーゼ、エリヤと會談し、水火風土に命令し、病

所をば、ここと公に定め示すことなく、救主ヤに關する引證は、容易にも眞面目なる推理よりも、寧ろ體裁の巧を基として成立したり。

此時代に於いては、奇跡は神性に欠くべからぬ目標にて、預言的信ぜられし所なりき（約士翰喇七の三四、四、以一三の三五〇）。耶蘇の居しとは、普く奇跡ありと稱せらる。されば耶蘇は、兩者の一を選ばざるに至可からざるに、シモンと呼びたる魔術者あり、奇跡によりて神の生涯を送りしサマリヤの地を揚げ、神が地上に留まりを證せんと企てし時、之をアポロニウスの名聲を博せプロチヌス及び其他アレキサンドリアの哲學者は何れも皆、種々の奇跡を成したりぬ、其使命を斷念するか、奇跡を行ふ人となるかの一つなり。希臘の多數の科學徒たる羅馬人を除き、古代人は皆奇跡を信ぜしのみならず、自然の秩序が或る法則の支配下に在りとの觀念は毫もなかりぎ。此點に於いて彼れの心中に最も深く根ざせ

が、果して實際、歴史的事實としての精靈宗徒（スピリチュアリスト）と同樣の潤したる今日の世界に住みにし、編纂者の信仰のやは、就中最も神的の力は、其性質にして痙攣的病の奇跡なりしが如し。當時猶太の醫術は、今日尚ほ者の如く純然たる非科學的の者にて、專ら人々の靈感に委したり。人の作りし科學的療法は、耶穌の時には、パレスチナの猶太人に未た識狀態に於いて、凡をかくの如き知拔くの人、柔情を以て病者に接しもて其快癒を保證せば、そは屢〻極めて有功なる治療法となるべきも別として、多くの場合に、柔和にして美麗なる婦人の一觸接が、あらゆる調劑の手段に匹敵せずといふことを、誰れか斷言せんとはするふ、而してこれ斷じて徒爾ならじ。

耶穌は其同國人以上に、合理的醫學について知る所なかりき。殆と總ての人と

者を愈すが如きは、全く自然のことなりとしぬ。何れの理想もせねば、忽ち其純粋を失ふことは忘るべからず、成功は魂の柔和して得べからず。人心の弱きや、其最良の事は常に惡しき論據の基督教使徒の顯證は、甚だ惱むべき議論によれり。一、コロムブス、マホメット等は常に人間の弱點を慮り、時には眞が故に、始めて能く其障礙に打勝つを得たるなり。耶蘇の聽衆が、深邃幽遠なりしモーゼ、クリストファ理の誠の根據を示さゞりしことは、我等の言ひ加へざる可からざる所なり。

更に民衆の評判が、一層多大の印象を受けて耶蘇の生前及び死後に、此種の多くの事跡を傳へしことは、我等の言ひ加へざる可からざる所なり。

福音書中の奇跡の物語中にて、耶蘇の生前若しくは死後に擧げらるゝどくどしき少數の模型より、作ふに、其國の趣味に稱ひしするは不可能なり。

奇跡の厭ふべき特色――呻吟、努力及び幻術に似たる狀態――

が意志に反する行動をなさしむとは、單に猶太のみならず、全世界に通ぜし普遍の思想なりき。屢〻アヴェスタ(Avesta)經中に記載せらるゝ、波斯の神アエシュマダエヴァ(Aeshma-daeva)、即ちアスモデウス(Asmodeus)の名の下に猶太人に採用せられたる邪欲の神は、婦女のヒステリー的狂亂の原因と考へらるゝに至れり。病者が失神の狀に陷るは、癲癇、精神病、神經病及び痙攣疾の如き原因の外に顯れざる病も亦同樣の說明を與へらる。ヒッポクラテスの名論文「神聖なる病氣に就いて」は、耶穌の前の頃、已に此點に於いて醫術の眞原則を示せしが、尙ほかゝる迷誤を世界の外に逐ひ得るに至らざりき。惡魔を追ふに多少有功なる方法あるは醫師の如く一定の職業なりき。耶穌が其生時に於て、己に斯術の祕訣を須ゐず、(馬太一七の二〇、馬可九の二四)當時猶太の地には、精神激動の結果、疑もなく多數の狂人あり。今もなほかの地には然るが如く、彼等は自由に横行するを許され、無宿者の常棲なる荒塚の穴に住みたり。耶穌は此等不幸の徒の上に偉大なる感化を及ぼしたり(馬太八の二八、九の三四、一二の一四、二〇、馬可五の一、路加八の四三、一七)。

同じく、耶穌も亦治療は宗教的施術にてかゝるの所業には信念は極めて至當なりき。の醫師は即ち、超自然の境に力を有したる聖人なりしなり。考へられたり、而して自己の衷に精神的の力を感せし耶穌は、自ら病を愈す特殊の天賦を有せりと思ひぬ、手を按き衣をふれ（路加四の四〇、四五、四六）、或は唾しなば、病者の必ず愈ゆることを信じながら、己が力優に之を與へ得べき慰藉を苦しめる人に與へざること如きことを信じながら、己が力優に之を與へ得べき慰藉を苦しめる人に與へざると認められ、而して常に貧者の釋放と共に、あらゆる禍害を痊すが爲めに起れり（馬太一一、一の一四、三四）、或は惡魔聯結せられぬ（馬太一一、一五、一五の三、路加九の一一、二、六）。兩者くの點に於いて關係あるエッセネ派も亦、甚だ有力なる精神的醫師たるの名聲を有したりき。

耶穌が最も度々用ひし治術の一種は、降魔（Exorcism）即ち惡魔の逐斥なり。惡魔を信ずる奇怪の傾向は、當時萬人の心を支配したり。惡魔が或る種の人を襲ひて、己

子と呼ばんとせしに、彼れ口を開くを禁じたり、彼等の彼れを認むるは、彼れの欲せざる所なり（馬三の可一一の二、路加四の二四、二五、三四、四一）。此福音の原説教を傳へたるが如く、而して主は頌むべき馬可に於いて認めらるべし。

を賛嘆したるが爲めに、常に耶穌を累したるが如く、而して主は頌むべき馬可に於いて認めらるべし。

うて、屢〻「之を語る勿れ」と言ひしが如し（可九の一一八、路加九の四一）。或時には此意見の不諧和の逆出して、心弱き者の願ひ絶へぬ苦しさをもらす激怒短氣となりたることもありき（馬太一七の一六、馬一の二四、二五、三四、四一）。

に生ぜし程の奇跡をも、出來得るだけは公にせざらんと勉めしこの彼れには好ましからず、上の奇跡を請ひし時、彼れ等は奇術者たる聲譽の彼れに負はされたるを感じて、之に反抗せざりしも、又同時に之を得んとは努めざりしこと、而して兎に角に、彼れが此事につき、一般人の所思の浮虚なるを感じたるは、彼れの欲せざるを得べし。

此點に於て我等自らの偏見を過重するは、正當なる歴史的方法の欠乏を示す者

らに之を妄信しぬ。されど此事につきても、其困難を誇説する「病」の名に外れし人呼はるゝ病は、屢〻甚だ輕微なり。今日にても、スリア一の語メは、狂者又は物に憑かれし亡者と目せらる。此狂と憑惡魔を追ふに足れり、而してかゝる一言は疑もなく耶穌の用ゐ降魔者としての耶穌の名聲が、耶穌自ら知らざるに擴らざりし東方の住民は、人々の想像の源をなせし事實の如何なりとも知つの間にか、己が醫師、魔術者、珍寶發見者の名を得たるを見て、往る事あるなり。

更に多くの事情を察するに、耶穌は晩年に至り、始めて素志に反して奇術者となりしに似たり。彼れは往々求められて後漸く、請ふ者の頑陋を跡をなせしことあり（馬太八の七、一六の四、一七の三九、一八の一、路加九の四一、六、馬一の四四、七の三〇、三一、一二の一六）。表はに解し難じつゝ、嫌厭の感の一點は、彼れの密かに奇跡を行はんとし、其愈せし人に、誰人にも語るなと言ひしことなり（馬太八の四、九の三、可一の四四、七の二四、八の二六）。惡魔

の成したるが如き精神的革命を成す能はず。若し耶蘇に於いて宗教改革者を壓倒せしならんには、耶蘇に基督教の創立者たらずして、加之此問題の如きも、畢竟は力と偉觀の如きも、畢竟は力と偉觀の場合を通じて同じ。今日に至るまで、人類の爲めに最も多くを爲ら〳〵と無病の名を知れり、殆ど今日の我等が背理にして、諒丈の傾向あり、ふらのる歷史上の人物は、惡人若しくは欺批評は悉く空に歸すべし。アレキサンドせしにはあらで、成したりと稱せらるゝ（卓絶せる）を願ひしと否とを問はず、魔術者なりき（Paul の如き）。十九世紀のヤネットの運ザーンサン、ボ

なるべし。眞誠の批評の根本的條件は、時代異なれば人の考ふるあることを解し純然たる主知的教育より生ずる本能的の習慣を我等は、耶蘇の性格に對して反對の生を遂くるが爲めに、時人と映じたる事實を匿すの要なし、此等は遙に主に劣れる弟子等がはず、彼れに取りて偉大なき幻術によりて、耶蘇を偉大にせんとして之を附加せし者なることは、容易に斷言し得べきなり。然れども、其の奇跡を賞讃する點に於いて一致せり。其一は、力を極めて此點を記せり、我等若し專ら馬可の通譯者なる馬可に從はなば、彼れを以て非常に功驗多く牽引力に富む人傑徒ペテロの福音書によりて、降魔者、極めて力ある、人を恐れ避けしむる魔術者と想像するに至るべし（七、馬可四の三、三の二八、太八の二七、三四、九の八、四の三六、一七の六、七、二、五、三五、三七、七、九の三四）。

然らば我等は踟躕なく、今日錯覺著しくは狂氣の特色と考へらるゝ諸行爲の、耶蘇の生涯の大部分を領せるを許さむ。然れども其生涯の莊嚴なる方面を驅りて、此面の犧牲とすべきか。斷じて然る可からず。シモンの如き單なる魔術者は、耶蘇

との惡評を彼れの名に被らしめしなるべし（約翰四。一六の一五）。さはれ耶蘇の性質の純然たる精神的傾向と、政治の外に超然たる彼れの王國は、想像の同一新鮮、上天の同一豫感によりて彼れの周圍に集まりし、小兒の如き人々の一圈にありき。

に發展せらるゝはあれども。

（此故に廣き意味に於いては、耶穌は唯其本意に反して奇術者、降魔者たりしのみと（馬一二の二四、路八の二三の八）。異敎者及び彼れを知らざる者も、恐怖の感を抱きて境域外に彼れを追はんとしぬ（馬五の一、馬太八の二八、馬四の一、馬八の三四、馬七の一七、八、可七の一四）。多くの人は恐らく、騷亂の運動に關せりといふよりも、寧ろ衆人によりて要求せられし奇跡を受けたるのみ、奇跡は常に衆人の所行にして、其名を得たる彼れの所行にあらず。耶穌は、民衆が彼れを爲すを固く拒めり、最大の奇跡は、實に彼れの造出せんと欲したる奇跡をして此以上毀傷及び民衆心理學の法則は、決に對する弟子や衆人の渴を醫するに當りてランシス以上の自由なかりき。耶穌の奇跡は、聖ベルナルド若しくはアシシのフ必要より生ぜる止むを得ざる讓歩なり。降魔者、奇術者は其高處より墜落せん、さはれ宗敎改革者は永遠に生きむなり。

彼れを信ぜざる者すら、此等の所行の印象を受けて之を證せんと欲したり（馬一四太

思想は悪く同時に。耶穌の胸中に存在したる者の如し。されど簡的革命の思想――は、彼れに極めて深き印象を與へたりとも見えず。彼れは地上の物、地上の富、物質的勢力を以て、考慮の價なしとなせり。彼れは世間的の野心を抱かざりき。自然の結果動もすれば、彼れの偉大なる宗教的重大となるの危險に瀕せしこともあり。彼れは、移りて社會的の申請を以て殆と侮辱となし、斷乎として之を却けき（一路加三、一二の四）。天上の理想をのみ思ひつゝ、彼れは人の賤ことなかりき。後の二つの神の國の觀念に關しては、耶穌は常に彼れにして若し。一般人の想像の泉たりしかの天啓に誘惑せられたるに止まりしならば、彼れは無名なる宗派の人に終りて、其思想を彼れに傳へたる人々に劣ること萬々なりしならむ。彼れにして若し（Chauvinism、或は「サヴォイの牧師」Savoyard Vicar ソーが借りて宗教上の著作中にルソーの所信を述べたるチャンニング、エミール中にルソーの所信を述べたるチャンニング、エミール中にルソーの所信を述べたるチャンニング、エミール

第十七章　神の國に關する耶穌の思想

の終局の形式

我等の想像によれば、耶穌活動の最後の一幕は、彼れが三十一年の歸りて、三十二年に構廬の節筵に旅立ちしまで、十八箇月の間に亘りぬ。此間耶穌の思想は、總て新たなる分子を加へて豐富となることなかりしも、已に其力を增し其大膽を加へて、止むことなく生長發達したる如くなりき。

耶穌の根本思想は、最初より神の國の建設なりき。されど此神の國は、既に述べし。彼れは時に、耶穌によりて極めて種々の意味に解せられたる者の如し。

棄てられたる者の勝利の外に、何物をも望まざる共和的首領とも思はるる時には、神の國とは救主（メシヤ）に關する天啓的幻想の文字通りに完成せらるる者なることもあり。

最後に、神の國とは屢〻精神的王國の意にして、間近き救とは此最後の意味に於いて、耶穌の願ひしこれなり。上の革命は、實際に生じたる者にして、モーゼの禮拜よりも更に純なる、新しき教の建設

此裁判の時、八々ば其所行に從ひて二つの種類に分たれ（馬太一三の三、二五の三三）天使は其判決を執行す可し（馬太一三の三、四九、四一、四九）。選まれし者は、世の初より彼等の爲めに備へられたる樂しき場所に行きて留まるを得べし。彼等はここに坐して、光り輝く衣を著、アブラハム、族長、預言者等を首座とせる饗宴に與るを得む（馬太二五の二四、比較、約翰一四の二、馬太八の一一、一三の三、四三、二六の二九、路加一三の二八、二二の三〇）。この八々は其數少くして、其他は皆ゲヘンナに行く可し。ゲヘンナはエルサレムの南の谷にして、そこには度々火の祭あり、場所は一種の溝となりぬ。されば耶穌の考にては、ゲヘンナは恐ろしき汚れの谷、神の國に斥けられし者はここに燒かれ、惡虫に食はれ、サタンや反逆の天使と偕なる地下の淵なりき。詩一、默示一の九、約翰六、彼得前二の四）。そこには泣嘆の聲と切齒の響とあらむ（馬太五の二二、八の一二、一三の四二、五の三〇、一八の八、二四の五一、二五の三〇）。

此新たなる世の次第は永遠なる可し、樂園と地獄とは、いつまでも果てなからむ。越ゆべからざる深淵は、兩者を分ちぬ（路加一六の二六）。人の子は神の右に坐して、世界と

類なき彼れが成功の原因なりき。初代の基督教徒は、我等なら想となすべき理想の圏中に動ける夢想者流なりき。されど又て心の釋放となり、創立者の宣したる、純なる禮拜を生ずるに至となりたる、社會的戰爭の勇士たりしるべき宗教の建設なり。

最も完全なる形式を具へたる耶穌の天啓的思想は、下の如くに約言せらるゝをを得べし。即ち人類現實の狀態は終末に瀕しつゝあり。此終末は大革命なり、生みの苦に似たる災禍を先驅とし、類稀なりの(馬二六一八—九)。而してこは實に暗黒なる自然現象を以てシス(Palingenesis)即ち耶穌告げらるべし。此大なる日人の子の象(かたち)は、赫々として諸天に輝ナイの天の如く、眼もあやに光り耀くき、火と燃ゆる流星は瞬く隙に東より南に閃き亘る。景色ならむ、強嵐は雲を裂して、雲の叫の響につれ、天使に圍まれ、榮光莊嚴の裝ひ裏にメシヤは現れん。弟子は御座の側に坐せむ。其シヤ裁きをなさむ(馬一六の二七、一九の二八、二〇の二一、二一、二六、二四、馬六の三〇、二五の三〇、前一四の六、三、六、二、路加林多前一五の五二、帖前四の一五)。

三。彼れは曰はく、神の國の待望まること最も切なる時と、正さしき時なりと（路加二の一七）。而も彼れは絶へず、ノアの日、ロトの日の如く、彼れ來るべきを繰返し、我等のよく警めて臨立の用意なすべきこと、人の子は盜賊が如く、若人の寐ねで燈火をともし置くべきこと、人の子の思はぬ時に來らんことを告げ（馬太二四の三六、馬可一三の三二、路加一二の三九、彼得後三の一〇）、稻妻の天の彼處より閃きて此所に光るが如くに、人の子も亦顯るべしと言ひぬ（路加一七の二四）。然れども耶蘇が終末近けりとの宣言は、其間に曖昧を存するの餘地なし。彼れは言へり、此事なる迄は、此世は過ぎざる可し」。「ここに立つ者の中に神の國を見ざる迄は死せざる者あり（馬太一六の二八、二三の三六、三九、二四の三四、馬可八の三八、九の一、路加九の二七、二一の三二）。

彼れは己れを信ぜざる者を難じて、來らん神の國の徵證を讀み得ざる者と言へり。「爾曹暮には夕紅によりて晴ならんと言ひ、晨には朝紅又曇によりて今日は雨ならんと云ふ。僞善者よ、空の景色を別つことを知りて、時の休徵を別ち能はざる乎」（太一六の二―四、路一二の五四―五六加）。あらゆる偉大なる革命者に悉く共通なる幻想は、耶蘇をして實際以上に、終末の來ることと早かるべきを想像せしめぬ。彼れは人間の運動の遲

人類との已に定まれるこの狀態を支配すべし（馬六、九、使徒七、路二、九、加五、二一）。

弟子が上の總てを文字通りに解し、加へて時には耶穌其人も亦然か解せしことは當時の記錄に見て、斷じて明白なるが如し。若し古代の基督教徒にして、深遠常恒なる信仰を抱きたりとせば、そは世界の終末の近つきしこと、基督の偉大なる默示將に起らんとすることなるべし。默示錄の終始をなせる「時は近し」（默示一の三）「聽け」（馬太一一の一五、一三の九、四三、馬四の九、二三、一四の三五、默示二の七、二九、三の六、路八の八、一四の三五）の絶へず反覆せられたる叫とは、全天啓時代を待つ希望の呼聲なりけり。

スリアの語マラン、アタ（Maran atha）即ち「我が主臨る」は、信者が信と望みとを强うするが爲めに、相互の間に用ゐたる標語の一種なりき（哥林多前六の二二）。紀元六十八年の終りの三十年半にして來るべきを言へり、而して、上の如き細密なる確定に思を凝すことなかりき。

耶穌は決して、彼れは常に拒みて答へざりき。彼れは實に、大なる日の何れの日なるやは問はゞ、彼れの昇天も亦、之を知れり、父は天使にも子にも之を顯さゞりしと宣しぬ（馬太二六の三六、馬可一三の三

て根本としたり。　耶蘇は斷乎として之を採用せり、されどその意味にてなりき。　多くの人は、已等の復活したる世界に於いて、飲食し結婚すべきを想像したり。　耶蘇は實に彼れの國に置くに、漸たなる逾越、漸たなる食卓、新たなる酒を以てせり。　されど彼れは明かに婚姻を除けり。　サドカイ人は此點に於いて、外見粗硬なれども、其實根本に於いて古き神學と一致の議論を抱きぬ。　古聖人の說によれば、人は唯其子等の中にのみ存生したることは記憶せられむ。　モーゼの法典は、此族長的理論を奇異なる制度――レビレート法（Levirate law 譯者曰はく、夫を失ひたる妻子なければ、夫の兄弟に嫁ぐことを定むる法）に制定したるのみ。　耶蘇は、永生には人に男女の別なく、天使と等しかるべきを明言して、此中より反對して、此

緩なるを遡せざりき。彼れは其後一千八百年を經ても、依然として完成せられざる所の者をば、一日にして實現し得べしと信じたりしなり。

此等の形を備へたる宣言は、殆ど七千年の間、基督教の家族が弟子の或るものは、天啓の日を見るまで死なざるべしとは、八々(約翰二一の二二、三)の如く、彼れ決して死なざるべしと稱せられ、或は其數に入るべしと信じたり。こは恐らくヨハネが達したりと豫しきを經りに過りたりし考なるが如し——此高齢に基きて、其後る日來りて、耶蘇の國を欲したりとの信仰くヨハネの命を延さんとて彼れの弟子は、基督の預言に、一層膨ろなる意味を附し

耶蘇は猶太の天啓諸書になすが如く、全然天啓的信仰を許すと同時に、又此等の補足或は

る如く、ラビに於いてもなほ幾分か新しき者にして、衆人しくは救主の熱心なる信者は、この信仰を以せざりき(の路二の二七)。パリサイの人

在せしめしこと是れなり。世界は、耶穌の告げしが如く、弟子の
を告ぐることはなかりき。さはれそは當に新たまりぬ而して
耶穌の願の如くに新たまりぬ。彼
に由る。彼れの夢は、人心を一變して過ぎ去りし他の多くの夢
ごりき。蓋耶穌の夢は、荒廢の外被あるが爲めに人間の胸臆に
永遠の果實を結びし生命の胚珠を含みたればなり。

　上の言をもて、耶穌の國、芥子の粒の如く、世を微ひて其枝の中に數多の鳥
が偉大なる國、此國こそは正さしく、耶穌が解し、望み、築きし所の
れ。然らず、顧じて然ることなし。此眞の王國、人をして等しく王たり祭司たら
しむる靈的の國、是れ外に、耶穌の國なし。虛僞、冷楽、
と生立ち、貧者の尊崇、人々の愛、賤しき者、誠なる者、單純なる者
不可能の此誘惑なる降臨の思想の如く、此回復を心に抱き
弱者の興起、貧者の尊崇、人々の愛、賤しき者、誠なる者、單純なる者
たり。彼れは並びなき美術者の如く、此回復を講くに永遠に不
朽なる手筆を以て

書並びに使徒の書は。猶太系統の書なる『但以理』『エノク』『託宣書』『Sibylline Oracle』『モーゼの昇天記』(Assumption of Mosez)のほかに已に發見せらるべき者も。存することの外に。殆と何物をもなし。耶穌は當時普く流布せし。此等の觀念を容れぬ。彼れは之を採りて活動の基礎。或は基礎の一端となしたり。蓋彼れの眞事業は。實の上より容易に抗拒を受くる處ある。か、る脆弱なる原理の上にのみは。其事業を築くを得ざりけるなり。(かくの如き教條を單に文字通りに見れば。何等の未來をも有せざるは實に明かなり。世界は依然其生存を續けて。此教の生命は多くとも一代に盡きぬ。初期基督教徒の信仰は尚ほ明瞭なれども。ヨハネ若しくは耶穌を見たる人の中の最後の生存者(そも)死して後。此の恐は。彼得後書の教條の虛僞を證したり。こらず。ヨハネ若しくは耶穌を見たる人の中の最後の生存者(そも)死して後。此の恐は。彼得後書の教條の虛僞を證したり。こ

て見るを得べし)。耶穌の教をして。單に『世の終末の接近』の信仰に止まらしめば。今は確に忘却の裏に眠りつゝあらむ。然らば之を救ひたる者は何ぞ。曰はく。福音は確に廣き。其裏能く同一象徴の精神的狀態に適合する思想を並

達の道徳と思はれしにも見るべし。　耶蘇其人に於ては、天啓的教理を用ゐきと雖も、彼れは屢〻「神の國は汝等の裡にあり」と言へり。神の國は人々若し個せば、即ち之に與るを得ん、皆一路加（馬一の一五、三一、馬可一の一五、三三、馬可一二の三四、一二の三二、一七の二〇、二一）。然らば神の國は唯一層善良なる次序なり、眞信の徒の、其力に應じて建造を助くべき正義のみ（馬可一二の三一）。或は又稍佛教の「解脱」に似たる、靈魂が物を離れて結ぶ果實なる靈魂我等には單に抽象的なる此等の眞理は、耶蘇には生ける實在なりき。

耶蘇は一切萬人の中にて、最も透徹に理想の實在を信せし人なりき。

彼れの心裏の國は、其意義をば利益ある樣に誤解したるが爲めに、其中より何物よりも、主として自由の上に、又善人が天父の許に建設せられたる、魂の國なりき。そは形式なく、殿堂なく、祭司なき彼れの神國は、疑もなく、直ちに諸天に開かるべき天啓なりき。さればこそ彼れは夢想郷（ユートピア）を採用したりとも、其意義をば利益も恐らくは先づ何物よりも、主として自由の上に、又善人が天父の許に建設せられたる、魂の國なりき。そは形式なく、殿堂なく、祭司なき

しけりっ　我等は已が內なる最上の
に夢の如き天幕し、茫なる雲の上に臨
此等は、彼れの夢は、死のまむ大なる凱歌の望を以て
想に與りしとするも、博た言ふに足らん
強うし、これなくば到底事へ難き戰鬪
ここに於いて、彼れを支持した
世の終に於いて、耶蘇の將へたる神の
彼れはバプテスマのヨハネに勝ること
次節に現在の生を離却し、將に來らん
の一點なりしなるべし。　されど耶蘇
ぬ。　彼れは人類の新しき狀態を造ら
に備へんとせり、而して單に、現實
に備へんとせしにあらざるなり。　若
備へしめんが爲め地上に臨みたりと
なるへし。　此事の誠なるは、彼れが曉

に亘り、基督教の不斷の中心思想にして、十三世紀の新教徒に至るまで、あらゆる改革者と堅固なる天啓信者との魂に溢れし未來渴仰の偉大なる本能の根本は、眞の基督教徒をして常に時代と戰ふの勇士たらしめたる非常なる熱中の源を形作れる天啓書は、かくて或はまたき像(すがた)を形作れる意味に於いて、最も崇高にして最も詩的なる表現なり。然れども又必然の勢、此等は甚しき迷誤を生ぜしめぬ。世界の終末は、絶へず人類の頭上にかかれる威嚇となり、數世紀の間定期的の恐慌を激起し、爲めに、一種の恐怖と奴隷的自屈の習慣とを生じ、中世をして遙かに古代並びに近世の下に立たしむるに及びぬ。加之基督出現の見解も亦非常の大變化をなせり。

社會は其存立の確固ならざるが爲めにあらゆる確實なる發達を妨害したり。

その住める遊星の終りは近きぞと、始めて人類に宣せられしときには、人は微笑を以て死を迎ふる小兒の如く、嘗て感せしことなき最も激烈なる歡喜の增大を感じれど世は去りて生命の執着あるにき。

(譯者曰はフロラのヨアキム(Joachim of Flora)ガリラヤ人がその單純なる魂に、ひた

純粹の宗教なりき。正しき人の良心と人々の腕に委託せられし世の一世紀こは存續すべき運命を有せし者なり。實に存したる者なり。ぬ。方便的說明は、たやすく顯はるゝ實質的希望の盡きし時、眞氣色もなき實質的王國の上に。被蔽を投じたり。パピヤ(Papias)の如く、耶蘇の言葉を其儘に信せし頑固者流は、狹陋、舊弊と目せられぬ。新約第一の天啓的書籍なる約翰默示錄は、直ちに來るべき世界(カタストロフ)終末の觀念と形式とを受けて殆と顧みられざるに至れり、天啓の完成は、少くも無限の未來の時代に、依然として初代の弟子の望を固守者と認められ、區々の淺瀨に難破したる異端の徒となりぬ(エビオナイト、ミレナリアン(譯者曰はく、基督の御代一千年續くべしと信じたる徒の如き)。人類は別なる神國に征服したり。

然れども此幻想を厭ふ勿れ。是れ實に、我等が其中に生くる神國、神市に對する無限の追究は、其長き歷史

「神の國なる話は又他方に於いて、靈魂が運命の補足、現實生涯につき敢する要求をば、他に類なき幸福を以て表はす者なり。人の之を信ずる能はざる人、靈魂不滅の自然宗教的教條を心理學と矛盾の形式の下に人心の必要を滿足せしむべき、最後の希望を得て安住せしむる者、悉皆の覺醒を促すことなきも長からず。此假定に於いては一時間の眠りより百萬年の眠りは宜なるべし。人類の高尚なる精神的、道徳的部分の其報償を得べきこと、而して其日耶穌の理想の姿が、徳を信ぜざりし小人と、之れども正直なる人の心が世界を裁かん日來るに達するを得ざる此詞(神の國)は、眞理をひとつに包括せるそが標緻崇高の裏に、此詞此故に永遠不朽の美に溢れて殘らん。貴き占卦の一種は、樣々の保持したりとぞ思はるゝ。

すら得ず、思ひ設けし恩恵の日は、遂のヲヒデエス(Epiphes)と轉じぬ。さりながら、神國の觀念は依然として實り多かりき。中世初年の法律文書中には、「世界の夕來らん時……」なる定例に始まる入籍の證文あり。封建的教會、宗派、宗門ある今日の如く、一見依りて世の不正に抗論しぬ。貧なる信者とてもなき、悲むべき時代に於いて非常に近似せる——初代基督教徒の憧憬と——は、或意味に於いて同一理想の萌芽せしむる大樹の一枝に外ならざるなり。人類の社會的革命は、一事、即ち偏に政治的經濟的方法の上に一般の幸福を築かんことは、彼等にして耶蘇の眞精神を其綱領主義となすに、竟に何等の功果なかるべし。我が耶蘇の眞精神とは絶對的理想を棄てざる可からざるの主義なり。

則的の組織ある團體に似し者は、毫もあらざりき。世に傳へらるゝ十二の員數は、其の中に多くの不精確と矛盾とを含めり。其中に顯はるゝ二三人は、全く不明のまゝに殘りぬ、又少くともペテロ、ピリピの兩人は、結婚して子を設けたり（ペテロは馬太の一八の一四）。

耶穌が世間に知らすを禁じたる祕密を、十二使徒に語りしは明かなり（馬太一六の二〇、一七の九、馬可八の三〇、九の八）。時には恰も、或る程度まで祕密の雲もて自己を圍繞し、自己に關する最も重大なる證據は其死後に至るまで之を放置し、唯弟子にのみ十分に自己を露出して後日彼れを世界に發表するの一事は、擧げて之を彼等に一任せんとするは、耶穌の計畫なりしが如くにも見ゆ。「我れ幽暗に於て爾曹に告げし所を光明にて述べよ、耳をつけて聽きしことを屋上に宣播めよ」（馬太一〇の二六、二七、馬可六の二六、一七、一二の二等、約翰一一四の一三）。此事は彼れに極めて嚴密なる言明を爲すの必要を免れしめ、彼れと一般人との間に、一種の中間物を作りたり。或る種の教は、唯使徒にのみ與へられしことと、意味衆人に不明なりし多くの譬喩を、使徒に説明せしことは明かなり（馬太一三の一〇、三四、馬可四の一〇、三四、加八の九、一二の四一、路）。謎の如き形式、奇異なる形の觀念聯想は、訓言集（ピルケアボト）（Pirke Aboth）

第十八章　耶蘇の教會

耶蘇が最も盛なる特別の稱號を受けたる者を選びしは、全然天啓的觀念の吸收する所とならざりしは、彼れの實によりて明かなるべし。

耶蘇の死後、彼等は、殆と疑を容るゝ能はずして知るべきなり（使徒一の一五、前哥林多一の五、加拉太一の一九）。そはヨナの二子、ゼベダイの二子、アルパイの子ヤコブ、ピリポ、ナタナエル、バルトロマイ、トマス、ゼロテといへるシモン、タッダイと名くるレッパイ及びイスカリオテのユダなり（馬太一〇の二、馬可三の一六―一九、路加六の一四、使徒一の一三）。

彼れにしても此思想中に此觀念の體を形成して、若し其中に欠員ある時は、選擧を以て之を補充したるを見れば、彼等の一體を作り、其中ペテロは長兄の位を占めたり、而して耶蘇は又彼等に十二支族の觀念が、此の十二なる數の選擇に與りて力ありしといふ事業の擴張を以てしぬ（使徒一の一五、二の一四、五の七、加拉一の一八、二の九、一五、二三、二八）。されど規

誰人の許にも泊し娶せらるゝがまゝ
る可かり
き。

耶穌は
福音の使徒が、自らの例に倣
て説教を
快く感せしめんことを欲し
て(Telue)を
遣べんことを命じぬ。 閙(サラム)笑
信仰の人
に對しては敢て用ゐざりし
を用うる
は、今なほ東方にて然るが如
る者なれ
り「恐るゝ勿れ、其家もし安き
は往々悪
を蹈躙したり。 耶穌は言へ
彼等の内
ば、爾曹の願ふ安きは爾曹に
悪遇を受け、歸るべし」(馬一二、馬可六の
悪遇の都
一〇、路加一〇の五)神の國の使徒
に、巧なる
には、主の全能を信じて、此寛
之を救ふ
容に不平なる者ありき。 ゼ
爲めなり」
耶穌は
反語を以てし、之を鎮めて曰
ふ、「人の子は人の命を滅す
ことを、主義と定めたるとし
ても方して、弟子は已に等して

の文章中に見らるゝ如く、學者の教に於いて普通なりき。耶穌は其信任者に、其教誡警喩中の特別の意味を説明し、時には彼等の爲めに、説明多くして晦澁となりしを保存せられたる者の如し（馬太一三の三六、馬可四の一〇、一三、馬可七の一七、一八）。

耶穌の生時已に、使徒は彼れと遠く隔たらずして説教しぬ（路加六の一二）。彼等は好遇を受けつゝ、或は寧ろ圀習に從ひて自ら好遇をもとめつゝ、都市より都市へと移行けり。東方にては、客は多くの權利あり、客は家主の上にあり、而して家主は最大の信任を客に置くの如き旅進の説教は、新しき教の宣傳に極めて好都合なりき。隱されし寶は分たるゝかくて受けたる所の者は拂はるゝなり。懇切と好情とは其助をなし、一家は動され、而して改宗せらる。此事方の好遇を外にして、基督教播布の説明は不可能なるべし。極めてよく善良なる古俗を守りたる耶穌は、弟子を勵して、旅館の設ある大市にては、已に或は廢絶したりと覺しき此一般人の權利をば、躊躇なく利用せしめぬ。耶穌は言へり、勞者の其食物を得るは宜なり（馬一〇の一〇）。時には

からざること、及びペルゼブルによりて行動せば惡靈の侵入を疑無しと想像しぬ（馬太一二の二四）。中には又耶穌の弟子より、不可思議力をへありきんとせし者さへありき。

教會の萌芽は、この時より漸く顯れ始めぬ。集まりて團體（エクレシア Ecclesia）を結べる人々の力、てふ有益なる觀念は、源を耶穌にの條より、彼れは二三の人の彼れの名によつてなりとの、醇乎たる理想的敎彼れ其中に在るべしと言ひぬ。彼れは敎會に附するに、束縛し解放する或る事を許し、又禁ずること、罪を許し若しくは罰し、權威を以て警戒を與へ、又聽かる丶ことの疑なきを信にて祈禱を爲すの權を以てせり（馬太一八の一八、約翰二〇の二三）。

後に至りて求められたる、耶穌の權威に代るべき集合的權威の基礎を設けんが爲めに、此等の言の多くを以て耶穌の言となしたることは誠に有り得べきことたり。殊の敎會の設立せらる丶には、唯耶穌の死後の事にして、此最初の望をよせたるアリマタイのヨセフ、マグダレナのマリア、ニコデモの如きは、此等の會堂（シナゴク）を模型として作りたる者のみ。耶穌も純然單に

の三五、馬可一〇の一〇、路加一〇の四〇、約翰一三の二〇）。人は、彼れが彼等に自己の不可思議力を與へたるを信じたり。一〇の一三、二七の一八、二一、六の一〇の一三、路加一〇の一七九）。彼等は、預言を爲し、惡魔を追ひ、著名なる降魔者の一派を作りき（馬太七の二二、馬可三の一五）。而も、彼等は往々力及ばぬことはあり或は東方醫術中の主要療法の一つなる塗膏の法を用ゐ（馬可六の一三、雅各五の一四）、遂に一般に用ゐられ、且つ痛く如く蛇を操り、毒液を飲みても中てられざるに至れり（路馬加一〇の一九）。彼等は手を按き。

ることの遠きに從ひ、此妖術の害は益〻甚しかりき、されどその初期教會に於いては人々の輕信を利用して此運動に便せり。

耶穌の生前にすら、耶穌の弟子ならざる者といへども、耶穌の名を以て惡魔を逐斥せり、彼等は、地獄の主權者は其從屬の上に權威を有せざる可からず。或人は又誤れる論理を極端に及して、惡魔の王ベルゼブルが、一個の職業となりしを觀過すにより、之を防がんとしたり、耶穌は之を以て、彼れ加之我等は、超自然力の施行——若し然力の施行——若し

靈の洗禮を受けたりと信じぬ（使二の六、比較、約翰七の三九）。此精（スピリット）なる語を用うるは、希臘語（ヘブライオス）よりスリアカルデア語に借用ゐしペシタ（アドウオケート）代言者若しは助言者（カンセラー）、又は「天の眞理の通譯者」及び「未顯現の神祕啓示の任を負へる教師」の意なり。耶穌が此詞を用ゐたりや否やは、極めて疑はし。こは猶太教並びに基督教の神學が數世紀間繼承し、而してメタトロノス、シナデルフ（Synadelphe）もしくはサンデルフォン（Sandelphon）なる神の輔佐全體、及びカッバラ教中のあらゆる人格化を生ずるに至りし過程の一適用たりき。唯猶太教に於いては、此等の諸創造は、自由なる個人的思辨に止まる可かりしに、基督教に於いては、第四世紀の初以來、正統派の信仰並びに全般信條の本質を作るに至りたり。

耶穌の觀念が如何許り、典則と信仰箇條とを有せる宗教的書籍の書かざりしに止まらず、聖典を作る事は無用なり。唯に彼れ自ら、大なる最後災禍の前夜に臨めりと信じぬ。救主（ソーシャ）は律法と預言とを除くが爲めに來れり、新しき記錄を作らんが爲め

敎會に附屬せんとせず。唯耶蘇の靈さしく神々しき追想を抱いて。足れりとせしに似たり。

耶蘇の敎には此外に、實行の道德。敎典的法則の痕跡は、極めて少なし。結婚の問題については、唯一回明瞭に語り、離婚を禁せらなし。（馬太二、一八の一九、比一七、約翰一の一六、一八）。後に至りて三位一體。化身を生ずるの因をなせしも、此等は、當時にありては、單に糢糊たる想像の神的實在、即ち聖靈を認めぬ（箴言一の七、九の一七、一〇の二〇、路加一一の一三、一二の一〇）。耶蘇は道（ことば）と同一物なる一種の神的實在を置き（馬太四の一九、約翰一の一四）此點に重きを置き（馬太四の二六、一五の二二、二六、二四）、弟子に、遙に靈を與へんと宣せり（馬太八、路加三の一一、馬可一の八、路加三の一六、約翰一の三三）。耶蘇にとりては、此聖靈は常に、父なる神より發する氣息と同一なりき。かくて甚だ巧妙なる者敎の中に顯れ始めぬ。耶蘇は死後代理として萬事を彼等に敎へ、彼れが自ら傳へし眞理の證據を供すべき精靈を以てしたりと稱せらる（約翰一四の一六、一五の二六）。使徒は一日疾風火焰の舌の姿せる此精

しパンなりといひしことにつき譏(そし)きずや、即ちずや、然るに何ぞ、我は天や（約翰六の四一、四二）。されど耶蘇は一層力を彼はヨセフの子イエスにあ

祖は野にマナを食ひしかど死ねり。凡て食ふ者をし

り降れるパンを食はば窮なく生くべし。我が與ふるパ

ンは我肉なり、世の生命の爲めに我之

を與へん（約翰六の五一―五四）。今

誠に實に

なし、わが

を遣す、父

降れるパ

ンを食ふ

して、彼れ

與ふる者

人いかで其肉を我等に與へ

爾曹に告げん。　若し人の子

肉を食ひ我が血を飲む者は、

我に居り、我も亦彼に居

にによりて我生ける如く、我を

食ふ者も我に由りて生く

べし。　これ天より

れども尚死にしマナの如

者は窮なく生くべし（約翰六の五八）。弟子の數人はかゝる

奇怪説の固執に激

へて曰はく、「生命を

譲らざりき。　彼れは唯加

命なり」（約翰六の六三）。こ

にあらず。
遥時代の諸
係の全體を
を有せしの
　然れども
の傳說は皆、
上の事を以て耶蘇に歸す
食に勝さり
人類の命を維ぎし、生命の
此思想を語
るに當り彼れは時に有形
堂に於いて、
彼れは彼れにとりて弟子
誠に誠に爾
曹に告げむ、天よりパンを
は天より眞
のパンを以て爾曹に賜ふ
なり、我に就
る者は餓えず、我を信ずる
者は渴くことなし」（約翰六
あり）。

此言は非常なる物議を起しぬ。「是
に於てユダヤ人等、イエスの
我は天より降り

慣の一に して、かゝる時彼れが殊に優婉に
食卓の上 き證據な に魚ありしといふ實際の事情（此
要なる部 る）は、其事自身、已に殆と聖餐（サクラメンタル）的な
分となりたり。
此等の 經驗は、此草創の教會の最も樂し
集まり、主 き時の中に數へられ
集會を愛 り。 耶穌は此等の
一つのパ 溢るゝ談話をなすな
ンを食ふは、交際の一種、相互の結 に集へるを見て喜べ
紐と考へられぬ。 此 り（路加二二五）。同じ
に至り誤 點に關して主は、後
りて文字通りに解せられたる極 り。 耶穌は其思想
に於いて めて強き詞を用ゐた まで實質的なりき。
信ずる者 想發表に於いて極度 は唯彼れによりて生くること、彼
の生命な は體、血、魂を擧げて れは體、血、魂を
更に警喩 りとの思想を表さんとして、弟子 悉く眞に信ある者
耶穌が慣 に曰ひぬ、「我は爾の食 物なり」と。 此詞を
用せるいつも極めて主觀的なり 曹がパンなり、我が血 は爾曹が飲物なり」、
し話法は、更に其度を 進め、耶穌は卓上の

の熱くべき說教ありしにも拘はらず、十二使徒は依然として忠實なりき。殊にケパスは之によりて、己が絶對的歸依を示すの折を與へられぬ。彼はクリストなり、生ける神の子なりと。

此のカペナウン人に容れられざりし耶穌の語基となり、此時よりは再び言うてはならぬ。使徒の傳說極めて區々たり、而かも疑ふらくは、此不十分は故意に出づるが如し。其物語の眞なるを證明せられたる共觀福音書は、唯一の晩餐を以て、神祕なる儀式の起原をなしたる者と想像し、「最後の晩餐」と之を一にす。カペナウンの敎會に於ける事作を記せる約翰傳は、最後の晩餐を記載することに長しといへども、かゝる行事については何等の語る所なし。其他我等は、彼れがパンを裂きしことは、耶穌との交會を求めし人々には、恰も最も彼れの特色を表せる行動の一なるが如くに認められしを知る（路加二四の三〇、三五）。

此の敬度なる追憶に現はれし耶穌の主は、神の饗宴の首席者にして、パンを取り謝し、而して之を席に列れる者に與へぬ（路加二四の三〇、三一、約翰二一の一三）。

し互に相愛し、他の爲めに生くれば、我等は
とは一なり。かくの如くに
生を共に
りき（約翰一 一〇）。彼れの弟子も亦同樣の語調を用ゐぬ。
時の常新
「貴き手に」羅馬及び希臘敎會の聖餐の
與ふるを
り）パンと盃とを持ちて、自ら之を彼等に
したる弟子等は、彼れが其神聖なる眞の逾越となり。彼れは
繙——極めて古代の者——にあ
見たり。彼等が食ひ且つ飮みしは彼れなり。彼れは
ぬ。古き者は彼れの血もて代へられぬ。彼れは
別せざる字義通りの話と隱喩（メタフオリカル）的の語とを截然區
可からざる、本質上定限的なる我等の國語に、「隱喩（メタイフオル）」或は寧ろ隱喩の代表せ
る觀念に、全眞實を付託するをもて本質と不可能の事なり。

食物を指して曰はく、「我はここにあり」と。パンを取りて「これは我が身體なり」、而して酒を指して曰はく、「これ我が血なり」と。其語調は總て「我れは爾の食物なり」といふに等し。

此神祕なる饗宴は、耶穌の生前已に甚だ重視せられたり。其は恐らく、最後のエルサレム行を去ること遠からぬ以前に定められたり。而して其は、救主の生涯中の最も莊嚴なる時機と聯結せられぬ。

基督教會の大なる信仰箇條となり（使徒二の四二、四六）、其起因は、基督教徒はパンと酒とを崇め、以て耶穌が將に逝かんとして弟子等に遺せし訣別の追懷を呼ばんと欲したればなり（前部林多前の二〇）。彼等にて、彼をして例へ於いて耶穌其人を見出でぬ。主の常に宣ぶる思想は、若し弟子彼れの名の下に集まりし時には、自ら弟子と共にあらんと言はしめたる、此靈魂現前の純精神的なる思想は、容易に上の事を認許せしめたり。耶穌は前にも述べたる如く、個性を形成せる者について明瞭なる概念を有せざりき。昇揚其極に達して理想は諸他一切を超絶し、肉體は殆と無に等しきに至れり。我等若

二二の二五、二五の二〇、二〇の二五）。

耶蘇によりて教の裏に播かれし種子や明らけし。眞の基督教會――世界を改宗せしめたる――が、自ら「末世の宗徒」の小さなる宗旨より脱却して、能く全人類初生の教會の團體を形成せざりしや、極めて多種多樣なるに作られたる佛教にも起りたるべし、若し聖人類社會の則となるに成功したりとせば、其組織は、唯根本的に變改せられ、其誇大を抛ち、本來夢想的にして、能く全人類に止まらざりしや明らけし。眞の基督教會――世界を改宗せしめたる――が、自ら「末世の宗徒」の小さなる宗旨より脱却して、能く全人類初生の教會の團體を形成せざりしや、極めて多種多樣なるに作られたる佛教にも起りたるべし、若し聖人類社會の則となるに成功したりとせば、其組織は、唯根本的に變改せられ、其誇大を抛ち、本來夢想的にして、能く全人類に止まらざりしや明らけし。眞の基督教會――世界を改宗せしめたる――が、自ら「末世の宗徒」の小さなる宗旨より脱却して、能く全人類初生の教會の團體を形成せざりしや、極めて多種多樣なるに作られたる佛教にも起りたるべし、若し聖人類社會の則となるに成功したりとせば、其組織は、唯根本的に變改せられ、其誇大を抛ち、本來夢想的にして、能く全人類に止まらざりしや明らけし。眞の基督教會――世界を改宗せしめたる――が、自ら「末世の宗徒」の小さなる宗旨より脱却して、能く全人類初生の教會の團體を形成せざりしや、極めて多種多樣なるに作られたる佛教にも起りたるべし、若し聖人類社會の則となるに成功したりとせば、其組織は、唯根本的に變改せられ、其誇大を抛ち、本來夢想的にして、能く全人類に止まらざりしや明らけし。眞の基督教會――世界を改宗せしめたる――が、自ら「末世の宗徒」の小さなる宗旨より脱却して、能く全人類初生の教會の團體を形成せざりしや、極めて多種多樣なるに作られたる佛教にも起りたるべし、若し聖人類社會の則となるに成功したりとせば、其組織は、唯根本的に變改せられ、其誇大を抛ち、本來夢想的にして、能く全人類に止まらざりせば、此

同じ事は必ずや亦此派にも生ぜしならむ。上に擧げたる、其起原の、極めて多種多樣なるに作られたる佛教にも起りたるべし、若し聖人類社會の則となるに成功したりとせば、其組織は、唯根本的に變改せられ、其誇大を抛ち、本來夢想的にして、能く全人類に止まらざりせば、此同じ事は必ずや亦此派にも生ぜしならむ。上に擧げたる、其起原の、極めて多種多樣なるに作られたる佛教にも起りたるべし、若し聖人類社會の則となるに成功したりとせば、其組織は、唯根本的に變改せられ、其誇大を抛ち、本來夢想的にして、能く全人類に止まらざりせば、此同じ事は必ずや亦此派にも生ぜしならむ。上に擧げたる、其起原の、極めて多種多樣なるに作られたる佛教にも起りたるべし、若し聖人類社會の則となるに成功したりとせば、其組織は、唯根本的に變改せられ、其誇大を抛ち、本來夢想的にして、能く全人類に止まらざりせば、此同じ事は必ずや亦此派にも生ぜしならむ。上に擧げたる、其起原の、極めて多種多樣なるに作られたる佛教にも起りたるべし、若し聖人類社會の則となるに成功したりとせば、其組織は、唯根本的に變改せられ、其誇大を抛ち、本來夢想的にして、能く全人類に止まらざりせば、此同じ事は必ずや亦此派にも生ぜしならむ。上に擧げたる、其起原の、極めて多種多樣なるに作られたる佛教にも起りたるべし、若し聖人類社會の則となるに成功したりとせば、其組織は、唯根本的に變改せられ、其誇大を抛ち、本來夢想的にして、能く全人類に止まらざりせば、此

故に、始めて能く世に勝つを得き。耶蘇は無罰の狀態を以ては不可能に初期の純僧侶的時代の埒外に出でざりき。彼れは極めて大膽に、自然性との必要に對して。一步をも讓らざりき。彼れは極めて大膽に、自然性との幾倍を受け、來世には永生を受けざる者な

第十九章　熱心昂揚の增進

唯單に神の國の期待の上に築かれたる此種の宗教的團體が、其全ならざるを得ざるは明かなり。初期基督教時代は、殆めて不完想とに生きぬ。彼等は世界の終焉を見る前夜に於いて、單に世界者は、一切を擧げて不用と認めたり。財を好むは罪惡と目せられ、一一（路加一四の三三、使徒四の三二、五の一一）すべて人を地上に牽引する者、天上より離さんとする者は、悉く避くべき者たりき。弟子の數人は結婚したれども、已に宗旨に入りて後に婚約無きが如くをなせしことはなりし人々を賞賛したり（馬太一九の一二）。獨身は非常に尚ばれぬ。或時主は明かに、天國を望んで自ら不具とし。

若し爾の手爾の足おのれを礙さば、斷ちて之を棄てよ。兩手兩足ありて盡きざる火に入るは、跛又は殘缺にて生命に入るは善きなり。若し爾の眼おのれを礙さば、抉出して之を棄てよ。兩眼ありて地獄の火に投入れられんよりは、一眼にて生に入るは善きなり」（馬太一八の八～九）。子孫斷絶も亦、屢〻神の國の徵證、條件と見做されぬ（太馬

二六、一四の一六、一七、一三一六)。若し彼等都市より追はるれば、靴の塵を振ふべし、されど又誰れしも知らずと抗論する能はざる、神の國の近きを告ぐべきなり。彼れは加へて曰はく、『爾曹イスラエルの諸邑を廻り盡さゞる間に、人の子は來るべし』(馬太一〇の二三)。

頻稀なる一道の熱火は、此等の全句に通へり。そは一部は、弟子の熱心の造りし所なれども、此場合とても亦、間接には耶穌其人より來れり、此熱心を鼓吹せし者は彼れなればなり。彼れと欲する者には、彼れは先づ苛酷なる人類の虐待、嫌惡を語りぬ。彼れに從はんと群に遣るが如く、弟子を送りて福音を解(わた)し、父は子を解さん。一國に虐待せられ一邑に投せらるるし。兄は弟を死に、父は子を、子は師より優らず、僕は主より優らざるべし。彼れ言ひけるは、「弟子は師より優らず、僕は主より優らざるなり……身を殺して魂を殺すこと能はざる者を恐るゝ勿れ……二羽の雀は一錢にて售るにあらずや、然るに爾曹の父の許なくば、其一羽も地に隕ることなし。爾曹の頭の髮まで皆かぞへらる。故に懼るゝ勿れ、爾曹は多くの雀よりも勝れり』(馬太一〇の二四―三一、路加一二の四―七)。更に『人の前に我を識ると言はん者を、我も亦天に在す我父の前に之を識ると言はん。人の前に我を識らずと言はん者を、我も亦天に在す我

し」（二路加一八の九、三〇）。

耶穌が弟子に與へたりと傳へらるゝ教には、同じき昂揚の氣息通へり（馬太一四の〇、一二の四、二一の一七、約翰一五の一八、一九、馬可六の四〇、一三の九―一三、路加九の三、一〇の一四）。世間に對しては極めて寛容にして、時には半同意にだも滿足したる彼れは（馬可三の八九）、己が弟子等に對しては嚴酷を極めき。彼れは「大よそ」を好まず。彼れの弟子等は、最嚴肅の規則下にありたる、宗門とも言ふべかりき。生活問題は人を煩はし、人を卑くうすとの、彼れが思想を守りて、全然世事を脱却して、專ら彼れの事業に一身を捧げんとを以てしぬ。彼等は旅路に、路銀食糧は更なり、小囊も携へざりき。彼等は極度の窮乏にも堪へ、僅に布施と接待とを用意の衣服すらる可からざりしなり。彼れは常に美はしき詞をもていへらく、「爾曹價なしに受けたれば、又價なしに施すべし」（〇馬太一〇の八）。人彼等を縛して判官に解さば、何を言ふべきかと思慮ふべからず、其時言ふべきことは、天なる精靈彼等に之を賜ふべし。父は其精靈を高きよりして彼等に送るべし、而して此精靈は、凡ての彼等の行爲の原則、彼等の思考の指揮者、全世界到る處に、彼等の導者となるべきなり（馬太一〇の二〇、約翰二六、一五の

母を愛む者は我に協はざる者なり、我よりも子女を愛む者は我に協はざる者なり、「そは其生命を得んとする者は之を喪ひ、我爲に生命を喪ひ自ら亡びなば、何の益かあらんや（太一〇の三九、一六の二四、二五、路九の二三―二五）。歷史的事實とは受取るを得ざれど、誘張ながらに此特色ある姿を表さんとせし二つの逸事は、人間自然の性に對する此挑戰を說明して、誠に適切なる者あり。彼れ人に語りて曰はく、「我に從へ、彼の葬ることを我に容せ、イエス曰ひけるは、主よ、爾は、主よ、先つゆきて父を葬ることを許せ。イエス曰ひけるは、死にたる者に其死にし者を葬らせ、爾は往きて神の國を宣めよ。又あり。彼れ人に語りて曰はく、「我に從はん、先づゆきて家人に別を告ぐることを許せ。イエス曰ひけるは、手を犂に著けて後を顧る者は、神の國に當はざる者也」（太八の二一、二二、路九の五九―六二）。非常の過激を容易に受入れしむ。

彼れ叫びて曰はく、「凡て勞したる者、又重き者なれば、我に來れ、我爾曹を息ません、我は心柔和にして謙遜し、我軛を負へ、我に學べ、なんぢら心に平安を獲べし、蓋わが軛は易く、わが荷は輕ければ也

父の前にこれを讃らずと言はん」（三馬一〇の三二、三三、三馬可八、路加九の二六、一二の八、九）。

熱烈峻嚴の調もて、全然肉を否定するに至りぬ。

ははや際涯を見ざりき。人情普通の限界を蔑視して、彼れは進んで唯彼れをのみ愛するを求めぬ、凡そ我に來つて、その父母妻子兄弟姉妹また己の生命をも惡む者に非ざれば、我弟子となるを得ず」（路加一四の二六）。我等は路加の文を注目せざる可からず、「さればスの如く、爾嘗其所有を盡く捨てざる者は、となることを得ず」（路加一四の三三）。此刹那彼れの言裏には、不可思議なる人間ありて存せり。此等の語は、生命の根本を燒盡し、萬物を恐るべき荒寥に導く火の如し。完全なる基督教徒の特色をなせる、世間に對する嫌惡、極端の自己拋擲の昔烈悒鬱の感情は、往古の巧慧にして愉快なる道德者の作寶に莫強なる豫感は愈〻益〻人間の境界を離れつゝありし、沈鬱て築かれし者なりき。人情至當の要求と戰へる此等の時には、耶感ずるの感樂を忘れたりと言ひ得べし。遂に一切の制限を超脫して、彼れは言ひぬ。「君し我に從はんと思ふ者は、己を棄て、其十字架を負ひて我に從へ」、我よりも父

と説くの僧ある。を其儘に解したり。完全なる福音し。完全なる福音立せられぬ。基督教社會は二個の道常人の爲めに超凡の度に過ぎざる者他して、完人は僧侶となり、福音の理想實現萬人の法たるを得ざりしは、獨身と貧窮ク倡は或意味に於いて、唯一眞誠の基督教薄弱迷謬の標なりとの一事を立脚點と大事作の開題に上るや、常識は判者たるくを求めざる可からず、福音に負へる道に於いてか福音はストア主義の如く、而人類の神的勢力の生ける證據となり、其碑とはなりぬ。

さはれ又他方面に於いては、耶穌のき。完全圓滿は普通の社會狀態の外に存在して可能なりとて、隱遁、僧道の主義は建て至れり。一は崇高なるパラドックス逆說なり。此理想の明かなり。僧モン侶せず。人間より少きを得んとせば、多果なり。ここかも之に加ふるに偉大なる充實を以てし。てられたる紀念

（馬太一の一八―三〇）。

かく過實の言辭をもて、恐るべき力をこめて現されたる此高調なる道德の未來には、必然の勢、大なる危險迫りにき。人を地上より引離すことによりて、生命の綱は斷たれぬ。若し基督教徒の其父に抗し、其國と戰ふこと、基督の爲めならば、基督教徒は不孝の子、非愛國の徒たるの故をもて賞讃を受くべき筈なり。古き都邑、市民の國の敵とは考へられぬ。恐るべき神政の國、存續の確實なる社會には、殆と其實現について顧慮する所なき、基督教徒の夢想すべき深き忘失の郷となるべき音の人は危險物質的なる者すら、福音の面をも憚らず、之をこめの人たらんとす。茲に於いてか、人類の最も利己、驕慢、苛酷にして、生命の綱は斷たれざるを得ず。

此點より、平和の福音作られし道德の萌芽は世に植えられぬ。

かく一時の危急に應じて作られし道德の結果は認められ得べし。かく一時の危急に應じて作られし道德の萌芽は世に植えられぬ。

――例へばルイ十四世の如き――をば、平和の國、存續の確實なる社會には、殆と其實現について顧慮する所なき、基督教徒の夢想すべき深き忘失の郷となるべき音の人は危險物質的なる者すら、福音の面をも憚らず、之をこめの人たらんとす。茲に於いてか、人類の最も利己、驕慢、苛酷にして、生命の綱は斷たれざるを得ず。

乃を出さん爲に來れり……今より後一家に五人あらば、三人は二人に敵對し、二人は三人に敵對して分るべし、夫れわが來るは、人を其父に背かせ、女を其母に背かせ、媳を其姑に背かせんが爲なり、人の敵は其家の者なるべし」(馬一〇の三四―三五、路加一二の五一―五三)。「我れ火を地に投入れんが爲に來れり、我なにをか欲む、已に此火の燃えたらんことなり」(路加一二の四九)。「衆人なんぢ等を會堂より黜くべし、且すべて爾曹を惡む時は爾みづから神に事ふると思ふ時至らん」(約翰一六の二)。「世もし爾曹を惡まば、我を惡むより先きに我を惡むと知れ、僕は其主より大ならずと、我なんぢらに云ひし言を心に記せよ、人もし我を窘迫せば爾曹をも窘迫すべし」(約翰一五の一八、二〇)。

此恐るべき熱心の增加に心奪はれ、日に日に高じ來る使命の必要に迫られ、耶穌はもはや自主の人たる能はざりき。彼れは彼れの事業に、而して或意味に於いて人類に隷屬しぬ。或は往々にして、彼れの理性亂されたりと言はんとする者あり。彼れは時に彼れを狂せりと想ひ(馬可三、二一)、神の國の莊嚴なる幻覺は、常住其前に現はれて、彼れをして眼眩せしめにき(馬可三、三〇、約翰一〇の二〇、二一)。弟子は彼れの苦痛と激動とを受けぬ(約翰二、一七)、敵は彼れを憑かれたりといひしことは、注意せざる可からざるなり(馬可三、二一、約翰七の二〇、

耶穌の生涯の此時期には、耶穌にとりて、神の國の物ならざる一切が絶對的に枯凋し去りし。蓋彼れは全然人性の家族や、友情や、國土や、此等は已に、彼れにとりしことは、容易に想像せらるべし。が自己の運命に封印せしことは疑ふを要せず。或は想像して曰く、彼れは自己の死の裏に、王國建設の手段を見て、自らの毫末の意義を止めざりきことを、愼重熟慮して決心せしなりと（馬太一六の二一、一七の二二、二三）。更に又――此思想は後日に至りて、神の國の物ならざる一切が絶對的に枯凋し去りし。蓋彼れは全然人性の家族や、友情や、國土や、此等は已に、彼れにとりしことは、容易に想像せらるべし。が自己の運命に封印せしことは疑ふを要せず。或は想像して曰く、彼れは自己の死の裏に、王國建設の手段を見て、自らの毫末の意義を止めざりきことを、愼重熟慮して決心せしなりと（馬太一六の二一、一七の二二、二三）。更に又――此思想は後日に至りて、

未來に對する、彼れの觀察の莊大なるは、往々にして驚絶す可きものあり。彼

て致傚となりたれども――死は、彼れの心には父を宥め人類を救ふの還命を有せる犧牲と見えぬ（馬可四五一〇）。暴虐と苦痛とに對する一種の豫感は、彼れが心を領し（路加二六）。彼れの血は、彼れが洗はるべき第二の洗禮の水とは見えぬ。彼れは、其議なる憧憬の情、湧くが如たり（路加五〇一二）。

れは徒に恐ろしき暴風を起すべきことを隱さゞりき、彼れは誰じく言へり、地に泰平を來さん爲に我來れりと思ふなかれ、泰平を

是れ實に、彼れの德の減少したるにあらず、理想の爲めに現實と戰ふ可からざるに至りしなり。世と彼れとの接觸は、彼れを傷け、嫌避せしめ、人は終生絶へず神の子たるの觀念は、汚辱せられ張大せられぬ。彼れが神の子の能はず。人の時に倏忽として、永き闇より闇へ、他人の改宗を望むかくの如きなり。理想の出でゝ光明の一閃に觸るゝや、誠に亦洩れや、忽ち來つて理想朽落せよと宣告する恐ろしき法則には、耶穌といへども取りし調子は、今ははや二三月立脚地に觸るゝに及んで、彼れを壓迫せり。人々は彼れの已等がざりき。是れ誠に一を支持する能はざるに至りき。

第十九章　熱心昂揚の增進

てしなき道より移し、長きに過ぎる局の錯節を斷ち、彼れを行かんとも行く能はる試みの中より救ひ、以て罪なきまゝに天和に導くべきの時なりき。

八の四、一〇八の二〇）。彼れが熱烈極まれる性質は、彼れをして常に人性の埒外に逸出せしめぬ。彼れの事業は理性の事業にあらず、彼れは人智を藐視し、其最も力を注いで求めたる者は即ち「信仰」なりき（馬太九、一八の一〇、九、約翰二、二二、二八、九）。これ實に使徒等の小集に於いて、最も屢〻繰返されし所の者なり。一切民衆運動の口號（あいことば）なり、一人一人其弟子を得ざる可からずと首唱者が、論理的に演繹し來りし證明により、一人一人其弟子を得ざる可からずとせば、かゝる運動の生じ得可からぬは火を見るよりも瞭らけし。思索は唯疑惑を生むのみ。例へば佛蘭西革命の首魁にして、豫め長時の熟考を經て後に確信を得るの要ありとせば、彼等は遂に何の成すことなくして、空しく老い果てたらんのみ。耶穌も亦同じ、其熱心の昂起を重んずるや、穩當なる證明に超へたり。急迫にして命令的に、彼れは反對を許さゞりき。人々は改宗せざる可からず、此以下は彼れの望まざる所なり。其天性の優婉は彼れをして常無きことありき（馬太一七の一六、馬可三の五、九）。一八、路加八の四五、九の四一）。弟子は動もすれば彼れを解せず、彼れの面前に恐怖に似たる感ありき（馬可四の三一、一〇、五の三二）。些細なる反抗に對する不快は、彼れをして解する能はざる恰も愚蒙に似たる行爲に出でしめぬ（馬可九の一四、二〇一二）。

を得るにあり。單純なる人の爲めに、彼れは、唯此等の人にのみ適應したる手段を藏したるなり。

嘗て、耶穌はパプテスマのヨハネの遣りし者に外ならずとの、風説流布したることあり。（馬太一四、路加九の一、馬可七の一四）。アンテパスは心に不安を抱き、新たなる預言者を其領外に追はんと巧みイの人は、耶穌を尊敬すと稱し、來つて彼れに、アンテパスの彼れを索めて殺さんとせしことを語れり。（馬太一四の一三）。彼れが平和の習性と民衆の激動より遠ざかる心にも、其係蹄を觀破して去らざりき。彼れが平和の習性と民衆の激動より遠

新たなる敎は、ガリラヤの都邑の何れにも、皆等しき好意もて迎へられしとは想像す可からず。唯に無信なるナザレ人の、其光榮となるべき耶穌を斥けしに止まらず、又彼れの兄弟の、彼れを信ずるを拒みて動かざりしに止まらず（約翰七の五）、なべて其遭遇せし人々の薄信と頑陋とを歎じぬ。而してかゝる非難の際には、舉げて皆改宗せられしにはあらざりき。耶穌は往々ばかる耶穌に誇張あることを、斟酌するは當然の事にして、又耶穌がパプテスマ

第二十章　耶穌に對する反對

耶穌の生涯の初期時代には、彼れは眞面目なる反對に會せしことなかりしが如し。ガリラヤの地に享けられし非常の自由と、隨處に顯出したる教師の數多かりしことは始めて彼れの耳朶に達しぬ。彼れが身を隱したる成功とに輝ける、大道を進來るに及び、暴風の如き物さわがしきは、耶穌より時々其頭上に落ちざりき（馬一二の一四―一九、三〇六、馬一一の二九、七、九、一二の一―八、路一一の一五、可三の二二）。されどアンチパスは、耶穌に干渉することなかりしが如し。ガリラヤの地に享けられし非常の自由と、隨處に顯出したる教師の數多かりしことは始めて彼れの耳朶に達しぬ。彼れが身を隱したる成功とに輝ける、大道を進來るに及び、暴風の如き物さわがしきは、耶穌より時々其頭上に落ちざりき（馬一二の一四―一九、三〇六、馬一一の二九、七、九、一二の一―八、路一一の一五、可三の二二）。彼れの常住所たるテベリアに於いて、此封主は、耶穌が活動の中心と擇みたる區域より、僅々一二里を隔てしのみ。彼れは耶穌の奇跡をなし、之を見んことを欲したり。當時無信者の徒は常に此種の奇術を見んとする好奇心に驅られたり。一取らんとする無信の世界に混ぜんは、彼れの欲する所にあらず、彼れの望は唯人衆

なし」（馬太八の二〇）。激怒と叱咤とは、時にさへ、尚ほ彼れを疑ふ者あらんと思ひ益〻其數を加へぬ。彼れは（かかし）信者を（馬太九の五八）。

ぬ（八路加の一）。

耶蘇は實に哲學者の冷靜をもて反對を迎ふるを得ざりき。哲學者は、種々雜多の思想が世界を分ち領する理由を解して、萬人の自己に一致せざることの、全く當然なるを知れり。猶太種族の主なる欠點の一は、議論の苛烈と殆んど此感情の欠乏とを欲するの情は、人をして謙遜にして圓滑ならしむ。されば、耶蘇の如く、瓦に相爭ふこと烈しき種族の牢乎として扼く可からざる氣質なり。「プラトンの對話篇（ダイアロック）」の如き巧なる著作は、此國民には全く縁無き者なり。己が種族の殆んど一切の欠點を無限の柔情を以て、其主要なる特質とせし耶蘇も、己が傾向に逆らひて議論に（馬太一二の三四、二三の三三、一五）。バプテスマのヨハネの如く、彼れは其調を用ひ（馬太一一の一七）。淳朴の徒に對しては非常に矯激の語を用ゐたり（馬太七の三）。然し彼れは、其攻撃の態度如何にさゝやかなりとも、若し一點の不信の分子を止

のヨハネにへども、此國彼れは叫びひし異能を、めしなるべも却て易かんぢらにな

我爾曹に告げん、審めん、彼れは地の極よりソロモンの知慧を聽かんとて來れり。

なる者此にあり。ニネベの人審判の日に共に起ちて、今の世の罪を定めん。

はヨナの誨加一一、三二）。

難うなりぬ。彼は言へり、「狐は穴あり、天空の鳥は巢あり、されど人の子は枕する所

習ひて示したる「時代（コンヴイチウム セクト）の非難」（Convicium Seculi）の一種あるを知れりといに捧ぐるの城に遠かりし一事は明かなり。ンよ、暗黒なる哉ベテサイダよ。爾曹の中に行しならば、彼等は早く麻を衣、灰を蒙りて悔改判の日にはツロとシドンの刑罰は爾曹よれしかペナウンよ、又陰府に落さるべし、蓋ならば、今日までも尚保（たも）存しならむ。

（馬一一の二一―二四、路一〇の一三―一五）。

（馬太一一の二一、四、路加一二の二、四）。

宗教改革と佛蘭西革命とは、遂に何れの民の一階級に向つて發せし黙示を罪すればパリサイ人は、傷をも受けで止みたる者は弟子に語りて曰ふべし、「人の意見を尊らむ。あらゆる人生の大事は、絶對の原則と言ふの權利なきを思へ」と。さはれ重せよ、而して何人も、反對者の言全然誤れりと思へ」と。批評的なる哲學者の思辨と風馬牛なり。一瞬の間理想に觸れ、而かも熱烈なる無魂の堪ふる所にあらざるなり、新しき世界の建設者に在りて、此感果して如何ならざる可からずとなすや。

耶穌の理想に對して、抑ふ可からざる反抗は就中パリサイの人より來れり。耶穌は步一步正統と稱せられたる猶太教より遠かれり。パリサイの人は、眞誠の猶太教の神經なり、筋肉なり。此團體はエルサレムに本營を有したれど又ガリラヤに定住する者、又は屢〻彼處に赴く者あり(の爲)て、獨隘にして外見を重んじ、其信仰は高慢にして形式的に、且つ自足の

めんか、忽ちにして激せられぬ（馬一二の三〇）。茲に至りて彼と困難とに遭ひしことなき、温和なる「山上の垂訓」の説者にあらざりき。彼れの性格の奥底に横はれる情熱は、彼れをして極めて鋭利の罵詈を用ゐしめぬ。此奇異なる配合は決して怪むを須ゐず。我等の時代の人たるラマネー（Lammennais）も亦、驚くべき力こもれる、同様の對照をめざましく發揮せり。彼れの美はしき書「信者の言葉」の中には、度を失せる激怒と最も芳しき優婉の趣とが、恰も屢も唇氣樓中に於ける如く、變幻交錯せるを見る。日常の社交に於いて、非常に親切なりし此人は、自己と所思を同じうせざる人に對しては、狂激制す可からざりき。一節を已が上に引きしにはあらず。「彼れは蔓、ふことなく、喧ぶことなし、人街に於て其聲を聞くことなし、傷める蘆を折ることなく、煙れる麻を熄すことなし」（馬一二の一九、二〇）。而かもなほ彼れが弟子に與へし勸言の多くは、中世に至りて恐るべき發達を來したる、眞乎のファナチシズム（狂信）の萌芽を含みぬ。

彼れは此故を以て非難を受くべきや。革命の成るや幾分の粗厲なきを得じ。若しルーテルや、佛蘭西革命の當事者にして「禮儀を遵踏せざる可からざりしとせば

世ざる可からざるに、誠に容易きの理なり。耶蘇は唯必情のサイ人の宗教は、殆と全く儀式より成てもれたりの。耶蘇はあらゆる者を求のの而してパリサイ人は此中に、彼等が貴占の街頭に祈り衆人の前に施物をは、人々皆恐れ畏みて神の裁判を待つべきを強論せりて代表せられし宗教上サイ教にの此傾向は、些小の反對とにはあらず。耶蘇の前者しくは同如きサザレのイエスの真の先祖の一人、ガマリエル、ゾコのアンテゴヌス（二節參照）

如き厳きにルレルの如きは殆と温和にして氣高崇高の良種は遂に棄かれたり。さはれ此等を以て全く非法を繼承したる者にあらざりき。ヒルレルが公子イエスが、眞誠の聞ありとの如きは、皆原失と兇血の裏に投じて勝ちの。多數の傳說は、法を守り且つ稱

動は滑稽にして、彼等を尊敬せる者よりも、寧ろ輕蔑せる者へし譏詆（カリケナ）書の趣ある渾名は之を證せり「ニキイ」（Nikki）あり。婦女を見まじと眼を閉ぢ、壁に衝突して「血額のパリサイ」（Kizu）あり、杵の柄の如く折重なりて身を曲ぐ「杵パリサイ」（Medinkie）あり。恰も其肩に圣律法を負荷せるが如く、背を彎げて步を履行せんと絶えず腐心する「すべきこと肩パリサイ」（Sonikui）あり。敎戒するパリサイ」あり。最後に、其敬虔なる外貌は唯僞善の矯飾に過ぎざる往々にして唯皮相に止まり、裏に藏する所は極めて容易に虛僞の敬迷誤極めて甚しき時といへども、民衆の本性は由來常に正しき者なるを以て、彼等に欺かる。民衆の愛する所の者は、善にして又愛好の價あり、唯其影と實とを分別するに足る洞觀を有せざるなり。

かく興舊せる社會狀態に於いて、耶穌と此性格の人々との間に反感の必然破裂

するに當り、不變なる聖書の本文を猶太教にはカレイト(Karaite)、基督教には新教徒(プロテスタント)を生ぜり。耶穌猛烈に斧を其根幹に擬しぬ。彼れはパリサイ人の虚妄のマソラ(masola)即ち傳說に對して、本文を引來りしこと無きにあらざりしも、概して註解なかりき。彼れが訴へしは良心なり。彼れは實にパリサイの人の傳說が、痛くモーゼの教を碎せり。彼れは一擊を加へて、本宗教の創造者なりき。耶穌は朽廢の宗教の改革者には過ぎたり。彼れの目的は未來にあり、過去にあらざるなり。

爭論

爭論は特に、耶穌も弟子も共に度外視したる傳說より來れるに關して起れり、パリサイ人は此點を捕へて、烈しく彼れを難じぬ。彼れ彼等と食を共にするや、彼れが習慣の洗淨を守らざりしが爲めに、大に彼等の激怒を招きたり。「彼は曰はく、爾曹所有物を以て施せ、然らは爾曹の爲に凡ての物潔まれる也」(加路四一の一一)。彼れの細やかなる感情を傷けしは、パリサイ人が宗教上の諸事に於いて示

する を名 とし、却て之を壓迫したり（馬太一の二）。疑なく此保守的標準 於いては必要なりしと言ふを得べし。猶太の民が狂熱に陷るまで、其律法を愛し たるはよし。蓋モーゼの教を、アンチオークス。エピファネス及びヘロデの下に救 ひて、基督教の發生に欠く、可からざる階段を遺せしは、實に此狂亂の愛なりければ なり。然れども其事其物についてに止まるのみ。

此等の思想を貯へし會堂（シナゴグ）は、遂に誤謬の父母以上たるに出づる能はざりき。會堂 の支配は終れり、而かも其引退を要求することは、即ち其當時の勢力の爲さざりし所、又爲すを得ざりし所を求むる者繁縟な態——傳說的形式主義とも云ふべき——に對する改革者が慣用する如き宗教の狀「本文」を提げて傳說に反對するにあり。宗教的熱心は、其の最も保守的たらんことを欲する の韜略は、聖書の時にすら、尙且つ常に革新遠ざかる 第次第に福音と者が、常に 如く、パリサイの人も亦、歩々聖書より遠ざかりぬ。是れ根本に於いて「聖書的（バイブリカル）」にして、時代を追うて變じ來りし流布の教理を批判

感情に訴へぬ。彼れは唯パリサイの人
殆ど常に然りしが如く、彼れに強ふるに
の三―八、二、彼れの辛辣なる反語、尖鋭な
三の一六 傷所に腐爛しつゝ絶えず存留せる烙印
サイの人の裔なる猶太人が、ぼろぼろに
譯者曰く、ネツスは若膜神話中の
染みし襯衣、ネツスに殺
潮笑せらるゝ潮笑のネツスス襯衣(Nessus-shirt
なりき。
ぞ書かれたる。絶倫の其形げに神の子
人を殺すを知る。ソクラテスやモリエ
耶穌こそは熱火と激怒とを、髄の髄まで
の事なりき。パリサイの人は既にガリ
レムに於いて奏功を見たる策略もて、彼
第二十章　耶穌に對する反對

したる揚ぐ、自得の貌なり。唯徒らに自己の優越と名號とを求めじ、毫末も心情の改善と相關する所なき滑稽の禮拜なり。絕妙なる譬喩は、此思想を得もいへずせり。「二人祈らんとて殿に登りしが、其一人はパリサイの人、一人は稅吏なりき。パリサイの人自ら立ちてかく祈れり、神よ、我は他人の如く强慾、不義、姦淫せず、亦此稅吏の如くに有らざるを謝すなり。稅吏は遙に立ちて天をも仰ぎ見ず、その胸を拍で、われは七日間に二次斷食し、又得る物の十分一を獻じたり。神よ罪人なる我を憐み給へといへり。我れなんぢらに告げん、此人は彼人よりも義とせられて家に歸りたり」（路加一八の九―一四）。

此爭論の結果は即ち、死を見て始めて甘心すべき憎惡の念なりき。バプテスマのヨハネは既に此種の敵意を激起したり（馬太三の七、一二、一三）。然れども彼は、實に死生の戰なりき。バプテスマのヨハネは、根本に於いて猶太人一切を粉碎し盡して世に顯出しぬ。バプテスマのヨハネは、根本に於いて猶太人の貴族は、下層の人民の前に來りしが如く、彼れを預言者となすを許しぬ（馬太一一の一四、五、二一の二六、馬可一一の三二、路加二〇の六）。然れども此耶蘇の戰なりき。耶蘇は、實に死生の戰なりき。耶蘇は常に、人の前に來りしが如く、彼れを預言者となすを許しぬ（馬太一一の一四、五、二一の二六、馬可一一の三二、路加二〇の六）。然れども此耶蘇の戰なりき。耶蘇は、實に死生の戰なりき。耶蘇は常に、人の

第二十一章　耶穌最後のエルサレム行

耶穌夙に危険の身を圍繞せるを感知し（三〇、二一）、十八箇月の禮を避けし間エルサレム巡に於いて、常に耶惡無信仰なる彼れの近親は、彼れにエルサレム行を促せり（約翰七の一―五）。福音記者ヨハネは此招きの中に、彼れを陷るゝ詭計の伏在したることを暗示するが如し。「彼等彼に云ひけるは、爾の行ふ所を弟子等に見せんために、爾も此處を去りてユダヤに行け、蓋し顯れんとして隱に事をなすものあらず、爾これ等のことを行はゞ己を世に顯せ」と。耶穌始めは詭計のあらんことを疑ひて之を拒みしが遂に隱かに程に上れり（約翰七の一〇）。これ彼れがガリラヤに告げたる最後の離別や、其果ては死の苦なる悲哀の途を遄邁せざる可からざる耶穌は復其愛せる北地を見ることなかりき。歡喜の日女等は、ユダヤの地に再び彼れを見ぬ（馬太二一・一―

黨の黨員を彼等の爭に利用せんとしぬ（馬可六、三）。ガリラヤに於ける耶穌の逃走の容易とアンテパスの政府の薄弱とは、此企畫を失敗に歸せしめたり。今や彼れは自ら好んで其危險に投ぜり。彼れは若し徒らにガリラヤの小天地に跼蹐しなば、彼れの動の必ずや限局せらるべきを明察したり。嗚呼ユダヤは、鷹の如くに彼れを引け取てして、反逆の都府を獲んとしぬ。而して「預言者は、エルサレムの外に死なず」の諺に稱はせんと欲せしが如し（路加一三、三三）。

へり。彼れは世間を知らず、常にガリラヤの可憐なる社會にのみ慣れの口を出づる言葉は、其朴素單純なる、エルサレムにては可笑しべし。彼れが想像と天然に對する愛とは、此城廓の内に拘束を感の喧雜中より生ずるは眞宗教の運命にあらず、そは實に曠野の靜こそ出づべきなれ。

祭司等が傲慢自負は、彼れに殿堂の知せる弟子の或者、殿堂構造の美、嘆豐多に意を留むるを望みし時、耶穌彼等に曰ひけるは「爾曹總て此まことに爾曹に告げん、此處に一つの石も石の上に圮されずして可一三の一、二、一路加二一の一一の一一）と。彼れの五、六、比較、馬可一三の一、二、一路加二一の一一の一一）と。彼れの前を過ぎて、小なる貨幣を賽る、一窶婦あらざりせば、彼れは遂に一物を贊嘆することをも拒みしならむ。「彼曰ひけるは、此貧しき窶婦は多く投入れし總ての人々よりも、此貧しき窶婦はその不足所（まつしきところ）より、其總ての所有すなはち全

の五五、馬可一路加二三の四九、五の五四一一）。されど此地の萬事は、彼れにとりて如何ほど變りたりき、彼れはここに、到底エルサレムにては他鄉人なる如き無限なる信仰の能力――若々しき氣質の好天賦――あるにあらず、又ガリラヤの地に見る如き、善良溫順曾て反抗（惡しき思想と頑愚との果實なる）を藏せざる人民あるにあらず。彼れは步毎に頑迷なる不信に遭遇し、北方にて偉効を奏せる其方法も、之に對しては殆と効果なかりき。嘗つて夜陰に耶蘇を訪ひたるニコデモは、猶太（ユダヤ）敎法議會（サンヘドリム）に彼れを辯護せんとして、殆と己が身に累を招かんとしたり。

人々彼れに云つて曰はく、「爾も亦ガリラヤより出でし者なるか、考見（たづねみ）よ、預言者はガリラヤより出づることなし」（約翰七の五二）。

既に述べたる如く、耶蘇は都會を好まざりき。彼れは從來活動の地としては、大中心を避けて田舍と小都とを選みぬ。其使徒に與へたる敎訓も、多くは唯朴素の民の單純なる社會にのみ專ら適用せらるべき者なりき（馬太一〇の一―一三、馬可六の七―一一、路加一〇の五―

なる蒼翠の眺を與ふる唯一の境なり。　ここには橄欖、無花果、棕櫚、アーゲ、ゲッセマネ、ベタニアの村々、田畝、園地等は、此等の樹の名に呼ばれたり。山上二株の大杉樹あり、流離せる猶太民族の間に、此樹は永く懐しき記憶を止めたり。其樹枝は鳩の匿家にして、其樹陰には小なる肆店建てられにび弟子等が一種の住所たりき。　彼等が其家々野々を知りたりしや明かなり。

耶穌の殊更愛せしはベタニアの村なりき。　村は丘の頂に位し、エルサレムよりは一時半程の路程（約翰一一の一、一一の一八）。一家總て三人、二人は姉妹にして一人は其兄弟なりき（約翰一一の五）。　耶穌は痛く彼等を憐み、エルサレムよりは一時半程の路程（約翰一一の一、一一の一八）。一家總て三人、二人は姉妹にして一人は其兄弟なりき（約翰一一の五）。　二人の姉妹の内、一人はマルタと呼ばれ、鄭寧親切に氣配り細やかなり。　一人はマリアと呼び、姉に反して、一種遲重の氣質と極めて發達せる冥想的傾向とにより、耶穌の好む所となれり（路加一〇の三八―四二、約翰一一の二〇）。　彼女は耶穌の足下に跪き、其言に聽惚れては、其日の業務を忘るゝことさへありき。　彼れは、爲めに家事一切を負ふに至り、靜に之を耶穌

する此批評の態度、即ち少きを與へたる貧しき人を稱揚し、多く與へたる富裕の祭司を難ずる此態度が、祭司社會の憤を買ひしは自然の數なり。

殿は恰も革命の當に其最後の勝利を博すべき所なり。

殿は恰も革命の當に其最後の勝利を博すべき所なり。

殿は恰も革命の當に其最後の勝利を博すべき所

らず。されど權力ある正統教の威壓は、其信仰を表白する者を、殆ど常に會堂より逐出すに至るべし（ヨハ一六の二）。ガリラヤ派に屬すれば、勢エルサレム人の不信用を買ふの恐ありき。（使四の三、四の一七）加之破門は、全財産の沒收を來す。猶太人たるを止むるも、羅馬人と同類の田舍漢に嘆美せられて貴族階級に侮蔑せられたる、田舍漢たるを免れざるを、彼は永く、自己は永く、自己と稱ならしめたる神政の下に保護を失ふに至るなり。一日も與へず。深うせり。

此新しき社會に於いては、其信仰を表白する者を、殆ど常に會堂より逐出すに至るべし（ヨハ一六の二）。ガリラヤ派に屬すれば、勢エルサレム人の不信用を買ふの恐ありき。

に訴へぬ。

せり。然れど耶穌は答へて曰はく、「マルタよ、マルタよ、爾多端により、マリアは既に善業を選びたり、此は彼より奪ふ可からざるなり」(路加一〇の四一―四二)と。此無くて叶ふまじきものは一なり、マルタの兄弟たり、或は少くとも、その家族の一員たりき(馬太二七の六、馬可一四の三、路加一〇の三八)。耶穌はここに、此敬度なる友情の裏に、其公生涯に於ける最慘憺を忘れぬ。此家の中に、彼れは學者とパリサイの人が絶へず彼れの身邊に揚ぐる爭論の苦を慰めぬ。彼れは屢〻橄欖山上モリヤ山に對坐し(馬一三の三)、低く殿堂臺榭の壯觀と、燦爛たる金板の屋とを瞰下せり。此眺望は、實に旅人の感嘆措く能はざる所にして、殊に旭日の昇る時は、聖山曈に眩ゆく、宛として白雲と黄金との大塊を見る。他のイスラエル人を歡喜自尊の念に溢れしむる此光景も、耶穌には汚れなり。「噫エルサレムよ、エルサレムよ、預言者を殺し、爾に遣はさるる者を石にて擊つ者よ、母鷄の雛を翼の下に集むる如く、我がなむぢの赤子を集めんとせしこと幾次ぞや、されど爾は好まざりき」(路加一三の三四)。

ガリラヤに於けるが如く此處にも亦、誠實なる魂多く、動かされざりしとにはあ

之を如何に處分すべきかと問ひぬ。

（約三節八）。神の仁慈に和げられたる世の中罪なきものまづ彼女を正しく淨き語をもて僞善者の惡心を貫きぬ而かも亦宣告に捺印したりしなり。彼は、兩曾て裏はすを得ざるなり。

かゝる辛辣なる攻撃によりて、彼等の注意を引くことなく、やがて全猶太國民を激昂せしむることなかりき。

彼等の注意を引くことなく、やがて全猶太國民を激昂せしむることなかりき。

裏に隱るゝを得たりしならむ。祭司の長とサドカイの徒とは、彼れを嫉みたりとはいふよりは、寧ろ侮りしなり。アンナスの族なる大僧族ボエトッシの危急に際して狂熱的たりしのみ。

る此等の不信者の、純粹なる猶太人たりしこととなり。換言すればサドカイの徒は、耶蘇と同じく、パリサイの徒は、耶蘇は長く恐るべき大嵐の前兆たりしのみ。

がもはや其の傳說を排する者は、卽て信仰の能はざるに至りては、偏に僞善を黒守して、後に生ぜる新時代の宗教的要求を滿すことなり。

潮の想像純潔の道念を有てる聽衆の上には、常に其効果を奏せしも、ここには石の上にぞ落ちける。（馬太十三ノ五）彼れが自己に就いて語るべき安かりし彼れは、調を變すべき小湖の邊りに心を留めざりき。かつては必ずなる能はざりき。（約翰八ノ二）彼れは論峯、法律家、聖書註釋家、神學者と趣致優れたりし彼れの談話も、今は猥雜なる論戰と姿變りせる無益の論爭（馬太二一ノ二三―七）の、及び預言に關する無益の議論に浪費せらるゝを見るを好まざる、稚法はては、時に、吾人が彼れの攻撃者たるを見るを好まざる、稚法ぬ。彼れが渾然たる天才は、時に、吾人が彼れの攻撃者たるを見るを好まざる、稚法ぬ。（約翰八ノ二）彼れは論峯、法律家、聖書註釋家、神學者と趣致優れたりし彼れの談話も、今は猥雜なる論戰と姿變りせる無益の論爭（馬太二一ノ二三―七）の、及び預言に關する無益の議論に浪費せらるゝを見るを好まざる、稚法ぬ。彼れが渾然たる天才は、時に、吾人が彼れの攻撃者たるを見るを好まざる、稚法ぬ。彼れの推論は、實に屢〻奇警なり（罪ふる、批評に身を委せり（馬太二三ノ三―六）。彼れは常に極めて巧妙に、多くして、彼れは不熟の爭論者痛ましき許り自ら卑下ぬ。彼れの推論は、實に屢〻奇警なり（罪ふる、批評に身を委せり（馬太二三ノ三―六）。彼れは常に極めて巧妙に、多くして、彼れは不熟の爭論者痛ましき許り自ら卑下り、而して單純なる頭腦の推論は、當に少しく詭辯的なり）。彼れは單純の頭腦と犀利の思考とし、故らに長く之を說明せざることもありき。アリストテレスの論理法に從へば、彼れの論據は極めて薄弱なる者なり、されど彼れが心の比類なき魔力顯はるゝ時は、彼れは勝利を得るなり。一日彼等耶蘇を苦めんと謀りて、一人の姦婦を曳來り、

必ずや彼れをピラトに付すべきを預期せり。耶穌の答は實に驚嘆に堪へたり。

ザルに歸せり。彼れは彼等をして、貨幣の鑄像を示さしめて曰はく、「カイザルの物はカイザルに、また神のものは神に歸すべし」（馬太二二の一五、馬可一二の一三、路加二〇の二五）。かくの如き督教の將來を定めたる深奥の言なり。實に靈界と俗界とを分離し、眞誠文明とに根據を與へたるの言なり。

の自由と温藉にして透徹なる天才は、唯彼れが弟子と偕なし時にのみ、彼れを動して優婉ゆる者は、竊賊なり、强盜なり。門より入る者は其羊の牧者なり……

て他より踰に告げん、羊牢に入るに、門よりせずし

羊は其聲を聽く、かれ己の羊の名を呼びて之を引き出す、己は

に從ふなり……竊賊の來るは、盜まんとし、殺さんとするの他なし……牧者に非ず、己が羊を有たず、唯やとはれて羊を守るもの

る、又已の大機迫れり、蓋し羊は彼の聲を知ればにぐ……我は善牧者にて己の羊を識は、狼の來るを見れば羊を棄てゝ

りとの思は、屢〻彼れに起りぬ。彼れ曰ひけるは、夫れ羊の爲に命を捐てんは、なむぢら無花果樹（約翰一〇の一六）の人道の

現代の福音的新教徒が、舊教國に於いて、一角から〳〵る不信者と目せらる〳〵と同じく、強なる反動は起る能はず。

せるは、唯、專門の祭司等を政權に集中し、這種の熱心なる運動を了解すること能はざりき。

即ち學者は、利益となりて脅されたる者は、實に彼等が偏見と知識によつて衣食せる、多數のソフィリム中流パリサイの人、即ち「傳說」の

パリサイの人の絶間なき苦心は、耶蘇を政治舞臺に引入れて、ガウロニテ人ユダの黨派に屬するとなし、之に連累せしめんとするにあり。彼等の策略は巧みなりき。

知慧を傾盡さゞる可からざりき。彼等は耶蘇を明瞭に宣說するに當り、羅馬主權との抵觸を避くる爲めには、耶蘇は非深遠なるの者ならんことを望み、其態度を明瞭にするを強ひたり。一日パリサイの徒と「ヘロデの黨」(恐らくボエトゥシム中に來り、敬虔熱心の裝をなして曰はく、「師よ。

爾は眞なる者なり、眞をもて神の道を敎ふ、また誰にも偏らざるを我儕は知る……

然らば貢をカイザルに納るは善きや惡しきや」と。

彼等は、耶蘇が與ふる所の答は、

善なる學者とパリサイの人よ、蓋は爾曹偏く水陸を歷巡り、一人も己が宗旨に引入れむとす。既に引入るれば、これを爾曹よりも倍したる地獄の子となせり」（三馬太二三の一五）。

「禍なるかな、盲ける導師、それ爾曹は隱沒れたる墓の如し、其上を行く人々之を知らざるなり」（加路一一の四四）。

「噫なむぢら禍なる哉、僞善なる學者とパリサイの人よ、蓋はなむぢら薄荷、茴香、馬芹の十分の一を取納めて、律法の最も重き仁と信とを爾曹は廢つ。これ行ふべきなり。盲者なる相者よ、爾曹は噎を漉出して者なり、かゝる哉、なむぢら僞善なる學者とパリサイの人よ、爾曹は食欲と淫欲とを充せり。駱駝を呑駄駝を呑むぢら禍なる哉、僞善なる學者とパリサイの人よ、爾曹拯して、内にくせよ、然らば其外も亦きよまるべし」

「噫なんぢら禍なる哉、僞善なる學者とパリサイの人よ、爾曹は内の汚穢にて充ちて外に美はしく見ゆれども、内は骸骨と諸の汚穢にて充

に山りて學べ、其枝すでに柔にして葉萌めば、夏の近きを知る」「目を擧げて觀よ。はや田は熟きて(いろづ)獲時になれり」(馬太一二の三―八、馬可一三の二八、約翰四の三五)。

彼れが偽善者と爭論せざるに當りてや、其力强き雄辯は迸れり。「學者とパリサイの人はモーゼの位に坐す。故に凡て彼等が爾曹に言ふところを守りてこれを動かすことすらなせること勿れ。然れども彼等が行ふ所は言のみにして負はせ、己は一の指をもてこれを負ひ難き荷を括りて、人の肩に負はせ、己は一の指をもてこれを動かすことすらせざるなり。また彼等は重く自ら

七等、約翰〇の三六)、律法的猶太教に對する挑戰なりき。彼れが貧者の間に與へたる大膽なる演說は、一層反逆的のものたりき。布告して曰はく、「我は見えざる者をしてみえしめ、見ゆるものを反りて瞽とならしめんが爲に世に臨めり」(約翰九の三九)。一日彼れは殿を毀ち、三日の間に手を以て作らざる別の殿を建てん」(馬可一四の五八)と言へり。この語の中に果して、彼等が捜せる如き寓意有りや、無しや、その如何なる意味ありしやは、即ち知る所にあらず。されど要められたるは唯口實なり、此語は忽ち執へられぬ。此語は實に、彼れが死刑宣告の序詞となりて顯れ、ゴルゴタの臨終の苦痛の唯中に、彼れが耳に響きぬ。此くの如き激論は、當に騒亂に終るべきもあれ、人をして古來の禮拜を棄てしめんと欲する者は、審問を須たずして、直ちにて、石にて擊殺すべしとは、律法の命ずる所なれはなり(約一〇の三一、二)。彼等は又彼れを呼びて狂となし、惡魔に憑かれたりとなし、サマリヤ人と呼び(約八の四八、七の二〇、二〇の二〇、五の一八、七の二〇、八の四八、七の四〇)。此異を容れ

も亦外に義しく人に見ゆれども、內は「噫なんぢ僞善と不法にて充つ」
人の碑を飾れり。又いふ我儕もし先祖の時にあらば、預言者の血
せざりしをと。然らば爾曹は預言者を殺しゝものゝ裔なること
ちら先祖の量を充せ」

「是故に我爾曹に預言者と智者と學者とパリサイの人よ、爾曹預言
架に釘け、或は其會堂にて之を鞭ち、或は邑より邑へ逐苦めん。そ
の血より、殿と祭の壇の間にて爾曹が殺ししバラキアの子ザカリ
で、地に流したる義人の血は、凡て爾曹に報い來らんなり。まこと
此事皆此代に報い來るべし」(馬太二三ノ三―三六)。

異教徒代の、恐るべき教義、神の國を受くべしと
れたる者が、その之を受くるを欲せぬ
すとの思想が爲めに、今や天國は將に他
の殺戮者と呼べる。生命に充てる警喩

者の墓をたて、義を流すことに與を自ら證す、なん

第二十二章　耶穌の敵の計略

耶穌は秋及び冬の一部をエルサレムに過しぬ。此地の冬はやゝ寒し。通路を屋に蔽ひ殿堂の建築の遺物にて、二列の柱と、ケデロンの谷を見下せる壁とも廊より成れり。（約一〇の二三）。此廊は古代ソロモンの廊は、彼れの常に逍遥せし所なりき（約二の一）。其入口は即ちシロアムの門にして、其門る、二つの場所の内に認め得べし。其當時已に谷のかなたの側に呼ばれぬ。今も尚ほ見得べき此等の柱は、華麗なる墳墓て飾らの紀念碑の或者は、古代の預言者を崇めし石碑なり、己が僞善と虚飾しなるべし。此等の預言者は、此廊の下に坐して耶穌がとを此等の莊大なる墳墓の背に隠さんとする祭司の徒に向つて雷したる所の者なりき（馬太二三の三九、路加一一の四七）。

十二月の末、彼れはエルサレムに祭を祝ひぬ。こはアンチオークス、エピファネスの冒瀆の後、殿の淨めの紀念に、ユダ、マッカバイの創めし祭にして（比較、約翰一〇の二二、馬可四の五二）「光の祭」と呼ばれ、八日の祭の間、家々は燈を點じぬ。其後間もなくして、耶穌は

ぬ神政の律法を、彼れの上に引來らんが爲めに、彼等は隱かに彼れの言を狙ひしなり。蓋は此律法は、羅馬主權の下にも尙ほ撤回せられざりければなり（路加一、五一―四一の）

てガリラヤになしたる多くの奇跡は、評しの聞こえを喜びせられたるが如し。當時よく見みし美にしき處の一つに數へられしなるべし。ヨセフォと同じく「神の國」とは呼ぶに躊躇もて此地を語り、ガリラヤはガリラヤと同じく「神の國」なりき。

耶穌は、已が最初の預言者的活動の舞臺において後、懐しきベタニアの姉妹の家を訪ひたる。ある特別な一生の最後を決するに與れり（一約翰の輸一一）。エルサレムに於ける惡實なるガリラヤ人を最も苦めしは、エルサレムに奇跡を行はざりしことなりき。「神の國」が首府にて受けし冷遇は、必ずや最も敏感に彼れに要むること屢々なりき。市人を蘇生せしむるの不信仰に對し力強き印象を與ふべき……

我等はマルタとマリアとが此事につきて耶穌に訴きしを想像し得るなり。名譽は已に此種の奇跡二三を以て疑もなく言ひ消し人死者より甦たる位生けるに悔いん。耶穌は答へたらざる可からず、否確へ八死より甦るとも八

ペレアに旅行を企て、ヨルダンの河邊にハネの宗派に從ひし時に來り訪ひ、自らも一〇の一〇。此旅に、彼れは殊にニリコの地に懇請を見出でたるが如し。此町は主なる税關所なりき。稅吏の長にして、町の富者たりければ、彼れは一行の通過す可かりし道を欲したり。身の丈小なれし人物の熱實に感動し、慣激を釀すの危險を賭して、此人の許に宿らんと決心したり。彼れが罪人の家をへしことは、多大の不平を惹起しぬ。別に臨みて耶穌は、此宿主にアブラハムの善良なる商たれと宣べぬ。而かもザッカイの聖徒となりし一事は、傳ふる所によれば、ザッカイは、其財の半ばを貧者に與へ、誣ひ訟へて正統派の憤懣を增大したりと云ふ。されど耶穌が入より得たる喜は、唯之にのみ止まらず。彼れ町を出で行きし時、乞者バルテマイを「ダビデの裔」と呼びて止まざりしは、痛く彼れを喜ばしめぬ。かつ

せしめしなるべし。耶穌が此不淨なる、厭はしき都府に於いて、彼れたらざりし一事も亦、記憶せざるの爲めに。彼れが心は、その昔の純淨をはや自らの主たらざりき。彼れが使命は重く身に懸りて、彼れるに任せぬ。これ誠に一死の、日ならずして彼れに神の自由を要むること多くなりまさりて、其支持愈〻困難となりたる逃るり、彼れを救出す可き時なりき。

耶穌の絶へず高じ來る熱心と、猶太人の冷淡との對立は、日に日に隔り增さりぬ。之と同時に嚴酷となり始めぬ。二月若しくは三月の初に、祭司の長等の會議開かれ、席上極めて明瞭に、「耶穌と猶太教とは兩存し得るか」との疑問を提出せられたり（約翰四一一）。此疑問を提出するは、即ち之を解決する所以なり。而して祭司の長は、福音記者の望みし如く、預言者たることなくして、遂に「民の爲めに一人死することは汝等の益なり」（約翰五〇一一）てふ殘酷なる原則を口にするに至りしは、誠に勢の自然なるべし。

なは信ずることなからん」と。かくて癩に掩はれし善心の乞食の、てアブラハムの胸に伴ひ行かれし、例の物語を思出で、耶穌は更るなるべし。ラザロは歸ることもあらん、而かも人々は信ずることなかるべし」と。後日に至り、假說は變じて事實となし、奇怪なる誤解は此點より生ザロ實に甦れりと言ひ、かゝる證據を拒みし者をば許す可からざしぬ。ラザロの癩と、癲病者シモンの癩病とは、互に混淆して、マリア耶穌によつて墳墓より呼醒まされたる頑固の徒となは、傳說の一部分となりぬ。東方の都邑の空談が、いかに不確實なれるかを知らば、此種の風說と、誇張の談とより成れるの、耶穌の在時已にエルサレムに流布し、轉じて遂に彼の死國を作りしは、必ずしも有り得べからざる事ならぬを知らむ。

ベタニヤの家族に、幾分か不謹愼の著なる證跡あり、往々人をして、ベタニヤりしことあるを想像せしむる。恐らくは、冷然として神度に過きたり死を早むる助となりしを咎めん。或は狂熱者を、默止せしめんとの熱心なる願望は、此情に烈しき婦女を驅りて、常軌の外に逸

家に止まり、義子カヤパの外に、其五子は職は一家相續なるが如く、彼れの家は、「祭司の家」と呼ばれて、殿の總て其一族の手にあり。他の族ボエトゥス族と、共く高級祭司の尊敬を受くること少かりき。かくの如くにしてアンナスは、事實上る中流社會、エトゥス族は此幸運を贏ち得たる根源に、忌はしき事あるより、敬慶な祭司の族の棟梁たりき。カヤパは彼れにによらずして、一事をも爲せしことなく、兩人の名は並び記せらるゝを習とし、而かもアンナスの名常に其首位を占めたり。方伯の變更と共に年々變更せし祭司政治の下にありて、身に傳說の祕密を藏し、己れより年少き者の、相次いで就職するを見、己れより家格低き者に、職を與ふるに足る勢力を擁したる此老祭司長が、極めて重大なる人物たりしは、容易に了解せらるべきなり。

裁判の嚴酷なる一派なりき。彼れの子等は何れも猛烈なる壓制者にして、父と同じくアンナスの名を負へる其一人は、主殿の貴族悉く然りしが、彼れも亦サドカイ、即ちヨセフォスの所謂「特に其精神は、驕傲大膽にして殘酷に、猶太の政治ある事情の下に石擊ちたり。此一家の兄弟ヤコブを、耶穌の死と似かよへる節

祭司の長等の陷りし堕落の狀を讀くこと詳かなる、第四福音書の言葉を借れば、「此年の祭司の長」は、ヨセフ、カヤパにして、ヴァレリウス、グラトゥスの任ずる所にかゝり、全然羅馬人に服従したり。エルサレムは方伯（プロクレートル）の支配下にありしが、カヤパは他者よりも職を保つべき官庭となり、其變更は殆と年毎にありしかど、カヤパの義父なるアンナス（Hanan）若しくはアンナスの如く、彼の性格に關しては、何等の知る可きものなく、多くの事情より見て、彼れの外、彼れの上、更に一人あり、我等が今就きてより、三十六年まで之を失ふことゝ久しく、二十五年に在にして、即ち是れなり。此人嘗て職務上一切の權を握りたり。紀元七年僅節クレニオより祭司の長と呼ばれ、重要なる問題起る毎に其職を失ひしも、なほ其勢威を失ふこと

なく、其職に在らざれども、依然として祭司の長と呼ばれ、重要なる問題起る毎に、其職を失ひしも、なほ其勢威を失ふことなく、彼れが住せられ、テベリオの即位せし十四年に至りて、實際此職を辭せり。

祭司の長の位は、五十年間殆と間斷なく、彼れが協議を受けぬ（約翰一八の一三、使徒四の六）。

サレムの實にエルサレム其者より起れり。ガリラヤにはあざるなり。事件に於いて、耶穌若し成功を得ざる、根據なき者なりとは言ふ能はず。普通の意味に於いて、直ちに惡意とより外に見るを國民の滅亡を招きしならむ。廣く凡ての古代の政が認容したる主義に從へば、アカヤパとが、人民の滅亡より一人の死勝れりと言ひしは正當なりしなり。かくの如きは、我等の見地よりは排斥す可き者なれど、而も人間社會始まりてより以來、保守黨の意見とする所なり。「秩序の黨派」(余は狹き意味に此語を用う)は、常に最高の義務は、國民の動亂を防遏するに在りとなし、刑戮によりて、流血の騷亂を避くるを得ば、是れ即ち愛國の行動を爲したるなり。未來の念慮殆と欠くる故に、あらゆる改革運動に對して宣戰を布告するは、僅に一日の勝利を贏ち得べき運命を有せる思想者たるを夢想せざるなり。耶穌の死は、無數の此政策を、破滅の危險に陷らしむる彼れの起せし運動は、全然精神的なり、而かもなほ運動たるを失はざりき。秩序

家の特性なる、高慢にして意地あしき邪念を藏せり。かくて、後に行爲の責任は、懸りてアンナス及び其一族の上に在りざる可からず。耶蘇を死に致せしは、實にアンナス及び其代表せし黨派なりき。アンナスは、ピラトよりも、更に遙に人類が呪詛の重荷を負ふべき者なり。

第四福音書の記者が、耶蘇の死刑の宣告を決せし語を置きしは、實に(約翰一一、五〇)。祭司の長は、或る種の豫言の天與を有すと想はれぬ。かくて彼れの言は、基督敎社會にとりて、意味深重なる託宣とはなりぬ。さりながら、之を口にせし人の誰なるを問はず、此宣告は畢竟、全祭司社會の感情を發明したるのみ。

祭司の徒は、極力民衆の騷亂に反對したり。彼等は此激昂せる說敎により、全國民の滅亡を來さんことを預見して、宗敎的熱心者を壓伏せんとしたり、而して彼等かく思ひしは正當なり。耶蘇の起したる激動は、決して世間的性質を含まざりしも、祭司等は此運動の最後の結果として、羅馬の束縛の更に重きを加へ、彼等の富と名譽との源泉たる、殿の破壞に終らんことを恐れぬ(約一一、四八)。三一四

耶穌は最後に今一度、此不信の都を訪はんとて、弟子と共に出立てり。彼れの從者の希望は、益々嵩まりぬ。彼等エルサレムに到らば、天國はかしこに實現せらるべしと思へり。彼等は人々の不信の極に達せし事と、其終の近きにある大なる徴證なりと確信し、此神國の論するに至れり（路加一一ノ一一―九）。彼等は之をサロメが其二人の子の爲めに、「人の子」の左右の座を請ひしは、此時なるべし（馬太二〇ノ二一、馬可一〇ノ三七）。然つゝ其敵に對する鬱々たる憤恚の念を洩しぬ。行きけるに、彼れ其領地を得んが爲め、遠國に支配を欲せぬ人とを遣へり。王歸り、彼れの支配を脫せんことを（路加一九ノ一二―二七）。又或時には、耶穌は弟子等の謬想を凝視し、心に恐怖を懷いて、敢て彼れに問

を重ずる人々は、人類の最も肝要なることは、靜穩を維持するに在るを信じ、新精神の汎布を妨ぐるの義務あるを感ぜり。かゝる處置が、如何に其目的に副はざるかを示すことゞ。此例の著しきに如くはなしならん。愚かなる敵の憎惡能と必死の苦鬪をなして、疲れ果てしなば、耶蘇は不可成功を定めぬ、而して彼れが神性に封印をなしぬ。

耶蘇の死は、彼れが事業の上の如く、二月中若しくは三月の初に定められたれども(約翰五ノ一)、耶蘇はなほ暫くは逃れぬ。エルサレムより一日程に足らぬ、ベテルの町に退き、ここに弟子との過行くを待ちたり。されど耶蘇のエルサレムに入るや、捕縛の數週を費して、嵐の都に、節筵を祝はんが爲めに來るべしとぞ期せられける。

頃數日の間噂高かりしラザロをば見んとて集まれり（三、馬太二六の一四、比較、路加七の三七、馬可一四の三、四）。マルタは例の如く奉仕し、痛く尊敬の狀を表して、八々の冷淡にさんことを欲しぬ。マリアは此饗宴の莊嚴を加へんが爲め、會食中香油を濺ぎぬ、彼女は貴賓を遇する古習に從ひ、其瓶ちて入來り、之を耶穌の足にる極度まで、其崇仰の情を表して、主の足下に屋内到る處芳香に滿ち、貪欲なり。此當時のかゝる社會の儉素なる習俗を除きては、衆皆痛く之を喜びぬ。イスカリオテのユダは、これ確に贅澤なりき。此貪慾なる出納役は、直ちに此香油の賣價を算し、此價を以て、何程を貧人に施し得べきかを考量したり。耶穌以上の考は、耶穌の不興を招きぬ。耶穌は崇められるゝを喜べり、何となれば、讃嘆の目的に益し、彼れが「ダヰデの裔」の稱號を固うすればなり。而して彼れに語りし時、彼れは寧ろ語を鋭うして答ふ樣、「爾曹は常に貧者と偕にあれども、我は常に爾曹と偕にあらず」（馬太二六の一一）と。而して彼れは此危急の時に、喜びて永生を約しぬ（馬太二六の六、馬可一四の三、約翰一二の一六）。

はざりき。彼れは既に色々の折に觸れて彼之を聽いて喜ばざりき（馬太一六の二一、馬可八の三一）。むことなく、其終末の近きにあることを語りしに、衆之を聽いて大等は、休徴の雲間に顯はるべきを預期し居たるなり（路加三の一五、一三）てふ神の國の第一聲は、已に喜ばしき調べもて、彼等の耳に響き渡りたるなり。「主の名に託りて來る者は福なり」（路加一三の三五）てふ神の國の第一聲は、已に今や彼等を恐怖せしめぬ。危き道の一歩一歩、彼等が夢まぼろしの中に、神の國は或は近より、或は遠ざかが死近く迫りきといへど、其死の以て世を救ふべきことを固く信至りぬ。

逾越の節筵の用意をなさんが爲め、其數日前にエルサレムに至耶穌の到着は遲かりしかば、彼れの敵は、一時は彼れを捕ふる望絶（約翰一一の五六）。節筵の前六日（土曜ニーザンの八日、即ち三月二十八日）、ニヤに達し、例によりマルタ及びマリアの家、即ち癩病者シモンの家に入れり。彼は盛なる歡迎を受けぬ。シモンの家にて多くの人は、耶穌及び近

るナザレの預言者イエスなり」となるに過ぎず、殆と名も知られぬ他郷に於ける民衆の動搖の如き些事にも、なほ普通の場合ならば、必ず忽ち喧騒を醸す雑實に其頂點に達したり。

此節筵の時の如きは、混雑の最も劇甚なるも亦、此等の人を以て充され、而かも喧しが如しと。エルサレムは、當時約五萬の人口を有すれど、此節筵に來り居し希臘語を語る改宗者（ヘレニスト）（猶太教に改宗せる者）等は、好奇心に駆られて耶穌を見んことを欲し、來りて耶穌の弟子等に挨拶したり（約翰一二の二〇―二三）。其後三日（月曜、火曜、水曜日）、會見の結果如何は、今日之を知るに由なし。耶穌は例によりて、愛するベタニヤに歸り、或は友多く住める橄欖山西の農家に赴きぬ（馬太二一の一七、路加二一の三七、三八）。

なべて（馬太二一の一―一七、馬可一一の一―一一）。

彼は日々必ずエルサレムに降り、日は快活晴朗なりし耶穌の魂も、此終の日ごろには、沈々たる哀傷の感に滿ちたりと覺し。就縛の前暫し、彼れが、一種頽廃の苦痛なる、踟躕煩悶の境を過きたりとは、「總ての記事の等しく一致する所なり。其中の一つによれば、彼れは俄然と

の鞍、路加七の三二、一二の二六比）。

翌日（日曜日）ニーザンの九日）耶蘇は、ベタニヤよりエルサレムに橄欖山頂、道の横はるを見、哭きて最後の一九の四一）。山坂の邊り郭外に近き、主として祭司の住所なる、ベトファーゲと呼べる所にては（無花果樹ありし故に、此稱ありしなるべし）、彼れは玄ばし八の報は既に擴まりぬ。節に來れるガリラヤ人は、大に之を喜び、彼れの爲めさゝやかなる歡迎の設をなしぬ。彼等は彼れの爲めに仔馬一頭を附け、いと美はしき衣を鞍に布いて馬背を蔽ひ、又衣を路上に擴げて、其もあり。彼れの前後を圍む群集は、手に手に棕櫚の枝を撒きたるに、イスラエルの王號を與持ちて、「ダビデの裔にホザナよ、主の名に託りて來る者は福なり」とぞ叫びける（路加一九の三八）。中には耶蘇の弟子等を責めよと」と。耶蘇に向うて曰はく、「師よ、此輩もし默止なば、石號呼ぶべし」と答へて、城内に入れり。エルサレム人は、殆と彼れを知らず、彼れを誰れぞと問へり。答は即ち「是は

し。恐怖と躊躇とは彼を執へて、死になる理想の爲めに、身の安泰と人生當然の報酬とを犧牲とせしめる事は容ぞと説伏せんとする時、常に急變激動の感をは、此刹那彼れにも亦臨みも往々にして鋭きと利刃、而かも強き靈魂の湛へたる、而かしなるべし。彼れは眺爽出でたりや。其樹陰に休らひけむ葡萄、無花果樹の林をもや。或は喜愛したる年少き乙女子どもか。或は又萬人に許せたる、殘酷なる運命を咒ひたりや。或は自らの天性の餘りに崇くして、犧牲となりしを悔い、眇たるナザレの一木匠に終らざりしを悲みしや。我等は知らじ。此等内面の苦悶は、悉く明かに、弟子共には封せられたる一章なればなり。彼等は露だも之を解せず、彼等は唯、主の偉大なる魂の暗き所をば、聖純なる推測によつて補へるのみ。少くとも彼れは、今も尚ほ死を遁れて其主權を得しならむ、さはて其主權を回復せしは確實なり。彼れは、今も尚ほ死を遁るゝれ彼れは願はざりき。事業の愛は彼れを支へ㊁。彼れは甘ん

して「今我心憂悴めり……」(馬一四、三四)と云ふ。或者は、此時一聲天上より聞えたりと信じ、或者は、天使來りて彼れを慰めたりと云ふ(路二二の四三、約一二の二九)。皆く擴布程に隔り、地に首をつけて祈りぬ。彼れの魂は、憂悩は彼れを壓せしかど、彼れは神の意に歸命して、自ら支持したり。恐らしき憂悩(馬一四、三六、馬可一四、三三、路二二の三九)、其觀福音書の編纂を次第して、其功なる順序に配列したる人心自然の技巧により、此事は耶穌の死の前夜、彼れが就縛の時に起りたりと記せらる。若し此傳説果して眞ならば、かくも感深き插話を一言もこの事を語りしことなく、且つ第四福音ヨハネが、其弟子に向つてなり。人性は刹那を勃起せり。彼れは己が事業に疑惑を抱き始めもしたるべき使命の重荷が、嚴しく彼れの上に掩ひかゝりしことのみは、確に斷言するを得べし。最後の數日間、耶穌の受けし莫大な

を探知せ
説明す可
可からざ
教傳説に
ユダは此
跡を行ひ、
の催あり
惡鬼を逐へり。傳説は常に
し一室を領せし者は、十一人
對的の棄別によつて、生じ來
の聖徒と一人の惡人なりと
して、ユダの貪欲を擧ぐれど
りし彼れが、主の死によりて
受くべき損失を熟知しなが
も、甚だ奇怪の事と云ふべし（約翰一二の六、ヨハ
は全然金錢の報
んか、是れ
酬を記せず。）
彼れが盜
賊にして、初より不信者なり

も飲まんとしぬ。之より後我等は、性格の上に一纖の雲翳をも見ざるなり。ここに至りて爭論者の巧妙と、妖術者、降魔者の濫に止めざりき。殘るは唯類ひなき受難の勇者、自由なる良心の慰むべき完全なる模範と、ある惱める魂の、見て自ら强うし自ら救主王の到著を說せる大膽の擧動――は、パリサイの城門にて、地方人の、彼等ファーゲの歡迎――エルサレム人と殿の貴族等との惡感を、其極に達せしめたり。

水曜日ニーザンの十二日。ヨセフ。カヤパの家に會議開かれ(馬太二六の一―五、馬可一四の一―二)直ちに耶穌を捕ふ可きを決定したり。

三、踏加一、二)唯、如何にして衆人の目を避く可きかは問題なりき。耶穌は人望あるにより、其年は金曜の夕に始まりしが、こは實に混雜喧騷の時なるをもて、其前に處置すべしと決定せられぬ。耶穌は人望あるにより(馬太二六の四―六)、彼等は人知の激動を恐れ、捕縛は翌木曜日と決せられ、加之耶穌の日々來るべき殿に於いてせずして、彼れの習慣を探知し、眼だたぬ所に彼れを捕へんとしたり(馬太二六の五―六)。祭司の部下は、耶穌の弟子を試みたり、彼等の怯弱單純の點を利して、有用なる報告

ずや。 匪
る痴愚の
道念を欠
て自殺し
此秋(とき)や
あり。 木
の恙を食
日と末日
馬可一四
二の七、約
輸の一一
三、路加二
の二九)。 耶穌はユダ
日計算上
ては、此木
此聖餐の
の特色は、

の怨は、味方を變じて敵と
欲念が、憫むべきユダの頭を
きたりしとは覺えず。 彼れ
たりと傳へらるゝなり(馬太二七)。
刹那も莊嚴ならざるはなく、
曜日ニーザンの十三日(四月二日)は來れり。 逾越の節
する饗宴に始まりて、七日間引續き、其間除酵のパンを
は特に嚴肅なりき。 弟子等はすでに節筵の準備に
の相違に基いて信ぜられたる、逾越の節筵にはあらず、
曜の晩餐は、眞の逾越、新約の決定なりき。 弟子等は皆
上に付したり。 彼等が各〻貯へ記憶したる、主の人心を動すと深き、多く
基督教敬信の首石(かしら)となりたる、此會

得可からざることなり。彼れの行爲は、寧ろ弟子間の或種の嫉妬、或は乖離の感情に基因せるものと見るべく、ユダに對するヨハネの特別なる憎惡は、此臆說を確立するの資料となりたり（約翰六の六、一二の六、一三の二、七一、七二、二七）。他の弟子よりも、比較的心情の純潔ならざるユダは、其職務の性質より、不知不識の間に心狹き者となり、其目的とせる事業以上に至りたり、財務者のユダは、遂に使徒のユダを殺戮したらざる可からず。ベタニヤにて彼れが洩せし不平は、彼れの往々にして、主が其精神的家族を見ることあるを、推察せしむるが如し。

イスカリオテのユダが、主の捕縛執行を助けしことは拒まずとするも、我等はなほ、彼れの一身上に累積せられたる呪詛の、やゝ至當を欠く者あるを信ず。彼れの所行は、恐らく悖戾といはんよりも、寧ろ迂拙なり。人間の道念は敏速にして正確なり、されど又不定にして搖著あり、刹那の衝動に抗する能はず。極めて眞摯と誠實とに富む、而してなほ甚だ多數の漏洩者あるにあら

れるは誰なるやを、確むるを努めんことを約しぬ。他に洩れぬる様、耶蘇と語ることを得しヨハネは、此謎語の意を彼れに問へり。耶蘇は唯疑を抱けるのみなれば、名を現はすを好まず、唯ヨハネに、心して汁に浸せるパンの片を誰れに與ふるかを見よと語り、同時にパンを浸して之をユダに與へたり。ペテロとヨハネとのみ、此事を知れり。耶蘇はユダに、烈しき詰責の意を含める數語を與へたりしも、席上の人は之を解せず、唯明日の饗宴に對する命令を與へたるのみと思ひぬ。かくて耶蘇は出行けり（約二翰一一三）。

此時此會食は、何人にも印象を與へざりき。主の弟子に洩らしたる掛念の外に、非常の事は毫も起らざりき、されど耶蘇の死後、奇しく嚴肅なる意義は、此晩に附加せられ、而して信者の想像は、美はしき神祕の色もて之を包みぬ。親しき友の終焉は、我等の最もよく記憶する所なり。我等は、避けんとて避け得ざる幻想により、其折なせる我等が物語に、唯「死」のみぞ與ふる意味を寄せ、多年の集中せしむるなり。弟子の多くは今玆したる會食の後は、復りき。他の時の如く此時にも亦、耶蘇はパンを割く神祕

食と共に聯想せられぬ。

此刹那、耶蘇を圍繞せる小教會に對しての強く朗かなる魂は、彼れを包める暗鬱なでしことは、疑ふ能はず（約一翰一等一三）。彼れはヨハネとペテロとは、其優さしき愛の標的たりき。ヨハネは耶蘇の側に睡床に倚り、其頭を耶蘇の胸に据きぬ。食終る頃耶蘇の胸を壓せし祕密は、大方は洩らされぬ。彼れいひけるは、「我誠に爾曹に告げむ、爾曹のうち一人我れを賣すなり」（馬太二六の二一、馬可一四の一八、路加二二の二一、約翰一三の二一―二〇）。これ實にかゝる單純なる人々にとりて、苦悶のひと時たりき。彼等は互に顏見合せ、各〻自己を省みぬ。ユダも此席に在り、恐らく耶蘇は、已に前より彼れを疑ふの理由を有し、此語によりてユダの眼色若しくは狼狽の態度より、彼れが罪の懺悔を觀取せんと欲せしなるべし。されど此反逆の弟子は、顏色をも變せず、反て敢て他の弟子と共に「ラビ、そは我なりや」とさへ問ひたりと稱せらる。

此時ペテロの善良正直なる心は、苦痛を感じぬ。彼はヨハネと瞬せして、主の語

によりて、傳説を代表せらるゝ一派にては、此聖餐式の制度は、主の形とは認められざりしとの一證なり。第四福音書記者には洗足の式最大の意義ありしならむ（約一三の一―一七、比較、馬太二六、二七、一五、加四、一二）。恐らく或る原始基督教徒の家族にては、此洗足の儀式は、極めて重の訓戒を、此の一最後晩餐の周圍に集めんとの傾向より、此事は彼れが死の前夜と結合せられしなり。

愛と一致と仁慈と相互間の謙遜とに、更に一味靈活の氣を添へたり。基督教の傳説が、此最後の數時に肯まれし記憶の崇高なる感情は、耶穌の象徴と談論との精神は、常にりといへる象徴と談論との精神は、常に基督即ち基督の靈によれの教會の一致なり。「基督曰ひける愛すべしとの是なり、我がなんぢらを愛せば、之は、われ新しき誡を爾曹に予ふ。即ち爾曹相愛する如く、爾曹も相愛すべし。爾曹もし相愛せによりて人々爾曹の我が弟子なることを知るべし。我は以後爾曹は僕よず、蓋は僕は彼れの主の行ふ所を知らざればなり。

的儀式を行ひぬ。此會食が逾越の日に催され、逾越の節筵なりしと、徒の信仰にして、聖餐式の制度が、此最も貴きひと時に打建てられしとの假定より發然に想像せらるゝに至りしは、必然の事なり。其上耶蘇が其死時を精細に預知せり足すれば、弟子等が、彼れの、終近き時の爲めに、重大なる行事數々貯置きたりと想像せられし所の者なり。耶蘇の死は、古律法の一切の犧牲に代はる犧牲——新約の一個無上の犧牲——なり、全人類の救濟の爲めに流せし血の標號とはなりぬ（路二二・二〇）。パンとは、初代基督教徒の基礎的思想を組成する行爲にして、死其物と聯結せられ、耶蘇が其苦痛をもて確定したる新約の像、降臨の時までの基督の犧牲の紀念とぞなりける（一前哥林一一・二六）。

此神祕は、已にはやく、互に酷似せる四種の小なる聖餐の說話に形作られぬ（馬一四・二二―二四、路二二・一九―二〇、前哥林一一・二三―二五、加五・二）。聖餐の觀念已に先入主となり（六章）、此最後の晩餐を極めて冗長に記載して、多くの自餘の事件、談論を之に關聯せしめし第四福音書記者は（八章より十七章まで）、かゝる說話を知ることなかりき。是れ即ちヨハネ

誓ひにきこもて、彼れに對する疑を表せり。恐らくペテロより傳はりたらんと思はるゝ說によれば、耶蘇はペテロの、鷄の鳴かぬ内に礙かんことを云へりと（馬太二六、約翰一三の三八、路加二二の三四）。其他の者皆ケパスの如く、彼れを知らずといはじと

さて、爾曹は我友なりと云へり、蓋は我が父より聽きたる者は、總て爾曹に知らせたればなり」(約翰一五の一三―一五)。この最後の時にさへ、上席に關する競爭は(路加二二の二四―二七、比較、約翰一三の三―五)。耶穌は、若し主なる彼れが、僕として弟子等の中にあらざるを語れり。一說によれば、彼は酒を飲みつゝ「今より後なんぢらと偕に、新しき物を我父の國に飲まん日まで、葡萄にて造れる者を飲まじ」(馬太二六の二九、馬可一四の二五、路加二二の一八)と云へりと。

耶穌の預言が又弟子等の心をも催して、彼等を己が側なる高座に坐せしめんとは一髮の間にありしを感知したり。耶穌は曾て、重大なる危險主に迫りて、危機は遠からず天國の饗宴を領したるに、其晩の終頃なりしが如し。彼等は總て、重大なる危險主に迫りて、危機つき慮り、劍のことを語りし用意にはつゝ

抗を制し、自ら其身を兵卒の手に委せり。弟子等は、かゝる強大なる權勢に對して、能はず、概ね遁れ散せしが、唯ペテロとヨハネとは、主の影を見失ふことなかりき。

祭司等が耶穌に對して取らんと定めたる方針は、已定の律法と完全に一致するものなりき。宗教の神聖を冒したる「褻瀆者」(Mesith)に對する刑罰は、實に笑ふに堪へたり。判決に仔細に説明せられて、その粗野妄慢なる、主要の部分と定められる。人若し褻瀆者として訟へられしかくて被告は其隣室に曳きて、遮障の彼方に隠さる。

人審問の時には、二人の證人設けらるゝことなく、被告の聲を聽き得る樣に設定せらるゝなり。二本の證人は彼を公廳に曳行き、石に擊殺すなり。『タルムド』中

證人設けられて、遮障の彼方に隠さる。

被告に認めらるゝことなく、被告の聲を聽き得る樣に設定せらるゝなり。二本の蠟燭を被

褻瀆の言を反覆することを強ひ、而して

肯せずば、自ら其身を兵卒の手に委せり。弟子等は、かゝる強大なる權勢に對して、能はず、概ね遁れ散せしが、唯ペテロとヨハネとは、主の影を見失ふことなかりき。

し——耶穌に從へり。彼等之を捕へんとせしも、青年は上衣を捕吏の手に殘して

逃去りぬ。

第二十四章　耶蘇の就縛及び審判

夜に入りて、彼等は室を去れり。耶蘇は例によりて弟子等を伴ひ、ケデロンの溪を過ぎて、橄欖山下ゲッセマネの園に赴き（馬太二六の三六、馬可一四の三二、加二二の三九、約翰一八の一）、彼れは眠らで祈りぬ。彼等の厳の様に友等を瞰倒しつゝ、彼れは眠らで祈りぬ。彼等の時、俄然武装せる軍隊の一種炬火を携へて顕れぬ。こは棒を手にせる殿の番兵にして、許されて祭司の養へる一種の邏卒なりき。彼等は、剣を帯びたる一分隊の羅馬兵によりて援助せられたり。逮捕の命は、祭司の長と猶太教法議會（サンヘドリム）とより出でき（馬太二六の四七、馬可一四の四三、約翰一八の三、一二）。ユダは彼れの習慣を知り、最も容易に彼れを襲ひ得べき所として、此處を指示したり。其上諸傳説の言を揃へて傳ふる所によれば、ユダは自ら此分隊に加はりぬ。或る説によれば、彼れは接吻を以て其の内應の標章（しるし）となすに至る迄、其悪逆の行を遂しうせりと（馬太二四の四三、路加二二の四八、約翰一八の三、使徒一の一六）。ペテロは剣を抜いて、祭司の長の僕マルコスの耳を傷けたりと傳へらる（約翰一八の一〇）。耶蘇は此抵

ペテロとヨハネとは、アンナスの居たれば、難なく入るを許されしが、ペテロは門口に立てり。ヨハネは前室に止まり、内に入るを、門番に請はざることを、門番にも、ガリラヤ訛りによりて、直ぐに彼れなきしが、直ちに彼等の弟子たるを認められぬ。

僕等の間み聴き聴聞の為め、種々問詰められ、三度まで、己が罪て腰まり居し爐に近つき見たる一人をも交へしの関係なきことを答へ度まで、己が罪を認めざりしことを、彼れに耶蘇と何等彼れは耶蘇の此言を聴く能はざりしこと

を思ひ、其庭にして彼れの犯せる罪を顕したるに想到せざりき。されど

更にして彼れは心痛み、出でて烈しく泣きぬ(加馬二太二の六の五の四、約九、馬一四の六の一、路二二の六一)。

アンナスは耶蘇の許に彼れを遣れり。

アンナスは死刑の裏主唱者なりしも、自ら判決を下すの権を有せず、職名を有する婿カヤパの許に彼れを遣れり。

サンヘドリンは彼れの家に開かれ(馬太一六の三、路二二の六一)、夜間の裏目なる器械たる此人は、固より何事をも承認せざる可からず。サンヘドリムは彼れの家に開かれ(馬太一六の五七、馬可一四の五三、路二二の六六、路二三の一、五)、夜間の裏目なる器械たる此人は、固より何事をも承認せざる可からず。サンヘドリンに記されある審問の手続により、預め設けられし数

て事を輕率にして、判決者に、其爲したる許さず、誠に人命は、此當時極めて輕々に犧牲とせられたるなり。かくの如き無思慮の侮慢を以て與へられたる判決の爲め、己等の子孫が、貧ひめの人に拂はざる可からざるに至らんことは、疑もなくサンヘドリムの議員の夢想だも及ばざりし所なり。

サンヘドリムは、死刑の判決を執行せしむる權なかりき(約三一八)。されど當時エダヤを支配せる政權の不統一よりして、耶穌は此時より直ちに、宣告を受けたる者となれり。夜中彼れは、あらゆる侮辱を加へて毫も假借する所なかりし、横暴極まれる多數の奴僕の虐待に委せられぬ(馬太二六の六七、六八、馬可一四の六五、路加二二の六三)。

翌朝祭司の長及び長老復集まれり(馬太二七の一、馬可一五の一、約翰一八の二八、路加二二の六六)。サンヘドリムの布告せし刑罰を、ピラトに是認せしめん爲めなり。議羅決は、もはや完全の効力無きに至りたるなり。方伯は羅馬皇帝の使節の如く、生殺の權を有せず。されど耶穌は羅馬市民にあらずして、方伯の權限にして足れり。國法と教法とを混合せる民族を

人の證人は、法廷の前に顯はれたり。三日にして再び之を造らむ」なる運命決定の詞は、二人の證人により報告せられたり（馬太二六の六一、馬可一四の五八）。大祭司の法にては、神殿を汚すは、即ち神を汚すなり（馬太二六の六五）。耶穌は沈默を守つて罪狀の答辯を拒めり。或る說を眞なりとせば、祭司の長は其時、彼れの救主なるや否やを言はんことを願ひぬ。耶穌は其然るを自白したり（馬太二六の六四、馬可一四の六二、ヨハネは此事を知らず）と。

彼れの天國の甚だ近きにあるとをさへ、集會の前に布告せる耶穌の勇氣は、此辯明を無用となす。思ふに耶穌がここにても、アンナスの前に於ける如く、沈默を保ちたりといふは、更に一層事實に近き事なるが如し。沈默は實に彼れが末期に於ける行爲の原則たりき。判決は已に成れり、彼は之を感知せり、而して無益の防禦を試みざりき。耶穌は誠に神の褻瀆者、既成の禮拜の破壞者たり。

集議會は異口同音に、彼は、死の大罪を犯せるを宣言したり。隱かに彼れに同情を寄せ居たる議員等は、欠席若しくは投票を棄權したり（路加二三の五一）。永續したる貴族政治の常と

ンバクは希臘語のリトストロトス(Lithostrotos)にして、地を敷ける意なりと。

○(三)かくて彼れは耶蘇と共に公會堂に入りぬ。會談は始まりてより、想像せらるゝ所は、少くとも對談者相互に於ける精細は、實見はよく第四福音書の記事に符合せり。

○(二)約八箇月の外に長せり。

○の二 非常なる興奮を以て、地を敷ける石より此語を發したるものなり。

○の三 かくて彼れは耶蘇と共に公會堂に入りぬ。會談は始まりてより、想像せらるゝ所は、少くとも對談者相互に於ける精細は、實見はよく第四福音書の記事に符合せり。

○(二)約八箇月の外に長せり。

○の二 非常なる興奮を以て、地を敷ける石より此語を發したるものなり。

ンバクは希臘語のリトストロトス(Lithostrotos)にして、地を敷ける意なりと。

証拠せる式前の国民の常に然るが如く、羅馬人は、猶太律法に一種の公許を與へざるを得ざりき。羅馬法は猶太人に適用せられたるに非ず、猶太人は依然として、『タルムード』中に謂ふ所の羅馬法の下にありしこと、恰もアルビリアに於いてアラビヤ人が、回教法典によりて支配せらるゝが如し。かくて羅馬人は、猶太人に對しては、殆ど英吉利の印度諸聖市の如く、又ガマスコの狀態の如し。ヨセフォス曰はく、殿に於いて、異教徒禁制の標より以内に、羅馬人の入る時は、羅馬人自ら其人を猶太人に付して、死刑に處せしむと。されど此事は甚だ疑はし。

祭司等の代理者は、即ち耶穌を縛して公廳（プレトリウム）に曳行けり。公廳は殿にして、アントニアの塔に近し。これ實に逾越の羔の食せらるべき日の朝なり。猶太人は、法廷に入らば、其身汚れて聖筵に連るを得ずとて、外に留まりぬ（約翰一八・二八）。ピラトは彼等來ると告げられ、ガッバタ（Gabbatha）と呼べる所にて、ビ

り得來りし經驗は、彼れをして、此頑固なる人民に對し、極めて愼重の態度を執らしめぬ。人民は反て其長官をして、苛酷を爲めに、此新事件に對して、殘酷の處置を演ずるは、方伯の極めて好まざる所なり（約三輯一五八）。ピラトは此宗教的狂熱者が、暴行に對して政府の許可を得れは、後日之を以て政府の責任に歸し、此事を爲せしとて、第一に政府を攻撃することを熟知せり。嗚呼これ何等の不正事ぞ。かゝる時眞の罪人は、實に其敎唆者なるにあらずや。

ピラトは此時、耶穌を救ふを欲せしならむ。恐らく被告の沈靜莊嚴なる態度は、彼れの過に印象を止めたるなるべし。傳說によれば（太馬二七、）耶穌は、耶穌につきて悲しき夢を見得たりと言ひし方伯の妻をいふ。彼女は殿の庭を見わたせる宮殿の窓より、此優婉にして高貴なるガリラヤ人を見もしたりけむ。疑ふらくは、彼女夢に復活れを見て、此美はしき青年の血、將に流されんとするを思うて、夢寐に悲はれしならむ。少くともピラトが、當初より耶穌を有せしことは確實なり。方伯は鄭重に彼れを審問し、百方彼れを放免

なりき。

者となし、熱信の徒は、新州長を以て猶太律法を破壊する周到なる懐抱したる、切の所行の如きは、彼等の偏狭なる狂熱と、深刻なる憎悪とは、多數普通の人民をして、彼れ就職の始めには、其に様々の困難ありて、殘忍なる手段を用ゐたりき。正義、民政の宏大なる感情を以て、之を解決せり。されど其主眼に於いより見れば、彼れは良行政官なり。

太人は、彼れの眼には、時代後れの人民と見えしなるべく、猶太人を裁判するは、恐らく宜つて寛大なる長官が、新道又は學校を以て反亂したる下プレタニアの計圖も、律法の障礙に遭うては、如何ともの事業に關する彼れが最上人を裁判せるが如からむ。國家しならず。律法は人生を局限して、甚しきに至つ切の變化改良を妨げぬ有益なる羅馬流の建築すら、妄信深き猶太人が反感となりぬ。ピ

記ある發願の札は、更に一層劇烈なる騒に近き住舘に掛けたる二枚の銘にして反抗鎮壓を殆と意に介せず、忽ち多くの衝突よ

熱心に擾を惹起せり。ピラト初は、此等の神經質累せられ、後日遂に己が免黜を以て、其局を結ぶに至れり

されど又同時に、我國は此世の國にあらずして更に、その王國の性質を說明し、その全然眞理の享受と宣傳とに在するを宣言せり。ピラトはかゝる高尙の理想主義を、つゆだも解するを能はず(約翰一八ノ三六一八)てふ深奧の語を發しにき。かを以て、罪なき夢想者流と視しこと疑なし。當時の羅馬人の間には、宗教上及び哲學上の轉進(コンバーション)全く無かりし故、眞理を求むる者を以て、全然幻想者と見做し、かゝる議論を以て、單に煩瑣無意義となしたり。此等の新たなる思辯の裏に、帝國を危うするの動機を有せざるを認めざれば、彼等は、此徒に對して暴力を用ゐるの不當なるを詮鑿と思はるゝ事に對し、刑罰を加ふるを取れり(使徒一四ノ一五ノ一八の)〃エルサレムの沒落に至るまで、羅馬人が其統治上に取れる方針は、全く宗派の爭を眼中に置かざりきと。

方伯は自己の感情と、彼れが其壓迫を感せしと、已に屢〻なる、狂熱なる人民の要求とを、調和すべき方便を思付けり。逾越の節には、人民に一人の罪人を與ふることゝ習慣なり。ピラトは、耶穌の唯祭司等の嫉惡の爲に繫がれたるを知り(馬可一〇ノ一五)、

するの手段を發見せんと欲しぬ。

「猶太人の王」なる稱號は、耶穌の自ら居りて發表したる者なるは之を以て、政府に對する一揆反逆の方向の全和たり、本體たりとしも、耶穌は常に、羅馬司の疑を招くの力ありき。彼者あらんや、何となれば、耶穌は常に、羅馬罪に誘へられぬ、天下嘗此訟より不正なるされど宗教的保守黨は、譎誣を行うて畏存の權力と認めたればなり。耶穌自らの說明を顧みず、彼等は耶穌のされば、耶穌は常に、羅馬慣れたり。ダの弟子と變形し、カイザルに貢を納むる勿れと教より、あらゆる種類の結論を誘導し、耶穌をガウロニテ人ユるを禁ずと主張せり（路加二三の二、五）。ピラトは彼れに問ふに、猶太人の王なるやを以てせり（馬太二七の一一、馬可一五の二、路加二三の三、約翰一八の三三）。耶穌は毫も所思を隱さゞりき、されば彼れが力の本源にして、又彼れの死後彼れの王位を確立するに至りたる此偉大なる兩意の言も、此時には即ち彼れの破滅を招けり。物心の別を插まざる理想主義者、兩刃の劍（默示錄の語を借用ねれば）を以て、其口を武裝せる耶穌は、十分に地上の權者の意を滿す能はざりき。約翰傳を信ずれば、彼れは己が王たるを言明せり。

號を譏笑する樣見せんとて、彼れは耶穌を答たしめぬ（馬太二七の二六、馬可一五、約翰一九の一）。答撃は常に磔刑の準備なりき。恐らくピラトは之によりて、人々に判決の宣告せられたるを信せしめんことを願ひ、豫備の刑のみにて事足らんことを望みしならむ。ここに至りてか（總ての記事によれば）忌はしき雜墓は開かれぬ。兵卒等は耶穌の背に絳色の袍を著せ、頭に荊棘の冠を載せ、手に葦を執らしめぬ。此裝にて彼れは、人民の面前を、公廳に曳行かれぬ。其前に跪きて「猶太人の王萬歲」と云ひぬ（馬太二七の二九、馬可一五の一八、路加二三の三七、約翰一九の三）。他の兵卒は又、誰もて彼れの頭を打ち、彼れに唾せりと云ふ。されど維馬人の非重を以てしてしてか、る恥づべき行爲に陷りたりとは、我等の了解に苦む所なり。ピラトが方伯たる地位上、其指揮下には、維馬の補助軍以外、殆と兵卒を有せざりしは事實なれど、維馬人はたとへ陰卒たりとも、かゝる下劣の所行には墮せざりしならむ。

ピラトは此狂言を以て、己が責任を覆ひたりと信じたりしや。多少讓歩をなして、耶穌に迫りし打擊を避け、又此悲劇的の結果に易ふるに奇怪な

此習慣を彼れの上に利用せんと努めたり。彼れは再び出でゝ、ビ
人の「王」を釋すべきことを、群衆に提議せり。此提議は、一種寛大の
非に又一種讒詔の性質を有せり。祭司等は其危きを見ぬ。彼等
時エルサレムに名高き一人の罪人の名を呼ばしめぬ、不思議の暗
亦イエスと呼ばれ、又の名をバラッバ或はバラッバンと云ひぬ（馬太
名なる人物にして、殺戮を行ひし一揆に加はりしかどを以て、獄が
而してピラトは止むを得ず、イエス、バラッバンを釋しぬ。
（馬可一五の七、路二三の一八）。叫聲は一齊に起れり、「この人にあらず、イエス、バ

ピラトの狼狽は猶太人の「王」なる稱號を受けし因人に對し、餘り
に姑息の態度を示す時は、即ち危害の身に及ばんことを恐れぬ。
の力を强ひて、己が味方となしぬ。ピラトは、幾分の讓歩を爲さゞ
思ひぬ。されど尙、嫌惡せる人民の滿足を買ふが爲め血を流すと
れは此事件を、一個の狂言に終らしめんと試みたり。耶穌に與へ

し、凡て自己を王となす者は、カイザルに逆く者なり、若し之を釋さこそ叫びたれ（比較、路加一九の一二、一三の二）。心弱きピラトは降服しぬ。め羅馬に訟へられて、テベリオに抗するなり。猶太人は、嘗て禮願札の問題につき、書を皇帝に送りて、滿足を得しことあり。彼れは其職を失はんことを恐れたり。ピラトは、後世己が名を歷しめし所以なる讓歩を爲し、傳ふるが如くば、續いて生せし一切の事件の責任をば、擧げて猶太人は負はしめたりと。基督教徒に從へば、猶太人は喜んで之を諾し「其血は我儕と我儕の子孫の上に係るべし」と叫びたりと云ふ（馬太四、二五七の）。

此語は果して遠なる史的事實を示す。羅馬人が猶太に於いて採れる態度を考へば、此以外を爲さんは、ピラトに取りて殆ど不可能のことなりき。宗教的狹量の指嗾を受け、國法を焚刑に處せる西班牙王は、ピラト以上更に更に多大の非難を受けん。王は實に、紀元三十三年頃、羅馬人がエルサレムに有せし權力より、凡て自己を王となす者は、カイザルに逆く者なり、若し之を釋さこそ叫びたれ（比較、路加一九の一二、一三の二五）。心弱きピラトは降服しぬ。め羅馬に訟へられて、テベリオに抗するなり。猶太人は、嘗て禮願札の問題につき、書を皇帝に送りて、滿足を得しことあり。彼れは其職を失はんことを恐れたり。ピラトは、後世己が名を歷しめし所以なる讓歩を爲し、傳ふるが如くば、續いて生せし一切の事件の責任をば、擧げて猶太人は負はしめたりと。基督教徒に從へば、猶太人は喜んで之を諾し「其血は我儕と我儕の子孫の上に係るべし」と叫びたりと云ふ（馬太四、二五七の）。

此語は果して遠なる史的事實を示す。羅馬人が猶太に於いて採れる態度を考へば、此以外を爲さんは、ピラトに取りて殆ど不可能のことなりき。宗教的狹量の指嗾を受け、國法を焚刑に處せる西班牙王は、ピラト以上更に更に多大の非難を受けん。王は實に、紀元三十三年頃、羅馬人がエルサレムに有せし權力より

る結果を以てし、此事件の此結局外に出づる價値なかりしを示さや（加一路二三の六、二）。彼れの企畫此處にありしとするも、そは遂に功をは益〻劇甚となり、遂に眞の暴動となれり。「彼を十字架に釘よ、彼せられずば、律法は危きにあらんと宣告方より打響けり。祭司等は愈〻聲を擡り、此褻瀆のせり（九約翰七一）。ピラトは耶ば、勢ひ此熱狂の暴動を鎭壓せざる可からを執へんと試みたり。彼れは公廳に歸ざるを明知せり。されど彼れの裁判權外の者なりと決定する口實を得むことを望めり（較約翰一九の九、比路加二三の六）。ピラトは耶一傳說によれば、彼れは當時エルサレムにありしと稱せらるゝアンテパスに、耶蘇を送りたりとさへ傳へらる。耶蘇は此好意ある盡力に少しも頓着せず、カヤパの前に於けるとを續けて、ピラトを怪ましめぬ、外よりの叫聲は愈〻聲高く呼び、羅馬法律の最大の敵は、此大逆に對不忠を聲高く呼とて、俄にテベリオ帝の忠臣とは豹變したり。彼等は「カイザルよ

て罰すべきことを定めたり。今耶蘇が此禮拜を攻擊し、而して之を破毀せんと渴望せるとは疑を容る可からず。猶太人がピラトに、我儕に律法あり、其律法に從へば彼れは死すべきなり、蓋彼は自らを神の子なりと爲せばなれども、眞は眞なる言なり。（約翰の一九の七）と言ひたるは、愚は愚なれるの進んで之を撤廢せんとするの勇者は、萬人に先んじて、先つ其罰を受けざる可からざるなり。

嗚呼、彼れの流せし血、其實を結ぶまでには、實に一千八百年の歲月を費して足らず。彼其人の如く、崇高なる數多くの思想家の上には、苦艱と死とは、いつも耶蘇の名を以て課せらるゝを定となしぬ。自ら基督教國と稱する國にして、今に至るも尙刑罰は、其宗教上の冒犯に加へらるるなり。耶蘇は此誤謬に對して責任あることなし。後世人々が妄想の餘りに、耶蘇をもて、炙れる肉を貪る恐ろしきモロク（Moloch は猶太王國の末期に共の子を供へて此神の怒解けんことを願へり）と考ふるは、基督教の神の名にして、基督教は寬大ならざりしと、さはあれ、寬宥なきは決して基督教の本質にあらず。絕對主義の理想を、初めて宗教上に確定した

なる權力を代表すればなり。國家の力や、即ち其微弱を證す。されば此點に罪しめよ。其背に僧侶的殘酷が潜める「俗流さしめながら、自ら流血の凄慘に堪へるは、テベリオにあらず、又ピラトにもあらず。そはモーゼの律法なりき。黨派なりき。

孫に遷住するこ耶蘇を殺したる爲め今ばなし。されば、其猶太人は、之を訟ふるの權利あり。何となれば、其猶太人は、クレネのシモンたりしやも知れず、或は兎も角も「彼を十字架に釘けよ」と叫びし人々の數に入らざりしやも知れざればなり。さはあれ、國民も亦個人の如く、其責任を有す。若し世に曾て國民的罪惡なる者ありしとせば、そは即ち耶蘇の死なり。彼れの死は正さしく「適法」なり。の、主として國民の眞精神たるを見れば、其モーゼの律法は、後世のものなれど實際に採用せられし形式の中に、既定の禮拜を變更せんとしたる一切の企畫をば、死を以

第二十五章　耶穌の死

事柄の單なる前の者ならしも、彼れの敵
無信者なるもて、單に冤罪と
び、人民に宣告を
利が、眞のモーゼの律法ならば、耶穌は
にして、故意及び死刑に加へて更に侮
等今之を實
も、殺しき小
て、眞最の主
られこ、當
は羅馬官憲
る處刑の最

成功したるに
ピラトより、死刑の宣告を
得る能はざりしならむ。
元來磔刑は羅馬の刑
石にて擊殺さるゝ可きなりき。
辱を與へんとする場合に
或は羅馬人が劍により死
即ち罪せられしは、實に自
上と同じ者に從ひ、死刑執
は死刑執行の務を掌りし
なり。　此故に耶穌
より鹽入せられた
と正午、先きに法廷

る者は猶太敎なり。人々を異信仰より改革者は、假令奇跡を
すること能ふ者同を須たず、有にて實效すに
此意味にて、實は猶太敎の特色なるは猶太敎の諸國民
力有りしは確實なりと雖も、宗敎的暴
敎徒となりたらんには、彼等若し
法典なり。猶太敎は、眞を以て武裝せる
百日なる延期の例を供したり。若
猶もて、猶太人を迫跡す
ることをなさず、己が敎祖
には、それは更に如何ばかり
り合理にして、更に如何ばかり

二人より劣りて、之を負ふに堪へざりき」（馬一五の二一）。彼れは恐らく、其後屢〻自ら目撃せし所を傳へしなるべし。

一行は遂に刑場に達しぬ。猶太の習俗によりて、受刑者は強ひて彼等をして、刑に先ち醉うて喪心せしめむとの憐愍の意より、罪人に與へられし麻酔の飲料にして、當時エルサレムの貴婦人は、屢〻此刑場に達しぬ。若し來りて與ふる者なくば、そは公費を以て賄はれぬ。耶蘇は辱を盃の縁に觸れたるのみにして、之を飲むを拒めり（馬一五の二三、馬太二七の三四は詩篇六九の二一を實現したりと事實を變じて記せり）。彼れは極めて明晰なる精神を抱いて生を離れ、十分の覺悟もて、自ら好みて招きたる死を俟たんとしぬ。

にて、衆人の觀せ物となす爲めに脫がせし衣を再び著せたり。之より先き軍隊は、處刑すべき笘の二人の盜賊を有せしをもて、此三人の罪人は一所に置かれ、行列は刑場に向け出發せり。

刑場はエルサレム廓外なる、ゴルゴタと呼べる處にして、廓を去る遠からず（馬太七の二二、約翰一九の一七）。ゴルゴタは髑髏の義にて、佛蘭西語のショーモン（Chaumont）に符合し、恐らくは裸丘若しくは禿頭の形せる高地の意なるべし。丘の位置は、今日正確に知るを得されども、確に都府の北或は北西に位し、廓とケデロン、ヒンノム兩溪の間に擴れる、不規則なる高原の上に在りしなるべし。此高原は恐らく平凡の境にして、殊に大都の近傍にして、尙更荒寥の眺を增せしなるべし。之をコンスタンチヌスの時以來、あらゆる基督教徒により尊崇せられたるゴルゴタと同視するは、全く謂れなきことなり。されど又同時に、此事致の傳說を批評するの必要ある程、甚しき反對の此說に對してあるにもあらず。

十字架の罪人は、自ら刑器を負ひて運ばざる可からず。されど耶蘇は體力他の

くの通行者は、之を讀みて怒れり。祭司等はピラトに、自ら猶太人の王と稱せし者との意を、簡單に標にすることを求めたり。されどピラトは已に此事件に飽き、書きたる者を改むるを拒みき（約翰一九の二一―二二）。されど傳說は、ヨハネ一九の一五）。更に一層確かなる事實なる婦女等の、彼れを逃れぬ。

弟子は（約翰二一の一九）語るに從ひ、彼れに事へ居たる、ガリラヤの忠實なる婦女等の、彼れを絶へず彼れと覺しきは、耶穌に從ひエルサレムに來り。ロパの妻マリア。クザの母ヨハンナ。サロメ其他の人々は、少し離れて立止り、眼を彼れより放たざりき（馬太二七の五五―五六、馬可一五の四〇、四一、路加二三の四九、五五―二四の一、約翰一九の二五―二七）。第四福音書を信ずれば、耶穌の母マリアも亦十字架の下に立止まりたるを見、弟子に向ひ「これ爾の母なり」と云ひ、母に向つて「これ爾の子なり」と言へりと。されど他の婦女の名を擧げたる共觀福音書の（傍）をもて獨り眼だたしき光景なりし、母の場に在りしことを擧げざりしや其事業に心奪はれて、此の如き私情に動かされたりとは、耶穌の人

彼れは衣を剝がれて、十字架に釘けられたり（馬可二七の三五、馬可二四、約翰一九の一七）。十字架は丁字形に縛せられし二本の梁木よりなり、其丈甚だ高からず、受刑者の足殆と地に著く程なり。彼等は之を樹て始め、次きに犧牲者の手に釘打ちたれど、釘くること多し（路加二四の三九、約翰二〇の二五―二七）。足は時には單に繩にて縛することもあれど、釘くることもあり。

耶蘇はあらゆる彼等が殘忍の裏に立ちて、此等の恐しさを味ひぬ、二人の盜賊は彼れの兩側に磔せられたり。刑を受けたる重罪人の「さゝやかなる持物」(panicularia)を分配する習なる執行者は、讖を引いて彼れが衣を取り、十字架の下に坐して彼れを護れりとぞ（馬可二七の三六）。傳說によれば耶蘇は「父よ彼等を赦し給へ、彼等は其なす所を知らざるが故なり」といひしと云ふ。

羅馬の習慣により、十字架の項には、希伯來、希臘、羅甸の三國語にて「猶太人の王」と書せる罪標を掲けたり。此語は、國民に一種の苦痛と侮辱とを與ふる者なり。多

彼れは恐らく、濁悪なる人類の爲めに苦みたるを悔いしならむ。が神、我が神、なにとて我を棄て給ふや（太二七、四六）と。さはれ彼れが も彼れは己が使き去れば、魂は愈〻朗らにに天の本源に復歸しぬ。彼れは死に臨んで世界の救濟を見たり。足下に擴れる醜體しぬ。肉の生命漸うゆらめき光景は眼より消失せて始めたれ。

磔刑の特に殘虐なるは、かゝる博慄すべき狀態にて、尚三四日の命を維ぎ得べきことなり。手の出血は須曳にして止み、死を來す不自然なる身體の姿勢にあり。眞因は是れ恐るべき血液循環の阻礙、腦と心臟との劇烈なる苦痛を惹し、遂に四肢の痛せし者は、十字架上に眠ることを得、其死本來の目的は、手を加へて直ちに犧牲を殺すに存せず、善用の道を釘けて、其身を曝し、架上の腐敗に委するに在り。耶蘇の弱き體格は、彼れ

格の經大悲高を以てしては、誠に有遠に彼女の小群を外にしては、耶蘇の前には、唯人間の愚鈍と下れの恩を慰めし此等の婦、四周に愚かなる嘲笑を行く人は彼れを嘲罵せり、彼れは聽けり。彼れが無上の苦景あるのみ。道との光景あるのみ。道痛の叫は、惡むべき詐謔の料となりけり。

ひしなり、神は、彼は神の子なりと云に依賴めり、神もし彼を愛しまば今救ふべし、蓋彼れ我は神ば、今十字架より下るべし、然らば我と云ひ、更に又人を救うて之を能つる者よ、自己を救へと言ひ親みたる者は、耶蘇のエリヤを呼べるを聽けりと思ひ、「俟て、エリヤや否やを試むべし」（馬太二七の四九）と云ひたるが如し。天は晦く、（馬太二七の三三、路加二三の四四）周圍の地は、エルサレムの環境一帶皆去かるが如く、蕭條として暗慘たり。或る物語によれば、彼れは暫しが程氣力を失ひぬるが如く、雲は天父の御顏を彼れに隱せり。此時彼れは、彼れが一切の苦痛の千倍にも勝り、強く鋭き失望の苦を受けたり。眼に見る所の者は人類の忘恩のみ。

（馬太二七の四〇、四四、馬太二七の四六、馬可一五の三四）おぼろ

りぬ。今はや爾が努力の建物、其欠所より壞るゝこともあり、平和の高座より、爾が業の無窮の結果を見そなはせ。爾の手の及ばざる所、天なる爾の力強き靈に觸るゝことすら協はぬ數時間の苦に會ひぬ。幾千年の間世は爾に從屬せむ。爾は我等が矛盾を統ぶる大胆なり、爾は我等が周りに劇戰して勝敗を賭する旗章なり。爾の沒後、爾は此地上の生涯の千倍を生き、千倍を愛せらる。爾は誠に人類の首石(いしづえ)とならむ、此の世を除くは、即ち世界の根柢を震撼することなり。今はや人は、爾と神とをわかたざらむ。爾死の全勝者よ、願くは爾の王國を領せよ、爾により て、長しへに爾に此國に從はむ。

をして、此長き苦痛を免れしめぬ。
るが如く、磔刑の苦痛の一なる、燒く
ぬ。側らに羅馬兵士の普通の飲料
入れし瓶あ
り。(ヨ)兵士は刑の施行を
る可からざ
りき。兵卒の一人は、海
綿を此飲料に浸し、葦の尖きに
蔑めしに、彼
れは之を吸ひぬ(二馬三太二七の三六、路加二三の四、約翰一九の二八―三〇)。東方にては、磔刑
若しくは串刑に處せられたる犧牲
に向ひ飲を許すは、即ち其死を促進するなりと
の説あり。
一層事實らしきは、心臓の卒中的衝
動若しくは血管破裂が、三時間の後耶蘇の急死
を促したることなり。靈を付す數
瞬の前、彼れの聲は尚ほ強かりき(馬太二七の四六、馬可一五の三四)。彼れは俄然として、恐しき叫聲
を發しぬ。或人は「父よ、我靈を爾の御手に託く」
と聽き、預言の成就を心に
抱きし人々には、「事竟りぬ」(約翰一九の三〇)とぞ聞えけ
る。彼れの首は胸に俯れ、彼れは息
絶えたり(馬太二七の五〇、馬可一五の三七、路加二三の四六、約翰一九の三〇)。
貴き開路者よ、今は爾が榮光の裏
に休らへ。爾の業は全きを得。爾の神性は定ま

ヨハネを以て此事件の實見者となす。

主眼せる（約三時三五）ヿ耶穌の死の確實なりや否やに關し、疑惑の常に提刑を見たる人々には、十字架上の數時間の懸垂は、かくの如き結果を來すに足らずと思はれき。（四、四五の四）に至事は磔刑を受けたる人の、時を經て取下ろされ、強き藥によりて蘇生したる、尠くの例を引きたり。

る爲めには、寺跡を呼來るの必要ありと考へたり。同一の驚駭も見出さるゝ。實際此傳記者の敵の疑深き憎惡なり。當時猶太人が、耶穌蘇るまでは、疑ふべし。されど兎に角、彼等は耶穌の果して死せしかを、注意したらざる可からず。古人は時々、事件の合法なる證據及び意しては、萬事につけ粗漏もありたるべけれど、此事件に關係深き等に重要なる事に對して、心を用ゐることなかりしとは、信ずる羅馬の習俗に從へば、耶穌の屍は、鳥の餌となるまで架上に懸置かざる可からず。猶太の律法に從へば、日暮に落されて、別に處刑者の埋葬地と定められたる汚辱の

第二十六章　埋葬に於ける耶蘇

耶蘇の死は、金の時間にて約七時頃なりき（馬太二七の三四、路加二三の四四、馬可一五の三六）。猶太の一律法規則は、雖馬息日、殊にも息日の前には、死刑執行の日の晝より後まで、屍を架上に曝し置くを禁せり。此により て、此日の汚されざらんことを願ふ旨述べたり。此要求は許可せられ、速かに三人が執行したる死刑には、遵守せられざりしが如し。刑よりは速殺して、十字架より移すべき命令は發せられぬ。兵卒の捕虜に對する、普通の刑なり。耶蘇は疾く死したるをもて、彼等は之に從ひ、礫斷足刑（クルリフラギウム）(Crurifragium)を施せり。これ效ある第二の刑、即ち へざりき。されど其一人は、此犧牲の果して實に死せるやの疑を、悉く除去らんが爲めに、又曲程の息殘り居らば止め盡さん爲めに、鎗もて腹側を貫けり。彼等は此傷口より、命絶へたる徴證と目せられし、水と血との流出するを見たりとなしき。

稱せらる。ガラリヤの婦女等はここに在り、涕泣慟哭して事に與りしと雖なし（馬太二七の六一、馬可一五の四七、路加二三の五五）。

夜は遲かりき。而して此等萬事は、非常の急忙の中に爲されたり。屍を安置すべき場所は未だ定まらず、其上屍を運行かば夜更けにも及ぶべく、安息日を汚すこともありぬべし。弟子等は尚、衷心より猶太律法の規定を遵奉したり、一時の中止せられき（約翰一九の四二）。近くの園中に、頃日岩に穿たれし墳墓あり、未だ用人の有たりしなるべし。是れ恐らくは、信徒の一時にはかくて決ねられざりき。岩窟は一個の小室の形をなし、室の奥底に於いて死骸を置くべき床によりて認むべし。此等の洞窟は、斜なる岩石の側面に穿てる者なれば、入口は平地に在り、容易に動かぬ重き石もて閉さる。耶穌の屍は此處に置かれ、石は戸口に轉せられたり。而して彼等は、更に完全なる埋葬をなす爲め、復來らんことを約しぬ。されど翌日は、嚴肅なる安息日なりければ、此事は更に其翌日に猶豫せられ、心して屍の置きざまを見たる後出行きぬ（路加二三の五六）。

婦女等は、ガラリヤの婦女等はここに在り、涕泣慟哭して事に與りしと雖なし（馬太

場所に置かるべし。耶蘇にして、小膽にして勢力なきガリラヤ人の外に弟子あらずは、後の方法は取られしならむ。エルサレムの成功は乏しき人々は神國を瞻望し、三の重要なる人物の同情を得たり。此彼れに從ひしなり。其中の一人小市アリマタヤのヨセフは、暮に方れども、深く耶蘇の屍を乞へり（馬太二七の五七、馬可一五の四二、路加二三の五〇、約翰一九の三八）。ヨセフは富裕にして名望ありし上、當時の羅馬法廷の議員たりし上、サンヘドリムの議員たりしが、ピラトは斷足の刑（クルリフラギウム）にも與ふべしと定めたり。恐らくピラトは、受刑者の屍は、誰れにても乞ふ者のかく急速に死にしを驚き、處刑を督せし百人長を喚びて、事情を詳にし、其確證を得たる後、ヨセフに願のを許せり。恐らくピラトは、既に十字架より取下されたるを見し、今一人の祕密の友ニコデモは（約翰九の三）、此時復顯れたり。彼れは防腐に必要なる材料を多く携來れり　ヨセフとニコデモとは、猶太の習慣によりて、耶蘇を葬り、沒藥、蘆薈と共に、彼れを布に包みしと

なる數瞬間よ。

たなる香料の備に從事して、安息日には、日曜の朝、マグダレナのマリアを首として、婦女等は夙に墓に來り（路加二四の一―三、五六の一）。石は入口より移され、屍はやや元置きたる所にはなし。同時に最も不思議なる風說は、基督敎徒間に流布し始めぬ。「彼は甦りたり」てふ叫は、いちばや く弟子より弟子に傳はれり。愛は隨所容易に信を呼來りぬ。（馬太二八の一―六、馬可一六の一―八、路加四―一三、五）。

たる。使徒の歷史を論ずるに當り、我等は此點を吟味せざる可からず、復活に關する傳說の起原を探求せざる可からず。史家によれば、耶穌の生命は、彼れが最後の數歸依の婦女等との胸裏に遺したりし彼は、なほ數週の間、恰も彼れは誰れにより て取去られたりしや。常に輕信に傾き生きて、己等を慰むるが如きものありき。群の物語を造りしや（馬太二八の一―五、約翰二〇の二―一八）。矛盾せる記錄無しとて、此事は斷定するに易き熱心は、如何なる理由なし。唯我等は此事件に於いて、マグダレナのマリアの強大なる想像が、其主役を演ぜるをいうて止まむ。神々しき愛の力哉。嗚呼靈を浴びし一人の熱情が、世界に復活したる神一つ與へたる、この神聖

られの。

生を終れり。而して未だ甞て一度だも、己が其國民の爲めに、僅しを疑ひしことなかりき。彼れの商はしに政治的籌畫より消滅しパスとヘロデヤは、其後直ちる、や、嫉妬深きヘロデヤグラの爲めに王位に即けらる者あるにも妥如たりしとて、アンテパスを望みぬ。己が同族に位勝れ深き婦人（ヘロデヤ）に剌戟性者を以てしたる、この野心潮惰の天性を勵まして羅馬に至り、恰も我等の紀元三位置を求めんとしたり、然れども此事は、彼れに最も不グリッパによりて、皇帝の眼に疑はれ、アンテパスは貶せられて、殘生を西里昂の流謫に送りぬ。ヘロデヤも亦、夫と共に汚辱の名も無き其臣民らるゝ、昔の名が、二人の墳墓の上に、ネ虐殺の痕留めんと、此遠隔の邦土に現はるゝに至りしまでに

第二十七章　耶蘇の敵の運命

我等が採れる算測に從へば、耶蘇の死は紀元三十三年に起りたり。何れにしても、ヨハネと耶蘇との說教を始めしが二十八年なれば、（路加三一）そは二十九年以前たる能はず。又ピラトとカヤパとの、其職を失ひしが三十六年にして、其上恐らく逾越の節前なれば、之は三十五年以後たるを得ず。されど二人の決して何等の關係ありしとは覺えず。ピラトは恐らくは、其退れたる插話が、後の後まで、己が悲むべき名聲を、子孫に傳ふるに暫くだも夢想せざりしならむ。カヤパの後は、耶蘇の裁判に於いて、主要の役目を演じたるアンナスの子なる、カヤパの義兄弟ヨナタン之を承けて、其後久しくサドカイ族なるアンナス一家の占むる所となり、而かも其勢力往時に勝りて、耶蘇の家族と弟子等に對して開きたる、深讐の戰爭を止めざりき。其創業を定めたる行爲をアンナスに負へる基督敎は、亦最初の殉敎者をもアンナスに負ひぬ。

基督教の大復仇の時は、尚ほ遠きを隔てたり。此新しき宗派はすぐに至るまで、何等の責任あることなし。馬帝國は確に、偏狹なる律法の強行が、如何なる結果を示すべきかを知らざりき。羅ど三百年の間、帝國の生れ出でたるを疑はんともせざりき。殆ありしと同じき運命を有せし主義の、其側も想はで、其道を歩み續けたり。

に共和的政的なると同時なる思想は、チウトン民族の侵入と共に、カイザルの事業瓦解の、最も有力なる原因たりき。

一方に於いては、均しく神の國に與るべき全人類の權利宣せられ、他方には唯に一國家より分離せらるゝに至りぬ。良心の權利は國法と絶縁して、遂に新たなる「靈の力」を打建てぬ。此力が再のみにあらず。數百年の間、僧正は諸侯にして、法王は火刑柱とを用ゐて自らを支持する、博愛すべき其源泉に反きし王なりき。所謂會堂（シナゴク）は更に後日を結ばん。其日を呼ばるゝを自證しぬ。されば日は來るべし。其日分離は其果一人の衷心より

百を經過せざる可からざりき。

惡漢イスカリオテのユダの死に關らるゝ所ありと云ふ。（馬太二の五）。シオンの南にアケルダマによれば、彼れは其背反の報酬として、エルサレムの附る土地なりと想像せらる（使徒一の一八、一一九）。一傳說によれば、彼れは自殺したりと、又他の傳說にては、恐しき口碑の流布が地所に倒れて、其結果內臟迸出したりと、使徒行傳に從へば、彼れは己が種に死し、天の罰と認められたる、厭はしき狀態を呈し、又詩篇（六九、一）作者が背信の對（ついで）となし、又詩篇（六九、一）作者が背信の友に對して發せる威嚇の完成を、ユダに於いて、靜穩韜晦の生活を爲せんとの願は、恐らくは此等の傳說を發生せしめしならむ。思ふに、彼れの舊友が世界を征服して、彼れの醜名を汎布しつゝありし間、ユダは或は、アケルダマの野に退いて、靜穩韜晦の生活を爲せしならむ。或は又、彼れの頭上に集中せられたる恐るべき憎惡の念は、高じ高じてなりもしたらむ。

（譯者曰はく、舊約撒母尼後書十五、十六、十七、ダ并にヒトペル（譯者に出づる人、ダを殺さんとせし人）

心にゲッセマネの大失錯を抱けるにいかでか貧しき人々に向ひて能く過誤なきの貌を装ふを得んや。

發生し、民衆の間に發展し、先づ民衆に愛せられ、賞讃せられたる基督教は、初頭の革命的凱旋なりき。是れ尚ほ其本來の性質を印鐫したり。基督教は、民衆の勝利なり、心單純なる善の世の初なり、民衆の心に解せらるゝ、美はしきものの就任式なり。かくの如くにして耶蘇は、古代の貴族的社會に、萬人の通過し得べき破口を開きたり。

羅馬の權力は、耶蘇の死に對して咎なしと雖も、一唯宣告に署名したるのみ、而かも是れ尚ほ其本意にあらず）事實上には、重き責任の負擔を分つを要す。カルバリの一場を監督して、羅馬の國家は自家の上に深き打撃を被りぬ。あらゆる類の失體を擧盡せる、口碑は流布せられ、而して全世界に隈なく知れわたりぬ。官憲が惡むべき所業を演じたりと云ふ說あり。或は理は被告に在るを、判官と公吏と相結託して、其眞相を掩蔽せしと云ふものあり。多數の通俗なる圖解によれたる、受難の歷史は、最も不公平なる處刑を許せし羅馬の鷲そを執之を命令したる方伯を現はすこと、極めて煽動的なり。嗚呼これ、一切の已設の力に對する何等の大打擊ぞや。此力は竟に創痍を復することなかりき。彼等其哀

なる記錄なり）中にも亦、此宗派の何等の痕跡をも認めず、基督教の創立者を記せる二つの
ゲマラ（Gemara 譯者曰はく、ゲマラはミッシュナ中の具體的の辯論並びに判決なり）の一節は、第四
紀以前のものにはあらず。耶穌の事業の精髓は、己が身邊に弟子の一團を作り、此
中に無限の愛を吹きこみ、其胸に彼れの教の胚種を置きたるに在り。「其死後に至
り、なほ弟子等の彼れを愛して止まざりし」（ヨセフォス）ばかり、己
ち耶穌の偉大なる事業にして、最も多く其同時代者を、感銘せしめたる者は是なり。
彼れの教は殆と教條的ならず、彼れは書かんとも、又書かしめんとも夢想せざりし
程なり。人々は此事彼事を信ぜしが爲め、弟子となりしにあらず、實に彼れの人格
に密著し、之れを愛するによりてなり。記憶の中より拾集めし二三の言、就中其性格
の姿、並びにその遺したる印象は、即ち彼れが遺物なりき。耶穌は教條（ドグマ）の建設者に
あらず、信條（クリード）の製造者にあらず、彼れは實に漸たなる精神を、世界に注ぎし人なりき。
一方に於いては、第四世紀以來、兒戲に似たる形而上學的議論の道に、基督教を驅り
し希臘教會の博士等、他方に於いては、福音中より數千の條項を備へし膨大なる體
系を作らんと欲せし煩瑣學者は、共にクリスチアンの至微たる者のみ。神の國を

第二十八章　耶蘇の事業の根本的性質

我等は既に耶蘇の行動の、決してユダヤの域外に出でざりしを見ぬ。彼れの正統派に侮蔑せられたる人々に對する同情は、彼れをして、異教徒を許して神の國に入らしめたりしといへども、——又彼れは一再ならず異教徒の國に至り、無信者と懇親の關係を結ぶこと一二度に及びしといへども——而かも彼れの生涯は、全然彼れ一小地域内に、過されしと云ふを得るなり。　希臘並びに羅馬帝國に就いての中に現はれたるのみ。而かも彼れの名は、一百年の後に生きたる、不信心者すらも、耶蘇の受けたる壓虐の關係より、間接に顯はれたるに止まる。　猶太教其物に永續の印象を與へざりき。紀元五十年に逝きたるフィロンは、彼れに就いて筆を取りたるヨセフォスの如きは、耶蘇の死刑を重大視せずして、僅々二三行に悉し、剩へ其時代の宗派を擧げしの中には、全然基督教を略せり。

其他ミッシュナ(Mishnah 譯者曰はく、ミッシュナは猶太の口述法律の標準と

の王位を宣せしは彼れなり。 始めて
ものにあらずと言ひし者は彼れなり。 眞誠の宗教の創立は實に彼れが事業なり
き。 彼れの後迄る所の一切は、實に基督教はかくの如くにして、宗教と同義語となりぬ。
基督教の創始は、悉く皆空幻のものたるべきなり。 耶蘇は人
類に、恰も、ソクラテスの哲學を、プリストレスの科學を創めしが如く、宗教を創始
しぬ。 ソクラテス以前哲學あり、プリストレス以前科學あり。 ソクラテス以後、
プリストレス以後、哲學と科學とは各大の進歩を爲せり。 然れども一切は舉げ
て悉く、此二人の溜泉に乏基礎の上に建てられたり。 爾れ同
じく、宗教的思想は、耶蘇の以後偉大なる征服を遂げたり。 而かも其の之
が爲めに、其の純正なる性質は永遠に昭一厘、純なる體幹の
思想は、實に此人により、此後も亦しこと無く、此後も亦
變改せらるゝことなからむ。 彼れは永遠に昭一厘、純なる體幹の眞誠の意義を定
めたり。 敎會は其時代並次に時相在其ものゝ。 それは唯一
の信仰の中に團結せらるゝ。 耶蘇は何物をも

耳ふて耶蘇に從ふとは、ヴリてヤアこなるべてふ、本來一切の意義に於て普通なる基督教が、他に比類なき運命により、十八世紀に、純粋なる基督教が、或點に於いて、其生るゝや一切の教條的束縛を擺脫し、良心の自由なる精神的活動の所産にして解せらるべきなり。

無窮なる宗教の性質を示せるやは、上の如くにして確定的宗教なる所以なり。

耶蘇の宗教が、或點に於いて、其生るゝや一切の教條的束縛を擺脫し、良心の自由なる精神的活動の所産にして解せらるべきなり。

無窮なる宗教の性質を示せるやは、上の如くにして確定的宗教なる所以なり。

耶蘇に從ふとは、ヴリてヤアこなるべてふ、本來一切の意義に於て普通なる基督教が、他に比類なき運命により、十八世紀に、純粋なる基督

なり。教條はいかに形を變じて止ますとも、耶蘇は依然として宗教の上に、純なる感情の創造者なり。山上の垂訓は、必ずや廢ることあらじ。如何なる革命も、宗教に於いて、其頭に耶蘇の名の光輝ける、偉大なる知的並びに道徳的族譜に、我等の結合せんとするを妨げざらむ。此意味に於いて我等はクリスチアンなり、たとへ殆と總てのむるには、彼れは此崇拜に價せざる可からず。愛は唯之を燃すに足る者を俟たずんば、生じ得べからざるなり。若し彼れが其周圍の人々に注ぎたる情熱が、彼れの偉大にして純粋なりしことを肯定せざるを得ざらしむるにもあらずんは、我等は耶蘇に就いて、何等の知る所なかりしならむ。初生基督教時代の信仰と熱心と持久とは、一個絶大なる人物が、全運動の源に立ちたるを想像するに及びて、初めて解するを得んなり。信仰時代の驚くべき創造を觀察するに際して、健全なる歴史的批評に取り、一樣に恐るべき二つの印象心中に起る。一面に於いて、我等は此創造を推想すること、徐りに非人格的なるに傾く。即ち動もすれば、強大なる意志と、高上

除外せざる。而して心の外に一物をも規定せざる。絶對的宗教を創立せり。福音の中に信條は嚴酷なる教條にあらず、無量の意味滾々として盡きぬ像（すがた）なり。耶蘇の思想の變裝なる、あらゆる信仰の告白は、恰も中なし、却てアリストテレス其人の思想を求むるは、あだなるべし。世の煩瑣學派が、アリストテレスを以て完成せる科學の唯一の宗師となし此徒が論議の場に在らば、かくの如き誤りしが如し。アリストテレスにして、若し此徒に隱れたる法則に反抗して、狹陋なる學説を排斥したるならむ。恰も同じく、進歩せる科學の味方となりしならむ。彼れは、己が教會問答的語句を以て、耶蘇若し我等のめんと欲する者は、二三の徒にあらずして、彼れの事業と、行はんと勞を悉したりと夢想せるの豫言者にあらず。其度樣々に異なる一切の偉麗の中、永遠の光榮を發見せざることもあるに存す。近代の物理學及び氣象學に於いては、「物理學」と稱し「氣象學」と稱せる、アリストテレスの論文中の一語を發見せざることもあらむ。されどアリストテレスの、依然として自然科學の創立者たるは、爲めに一毫も減ずる所なき

迷惑も亦深い。彼等は實に我等の
御等は我等の如く感じ且つ考へぬ。
かゝる事も亦我等の中にあるや、且
つ我等の如く感じ且つ考へぬ。
面にも且つ我等の中にあるや、且
凡に陷るなり。

さらば我等をして、耶穌の人格を八
も超自然界に關係こゝる所の傳說
も、ファンシのファンシー
ファンシに非ざる事を証
は、ファンシのファンシー
全して書は、基督教創
當傳說が神
於ける如き
熟す所の人
思ふ如く
し如きこと
ふは甲

なる精神との業たりし所の者をもて、集於いて我等は人類の運命を決せし此等の非常の運動の發頭人について、更に更に自然が其胸臆に祕めじき人を見んとする傾向あり。我等をして、個人の獨創が自由に發展の餘地を有せし時代の人の偉はざるなり。今ここに我等に與ふる王宮に現はれ、脚兵を退けに出を出でゝ、嚴然たる聲を放ちて、王に想像せよ。都府に近き山れる革命の近きを告ぐるとせむ。此觀ずや。さはれ、其自身が己に微笑を催かくの如きは即ちエリヤなりき。ティシュビ人エリヤを通過することなかるべし。耶蘇の說敎と、ガリラとは、我等が慣熟せる今日の社會と相去ること、殆と正に劣るなきなり。圓滑なる我等の方便主義を脫却し、我等を細緻に すれども、又大に我等の個一律の敎育を免れて、此等の強烈なる靈魂は、驚くべき精力を其行せざりし英雄時代の巨人の如く、我等が眼におぼゆるなり。又他面に於いて、我等と同じき人を見んとする傾向あり。我等をして、自然が其胸臆に祕めしめよ。煩細なる拘束に支配せらるゝ今日の文明は、各個人の獨創が自由に發展の餘地を有せし時代の人の偉はざるなり。今ここに我等に與ふる王宮に現はれ、脚兵を退けに出を出でゝ、嚴然たる聲を放ちて、王に想像せよ。都府に近き山れる革命の近きを告ぐるとせむ。此觀ずや。さはれ、其自身が己に微笑を催かくの如きは即ちエリヤなりき。ティシュビ人エリヤを通過することなかるべし。耶蘇の說敎と、ガリラとは、我等が慣熟せる今日の社會と相去ること、殆と正に劣るなきなり。圓滑なる我等の方便主義を脫却し、我等を細緻に すれども、又大に我等の個一律の敎育を免れて、此等の強烈なる靈魂は、驚くべき精力を其行せざりし英雄時代の巨人の如く、我等が眼におぼゆるなり。又他面に於いて、我等と同じき人を見んとする傾向あり。我等をして、自然が其胸臆に祕めしめよ。煩細なる拘束に支配せらるゝ今日の文明は、各個人の獨創が自由に發展の餘地を有せし時代の人の偉はざるなり。今ここに我等に與ふる王宮に現はれ、脚兵を退けに出を出でゝ、嚴然たる聲を放ちて、王に想像せよ。都府に近き山れる革命の近きを告ぐるとせむ。此觀ずや。さはれ、其自身が己に微笑を催かくの如きは即ちエリヤなりき。ティシュビ人エリヤを通過することなかるべし。耶蘇の說敎と、ガリラとは、我等が慣熟せる今日の社會と相去ること、殆と正に劣るなきなり。圓滑なる我等の方便主義を脫却し、我等を細緻に すれども、又大に我等の個一律の敎育を免れて、此等の強烈なる靈魂は、驚くべき精力を其行せざりし英雄時代の巨人の如く、我等が眼におぼゆるなり。

ルクス、デウレリウスの如き、謙抑柔和なるスピノザの如きは、自らありと信ぜざりしが故に、耶穌の陷りたる誤より脫するを得ぬ。き韜晦の生活に、耶穌の求めざりし利益を得たり。極めて愼重に、論證の方法を用るるとにより、我等の絶對的純誠により、又純なる思想に對する無偏の愛により、我等——科學に一生を獻じたる者皆——は、新たなる倫理的理想を建設しぬ。然れども一般歷史の判斷は、必しも人格的價値の評量に制限せらるべきにあらず。マルクス、アウレリウス並ひに彼れが貴き諸師は、世界に永遠の感化を與へざりき。彼れは其死後に、美はしき書と呪ふべき子と、而して腐敗の國民とを殘しぬ。耶穌は人類の爲めに、いつまでも靈的再生の不盡の原則たり。哲學は、多數人の爲めに、勢、冷かなる理性を有せるソクラテスに勝る成功あり。諺に曰はく、「ソロニウスは神なり」と。離俗、敬虔、驚異の分子なくば、宗教はかくも永く存續すは不足なり、彼等は崇信無かる可からず。アポロニウスは人を地に遺す、アポロニウスは人を天に上ぐ、ソクラテスは唯聖人のみ、る能はず。アントニヌス（アウレリウスの事）一流の後に、哲學の宗教を造らんとせし時、哲學

耶穌の比倫たるに堪へず。ヨハネは其默れの靈を動かしたるかを示すのみ。されば四福音書は新約聖書の諸篇中、挺然として群を絶せり。此故に耶穌の傳を讀みて、使徒の行傳に移るの感に苦むが如し。

彼れの高きに達する力無きより、絶へず彼れを誤り現はせり。彼等の記する所は、錯誤と謬解とに充てり。神秀の語の、之を解せぬ人の思想を代置したるや、我等は俄然墜落して、遙に耶穌の姿を我等に傳へたる福音記者其人も、遙に下にあり、能く彼れの記述者の手に抄寫せられ、その牢解の語に對して、記述者其

る者は、狂熱の狀態より生じぬ。あらゆる偉大なる創造は、其中に鈎衡の破壞を藏せり。小兒の出生は、實に一個强迫の狀態にあらずや。

我等は實に基督敎の、一人の事業としては、餘りに複雜なる創造にして、全人類は此業に協力せる意味に於いて、全人類の痛く相隔れる部分が、相互の交通なくして、同時に殆と同一の觀念想像に達するを、恰も符節を合するが如き奇異の一致は、歷史の上に塡溢せり。第十三世紀に於いて、羅甸人、希臘人、スリア人、猶太人及び回敎徒は、頻頃哲學を作り、而かもヨークよりサマルカンドまで、殆と同じ頻瑣哲學を作りき。第十四世紀には、伊太利、波斯及び印度に於いて、人々は皆神祕的寓言の趣味に耽りぬ。第十六世紀には、伊太利國內並びに大蒙古の宮廷に於いて、極めて相似たる技術の發達を見たり。されど聖トーマス。バルヘブラエウス(Barhebraeus)、ナルボンネのラビ達(Rabbis of Narbonne)若しくはバグダッドのモテカレミン(Motecallemin)と皆互に相知ることなく、ダンテ、ラルクと、何れもスフイ(Sufi回敎徒の一、極めて神祕的なる者。)を見しことなく、ペロウス(Perois)即ちフロレンス派の學徒は、未だ會てデル

者を聖徒に變じ、ピタゴラス或はプロチヌスの「教化の生涯」を書く口碑、節制の德、默思、超自然的の力を加ふるの要あり。これなくしては、信任と權威と共に、當時に於いて得らるべくもあらざりしなり。

我等が區別を爲めに、歷史を殘害するをや。果して能く狂激なる感情を滿足せしむるアシシのフランシスや、痙攣醫術をして此人性の大異常を表すの名を有せしめよ、天才は腦髓の病なりと主張的なる聖テレサを、神經的徵候の中に彙類せしめよ。或る種の道德的易感性を目して、肺結核といふは、全然比較的の稱呼なり。誰れか斗(エンシユーシヤズム)靈と健康」といひ「病的」とを望まざる。

せしめよ、滑(スピレーション)靈或はパスカルとなりて病まんことを。寧ろ健ならんよりも、此等の歷史的判斷は、此種類の問題に於ける我狂に對する狹隘の觀念、態、意志の招喚と

しめよ。

しむ。昔は、其人を狂者として禁錮せざる所の事を語る時の狀らるべき者たら

此等一切は、「預言者」(イン)の名に呼ばれにき。世界の最も完美な

に存したりと覺しき。此絶儔の國民に。高き位を與ふるを願ふこと、未だ余の如く甚しきはあらじ。疑もなく耶穌は。猶太教より來れり。されど彼れの來りしは。ソクラテスの詭辯學派よりし。ルーテルが中世に出で。ラマネーの加特力教よりし。ルソーの十八世紀に出でたるが如し。人は已が時代と種族とに反抗する時すら。なほ其時代並びに種族の人なり。彼れは猶太教の相續を離れ。猶太精神との分裂を代表せり。此點に於いて彼れの思想がなほ。曖昧の天地を餘せしことを想像するとも。甚督教の完美は。耶穌に歸るにあらざるなり。甚督教と遠ざかる。甚督教の傾向は。彼れの後に何等の誤解を貽すことなし。彼れの光榮は。誰人も正當に之に與ることを許さず。

諸々の事情が。此非常の革命の成功を助けたるは。固より疑なしと雖も。されど事情は。何れも拘束なき本能の一種にして眞實なる者を支ふるのみ。人類發展の枝は。一時代を有するなり。而して。勞せずして其完成の域に達する。特權ある一時代を有するなり。自然がかゝる刹那に。靈感に充ち充てる天才の手を通じて作りし傑作を。後に至り

ヒを訪ひしことなかりしなり。偉大なる精神的勢力は、恰も傳染病の如く、人種國境の區別なく、全世界に流布しつゝ、ありといふべし。人類間の思想の交換は、單に書籍或は直接の交通によりて、生ずる者にあらざるなり。耶蘇はれは誠に希臘の書を讀まず、佛教の修多羅のついて怪まざりし佛教、波斯教若しくは祕密の講路を通じ、樣々なる人類の部分に存在せる、一種の同感により一切を受納し、他方に於いては自ら其より一切を受納し、他方に於いては自ら其偉人は一方に於いては、其時代の本性と必需とに、一致したることを證するのみ。換言すれば、その時代を支配す。されば耶蘇の創立したる宗教が、前時代の事物の當然の歸結たりは其時代の本性と必需とに、一致したることを證するのみ。

耶蘇は一切を猶太教に負へり、而して…層正當の言なりや。其特彼れの偉大は唯猶太民族の偉大なりとなすは、果して彼れの天賦は、其中に善惡兩極端を包擁する

は死は即ち猶得なり。　耶穌が六十七十の老境に至るまで、其神性の火を失ひながら、此比類なき使命の束縛の下に、漸次に其衰を重ねたりと想像せよ。萬事は特殊の運命に選ばれたる者を嘉惠す。彼等は抑ふ可からざる感激と、運命の命令によつて、光榮の道に進行くなり。

今も尚ほ日日世界の運命を支配せる、此崇高の人格をば、我等は呼んで神的といふを得べし。そは耶穌の、あらゆる神性を收收せり、或は之と同にあらず、實に其同胞をして、神的の方面に最も大なる歩を運ばしめし者は、彼れなりてふ意味に於ては、下劣利己の生物の集團たる觀を呈す。唯其利己の、纔に動物に比して、一層反省的なるを勝れりとするのみ。然れども此一樣卑俗の唯中より、天邊に向つて挺起せる圓柱あり、更に高き運命を證す。耶穌は實に、何處より來りて何處に行かざるかを人に示す、此等の圓柱の最高なる者なり。我等の天性の善き者高き者の悪皆は、茲まつて彼れの裏にあり。彼れは罪なきにはあらざりき、彼れは我等と同じ情熱と戰ひ、之を征服しぬ。彼れ自らの良心を外にして、神の御使も彼れを慰むるに由なく、人皆の胸裏に蟠る者を

て産出せんとするは、たとへ省思を勞するとも功なし。希臘の黄金時代は、現世の技術文學の爲めにありき。耶蘇の時代は、宗教の爲めにありき。猶太の社會は人類の古來經過し來りたる中に、最も非常の道徳的並びに知的狀態を呈せり。それは實に偉大なる事物の、千の潜める力の共助を藉りて現出し、偉大なる靈魂が、此力の中に、已等を支持する、遥るゝが如き實替と同感とを認めたる、神的時代の一なりき。小なる共和市の極めて狹陋なる暴虐より救はれて、世界は大なる自由を享けぬ。羅馬の帝主專制は、多年の後に至るまでは禍を及さず、加之遠隔の州にては、帝國の中心よりも、更に壓制少かりき。今日の頻はしき妨害的干渉(精神的事物に對して)は存せざりき。耶蘇は、今の社會ならば二十回も驚死よりも更に有害なる)は存せざりき。耶蘇は、今の社會ならば二十回も驚死よりも更に有害なるべき生活を、三年の間專なく送るを得たりき。現行の法律は、醫藥の前に曳きたるべき生活を、三年の間專なく送るを得たりき。現行の法律は、醫藥の不法使用を擧ぐるのみにても、優に彼れの事業を中絶するに足れり。他方に於いては、無信なるヘロデの朝は、宗教運動について、殆と注意を拂はざりき。アスモニア家の下にありなば、耶蘇は恐らく、第一著に捕縛せられしならむ。狀態に在りて、改革者はたゞ一に死を賭したり、而して未來の爲めに勞する人々に

永劫如何なる意外の事起らんとも、耶蘇は斷じて之にたち勝らん、
彼れの禮拜は長しへに其春を新たにし、彼れが一生の傳說は絶へず眼に涙を溢れ
しめむ。彼れの艱苦は、最善の心情を和げむ。あらゆる時代は、人の子等の中に、耶
蘇よりも大いなる者、嘗て生れざりしことを宣せんとすらむ。

外にして、サタンも彼れを誘ふことなの智慧足らぬ爲めに、我等に傳はらざりし如く、彼れの欠點の多くが、隱されたることもありぬべし。然れども其一生人類の休戚を以て、紛々たる切を隷屬せしめたり。彼れの一生のざりし許りに、未だ曾てかくまで、家族迦牟尼を外や、世の歡樂や、其他一切のたる、神の使命の爲めにのみ生きしなせし一人はあらじ。耶穌は唯父の爲めに、而して自ら充すべき

飜つて我等を見る。我等永遠の小兒、力無き者と定められて己が播きたる種の實りを見ざる我等は我等が成し、造り、定めしめよ。彼等を我等に隔てし先きの世の大膽な行ひ得ざる者をなし得たは再び生れんか。將た世界は、唯遠くる創造者等の、開きし道たどり行くをもて甘んずべきやの。我等は知らざるなり。

明治十一年九月一日印刷
明治十一年九月五日發行
明治二十二年二月廿五日再版發行

著作權所有

譯述者　綱島榮一郎
譯述者　安倍能成
發行者　日高有倫堂
印刷者　東京市本郷區天神町二十五番地　日高有倫堂
印刷所　東京市神田區三崎町三丁目一番地　小西幸吉
東京市神田區三崎町三丁目一番地　日本印刷株式會社
電話本局千八百四拾番

定價金一圓五十錢
郵稅金十錢

ルナン奥付



有倫堂出版書目

四十二年二月印刷
每月十訂正增補改刷

東京市本郷區天神町二十日廿五番地
日高有倫堂

所捌賣大

明治四十一年十二月

東京	東京市神田區表神保町
前川文榮堂	東京市京橋區中橋廣小路
至誠堂	東京市日本橋區住吉町
上田屋	東京市神田區表神保町
警醒社書店	東京市京橋區尾張町
吉岡文榮堂	大阪市備後町四丁目
福音社	大阪市北區曾根崎南久太郎町
早野文星堂	名古屋市玉屋町
川瀨代助	名古屋市本町
小澤百樂館	名古屋市青屋本町
東枝書店	京都市佛光寺通烏丸
實文堂	京都市二條川原町
川瀨日進堂	神戶市元町
奧田金昌堂	岡山市西大寺町
積善館	廣島市顯屋町
友田藤助	廣島市東橫町
白銀日新堂	周防國岩國町
金支店	山口大市町
上山文盛堂	下關市西南部町
菊竹金文堂	筑後國久留米市
長崎次郎	肥前國平戶町
有隣堂	橫濱市吉田町
正心堂	橫濱市鶴天通
宮坂日新堂	信州上諏訪町
松榮堂	信州松本市
西澤喜太郎	信州長野市
西村六兵衛	越後國長岡
西村支店	越後國水原
學海堂	越中國高岡
宇都宮書店	加賀國金澤市片町
川俣銀藏	越中國高岡市守山町
內田正榮堂	越中國富山市一番町三丁目
今泉道太郎	北海道札幌南一條西三丁目
佐藤商事店	北海道網走國網走郡網走町
橋崎書店	秋田縣秋田市大町
富田海寶堂	弘前市土手町
東林堂	仙臺市大町
小島大益堂	陸中一の關
清水松之助	靜岡市大谷五十二丁目

新刊

むらくも

定價 壹圓六拾錢
送料 拾貳錢

東京岡本綺堂 著
當代の名高畫家挿入

合縁綺縁

大正廿一年、十月廿日、午前、箱根、湯本、福住、別荘、離座敷、風雨、凄まじく、雨戸、ガタ〳〵、鳴る、音に、驚き、眼を、覚ます、客、一人、有り、客、名を、名乗らず、宿帳に、記名、せず、只、一言、「今夜、一晩、泊めて、呉れ」と、云ふ、外、何事も、語らず、只、窓に、凭れて、外を、眺めて、居る、其の、姿、何と、なく、物凄く、見ゆ、

定價 壹圓
送料 拾貳錢

東京岡本綺堂 著

番町皿屋敷

定價 一圓五十錢
送料 四錢

東京岡本綺堂 著

半七捕物帳

是れ、震雲氏の、禁圖、集也、小、説に、就き、、、

新刊

都市と政治

安部磯雄著

本書の論ずる所は都市の發達、市の立法及び行政、機關、道路掃除、水道、瓦斯、電氣、公園、市場、家屋、衛生、教育、娯樂、財政等の諸問題にして、當に眞來諸論市の現狀を詳述せるのみならず、著者特有の識見を以てこれを我國の都市に應用せんことを企圖せり。一面より見れば經世家の爲に社會問題の解決を試みたる特種の參考書にして、他面より見れば國民の爲に斯奇なる都市問題を紹介したる市民讀本なり

（上製四百八十頁）

定價壹圓廿錢
送料拾貳錢

新刊

机上圖書館 第六編 文學概觀

文學は吾人に美的刺戟を與へ引いて高尚温雅なる生活に導く文雅的修養も亦國民的資格の一なるを悟るべし本書は各種文學の分類美の原則詩想詩形文體の法則抽寫其他各種の問題を網羅し平明簡潔に文雅的修養を得せしむ文學を愛する人に向つて手頃の參考書たるか疑はず

定價壹圓
郵稅六錢

伊藤銀月編

新刊

家庭文藝 名論卓說

佐々醒雪
白河鯉洋 序
稻田漢光 編

家庭に於ける文藝及娯樂問題は目下の最大急務なり。此急務に應じて解決を與へんとするは本書の目的なり。本書收むる所は皆其の代表的人物を招へ來りてその宿論を叩きたるものなり。道々皆意あり句々悉く生氣を帶ぶ。實に空前の名論卓說と謂ふべし。加ふるに附錄として醉雪先生の百人一首俗譯を附けたれば、新年の贈物として此上なし。切に目下の青年淑女に薦む。

定價四十五錢
郵稅八錢

伊藤銀月著

新家庭觀

本書家庭に於ける總ての問題に對し實驗を與へ將に家を成さんとする人に向ひ最頁の指針を與ふ之を讀んで興味と共に實益を得る事疑無し

定價參拾五錢
郵稅六錢

新刊

實驗

小兒保育法

小松小兒科院長 小松貞介先生著

健康兒の卷、虚弱兒の卷

本書は兒科專攻の國手として有名なる小松小兒科院長が夙に泰西の學理を渉獵し兼ねて自家の實驗を重ね我國の家庭に最も適切なる育兒法を記載されしものにて說明悉く實地に渡り懇切なること手を取つて教ゆるが如し荷も人の親となるもの快活なる健康兒の笑顏を樂まむには先づ此書によつて完全なる 小兒保育法を心得られよ

定價四十五錢
郵稅金八錢

伊藤銀月著

再版

偉人

奇なる愛すべき銀月先生が愛し其人物簡々の氣骨頭角躍如たらしむべき代表的一二の行動を抽寫し添ふるに勁拔なる短評を以てす卷を開けば森羅萬象なるもの偉人の面目咄々人に逼る眞に人界の大觀奇蹟也之を讀んで凡骨を練磨すべく有爲の氣象を養成するに足るべし

定價壹圓五錢
郵稅六錢

田口掬汀氏の三大作

最新刊

二人

現代人士の煩悶を悟らん、する人は必ず此作を一讀せられよ、此書には科學的文明の弊を受けたる人と高潔なる理性に依て活きんとする人との心情、動作等最も明瞭に寫されたり。

定價八十錢
送費十錢

十五版

女夫波

朝日新聞評　小說女夫波は明治文壇の傑作にして予は此作を讀みて少なからず感動を得たると共に滔滔の作多き小說界に此傑作の出でたるを愉快とするものなり

定價一圓廿錢
送費拾錢

十版

伯爵夫人

二六新聞評　意志に強き男子が一念の機と智に敏き女子が纏綿の情を相結び、讀者をして運命の數奇に泣かしめ、可憐なる二孤兒の身上に萬斛の涙を注がしむ、這は人生の奇脈を拓ける小說にして總ゆる階級の讀者を感動せしむ可き傑作ならん。

上下二冊
定價各八十錢
送費各拾錢

伊藤銀月著

小說

怒濤

是れ一氣呵成一百二十餘回に連れる雄篇巻を披けば直ちに怒濤の面を打ち來る電ゆ眞率なる新學士、漁夫の子なる絶大の美人隱れたる偉人なる其父毒惡なる青年老猾なる富豪其他篇中の人物盡く特殊の面目と性格となりて活躍飛動す　而も其結構の壯大と描寫の精刻とに伴ふに當代無比の妙文を以てす　蓋し一時の投機的作物にあらず眞の小說を讀まんとする者は此書を逸すへからず

定價八拾錢
郵稅金拾錢

小杉未醒譯

新譯三遊記

近刊

繪本

幷に畫八十餘枚挿入

當代の奇才未醒、千古の奇書西遊記を新譯す、物當に其處を得たり、アラビヤンナイトを好み、ロビンソン漂流記を好み、水滸傳を喜び三國誌を喜ふものは、亦來つて此の新にされたる奇書に接せよ、八十有余の漫畫的柿畫飄逸簡素なる譯文と相俟つて諸君の苦楚より引離さん也、

定價八十五錢
郵稅八錢

江見水陰著

新刊

小說

女馬賊

文學的の冒險小說詩化されたる事實談は是也　著者猶得の靈筆を揮ひて文壇に此新方面を開發す自然不自然を論ずるの遑なく一讀せざる可らざるの快著なり

○回數百三十余回に亘る大作
○紡間隙ぐ所の書二冊を超ゆ

定價九拾錢
郵稅拾錢

綱島梁川著（菊判總クロース頁數約千頁）

四版

梁川文集

梁川綱島先生高邁博大の識、情厳重到の言、恰も燭を把つて照すが如しされど先生は談とするに是れ能とする學者に非ず一面冷靜細緻の頭腦を備へたる倫理學者にして他面別に抑ふ可らざる詩人の熱情を蓄へて日夜に瞑想し且霽にも筆止まざる哲人也解脱の人也、深遂にして優麗其想獨特、其文獨特、毅然一家を成して現代思想界の一角に拔く可らざる自家の領地を占めて妄に他人の追從する許りせば人格なれば也堂堂幸に玉稿を清うて上梓す

定價二圓廿五錢
郵稅拾五錢

大町桂月著

四版

代表日本人

（製本美）

定價八拾錢
郵稅金八錢

日本人を化せしは區々たる教義にあらずして事實也歴史也國體也我が國には（）教佛教以外一種の武士道ありて今日の發展を致したる事實を信ぜざるべからず此書日本國民の前路に光明を與へ教訓を與ふ一風變はれる日本國民の歴史也策れて道徳經也。

小川芋錢著

草汁漫畫

古人曰文章拙を以て成ると芋錢子の畫は則太拙なり其謂ゆる妙想奇致なる者も則拙中の一味に過ず雅致の士冀くば一本を購ひて清玩に備へ

定價金六十錢
送料金八錢

海老名彈正先生著

三版

基督教本義

基督教の本義果して如何之れが明白なる解答を與ふるもの古來宗教史上に光明を放てる豫言者教師教祖の抱懐せる思想經驗に依らざるはなし本書は基督教界の明星海老名彈正先生畢生の識見健の筆を以て上はモーゼより下はルーテル、シュイエルマツヘルに到る迄正確に偉人の悟得を明かにし斯教の本義を説明せられたるもの也華に愛讀の榮を賜へ。

定價五十五錢
郵稅金八錢

伊藤銀月編

机上圖書館
第一編

萬國歷史要領

是れ机上圖書館の第一編として出でたるもの也、著者は特殊の觀察眼を有せる歴史家として社會に認められる、人世界の歴史の要領を此一書の中にコンデンスして、一讀東西の進歩變遷を會得せしむべきもの也、簡明に適切なること未だ本書の如きものあるを見ざる也、試みに一本を購うて此言の當否を見よ。

定價三十五錢
郵稅六錢

伊藤銀月編

机上圖書館
第二編

萬國地理要領

地理書は讀み去つて最も多く頭腦に印象を殘すものを便とす本書材料の取捨按排簡の適度を得殊に流亦何動通切直者をして容易に明晰なる地理的觀念を得せしむ獨り同民札上の實たるのみならず又受驗用書として中學生諸君が頭腦の整理上缺くべからざる疑無し

定價廿五錢
郵稅六錢

獨逸哲學概論　全一冊

近刊

古今哲學通解

高橋五郎譯

哲學は其の範圍の廣大其學者をして往々自殺に安心を求めんとするより生ずる弊なり於ては古今東西を通じ純正哲學の何物たるや及び倫理に三大別して詳密に論述し最も平易に哲學の概念を知らしめんとす

定價七拾錢
郵稅金拾錢

哲學物語

上田萬年
高橋五郎
井上哲次郎
小松原英太郎
藤井健次郎
文學士　小松武彦　共譯

上製一冊

英國ウヰルスハラム著

中世文藝史

上田萬年
高橋五郎
井上哲次郎
藤井健次郎
文學士　小松武彦　共譯

英國ハラム翁曲中最も有名なるヒストリエンゾト原書の物語を基礎として數種の書を參考し加ふるに自己の意見を以てし尚ほ沙翁劇曲の批評を附し以て學術上の參考に備ふべき

定價七拾錢
郵稅金拾錢

哲學要領

戸川秋骨著

私觀

定價金圓拾五錢
郵稅金　六錢

時代

伊藤銀月著　小松武彦共譯

奇警なる着想、嚴正なる態度、而して明快なる論斷これ即本書の特長にして收むる處の諸論、政治社會文藝宗教及び教育に對する諸論は實に現代思潮の如何を知らんと欲するもの須く一本を備ふべきなり

定價八十錢
郵稅金拾錢

新譯　水滸傳

（插繪十枚）

本書は支那古來の傳奇小說中最も有名なるものにして革命の次第を敍したる天下の大奇書なり、今や國民皆な革命の氣に富めるの時に當り、此一書を讀まざるは恰も孔孟の書を讀まざるが如く、一讀すれば誰れか快哉を叫ばざるものぞ、譯文平易流暢にして原書の妙味を遺憾なく發揮し、插繪亦た精巧を極む、一讀すれば必ず之を手にせざるを得ざるの感あらん、況んや全部二十冊の大冊を僅かに二冊に纏めて定價の低廉なるをや

定價參拾錢
郵稅金四錢

天人論

三宅雪嶺著

天下の風雲を叱咤したる天人論に對する世人の一讀を要求する事久し、今や全部を上下二冊に纏めて出づるや、各方面の絶讃を博し今や第八版を發行せり、以て本書如何に學者に愛讀せらるゝかを知るべし。

文學博士 桑木嚴翼著（四六總夕ページ）

性格と哲學

本書は高妙なる荷皇宗教の問題より卑近處世法並に女子に關し興趣饒多なる範圍に亘り偏僻なる評論を下せるものに非ずして誠に學界の珍書たるを失はず

定價 金廿錢
郵稅 金十錢

近刊

机上圖書館

伊藤銀月編

本書は漸次に刊行して都合十冊完成の上は『机上圖書館』と表記したる雅致ある箱に收めて座右に備ふべく、苟くも書籍に趣味と實益とを求めんとする時之を開かば坐ながらにして、圖書館に入ると同一の結果を得ん、蓋空前の有用書にあらずや、

全十冊
價三圓廿錢

新白然主義

岩野泡鳴著

本書は自然主義の問題より卑近處世法並に女子に關し興趣饒多なる範圍に亘り偏僻なる評論を下せるものに非ずして誠に學界の珍書たるを失はず

定價 金十錢
郵稅 五拾五錢

小說 天

瀧藤無緒著

定價 六十五錢
送料 八錢

安全なる結婚

小栗風葉小川默水合作

定價 拾八錢
郵稅金四錢

小說 女

小栗風葉著

價 七十錢
送料金十錢

小說 十七八

參版 鏑木清方畫（上製美本）

價七十五錢
郵稅金十錢

孤雁插畫集

戶張孤雁著

定價五十錢
郵稅八錢

小說 出潮

伊藤銀月著

定價六十錢
郵稅八錢

小說 流轉

半井桃水著

定價六十錢
送料八錢

伊藤銀月編

机上圖書館

第三編

科學新潮

價三十五錢
郵稅六錢

科學の進歩は元素を細分して最新の電子論を生み電氣の新利用は隆盛を極め動物の変遷人間の改造かも企圖し魂魄の形狀重量を衡り不思議の事の新研究を生み其他天文物理醫學心理學等何れも斬新なる研究發見ある時は胚胎せざるはなし本書は平明に是等の新潮を紹介し趣味實益兼收金からしむ寔に机の珍籍也

伊藤銀月篇

机上圖書館

第四篇

社會組織綱要

定價參拾五錢
郵稅六錢

法律は國民の生活に密接の關係を有す其大體に通ずるの必要言を俟たず而も術語の難解なる條文の佶屈なる一般の讀書眼に入り難く之が研究する者稀也本書之に鑑み平易なる言文一致體を以て其大綱を擧げ上國家の擔度より下私權の得喪に至る迄何人にも容易に會得せしむ寔に國民祝上の寶典也

大町桂月著

九版

我が文章

定價
金四十八錢
郵稅金六錢

桂月先生の文章愈老熟して筆橫自在眞情流露し行く處に行き止る處に止まり些の衒ふ所なく苦む所なく直ちに入て以て文を遣り洒落通に快闊にして男性的意氣勃揮し而かも言外に情熱溢る此に至れば聖なり先生の文の如きは、當代の逸品なり

大町桂月著

十五版

わが筆

定價
金四十五錢
郵稅金六錢

明暗の中に涙あり放言の中に眞理あり教訓あり才氣あり覇氣あり或は洒脫に或は沈痛に或は單刀直入に或は旁敲側擊にして萬馬野を走る面かも實くに一脈の氣と熱とを以てし行るに重油の才筆を以てす家庭學校會社及び文學等に關する卓見到る處に充ち才情溢すべき美文もその間に光彩を放つ天地間有數の活文字也

大町桂月先生選

九版

時代青年文集

定價四十錢
郵稅金六錢

桂月先生最も青年を愛し指導敎訓須臾も懈らず夙に滿天下青年諸子の傑作數千篇中より其尤なる者を拔き嚴正なる批評を加へて時代青年文集と編せらる收むる所叙事抒情論說書簡あり將た新體詩あり成な綺花の如く情熱火の如し以て青年の煩悶を醫すべく元氣を鼓舞すべし阿錄には當代諸名家の名篇を添へて錦上更に美花を飾る

大町桂月著

七版

家庭と學生

定價
金參拾八錢
郵稅金六錢

著者申す、我れに三男一女あり共れを斯くは愚悟せむと心に期するのみにて能く實行すると斷言し得べき斯くは愚悟せむと心に期するのみにて能く實行すると斷言し得べき身のならねど家庭敎育の大切なる事を今更のやうに感じて愚者の一得もやと世の青年の男女の前に呈し合して世の父兄の前にも呈する迄

第六版
宇宙と人生
景山英著
定價金拾五錢　郵稅金四錢

第二版
妻の一生涯
川上眉山著（上製美本）
定價金三拾錢　郵稅金六錢

第三版
觀音
川上眉山著（頁數三百卅頁餘ル美本）
前編　後編
定價八拾錢　郵稅金拾錢

再版
小說　竹の家
翠雲村著（上製美本）
定價金六拾錢　郵稅金五錢

伊藤銀月著
二合半
江戸名物
原生活
定價四拾錢　郵稅金六錢

田岡嶺雲著
第六版
宗教
定價金拾五錢　郵稅金四錢

第二版
悲劇
熱血
田口鼎汀氏著
定價三拾錢　郵稅金六錢

小栗風葉著（美術的美本）
小說
新
粧
定價八拾錢　郵稅金拾錢

大町桂月　伊藤銀月　刪修天籟篇
再版
文士宜典
定價金參錢　郵稅金六錢

第三版
小說
不問
（附大詩人出現　鹽原遊記）
定價金七十錢　郵稅金十錢

青木仙庵著　鳥羽一夫畫
三位一體
戀論
定價金參錢　郵稅金四錢

田口掬汀著（満方書画各二枚）

再版
小説 迫 恨
定價金壹圓
郵稅拾貳錢

理學士（醫學博攻）河野德助著
初等 代數學講義 上下
定價各壹圓
郵稅八錢

德田秋聲著（上製美本）
小説 母の血
定價七十錢
郵稅十錢

薄田泣菫君題詩
蒲原有明君序詩
小島烏水君序文
清水橘村君著
新體詩集 琉波の紫
定價四拾錢
郵稅六錢

牛丼桃水著
小説 靴の下露
定價六拾錢
送料八錢

凡鳥山人著
再版參
馬鹿物語
定價四拾錢
郵稅金六錢

大町桂月序 斎藤笠編纂
再版
明治大家文集
定價八十錢
郵稅金十錢

田口掬汀氏著
小説 獨木舟
定價金壹錢
郵稅金六錢

天野說齋編
名流實話 身世觀注
定價廿五錢
郵稅金六錢

岩野泡鳴著
小説 子
定價金六拾錢
送料八錢

牛丼桃水著
闇の森
定價廿八錢
郵稅金六錢

大町桂月先生 宇内蝶二先生合著
再版七
少女と山水
定價卅五錢
郵稅金六錢

蘆庭篁村著

紀行文集 天下泰平

定價金四拾五錢 郵稅金六錢

德田秋聲著

小說 花ばな

定價金四拾五錢 郵稅金六錢

萬朝報記者 茅原華山編纂

青年と詩吟

定價三拾五錢 郵稅金四錢

泉鏡花著○清方畫

小說 誓之卷 愛藏版

定價金七拾五錢 郵稅金拾錢

日高有倫堂編

基督教講壇集

定價七拾錢 郵稅金六錢

茅原華山編纂

我と人

定價貳拾錢 郵稅金六錢

本居豐穎撰

業文摘英

定價廿五錢 郵稅金四錢

海老名彈正著

宗教々育觀

定價金五拾五錢 郵稅金八錢

鈴木秋子女史著

軍國の婦人

定價廿八錢 郵稅金四錢

苦學社編輯

苦學の伴侶

定價三拾錢 郵稅金四錢

橫山管助著

再版 成功したる信服暗示術 應用自在

定價參拾錢 郵稅金四錢

山口先生序 シルレル原著 齊木仙峰譯

接神術

定價廿貳錢 郵稅金四錢

文學士　久保天隨著

文壇獅子吼

定價金四拾五錢
郵稅金六錢

泉鏡花著○滿方畫（上製美本）

參版

小說

憂樹

定價金八拾五錢
郵稅金拾錢

文學士　久保天隨著

紀行文集

山水寫生

定價金四拾五錢
郵稅金六錢

海老名彈正先生著

五版

人道

定價金拾錢
郵稅金二錢

チヨサイア、スフロンング原著、石川三四郎譯

二十世紀の大覺醒

定價三拾錢
郵稅金四錢

文學士　久保天隨著

再版

美文文

紅葉

定價金三拾五錢
郵稅金六錢

高橋五郎著

此百話

定價金四拾五錢
郵稅金六錢

姉崎博士序　高畑報記者芳原華山畫

改版五版

向上の一路

定價三十錢
郵稅金六錢

大町桂月先生撰

第貳時代青年文集

定價四十錢
郵稅金六錢

半井桃水著　清方畫

再版

小說

慰問

定價金七拾五錢
郵稅金拾錢

醫學士　佐藤得齋著

美的衛生

定價金四拾錢
郵稅金六錢

醫學士　中本多聞著

再版

新化粧

定價金四拾錢
郵稅金六錢

泉鏡花著

小説 なゝもと櫻

定價四拾錢
郵稅金六錢

浜木綿碎先生譯

トルストイ教訓小説集

定價參拾錢
郵稅金四錢

加藤直士譯

トルストイの日露戰爭觀

定價參拾錢
郵稅金四錢

高橋五郎著

杜伯 品藻

價參拾五錢
郵稅金六錢

蘆風秋元喜久雄譯

四版 獨逸詩粹 紅紛集

定價廿五錢
郵稅四錢

文學士 小原無絃譯

原文對照 バーンスの詩

定價三拾錢
郵稅四錢

杉山先生書簡 黒澤辰三郎編

日本名家手簡

定價參拾錢
郵稅金六錢

文學士 小原無絃譯

原文對照 シェレーの詩

定價金三拾五錢
郵稅金四錢

泡鳴著

新體詩集 悲戀悲歌

定價卅五錢
郵稅四錢

泡鳴著

新體詩集 夕潮

定價卅五錢
郵稅六錢

細超夏村著

新體詩集 靈笛

定價三拾錢
郵稅四錢

秋元蘆風譯

獨逸詩 野葡萄

定價卅五錢
郵稅金六錢

○原文對照○巻末に評註を附す

